
創作者の冒険～萌えもんで欲望を～

牙練

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創作者の冒険〜萌えもんで欲望を〜

【Nコード】

N8056U

【作者名】

牙練

【あらすじ】

——此れは、作者による作者の自己満足な物語——
と言う訳でじゃんじゃん読んでくれ！

物語は終わらない、何処までも駆け抜けるものだから。

100話突破記念！修行中にやってきた並行世界のトレーナー。（前書き）

外伝です。

これはまだ、リーグに突入する前の話。

尚、クロスです。

Kavalleristさんの小説“ ポケットモンスター 白
き金剛石の輝き”より。

では、楽しんでいてください！

100話突破記念！修行中にやってきた並行世界のトレーナー。

「チャンピオンロード・出口」

現在、作者達は修業していた。

メンバーはキルト・ムロン・タルト・ディン・カイア・ゴゲンのメンバーだ。

作者「ふう〜！もうそろそろセンターで回復しよう！」

キルト「そうですね！」

回復しに行こうとしたその時！

ピカーッ！

行き成り洞窟内が輝いた！

そして、光が収まったら少年が倒れていた。

作者「…………マジか。」

ムロン「一体何が…………。」

とりあえず、萌えセンターに連れて行った。

「萌えセンター」

「…………うん…………。」

作者「お、気がついたか。」

「???」……ハッ！N！」
作者「うお！？」

作者は少年の掴もうとする手を避けた。

作者「落ち着け！」

「???」あ……れ……？此处は……一体……。」

作者「まああれだ、とりあえず落ち着け。話はそれからだ。」
「???」はい……。」

数分後

作者「落ち着いたか？」

「???」はい、ありがとうございます。」

作者「そいつは良かった。」

「???」まだ名前を言っませんでしたね。」

作者「まあ気が動転していたんだ、無理ねえよ。んで、名前は。」

ダイヤ「ダイヤって言います。フタバタウンの出身です。」

作者「……やっぱりか。」

ダイヤ「何がやっぱりなんですか？」

作者「良いか、一つ聞くぞ。お前の手持ちの“萌えもん”は何だ？」

ダイヤ「萌えもん……？ポケモンじゃ無いんですか？」

作者「……今からある話と仮説をするから、ちゃんと聞いてくれ。」

作者説明中

ダイヤ「つまり……、この世界は俺が居た世界では無くて、ポケモンの代わりに萌えもんと言う種族が居る世界で、その萌えもんは人の姿をしている。あと平行世界って事ですか？」

作者「あの長々とした説明を理解してくれてありがとう。」

ダイヤ「どういたしまして。」

作者「まあ、行き成りこんな話を信じろとは言わないが論より証拠、今呼ぶよ。」

ダイヤ「あ、その前に俺の手持ちも確認して良いですか？あの戦いの後、まだ安否を確かめていないんです。」

作者「そうだな。念のためお前さんの萌え、じゃなかったポケモンも回復させてもらったよ。」

ダイヤ「ありがとうございます。」

作者「んじゃ、確認しにいk」

バタンツ！

突如ドアが開いた。

開け放った人物は青い髪を生やしている好青年だった。

背中には双剣を背負っている。

エンペルト「ダイヤ！大丈夫か？」

ダイヤ「え？ちよっ！誰？」

エンペルト「何言ってるんだよ！俺だよ！エンペルトだよ！」

ダイヤ「エンペルトって……、え？え？」

さらにドアからキルトがやってくる。

キルト「マスター！此处にエンペルトさんが……って居た！」

エンペルト「お、キルトさん。ダイヤ見つかりました！」

キルト「良かったですね……って言うわけ無いでしょ！」

作者「どう言う事だ？」

キルト「回復の最中にボールこじ開けてダイヤさんを探しに行っただけですよ！ジョーイさんカンカンですよ！」

作者「……………ダイヤ。」

ダイヤ「……………すんません。」

く色々あつて数分後く

あの後、ジョーイさんに謝りダイヤは手持ちのポケモン達と再開したが困惑していた。

ヴィオラ「何でそんな間抜け面してるのよ。」（クロバット）

ビーダル「きつと僕達の変化に驚いているんだよ。」（デイルグ）

フェリス「この体制を維持すれば……………、輝ける！」（アンノーン・F）

ドクロッグ「格闘なんだけど、何でナイフなんだろう？」（ドクロッグ）

そして、赤い髪に黄色の瞳、身長は高く青い翼を生やし、工事現場の様なメットを被った青年。

ラドガン「何だつてこんな姿になつてんだ俺達は？」（クリムガン）

エンペルト「まあ良いじゃねーか！ダイヤと話せる機会なんだぜ？」

ダイヤ「俺は心労でどうにかなりそうだよ……………」

ビーダル「それがダイヤの運命なんだよー！」

ダイヤ「笑顔で言うな！」

とまあ、何だかんだで馴染んで居た。

作者「しかし、ポケモンが萌えもんになるって事は、萌えもんがポケモンになるのかもな。」

ダイヤ「恐らくそうだと思いますけど…。」

作者「別に碎けた口調でも良いんだぞ？」

ダイヤ「んー、命の恩人ですからもう少しはこのままで。」

作者「そうか。所でだ、Nって誰だ？」

その言葉は、ダイヤ達の動きを止めた。

ダイヤ「俺の仲間で、友達でした…。」

重々しく話すダイヤ。

作者「今は違うのか？」

ダイヤ「……解らないんです、何かの間違いだとは思っていますが…。」

「

作者はしばし思考。

んで、再稼動。

作者「ダイヤ、表に出ろ。」

ダイヤ「え？」

作者「バトルしようぜ？」

「表」

作者「ルールは1対1の勝ち抜き戦！降参か手持ちが居なくなったら負けだ！」

ダイヤ「あの、何で行き成り？」

作者「……さあな、ただ馬鹿につける薬が無いかと思ったただけだ。」

ダイヤ「馬鹿って……意味が解りませんよ……？」

作者「とりあえずだ、負け犬になりたくなければ戦え。それとも…」

——怖いのか？——

その一言がダイヤのやる気を出させた。

ダイヤ「その喧嘩買った！」

「ポケモントレーナーのダイヤが勝負を挑んで来た！」

ダイヤ「行け！ヴィオラ！」

ヴィオラ「まったく、何でこんなめんどくさい事を…」

作者「ゴゲン！」

ゴゲン「任せて！」

クロバットは羽を使い上昇しようとするが、クロバットの影からシヤドーボールが飛んでくる！

ゴゲン「せい！」

まだまだ飛んでくる！

ヴィオラ「甘い！」

しかし、そんな攻撃も何のその。
軽やかにに避ける。

ヴィオラはそのまま急降下——空を飛ぶを喰らわせようとした。

しかし、ゴゲンは手に黄色の塊を溜めていた。

ゴゲン「行けええええ！」

十万ボルトがヴィオラに直撃する！

しかし、失速せずヴィオラは突撃した。

2人共動かない。

引き分けた。

作者「やるな。」

ダイヤ「作者もな！」

その後、デイルグとムロン フェリスとタルト ドクロッグとディンが引き分けた。

そして、カイアとラドガンとの勝負にも決着がついた。

カイア「が……は……！」

ラドガン「ぐおお……！」

カイアの龍の波動とラドガンの鮫肌+逆鱗が衝突し、両者共に倒れた。

作者「此処まで引き分けるとはな……。」

ダイヤ「一応、レベルはいくつ何ですか？」

作者「100〜90台が4名、60〜50台2名だな。」

ダイヤ「何で引き分ける！？」

作者「世界が違ってからじゃね？」

ダイヤ「それで納得しろと！？」

作者「知るか！」

ダイヤ「逆切れ!？」

とまあ、馬鹿やってる暇は無い。

オオトリはキルトとエンペルトとの一騎打ち。

最後は一発勝負になった。

エンペルト「はあああああっ！」

エンペルトは剣を合体させ、エクスカリバーを装備してキルトに向かって疾走する。

キルト「はあ！」

地面から大量の蔓がエンペルトに迫っていく。

エンペルト「せいつ!やあっ!とっつ!」

ヒュパツ!シュパツ!パパパパツ!

次々に蔓が切られていき、キルトとの差が縮まった。

キルト「があああああっ！」

エンペルト「りゃあああああっ！」

キルト逆鱗がエンペルトのエクスカリバーが衝突し、光を放った!

光が収まった時、2人は倒れていた。

作者「引き分けだな。」

ダイヤ「良い勝負だったな。」
作者「そうだな。とりあえず、回復させるか。」

〈回復中〉

作者はダイヤにある物を渡していた。

ダイヤ「ちょっ！？別に良いって！」

作者「良いから持つて行け。」

作者は自腹で回復の薬×99 何でも直し×99 ハイパーボール×99を渡した。

ダイヤ「いや、でも……。」

作者「良いんだよ。でもな、これだけは覚えておいてくれ。」

——— 本当の友達ってのは、笑いあったり、喧嘩したり、共に泣いたり。

そして、そいつが間違ってるなら殴ってでも眼を覚まさせてやるんだ。

それでも戻らなかったとしても、最後まで諦めるな！———

作者「俺が言いたいのはそのだけだ。」

ダイヤ「……ありがとう。」

作者「ダチの為に何かをしてやるのは当然だ。」

ダイヤ「そっか！」

その後、ダイヤを発見した場所に向かうとダイヤが輝き出した。
ダイヤは別れ際にこう言った。

——また会おうぜ！——

そして、光が収まりダイヤは居なかった。

作者「……やれやれ、世話のやける奴だ。」

キルト「マスターも御人好しですね♪」

作者「うっせえ。」

こうして、修業を再開する作者達であった。

100話突破記念！修行中にやってきた並行世界のトレーナー。（後書き）

終了！

難しかったぜ…。

あとは、何処にも矛盾が無い事を祈るっと。

主人公（作者）紹介（前書き）

こんな紹介で大丈夫か？

大丈夫だ！問題ありまくるが問題ない！

駄目じゃん！？

主人公（作者）紹介

主人公：作者（本名を入れてるので、呼び方は作者で書かれるはず）
性別：男

年齢：20代（実例年齢とは違う）

外見：高校2、3年生くらい（様は小柄）

性格：実際はクールではないが、この小説の“俺”はクールっぽくなる。

基本的にツツコミ役

願望：一夫多妻・ハーレム（正し、無理やりは嫌いなのでやらない）
異世界移動理由：夢が無くて当ても無く山や浜辺を歩いていると、
光に包まれ気がつくと異世界に居た）

趣味：ゲーム・将棋・もふもふしたり嗅いだりすること。

理性度：奥手だが時に大胆（意識してない時に大胆）

補正：不老・主人公・フラグ

主人公（作者）紹介（後書き）

実はまだ資料が手元に無いので、予定で投稿してる。
万が一おじゃんになったら削除。

名前一覧と性格と自称と説明（前書き）

姓名判断氏で変えてもらった名前を表記します。

……被ってたり、違う小説の名前と被ってないといいけど。

パクリじゃないです。

脳みそを絞りに絞った結果です。

苦情とかある場合はメールくだせえ。

土下座で勘弁してください。

名前一覧と性格と自称と説明

名前	種族名	性格	1人自称	作者の呼び方
キルト	フシグバナ	テレや	私	作者の呼び方 マスター
ジル	ラッタ	のんき	私	お兄さん
ホロン	ヨルノズク	陽気	私	作者
くおん	オオタチ	能天気	私	ご主人様
(メイド)				
やよい	ニドラン ♀	慎重	私	作者さん
(ウエルの嫁)				
ウエル	ニドキング	穏やか	自分	彼 (
紳士)				
くいん	ニドクイン	腕白	アタシ	アンタ
(もしくはダンナ)				
アンユ	レディアン	腕白	私	作者さん
まろん	サンドパン	おっとり	私	作者
(～です)				
ラタク	ダクトリオ	せっかち	オレ	ダンナ
(熱血)				
しので	アリアドス	やんちゃ	拙者	主様
(～ござる・くのいち)				
ムロン	ロトム	陽気	僕	主人
(知的)				
チルド	ギャラドス	穏やか	あたい	作者
(若干?脳)				
レイニ	スリーパー	気まぐれ	私	作者
アスラ	アーボック	生意気	私	作者
(クール?)				
サロノ	オニスズメ	臆病	私	作者さん

シヨナ	ピジョット	テレや	私	作者
タルト	カメックス	頑張り屋	ボク	マスター
(変態・卑猥要素)				
ネルコ	ペルシアン	うっかり	私	ご主人
(ゝにゃ・ドジっ娘)				
こなち	ウツボット	やんちゃ	私	お兄ちゃ
ん	(甘えん坊)			
レシア	キレイハナ	生意気	私	作者
(ツンデレ?)				
しきは	バタフリー	のんき	私	作者さん
(大人の色気?)				
ジエネル	スパアー	やんちゃ	自分	司令
(軍人氣質?)				
デン	デンリュウ	頑張り屋	私	ご主人様
(メイド)				
フォン	イーブイ	臆病	ボク	作者
ニウ	メガニウム	せつかち	私	マスター
(慈愛?)				
ノム	ウリムー	控えめ	私	作者
(無口?)				
ゴネ	イシツブテ	能天気	私	兄さん
(元気っ娘?)				
デイン	フリーデイン	穏やか	ワシ	主殿
(お婆さん口調)				
のこえ	パラセクト	意地っ張り	私	作者
(ゝです・ツンデレ?)				
ふうか	テッカニン	意地っ張り	我	貴殿
(武人氣質)				
はるせ	クロバット	頑張り屋	私	作者さん
(素直)				

ジュン	ジュゴン	穏やか	私	お兄
(無垢)				
ドン	ヤドン	控えめ	自分	作者
(クール?)				
インナ	ビリリダマ	気まぐれ	私	作者
クリン	ププリン	寂しがり	私	お兄ちゃん
ん	(甘えん坊)			
まわり	ヒマナッツ	穏やか	僕	マスター
(元気っ娘?)				
クシメ	ピッピ	気まぐれ	あたし	作者
ロール	ドンファン	陽気	私	作者
無口)				
えにし	クチート	やんちゃ	私	作者
ちらそ	クヌギダマ	勇敢	拙者	主様
くのいち)				
リン	ヒメグマ	陽気	私	お兄さん
ランナ	グライガー	控えめ	私	ご主人様
(元気っ娘)				
ミルラ	ガルーラ	勇敢	私	アナタ
(良妻)				
サリヤ	リザードン	やんちゃ	私	作者
ツンデレ気質・気配り上手)				

名前一覧と性格と自称と説明（後書き）

更新します、場合により。

名前一覧と性格と自称と説明その2（前書き）

分割して書きます。

もし、こんな名前が良いと考えてる方は、メールでもくだせえ。
厳しめなチェックで審査します。（鬼）

名前一覧と性格と自称と説明その2

名前	種族名	性格	1人自称	作者の呼び方
ヘルン (ご主人様)	ヘルガー	おとなしい	あたし	作者の呼び方 あんた
レルツ	エレキブル	無邪気	俺	作者
たしみ	プラスル	テレや	私	作者
ひきよ	マイナン	慎重	私	作者
ピユノ (元気っ娘)	ライチュウ	冷静	ボク	作者！
しろね (色違い・銀)	ライチュウ	気まぐれ	私	作者
チュノ (キス魔)	ルージュラ	せっかち	私	作者
おとね (マネージャー)	ペラップ	穏やか	私	作者
チリス	パチリス	控えめ	私	お兄さん
ふたみ	ドードー	腕白	私	作者
ミヨン (剣士・侍気質)	ハブネーク	頑張り屋	私	作者様
サザナ はくらん	ザングース ストライク	図太い 図太い	アタシ 私	作者 作者
ソルト (クール・天然)	アブソル	のんびり	私	主人
メンテ (変態要員・無自覚)	メタモン	テレや	ボク	お兄さん
しゅくれん	ロコン	真面目	私	主
カガラ	カラカラ	臆病	僕	作者さん

			(寂しがり・無垢)		
	デイモ	ウインディ	穏やか	ボク	ご主人様
	(元気っ娘・甘えん坊)				
	ツロル	ガーディ	陽気	僕	ご主人
	(知的・クール)				
	くみ	カモネギ	臆病	私	作者さん
	(早とちり・剣士・侍気質)				
	ラスラ	バンギラス	腕白	私	お兄様
	(お嬢様気質)				
	ワルツ	ポワルン	せつかち	私	先生
	(知的)				
	おどか	オドシシ	陽気	私	作者さん
	(人見知り)				
	カイア	カイリユウ	腕白	私	作者
	(元気っ娘)				
	ゴゲン	ゲンガー	図太い	オイラ	アニキ
	スタンナ	ヒトデマン	寂しがり	私	作者さん
	リゼハ	ハリーセン	臆病	私	作者さん
	ピリス	オオスバメ	素直	私	作者さん
	(リーダーシップ)				
	ストラ	コロトック	勇敢	私	オーナー
	(指揮者気質)				
	ピナス	トロピウス	やんちゃ	私	作者さん
	(勘違いしやすい)				
	グROOM	クラブ	控えめ	私	作者(冷
	静)				
	ルダン	コダック	控えめ	私	作者(冷
	静)				
	カクさん	カクレオン	図太い	私	作者(変
	色可能)				

しなみ	タマタマ	のんき	私	作者
サドメ	サイホーン	穏やか	私	作者君（
交渉人（気質）				
イマバ	バリヤード	大人しい	私	作者（
モノマネ（達人）				

名前一覧と性格と自称と説明その2（後書き）

更新で増やす予定。

進化した場合は更新。

名前一覧と性格と自称と説明その3（前書き）

精魂尽きた……。

名前一覧と性格と自称と説明その3

名前	種族名	性格	1人自称	作者の
呼び方				
りんり	キリンリキ	意地っ張り	私	あんた
(ツンデレ気質)				
ゴンノ	カビゴン	図太い	私	作者(
大食い気質・眠たがり気質)				
エアロナ	エアームド	頑張り屋	私	作者(
お色気気質?)				
ポロル	ソルロック	能天気	私	兄様(
甘えん坊気質)				
リッキー	マンキー	寂しがり	オレ	アニキ
(甘えん坊気質)				
いずま	トサキント	大人しい	私	お兄様
(淑女)				
パッチ	パッチール	臆病	ボク	作者♪
(語尾に♪が付く)				
ルーブナ	ブルー	素直	私	作者(
纏め役)				
せせら	コンパン	臆病	私	作者さ
ん(ツッコミ気質)				
ロヘル	ベロリンガ	寂しがり	僕	作者(
S?)				
ブラスト	ブーバーン	控えめ	私	作者さん
ゼルマ	フローゼル	穏やか	私	作者
(クール)				
カルル	ニヨロモ	臆病	私	作者(
無口)				

シリス	キングドラ	能天気	私	作者（
元気っ娘）				
ヌオン	ウパー	生意気	私	トレー
ナー（又は作者）				
ジバル	コイル	意地っ張り	僕	博士（
縦横無尽気質）				
ブース	ビーダル	のんき	私	作者（
眠たがり気質）				
ライカ	ライボルト	テレ屋	私	作者（
変態気質）				
せっか	カプト	せっかち	私	主（寡
黙気質・剣客気質）				
きしみ	オムナイト	大人しい	自分	主様（
お喋り気質・騎士気質）				
なまね	ナマズン	素直	わし	小僧（
纏め役）				
コツチン	ノコツチ	冷静	私	作者
（クール）				
リギロ	ワンリキー	大人しい	私	作者（
警護気質）				
ランサン	ジーランス	せっかち	私	作者さ
ん（慈愛気質・達観気質）				
イルク	オーダイル	うっかり屋	アタシ	作者（
天然気質）				
バグマ	バグフーン	生意気	ボク	作者（
勝手気まま気質）				
パルパル	シェルダー	素直	私	作者さ
ん（妬み易い・口癖：パルパル）				
つやな	モンジャラ	テレ屋	私	作者さ
ん（恥ずかしがり気質）				

はざくろ	サクラビス	のんき	私	作者（
天然気質・大人の色気気質）				
メハダ	サメハダー	気まぐれ	私	作者（
ツッコミ役）				
メタラン	メタドガス	頑張り屋	私	作者
ベット	ベトベター	陽気	私	作者
マルツ	マリル	おっとり	私	ご主人
様（生粋のメイド）				
えんろん	ポニータ	腕白	私	作者（
忠義気質）				
ネラオン	ネオラント	臆病	私	作者（
甘えん坊）				
ドラシー	メノクラゲ	やんちゃ	ワタクシ	作者（
お嬢様気質）				
チヨウ	ファイヤー	真面目	私	作者（
妖艶気質・纏め役）				
サン	サンダー	腕白	俺	作者（
姉御肌・やきもち焼き）				
レイズ	フリーザー	腕白	私	作者（
無口・甘えん坊気質）				
チルナ	赤いギャラドス	気まぐれ	僕	作者（
知的）				
紅	赤いギャラドス	おっとり	我	お主
（二重人格・先祖・酒豪）				

名前一覧と性格と自称と説明その3（後書き）

やっと、名前書けた…！

名前一覧と性格と自称と説明その4（前書き）

とりあえず、現実逃避中……。

名前一覧と性格と自称と説明その4

名前	種族名	性格	1人自称	作者
の呼び方				
みなも	ホエルオー	生意気	私	作者
(親方気質)				
ましる	レントラー	図太い	私	主様
(忍び気質・浴衣美人)				
ミラージュ	ヤミラミ	寂しがり	私	作者
(眼鏡っ娘・知的)				
リガーナ	シザリガー	素直	俺	作者
(大船気質)				
ニース	サニーゴ	おっとり	私	作者
パルン	ルンパッパ	気まぐれ	私 [♪]	作者
♪(踊り子気質)				
リプス	ラプラス	むしゃき	私	ご主
人様(乗せたがり気質)				
スロミカ	ミロカロス	能天気	私	作者
さん(淑女・献身的)				
イロード	カイロス	慎重	アタシ	作者
(護衛気質)				
ピネラ	ハピナス	勇敢	私	先生
(保険医員)				
くおん	バグオング	穏やか	自分	マス
ター(感情乏しい・冷静)				
ハニン	ビークイン	おっとり	私 ^{わたくし} 王	(女王)
様気質・天然・巨乳)				
ニズノ	ダイノーズ	照れ屋	私	先生
(学生気質・ジャグラー)				

たまさき	マントイン	真面目	私	作者
(懐が広い・寛大・食い意地)				
ネイル	イワーク	陽気	自分	作者
(達観・制動気質)				
リタ	チルタリス	図太い	私	あん
た	(ツンデレ・世話焼き気質・水色縞パンツ)			
エナール	グラエナ	図太い	私	作者
(クール・お色気気質)				
ゴド	ボスゴドラ	おっとり	私	主
(天然・着痩せ・騎士道気質)				
レムレス	チャーレム	勇敢	私	師匠
(盗賊気質・努力家)				
じよや	ドータクン	やんちゃ	私	お兄
ちゃん	(元気っ娘・着痩せ・甘えん坊)			
しなり	ケッキング	穏やか	私	ボウ
ヤ	(お色気気質・怠け者)			
ピッツ	ブーピック	陽気	僕	作者
(跳ね気質・元気っ娘)				
メアナ	サーナイト	意地っ張り	私	作者
(巨乳・世話好き・弱ツン強デレ)				
クラリ	ネンドール	大人しい	私	劇団
長	(踊り子気質・巨乳・舞姫)			
ささに	ハリテヤマ	臆病	自分	師匠
(サラシ・守護神気質)				
ナティ	ギラティナ	素直	我	作者
(王冠持ち・クール気質)				

名前一覧と性格と自称と説明その4（後書き）

はあ…。

名前一覧と性格と自称と説明その5

名前	種族名	性格	1人自称	作者の呼び方
クー	バクーダ	腕白	私	ボス（幹部な雰
困気・腹心気質・クール）				
えんか	コータス	素直	私	作者（ドS気質・
戦闘狂・巨乳）				
ゆの	ユキメノコ	図太い	私	作者はん（淑女・
おとしやか・隠れ巨乳）				
ガゼル	トドゼルガ	大人しい	私	作者（ツンデレ
気質・巨乳）				
おうぎ	ダーテング	慎重	ワシ	主（弄び気質・
知略）				
バイル	スカタンク	うっかり	俺	作者（男勝り・
悪知恵・お色気？気質）				
ニヤルン	ブニヤット	臆病	私	ご主人様（
甘えん坊気質・巨乳・色仕掛け）				
ロロネ	エネコロロ	せっかち	私	ご主人様（合法
ロリ・元気っ娘）				
みりん	マルノーム	真面目	私	作者君（書記気
質・大食い・巨乳）				
せいら	ニユーラ	腕白	私	作者（女子高生
服・元気っ娘）				
オーガット	オニゴーリ	慎重	私	作者さん（ミ
ステリアス・丁寧口調）				
タバネ	ハネッコ	大人しい	私	お兄ちゃん（落
ち着き気質・飛び跳ね気質）				
レドル	ドーブル	臆病	私	作者さん（犬耳
垂れ耳・眼鏡っ娘・絵描き）				

マヤヤ	ヤンヤンマ	気まぐれ	私	作者	(探究心・
知りたがり・知的)					
ソウス	ウソツキー	テレや	私	司令	(隠密気質・
潜入班)					
ティーン	ネイティ	勇敢	私	作者	(無口っ娘・
冷静・予知者)					
つり	ツボツボ	うっかり	私	作者	(怠け気質・
色気?)					
トリスター	トリトドン	やんちゃ	私	神父様	(シスタ
ー気質・賛美歌・清楚)					
ラージョン	ラグラージ	穏やか	私	作者	(お嬢様気
質・責任感・美乳)					
キスマ	マスキッパ	図太い	私	作者	(キス魔?・
冷静)					
アドロ	ドクロック	寂しがり	私	作者様	(暗殺者・
ナイフ使い・甘えたがり・スレンダー)					
ペラーテ	エンペルト	大人しい	私	主様	(騎士道・
双剣使い・聖剣使い)					
セバス	髭エンペルト	腕白	私	作者様	(男性執
事・聖剣使い・紳士)					
とがみ	ドクケイル	大人しい	私	作者	(お調子者・
気楽)					
しあの	アゲハント	無邪気	私	作者	(元気っ娘・
癒し系)					
アマドナ	アーマルド	気まぐれ	私	作者	(軍人氣質・
責任感)					
ほむらび	ボーマンダ	勇敢	我	汝	(武人・冷
静・軍神・巨乳)					
スプール	トリデプス	素直	私	作者	(無口っ娘・
守護神)					

グロツタ	メタグロス	慎重	私	作者	(知略神・
天才知能・冷静)					
ムパラ	ラムパルド	素直	私	作者さん	(ス力
ート装備・慌てんぼ)					
ストレイト	マッスグマ	勇敢	私	作者	(準メイド
候補・クール)					
フワナミ	フワライド	うっかり	私	作者	(天然気質・
赤い下着着用・軽業師)					
ミルハ	ミルタンク	真面目	私	作者	(爆乳・母
乳体質・ツツコミ気質)					

名前一覧と性格と自称と説明その5（後書き）

名前が適当になってきている……。

被りそうになってるし……。

ネタが付きかけている。

あと、胸とかの説明があるけどマジでそう見えるんだもん。
ひらがなの名前を漢字にしてみるか……。

横着した結果、文章が力オスになってしまった……（泣）

出会い・旅立ち・俺と相棒（前書き）

続投決定です。

バッテリー壊れたので買わなければ（泣）

出会い・旅立ち・俺と相棒

目を開けると、作者は言った。

「知らない天井だ…。」

お約束のボケ。

その声が聞こえたのか1人の女性が入ってきた。

「あら、目が覚めたのね。」

「あの、ここは？」

「ここは、マサラタウンという町よ。何故貴方が私の家に居るかというと、倒れてたから。」

「倒れてた？」

作者は詳しい話を聞く事にした。

「????の家・居間」

あれから色々な事を蘭木^{らんぎ}さんから聞いた。（母親の名前）

ここはマサラタウン、マサラは真っ白、始まりの色。

多くのトレーナーがここから旅立つらしい。

とりあえず俺は異世界から来たという事を除いて話した。

蘭木さんは驚いてはいたが。

「それなら、貴方も旅に出てみないかしら？もしかしたら故郷に帰れるかもしれないし。」

そんな感じでオーキド博士なる人に話しをつけてもらえる事になった。

正直、帰れなくても良いと思っている。
旅もしてみたいし。
そんな感じで過ぎた午前。

くマサラタウンく

外は空気がおいしい。
やはり自然が綺麗ならではだ。
とりあえず研究所を目指すか。

く作者移動中く

ん？

ここは……、草むらか。
しかし、何故が入ってみたい。
つか、入らないと話が進まない気がした。
いざ！（キラッ！）

「おーい！待てー！待つんじゃー！」
！？

後ろからお爺さんが走って来た。

「ぜー！ぜー！危ない所だった。草むらでは野生の萌えもんが飛び出す！こちら萌えもんを持つていれば戦えるのだが……。」
爺さんはしばらく考えていると、思いついたように手を叩く。

「そうじゃ！……ちょっとわしについてきなさい！」
こうして俺は、爺さんに連行された。

くオーキド研究所く

中は機械が置いてあり、研究員がせわしなく働いている。

ん？

あの少年は誰だ？

「遅いですよ。待ちました。」

「努眼^{つとめ}か……、おおそうじゃ！わしが呼んだのじゃった！ちよつと待っておれ！」

爺さんは俺の方に体を向けた。

「なるほど、君が作者君だね？話は蘭木君から聞いておる。……中々に壮絶な旅な様じゃの。」

「旅人なの？あんだ。」

え〜と、島暮らしたったんだが浜で寝ていて波に攫われて今ここに。把握したよ。君は馬鹿だね。」

うつ……、言い返せない。」

そんなやりとりを見て爺さんが助け船を出す。

「ほれ！作者！そこに3匹の萌えもんが入ったボールがあるじゃろ！ほっほ！昔はバリバリのトレーナーじゃったんじゃよ。」

「自慢はいいから話進めてください。」

「……（泣）」

えと、とりあえず続きを。

「とりあえずその3匹のうち1匹をやろつ。」

良いんですか？

「構わんよ、それに彼女達も退屈じゃろつしな。世界を知らぬまま生涯を終えるというのもな。」

「お先にどうぞ、作者さん。」

良いのか？

「ええ、大人ですから。」

……… 大人ねえ。

「早く選んでください！」

おお、怖い。

さて、ふざけてないで真面目にいきますか。

（作者選り中）（萌えもん達は寝てました。）

決まった。

「ほう？だれじゃ？」

この子にするよ。

俺の相棒はフシギダネにするよ。

「そうか、なら挨拶がてらボールから出してやりなさい。」
解りました。

それ。

ぽんっ！

「ふわあゝ。よく寝た。」

おはよう、フシギダネ。

「ふわ！？だっ！誰ですか！？／／／／／」

そうだね、俺の名前は作者だ。

（青年説明中）

「そうだったんですか……。えと、これからよろしくお願いします
！」

ああ、よろしくな。

さて、とりあえず出るか。

「待ってください。」

……何だ？

「勝負、しませんか？」

何故？

「縁担ぎですかね。」

どうする？

「私、やってみたいです！」

仕方無い、良いだろ。

「ありがとうございます。」

こうしてバトルが始まった。

今回は省略。

結果敗北した。

「あう……。」

大丈夫か？

「ごめんなさい……。」

気にするな。

「あの、大丈夫ですか？」

大丈夫だろ。

……デフェンダーと傷薬は痛かったが。

「手段は選ばない主義なので」

良い性格だよ。

こうして俺達は、1度蘭木さんちに戻った。

（蘭木の家・二階）

重い。空気が重い。

「あの……。」

どうした？

「ごめんなさい。弱くて。」

気にするな、別に強さだけで選んだ訳じゃない。

「え？」

フシギダネが俺の相棒だったら良いなと思ったから、君を選んだんだ。

迷惑だったか？

「い、いえ！迷惑じゃ……。」

でも、自分勝手な理由もあるんだ。

「理由？」

まあ、願望かな。

くだらなくて、叶うはず無い願い。

「……………その願いつて？」

ハーレムを作りたいな〜って。

「は、ハーレム？」

まあ、男の悲しいさがだよ……………（遠い眼）

「あの、それって私も入ってます？」

いやなら別に……………。

「嫌じゃないです！」

そ、そうか。

んじゃ、改めてよろしくな！キルト！

「はい！……………キルト？」

お前の名前さ。

「名前？私の？」

もちろん！

「あ、ありがとうございます／＼／＼／＼／＼」
どういたしまして。

こうして夜が更けていった。

出会い・旅立ち・俺と相棒（後書き）

次回は省略して図鑑をもらった後の話。

1000のバッテリー買わねば。

散財だ……（泣）

仲間集めと特訓と（前書き）

前回の予告通り、図鑑もらったあたりから。

尚、これは鬼畜でお送りします。

出入り口でサトシっぽい奴と戦闘しましたが、多分幻覚かと。

ピカチュウ使ってきたけど。

仲間集めと特訓と

くマサラタウンく

しかし、図鑑か……。

まあ、ハーレムとか作るって決めちまったしついでだな。

「あの、マスター。」
ん？

どうしたキルト？

「えと、ハーレムってどうやって作るんですか？」

モンスターボールって道具を使うんだよ。

ただ、相手を弱らせてから使うから何か誘拐みたいなんだよね……。

「大丈夫ですよマスター！私が弁護しますから、泥舟に乗っていてください！」

さり気に酷いな。

あと、泥じゃなくて大きい船な。

「あううう／＼／＼／＼」

——キルトの性格はテレやだからなあ。—— 一々赤くなる——

く1番道路く

さて、じゃあ捕まえますか。

「お~~~~~！」

しかし、レベルが上がりと過ぎると捕獲は難しくなるしな。

（諸事情により、名前を捕獲時に変えるとバグるので当面名前の変更は先予定）

く青年草むら散策中く

捕獲結果

オタチ・コラッタ・ホーホー

……色々と言いたい事はあるが1つ言わせてくれ。

何故居るし

まあ、とりあえずセンター行って紹介と行くか。

「っ、疲れました…。」

お疲れ。

撫で撫で。

「ひゃあ！？／＼／＼／」

おっと、嫌だったか？

「い、いえ……、むしろもっと……。」（1つによ1つによ）

……大丈夫か？

「大丈夫です！早くセンターに行きましょう！」

あ、ああ……。

トキワ・センター

ジョーイさんからボールを受け取り、あてがわれた部屋で過ごす作者とキルト。

さてと、顔合わせだな。
それ！

ぽわんっ！

「うわっ！」

「きゃあ！」

「わつと！？」

3人の女の子が出てきた。

3者3様の叫び方で。

あゝ、大丈夫か？

「何とか……って、あんた昼間の！」

「あゝ！あの時のトレーナー！」

「お腹すいたな。」

1人だけ状況を理解してない！？

「だってお腹減ったんだもん。」（オタチ：能天気）

「あんたはもうちよつと危機感持ちなさいよ……。」（ホーホー：陽気）

「こうなったら……！あんたの大事な相棒を齧ってやるうゝ！」（コラッタ：のんき）

「ええ！？私、齧るんですか！？」

「違うわよ！」

なんか、性格が合ってないな。

「だまらっしゃい！」

まあ、もうそろそろ話しに入りたいんだが……。

「そうね、詳しく聞かせてもらうわよ。私達を捕獲した理由。」

「トレーナーって、捕まえるのも仕事みたいじゃなかった？」

諸事情があるんだよ。

（青年説明中）

「つまり……、貴方の下らない願望の為に捕獲したと？」

あゝ、そのなんだ、すまん。

「謝るくらいなら捕まえないですよ。」

「でも、勝負しかけたのは私達だよね？」

「まあ、そうね。別に逃げても良かったのにね。」

……何故に逃げなかった？

「それは。」

「勿論。」

「退屈だったから。」

解りやすい説明ありがとう。

まあ、これからよろしく頼めるか？

「良いわよ。世界を見てみたいしね。」

「よし、齧りまくるぞー！」

「おーーー！」

程ほどに頼むよ。

「マスター。」

どうした？

「布団どうします？」

……くっつけて寝るぞ。

こうして、夜が過ぎていった。

尚、現在の萌えもん達は幼女体系なので理性は簡単に保てました。

仲間集めと特訓と（後書き）

尚、全国図鑑に最初からなっていました。

名前はシオンで変えられるはずですよ。

早く更新したいが、プレイ日記みたいな物なんですよね。

今回はトキワ周辺の捕獲とレベル上げです。

そのうち、官能系でも書くか……。

仲間集めと特訓と〜パート2〜（前書き）

さて、今回は捕獲とレベル上げです。

捕まえてボックス行きになった萌えもんもちゃんと育てようかと。

ストーリー関係ないですが、休日的な話も書こうかと。

……そこ！毎日が休日とか言わない！

仲間集めと特訓とパート2

トキワシティ

全員、準備できたか？

「大丈夫です！」

「問題無いわ。」

「まだソーセージ無い？齧りたい。」

「バナナはおやつに入る？」

……遠足か！

まあ、ちゃんと頑張るなら持って行っていいぞ。

「わ〜〜い！作者ありがとう！」

「ソーセージわ？」

持つてけ。

「齧るぞおお！！！」

「一々叫ばないの！」

「賑やかですね。」

まあな。

んじゃ、行くぞ。

『おお〜〜〜！』

青年移動中

途中、お爺さんが幼女誘拐してたのでシバいた。

22番道路

さて、捕まえるぞ！

〈青年捕獲中〉

結果：ニドラン♀・ニドラン♂

まあ、何で♂が居るのかと言うと、ノリだ。

「ハーレム目指してる癖に？」

まあ、こいつにはこいつの事が好きだという嫁を探そうかと。

「それで納得しますかね？」

解らないが交渉してみる。

ぽわん！

「あーも！何で捕まったのよ！！！」

「それは、自分の力を過信しすぎたからでしょう。」

あーと、大丈夫か？

「痛いわよ！」

「まあ、勝負しかけたのは自分ですからね。ただまあ、捕まえた理由は知りたいですがね？」

解った、説明しよう。

〈青年説明中〉

「つゝまゝりゝ！アンタのくつつつだらない願望の為にアタシを捕まえたと！！！」（ニドラン♀：腕白）

「自分はノリですか……。」「（ニドラン♂：穏やか）
やっぱり嫌か？」

「当たり前でしょうが！！！」

「まあまあ、落ち着いて。トレーナと言うのは自分が信頼できる萌えもんしか仲間にしないそうですよ？」

「アンタの説明は聞いてないわよ！アタシは強い男が良いのよ！！」

「！」

「……では、彼が強くないと？」

「そうよ！何処からどう見ても“もやし”でしょ！！！！」

「もうし……」

「そうですかね？自分には“落ち着いた風貌に隠れた情熱”が見えますよ？」

「情熱？」

「ええ、飛びっきりのね。」

「……まあ良いわ、アンタが旅して化けるなら候補に入れてあげるわ！」

「ありがたいなそれは。」

「二ドランのもありがとな。」

「いえ、自分も期待してますからね。」

「責任重大だな、これは。」

「お嫁さん探しもですよ？」

「解ってるって。」

「とりあえず、センターで回復してからレベル上げするぞ！」

「ふん！私を使いこなさないよ！」

「では、お手柔らかに。」

「絶賛レベル上げ中」

仲間集めと特訓と〜パート2〜（後書き）

レベル上げと仲間集めがまだ優先させてもらえます。
フラグ乱立中だぜ！（死亡フラグ）

仲間集めと特訓と〜パート3〜（前書き）

まだまだレベル上げと仲間集め中です。
ライバル戦今回か次回で勘弁してください。

仲間集めと特訓と（パート3）

（トキワシティ）

さて、今日もレベル上げるぞ！

「解りました。」

「無理させないでよ、昨日毒喰らって倒れたのよ！」

……正直すまん。

「次回は齧るからね！お兄さんの相棒！」

「食べれるの？」

「何で朝から卑猥な話してるのよ！！！」

「まあまあ、彼も健全な男性ですからね。」

とりあえず、事態をこれ以上悪化させないでくれ。

つか、ニドランはワザと煽るな。

「おや、ばれましたか。」

まったく。

「マスター、ひわいつて何ですか？」

知らなくて良いことだよ。

「いつか知るときが来ますよ。」

願わくば知らんでいてほしいな。

（2番道路）

さて、仲間集め（と言う名の捕獲）といきますか！

「しかし、気になりますねえ。」

何がだ？ニドラン。

「ここに居た少年はロケット団と戦ったようです。」

ロケット団？

「おや、知りませんか？萌えもんを悪事に使う組織ですよ。もっと

も、数年前までは善良団体だったそうですが。」

……何かあったみたいだな。

「詳しい原因は解ってませんがね。さて、気になったのは戦った雰囲気についてです。」

雰囲気？

「ええ、少年曰く『萌えものの雰囲気違うんだ……、ちょっと怖かったぜ……』と、気になりませんか？」

確かに。

しかし、現段階では解らない事が多いし今のレベルで勝てるか解らない。

「だからこそ、レベル上げですね。」

そういうことだ、さあ！始めるぞ！

〔青年散策中〕

結果：レディバ・イトマル

持ちきれないから転送されちまったが、誰のパソコンだ？

「大丈夫でしょうか？」

大丈夫だろ。

「なんで解るのよ？」

直感。

『はあ。』

全員でため息つくな！

まあ良い、次は“サンドの穴”行くぞ。

「おい、警察呼べ！犯罪犯す前に……！」

その穴じゃねーよ！？

「マスター、その穴って？」

知らないでくれ！頼むから！

「青春ですねえ。」

「青春って何？」

「食べられる？」

「そればかりね、オタチ。」

「だーもー！いいから行くぞ！」

「サンドの穴」

ふむ、洞窟なのに明るいな。

「照明機でもあるんですかねえ？」

「暗いよりは良いでしょ。」

まあな……！？

「どうしたのよ？」

「人が居るな。」

「ウホッ！良い男！やらないk」言わせないし、やらせねえよ！？」

阿部さん風の山男が現れた

行け！ニドラン♀！

ニドラン♀ 引っかく！

急所に当たった！

山男は倒れた

賞金も経験地も手に入らなかったな。

「悪は滅ぶべきなのよ！！！！」

頼むから急所はやめてやれ。

「同じくですね。」

「いいから散策するわよ！！！！」

＼青年散策中＼

結果：サンド

まあ、予想していたが。

「では一度戻りますか。」

そうだな。

＼2番道路＼

そういえば。

「どうしたの？」

ニビシテイに向かう道なんだが……。

「何か問題でも？」

木が生えていて通れないんだ。

「私が齧ろうか？」

止めとけ、特殊な技じゃないと切れんらしい。

「じゃあ、どうしますか？」

……ハナダで最初のバッジを手に入れるしかないな。

「あそこですか……。」

「知ってるの？」

俺も少し調べただけなんだが、何でもトラウマを植えつける萌えもんが居るらしい。

「こ、怖い。」

ま、いずれは戦うんだ、それが早くなっただけさ。

着くまでもしくは着いてもレベル上げしておこう。

「はい！」

＼青年絶賛レベル上げ中＼

ライバル戦と戦略と（前書き）

実は申し訳ない事にライバル戦終えてしまいました。
すみません。

今回はうる覚えながらの回で勘弁してください。

ライバル戦と戦略と

トキワ・センター

さて、努眼にあったのは予想外だったがりベンジは果たせたな。

「でも、私倒れちゃいました……。」

「気にしない気にしない！私はいれなかったから活躍も何も無かったし。」（レディバ：腕白）

「そ～ですよ。私なんかギリギリ相手を倒して、倒されましたから。」（サンド：おっとり）

「そんな事気にしないでガンガン成長して行こうよ！さあ！さあ！さあ！」（デイグダ：せっかち）

「落ち着けよ！そんな焦っても意味無いだろ！それよりも殴りこみだろ！？」（イトマル：やんちゃ）

殴りこむな。

「しかし、私達はあった事無いわね。」

「どんな奴だった？？うざったいのか？？？」

どちらかと言うと、冷静沈着かな。

「自分みたいと言う事ですか？」

「ん～ん～、大人っぽかった。」

「でも、聞いた感じだと、背伸びしてた感じなんでしょう？」

まあ、博士のいとこの息子（様は甥）らしいからな。

「しかし、厳しかったですね。」

ああ、あれは厳しい。

回想～22番道路～

さて、レベル上げはまだしとくかな。

「どこかで見たことある人物かと思ったら、作者さん。」

あ、努眼……だっけ？

「ええ、所で何かしてたんですか？」
修行かな。

「そうですか、因みにこの先はバッジが無いと通れないみたいです
よ。」

そうか、情報ありがとう。

「いえ、暇ですから。」

暇なしだよこっちは。

「そうですか。そうだ！バトルしませんか？」

良いけど、いきなりどうした？

「暇つぶしです。」

そうかい、んじゃリベンジマッチと行かせてもらっぜ！

ライバルの努眼が勝負を仕掛けて来た！

「行け！ホーホー！」

「掛かって来い！」

行け！サンド！

「はーい！行きまーす！」

サンド！引っかく！

「せいっ！」

「きゃ！」

「これを使いなさい！」（ディフェンダー使用）

相変わらず手段を選ばないな……。

「どうします？」

削るだけ削ろう、引っかく！

「えい！」

ドコッ！

「くっ！」

「体当たり！」

「了解！」

「きゃあ！？」

大丈夫か！？

「何とか…。」

変わるか？

「いえ、まだやらせてくれませんか？」

……無理はするなよ。

「はい。」

サンド！引つかく！

「えい！！！」

ズガン！

「か……！は……！」

「ホーホー！？」

「はー！はー！」

サンド！良くやった！

「えへへ！！／＼／＼」

「戻りなさい。」

「す、すみません。」

「次に期待します。」

ぼん！

さて、交替したいが……。

「まだ、戦わせてください……。」

駄目だ、交替。

「……はい。」

お疲れ様。

撫で撫で。

「あう／＼／／」

ぼん！

次はお前だ！ディグダ！

「諦めんな！怯むな！立ち向かうんだあああああ！！！！」
熱いわ！？

「ちつつち！舐めないでくだせえダンナあ！」
誰がダンナだよ。

「余裕ですね。」
な訳無いだろ。

「まあ良いでしょう。行け！ヒトカゲ！」
「……………」

何だ？この気迫は？

「…………ふ、ふふ、ふふふふふふふ！」
！？

「きゃっはー！！！！」

「落ち着きなさい。暴れたい気持ちは解りますが。」

「でもでも、マスター！私は強くなりたいし、マスターの役に立ちたいんですよおおお！」

「解りましたから戦闘開始ですよ。」（プラスパワー使用）
「ドーピング来たあああああ！！！！」

マジか……。

「ダンナあ。」

どうした？怖くなったか？

「萌えてきた！」

駄目だこいつ、もう色々手遅れだ……。

「さあ！指示をおお！」

砂掛け。

「……………は？」

だから、砂掛け。

「はあああああああああ！！？」

理由はあるぞ。

「何だよ？」

お前の情熱を仲間が受け取り相手を倒す。それこそ燃える展開だろ？
「……………燃えてきたー！」

計画通り！

「えへへへへへへへへ！行くよー！！！」

「引つかきなさい。」

「そおおおおい！」

「喰らええええ！」

ズン！

シュバ！

「目がああああ！目がああああ！バルス！」
「くうううううう！痛ええええええ！！！」

ディグダ、もう一度だ！

「ヒトカゲ！引っかくだ！」

「当たれええええええええええ！！！」

「まだだ、まだ終わらんよおおおお！」

ス
カ
！

シュバ！

「くそおおお！！！」

「h a - h a - h a - ! これで勝つる!!!」

……何気にフラグ建てたな。

「引かく！」

「そこおおお！」

ドカ！

「ぐはっ！」

大丈夫か？

「まだいける！はず！」

「まだ、いけるうう……!!!(泣)」

「しかし、熱いね。」

そうだな。

「まだか！次はまだか！」

……………行け！キルト！

「頑張ります！」

「久しぶりいいい！そしてえ……………！さよならああああ！」

「え……………？きやあああああ！？」

キルト！？

ドゴン！

キルト！

「ま、マスター……………、すみませ……………ん……………」

気にするな、向こうがドーピングしてるからいけないんだ。

「勝つためには手段選びませんよ。」

……………コラッタ、頼む。

「散っていった皆の仇！」

『死んでないから。』

まさかの全員からのツツ「ミ」。

「まあ良いさあ！さあああ！掛かって来いいいいい！」

コラッタ！嫌な音！

「喰らええええ！」

ボオン！

「くうう！」

「防御を下げますか……、ヒトカゲ！ 引っかく！」

スカ！

「当たらないよおん！」

「むかつく！」

嫌な音！

「えいやー！」

ボオン！

「当たれ当たれ当たれ当たれ当たれ当たれええええええええええ！！！！！」

スカ！スカ！スカ！

今だ！電光石火！

「止めだああああ！」

ズッ
ガ
ア
ア
ア
ア
ア
ン！

空中に吹き飛ばされるヒトカゲ。
そして、地上に落ちる。

ズシン！

「……」

「僕の負けですね。」

ギリギリだったかな。

「…………勝負は実力と時の運です。しかし、次は勝ちますよ。」
次も勝たせてもらうさ。

「では、さよなら。」

とりあえず、センターに戻るか。

く回想終了く

まあ、次の対決に備えてレベル上げだな。
全員、必ず勝てとは言わない。

でも、無理せず諦めず勝利を掴もう！

『おーーーーー!!』

ライバル戦と戦略と（後書き）

次回はクチバに行きます。
仲間集めてから修行します。

港にいったら釣りか？（前書き）

謝れなければならぬことがありますた。
あと、タイトル詐欺。

港にいったら釣りか？

実は、前回“捕まえてたの！？”というツツコミが来そうなので補足を。

ディグダ・キャタピー・ビードルは2番道路で修行中出会い捕まえました。

今回の様に、修行中に見つける事が多く、捕まえた報告を忘れるかもしれませんのでご容赦ください。

しかし、キャタピーとビードルのレベル上げてたら進化しました。眩しかったとです。

結果、トランセルとコクーンになりました。

あと、クチバ探索中に自電車引換券を萌えもん大好きクラブ会長から貰いました。

……………眠かったです。

センターではバトルサーチャーを貰いました。
これで資金稼げる！

以上、遅い報告でした。

くクチバく

……………。

「動きませんね。」

「齧る？」

止めとけ。

「……………」。(トランセル：のんき)

「……………」ガタガタ！。(コクーン：やんちゃ)

めっさ孵化したがっとなる！

「今日どうします？」

サンドの穴で修行でもしようかと。

「わ、私の穴！／／／／」

「変態！！！」

その穴じゃねーよ！？

つか、もう止めてくれ！

「マスター、その穴って……？」

知らぬが仏だ。

くクチバデパート・手前く

ここ、入れるのか？

「あー、現在立ち入りできません。」
解った。

しかし、暇だ…。

ん？

デパートの横に……、テレビ？

あれ？

モンスターボールがあるな。

空か？

「わあ。」

……入ってますかー？

「入ってるよー！」

……。

「……………」

……。

「これからよろしく！」

……はい！？

「転送！」

シュンッ！

え？え？
ちよっ！

ええええええええええええ！？

くセンターく

「やあ！」

やあ！じゃない！

お前誰の萌えもん！？

「君の萌えもん。」

そうじゃなくて！

「気づいたらボール入ってた。」

……え？

「だから、自分が何なのか解らないんだ。」（ロトム：陽気）

……。

「でも、君が見つけてくれた。なら僕は君の萌えもん！」

…… お前が良いなら良いが、後悔するかもよ？

「大丈夫だよ！僕の直感に間違いは無い！」

くくっ！

面白いな、お前！

「いえー！」

つか、お前♂なのか？

「んー、多分♀だと思うよ？」

ふーん。

まあ、よろしくな！

「よろしく！マイマスター！」

くクチバ・港く

釣竿貰ったから釣りでもするか。

……！

今だ！

「うー！うー！」

れみりゃー！

「違うわよ！針が痛いだよ！」
すまん。

「外しなさいよ！」
よっと！

「よくもやってくれたわね！最強のあたいに喧嘩売るなんて良い度胸ね！」

最強？

「そうよ！最強よ！」

行け！ロトム！

「呼ばれて飛び出て〜！」
最強らしいぞ？

「無い無い。」

「むきー！見てなさい！」
来るぞ！

「大丈夫だよ。」

ピョン！ピョン！

跳ねてるな。

「跳ねるだね。攻撃0の技。」
使えるのか？

「さあ？使う時あるんじゃないの？」

「どーだ！あたいの跳ねるは！」

きゃー！こわーい！（棒読み）
「マスター、ノリが良いね。」

さて、ふざけてないで捕まえるか。

「捕まえるの?」

磨けば光ると思うぞ。

「何で解るのさ?」

直感。

「なるほど。」

このあと、泥掛けで弱らせて捕獲しました。

クチバ探索結果：ロトム・コイキング

く再びセンターく

「うゝ！何で捕まるのよ!」

君が?だからさ!

「?って何よ!」(コイキング：穏やか)

——性格違いだよなあ——

「何よ?黙らないでよ。」

まあ、お前が最強なら捕まらないと思っただんだが。

「……………」

「マスター、それは地雷だよ?」

あ…………。

「…………そーよ、あたいは最強なんかじゃ無い……。ただの弱い萌えもんよ…………。」

…………なあ、俺がお前を捕まえた理由、教えてやろうか?

「え?」

1つは、俺のハーレムを作りたいと言う願望の為。

「そんな願望あったのかい?」

嫌か?

「気にはしないさ。驚いただけさ。」

「……まだ、あるの？理由。」

もう1つは、お前に可能性があると思った。

「可能性？」

ああ、だから俺がお前を“本物の最強”にしてやるよ。

「で、でも……。」

何、俺が信じられないならそれで良いさ。

でも、自分の可能性だけは信じる。

「……うん。解ったよ。でも。」

でも？

「アンタも信じるからね！」

光栄、といっておこう。

こうして、今日が終わった。

港にいったら釣りか？（後書き）

コイキングの名前は決まっています。
（チルドです。）

トレーナー戦は厳しいがおいしいと思う。(前書き)

捕獲して、戦って、食べられて(性的な意味で)ゝゝゝ
今日も 戦う 増える そして 食べられるゝゝ
もちろ ん 嘘 だが な !

トレーナー戦は厳しいがおいしいと思う。

（１１番道路）

さて、捕獲とレベル上げた。

「跳ねるわよ！」

「跳ねなくていいよ。」

「……………こく。」

「トレーナーとも戦いますか？」

多分な。

相手も俺らと同じレベルだと良いがな。

「そうですね…。」

まあ良い、行くぜ！

『おー！』

（青年散策中）

トレーナー一戦目：勝利！

二戦目：勝利！ロトムが倒された為センターへ。

三戦目：勝利！

四戦目：勝利！

五戦目：勝利！相手のノコッチの思念の頭突きが予想以上に威力が高かった。

六戦目：勝利！マルノームが思わぬ鬼門になった。センターへ。

七戦目：勝利！

八戦目：勝利！サンドが無双したので頭を撫でた。「えへ／＼／＼／＼／／」

九戦目：勝利！

十戦目：勝利！

……疲れたな、皆お疲れ！

「疲れた〜。」

「まだだ！まだ終わらないよおお！」

黙れ、お前のライフは零だ！

「まだだあああ！」

捕獲行くぞ！

『はい。』

結果：アーボ・スリープ・オニスズメ

今日はこんな所だな。

全員、明日も頑張るぞ！

『おー！』

トレーナー戦は厳しいがおいしいと思う。(後書き)

また、手に入れてない萌えもん報告が遅れるかも。

顔合わせ的な事。(前書き)

ヒトカゲ諦めました(泣)

しかし！ただでは転ばない！

伏線張ってやるぜええええ！

尚、今回からキャラの名前をつけて書いて行こうかと。

例

作者「うぼあー！」

こんな感じで。

顔合わせ的な事。

事後報告

1 番道路でゼニガメ・ポツポ確保 （ヒトカゲ♀ 出なかったので諦めた）

6 番道路でナゾノクサ・ニヤース・マダツボミ確保

6 番道路のトレーナーが出ず、バルビート・イルミーズが鬼門だった。（炎パンチ・氷パンチ繰り出してくる）

今回は、今まで捕まえたキャラの顔合わせである。

くちバシテイ萌えもんセンター・宿泊室

今回、初の全員顔合わせであった。

作者「第一回、顔合わせ〜！」

キルト「お〜！」（テレヤ）

ホーホー「夜中に叫ばないの！」（陽気）

コラッタ「カジカジカジカジッ！」（のんき）

オタチ「尻尾齧らないでえ〜〜」（泣）（能天気）

ニドラン♀「馬鹿！！止めてやれ！！！」（腕白）

ニドラン♂「とりあえず、チーズあげますから齧るのを止めましょう。」（穏やか）

レディバ「くっ！凄い力で齧ってやがる……！いい加減にしやがれ！」（腕白）

イトマル「拙者にお任せでござる！糸を吐くで捕縛して引き離すでござる！」（やんちゃ）

トランセル「……………」。（手伝う。）（のんき）

コクーン「……………」。（同じく。）（やんちゃ）

デイングダ「h a - h a - h a - ! 萌えてきたああああ!!!!!!」

(せっかち)

サンド「字がゝ違いますよー!？」(おっとり)

ロトム「ok! とりあえず落ち着こうか。僕としてはカオス過ぎる展開なんだ。」(陽気)

コイキング「あたいに任せなさい!」(穏やか)

スリープ「何かやるの? 面白そうだけど見てよっと。」(気紛れ)

アーボ「ふん! どうせ下らない事だな。」(生意気)

オニスズメ「そ、そんな事……言わなくても……。 (ビクビクッ!)

「(おくびょう)」

ポッポ「そんなに怖がらなくても良いんじゃないかな?」(テレヤ)

ゼニガメ「大丈夫だよ! この皆は良い人達だし。」(頑張りや)

ニヤース「そんな事より物拾って……にゃ!? どっかに落としたにゃ!？」(うつかり)

マダツボミ「これじゃねーの?」(やんちゃ)

ナゾノクサ「クラブの実か……。 まあまあね。」(生意気)

作者「中々にカオス。」

キルト「でもどうします? この状態。」

現在、枕投げが開始されていた。(尚、萌えセンターは防音なので問題なし。)

ホーホー「弾幕薄いわよ! 何やってるの!」

コラッタ「喰らえ! 電光石火投げ!」

コラッタが電光石火を使い枕を投げる!

オタチ「貴女だけが出来る訳じゃないわよ……!」

オタチも電光石火で応戦する。

そんな2人を尻目に、他は他で戦っていた。

ニドラン♀「沈めやあああ！！！」

レディバ「こっちのセリフだあ！」

ニドラン♂「やれやれ、何故自分まで……。ですが、殺るからには全力で行きますよ？」

ロトム「字が違うと思うよ？まあ、僕も手加減する気は無いけどね！」

接近戦の腕白達と遠距離戦の丁寧口調達の攻防はヒートアップしていた。

しかし、熱さならあいつが燃え上がらない訳も無く。

ディグダ「もつとだ！もつと熱くなれよおおお！」

サンド「ひいひいひい~~~~！！？ま、丸くなるうう~~~~！！」

トランセル「……。 (硬くなる) 」

コクーン「……。 (同じく。) 」

アーボ「誰か奴を止める。暑苦しいわ。」

そう言いつつ巻きついて止めようとするアーボ。

途中、ディグダが砂掛けならぬ布団掛けしてきたので切れたアーボが毒針を乱射する。

そんな感じで攻防は続いた。

布団は特注製なので穴所が傷一つつかないので、安心だ。

……こんな攻防を想定されて作った業者が凄いと思う。

さて、他も戦いに興じている様だ。

コイキング「無駄無駄無駄無駄あ！あたいったら最強ね！」

スリープ「くっ！赤い魚は化け物か！？」

オニスズメ「す、凄い……………！」

ポッポ「まさか……、跳ねっぱなしって……………！」

ゼニガメ「泡で動きを遅くするよ！頑張るぞおおお！」

跳ねて避けるコイキング。

枕を当てようと催眠術を掛けようとするスリープ。

泡を当てようと頑張るゼニガメ。

まさに、大惨事枕投げ大戦（笑）

参加していない奴等は傍観しながら実況中。

ニヤース「おおーと！ここでコラツタとオタチの電光石火戦に決着がついたにや！」

ナゾノクサ「まさかの相打ちね。しかも、ホーホーの上で蹴りがついたからホーホーは下敷きでアウトね。」

マダツボミ「あれ？そーいやイトマルは？」

暗躍してる蜘蛛がいた。

イトマル（今こそ拙者が輝く時でござる！）

忍びなら輝くなと言いたいが、聞こえる訳も無く。

イトマルは事前に張っておいた“糸”を発動する準備をしていた。

イトマル（くくっ！今に地獄を味あわせてやるでござる）

コイキング「ぐはあああああ！？」

イトマル「えっ？」

ドゴオ！

枕がヒットした勢いで飛ばされたコイキングがイトマルに直撃した。しかし、イトマルが直撃した勢いで腕をおもいきり振り上げた事により、仕掛けた“糸”が発動する。

ビーン！

仕掛けられた糸がトランポリンの要領で勢い良く跳ねる。

『きゃああああああ！?』

その上に乗っていた面子は天井にぶつかりたんこぶを腫らして気絶した。

因みに天井も（略）

作者「……………」

キルト「……………」

トランセル「……………」

コクーン「……………」

見渡す限り死屍累々（笑）

実況メンバーも巻き込まれた様だ。

サンド「痛〜〜〜〜！」

作者「大丈夫か？」

サンド「な、なんとか〜〜。」

キルト「しかし、頑丈ですね彼方達。」

サンド「それしか取り得が無いから……………」

作者「そうか？成長すればきつと強くなると思っぞ？」

サンド「そ、そうですね〜〜？」

作者「ああ！」

良い笑顔をサンドに見せる作者。

不機嫌になったキルトは、弦の鞭を使い枕を投げる。

作者「ぶっ!?!」

キルト「ふーんです。」

作者「……………良い度胸だ。喰らうが良い！」

キルト「きゃっ!？」

サンド「私もやる……………」

ゼニガメ「う…………ん。ヒトカゲ…………。」

こうして、初の顔合わせは成功したと思う。
今日は忘れられない日になるだろう。

顔合わせ的な事。(後書き)

今回はハナダシティから始めようかと思います。

多分ハナダの草むらで萌えもん捕まえてると思うので、次回に捕獲報告します。

後、自転車を貰った後捕まえた事にしてますので自転車屋の絡みなどは期待しないでください。

質問ですが、まだレベルも低いのですが一度今のレベルでジムに挑むべきか、それともマサキの家に向かうべきか悩んでいます。

どちらが良いですかね？

メール求む。

進化する事は成長する事であり、化ける事でもある。(前書き)

今回も事前報告だ。

前回の質問の答え返ってきてない……。

自分で決めて良いのかよ？

まあ、良いけど。

進める時は進めるし。

進化する事は成長する事であり、化ける事でもある。

事前報告

トランセルとコクーンがレベル10になった時、眩く輝いたのだ！

……進化したんですけどね。

眩しかった。

バタフリーとスピアーになったので技を覚えました。

フシギダネことキルトもレベル16でフシギソウに進化しました。

実際の様子がこちら……！1！2！3！

〈回想〉

キルト「ま……、マスタあ……。」

作者「ど、どうした！？」

キルト「体が……、熱い……！」

バタフリー「進化ですね。」

スピアー「ほう、我等が隊長もついに進化か。」

作者「進化なの！？お前等何とも無かったじゃん！」

2人「蛹だったから。」

作者「そうか……ってんな訳あるか！」

2人「ちっ」

作者「舌打ちすな！」

キルト「マスタあああああああ！」

作者「キルト！？」

ピカー！

シュウウウウン！

キルト「……………。（ほけ）」

作者「キルト……？大丈夫か？」

キルト「あ、ふあい、大丈夫れす。」

作者「あー、とりあえず休んでろ。」

キルト「ふあい／／／／」

キルトは部屋に行った。

残るのは3人のみ。

作者「しかし、今日の特訓から帰って来てから様子がおかしいとは思ったが、進化とはな。」

バタフリー「しかし、妙に艶かしかったですね。」

スピアー「さすが隊長だ。見習わねば。」

作者「……………あえてツツコミたいがめんどくさい展開になりかねないのでスルーする。」

バタフリー「あら、突っ込むだなんて…………／／／／／」

スピアー「我等が司令はいやらしいですな／／／／／」

作者「……………これだけは言わせろ、お前等そんな性格だったか？」

バタフリー「必ずしも書かれてる性格とは限りませんよ？」

スピアー「女は化ける者だ。」

作者「御見それしました。」

（回想終了）

……………今回これだけで潰せるんじゃない？

因みに、全員のレベルは10にしたのでそろそろ捕獲に行こうかとクチバの右のゲート通って散策しに行くの忘れたので、そちらに行こうかと。

あ、まだ報告がある。

ハナダに来る前の話。

地下通路通る前に、とある一軒屋にお邪魔したんだ。

そこには技教え屋の人とレベル上げマシンがあったのだ。

技屋の人曰く「きのこ持って来たら技を思い出させたり、覚えさせたりするぜ！」と言っていました。

白黒魔法使いだったら様になるのに。

レベル上げマシンは、装置調べたらいきなりバトルだった。

レベル5ばかりだったが、相性が悪い萌えもんだったので苦戦した。瀕死はださなかったが。

地下通路を通る時、中が以上に暗くてオニスズメが泣きながら服にしがみついていた。

まあ、仕方無いと思ったが、その他の視線が痛かった。

死線に変わってる奴も居たが無視した。

そんなこんなでハナダに到着した。

自転車引き換えで自転車を手に入れ、俺と仲間達で交替しながら乗ったが大体が漕げず倒れるので練習するとか言ってた。

……萌えもんも自転車に乗るのだろうか？

まっ！そんなこんなで今日が過ぎていった。

進化する事は成長する事であり、化ける事でもある。
(後書き)

今回はここまで。

次回は、クチバ右を通りトレーナーをしばき倒します。
捕獲もします。

毎回恒例の捕獲とレベル上げです。ライバル戦は危ない。(前書き)

前回、クチバ右行くと言いましたが。

カビゴンが寝てました(泣)

てな訳で、ハナダの草むらで捕獲とレベル上げします。
上手く話が進めばライバル戦書きます。

毎回恒例の捕獲とレベル上げです。ライバル戦は危ない。

ハナダシティ・センター

作者「今日は仲間集め行くぞ。」

ニドラン。「誘拐ですね。解ります。」

ロトム「そんな趣味があるなんて……！見損なつたよ主人！」

作者「沈めてやろうか？幸い水辺には困らないし。」

2人『ごめんなさい。』

作者「よろしい。んじゃ、行くぞ。」

全員『おー！』

4番道路

作者「んじゃ、捕獲しますか。」

青年散策中

結果：メリープ

作者「ふむ。」

キルト「どうしました？」

作者「いや、なんでもない。」

キルト「？」

ハナダシティ・センター

作者「うーん……。」

ロトム「どうしたんだい？」

作者「ん？ああ、マサキって奴の噂だよ。曰く「珍しい萌えもんを持つてる。」とか「珍しい萌えもん手に入れる為に、あんな事やこんな事も平気でするって聞いたよ！」とか「皆羨ましいからそんな噂が流れてる。」とか。」

ロトム「なるほど、尾ひれがついた噂が多くてどれが正しいか解らないんだね？」

作者「そういうこと。」

ロトム「なら、行ってみてはどうだろ？虎穴にいらずんば虎児を得ずとも言っし。」

作者「そうだな、行ってみるか！」

ロトム「その前に、新しい仲間を鍛えないとね。」

作者「そうだな。」

ハナダ・ゴールデンボールブリッジ前

努眼「あ、作者さん。」

作者「お久しぶり。」

努眼「ええ。こんな所で奇遇ですね。」

作者「そうだな。どうよ調子は？」

努眼「いろいろ捕まえて育ててますね。」

作者「俺もそんな感じだな。」

努眼「なら、見せ合いまししょうか？」

作者「バトルでか？」

努眼「ええ。（満面の笑み）」

作者「……仕方無い、戦おう。」

ライバルの努眼が勝負を仕掛けてきた。

努眼「行きなさい！ホーホー！」

ホーホー「前回の屈辱を晴らさん！」

作者「行ってくれ！ロトム！」

ロトム「任せてくれ主人！」

作者「電気ショック！」

努眼「風起こし！」

主達の声に応える様に技を放つ2人。

有利なのはロトムだった。

ホーホー「くっ！」

努眼「麻痺ですか……。」

作者「良いぞ！その調子だ！」

ロトム「余り調子に乗せないでくれ主人。顔がにやけてしまう。」

そして先ほどと同じ作戦を繰り返す作者。

作者「電気ショック！」

ロトム「落ちろ！」

それがホーホーに直撃する。

ホーホー「きゃあああああ！？」

ホーホーは倒れた。

努眼「……良く頑張りました。戻りなさい。」

作者「次は何を出すんだ？」

努眼「次はこの子です。行きなさい！ケーシー！」

ケーシー「……行くよ。」

作者「こっちはニドラン♂だ！」

ニドラン♂「では、行きますよ！」

作者「突く！」

努眼「念力！」

ケーシィの念力がニドラン♂に大ダメージを与えた！

ニドラン♂「ぐあああああ！？」

作者「ニドラン♂！？」

努眼「今度はこちらが有利ですね？」

作者「交替だ！ポツポ！」

ポツポ「はい！」

しかし、またもピンチになる。

この後も交替する事になった。

作者「不味いな。仕方無い、行け！ロトム！」

ロトム「任せて！」

しかし、念力の追加効果で混乱する。

～省略～

結果：ギリギリ勝利。

被害が酷いので、事後報告

努眼はマサキの家に行つて来たらしいが、不在だったらしい。

珍しい萌えもんは見たがとは言っていたが。

明日行こうと思う。

毎回恒例の捕獲とレベル上げです。ライバル戦は危ない。(後書き)

ギリギリ勝ちました。

ケーシィはレポートしか使わないと思ったのが仇になりました(泣)

今回はブリッジの秘密です。

では、また。

ゴールデンボールブリッジの戦い。(前書き)

今回はついに噂の組織との対戦になるはず。
尚、クリアしたら草むらで散策します。

ゴールデンボールブリッジの戦い。

く24番道路・ゴールデンボールブリッジく

作者「今ここで、トレーナー勝ち抜き戦が行われてるらしいぞ。」
イトマル「主！参加するでござるか？」

作者「つか、ここしか通る道が無いからなあ。」

ゼニガメ「ここはボクに任せてよマスター！泡だらけにしちゃうぞ
おお！」

作者「草タイプとか出ないといいがな。」

コラッタ「ねえくお兄さん？この橋齧って良い？」

コラッタ以外『駄目。』

コラッタ「ちえく。」

キルト「マスター。」

作者「どうした？」

キルト「この橋のゴールデンボールってどういう意味なんですか？」

作者「……………」

ニドラン♂「それは、いつか解る日がきますよ。」

キルト「そうなんですか？」

作者「まあ、そうだな。もういい加減進むぞ。」

全員『イエッサー！』

く橋通過中く

トレーナー戦

1回戦：ギリギリ勝利した。他瀕死。

2回戦：勝利した。瀕死1名。

3回戦：勝利。瀕死1名。コラッタ連続。

4回戦：勝利。宿り木が功を成した。

5 回戦：勝利。オニスズメが瀕死。

勝ち抜いた訳だが、少し鍛えないといけない事が判明。
作者「特訓しにいくぞ！」

全員『おー（泣）』

ゴールデンボールブリッジの戦い。(後書き)

……次回こそロケット団と戦います(泣)
レベル差が激しいのが痛過ぎる(泣)

毎度事後報告（前書き）

えゝ、明日から母親に（強制的に）山に逝ってきます（泣）
深夜12時にですが（号泣）

なるべく早く書きます。

今回はレベル上げの報告です。
進化の話ですが。

毎度事後報告。

進化報告。

レベル15で進化した萌えもんを回想します。

く回想く

メリープ「体熱い……です。」

オタチ「同じく……。」

作者「……進化か？」

レディバ「何の心配もしないんだな、お前。」

作者「前回の弄りは勘弁なんだが。」

レディバ「あいつら関係無いだろ。」

作者「そうだよなあ。」

作者は2人に近づく。

作者「大丈夫か？」

メリープ「頑張ります……。」「（頑張りや）

オタチ「しかし、熱いです。服脱ぎたいです。」

作者「止めてくれ。理性が保てん。」

レディバ「何と言う欲望。」

2人「きゃー！！！！」

ピカー！

シュウウウウン！

作者「……どうなった？」

レディバ「さあ？」

モココ「ふにゃ〜。」

オオタチ「みゃ〜。」

作者「……寝るわ。」

レディバ「ん、お休み。」

モココ「ごしゅじんさま〜。まってにゃ〜。」

オオタチ「そうそう、それが〜メイド道です〜。」

作者「……………」

強く生きる。

〜回想2〜

省略。

時間無いので。

カメール「ええ〜！？ボクの進化シーンは！？」
無い。

カメール「そんな……………！この日の為に考えたセリフは！？」

あれは駄目だ！卑猥なんてレベルじゃねーよ！

カメール「うえーん！（泣）」

じゃーなー！

カメール「ヤケ食いしてやるううう！！！！」

終了。

毎度事後報告。（後書き）

明日は多分投稿できません。

全員のレベルは15まであげました。

コイキング、15で体当たり覚える。
泣けるぜ。

現るは、ロケット団。(前書き)

時間が事情により延びました。

カメール「それならボクの進化の話でも良かったよね？」

放送禁止用語並みに危険だから駄目。

カメール「……………＜放送出来ません＞」

止めい！

現るは、ロケット団。

「24番道路・ゴールデンボールブリッジ」

作者「ふう。何とか終わったな。」

キルト「しかし、厳しかったですね。」

ロトム「いかに僕が弱かったか身にしてみたよね。この橋でよく解ったよ。」

コラッタ「そのおかげで地獄の特訓するハメになったよね……。」

オニスズメ「うう……、もうシグナルビームいやあ……！」

サンド「もうこりこりです。」

ディグダ「オレはまだまだ行けるぜえ！」

作者「また、レベル差が激しいと感じたらやるぞ。修行。」

ディグダ以外「ええ！？？」

作者「当たり前だ。」

全員「はい。」

そんな感じで橋を渡り終えようとした時、1人の謎のトレーナーが現れた。

謎のトレーナー「おみごとー！5人抜きおめでとう！商品にこれをプレゼントしよう！」

金の玉を貰った。

作者「あ、ありがとう。」

謎のトレーナー「所で、物は相談なんだが……。」

作者「はい？何ですか？」

謎のトレーナー「ロケット団に入らないか？」

作者「……………！？」

謎のトレーナー「なに、萌えもんが悪い事をやらせるだけの仕事さ。それに萌えもんなら捕まっても直ぐ変わりが居るだろ？最高のビジネスじゃないか！」

作者「……………断る。」

謎のトレーナー「何で？入りなよ、入らないの？」

作者「ああ。」

謎のトレーナー「そうか……………、それなら無理やり入れてやる……！」

ロケット団員が勝負を仕掛けてきた。

ロケット団員「くくく！無駄だ！足掻いたところでこの“力”が欲しくなる！行け！アーボ！」

アーボ「……………う……………あ……………」

作者「何だ……………、あの眼は！？くっ！デイグダ！」

デイグダ「どうやら、ふざけ無しみたいだな。」

作者「デイグダ！マグニチュード！」

デイグダ「落ちなああああ！」

マグニチュード8がアーボを襲う。

アーボ「……………あ……………」

ロケット団員「噛み付けええ！」

アーボがディグダに噛み付く！

ディグダ「ぐああああ！？」

作者「ディグダ！？」

ディグダ「大丈夫だぜ……。」

防御力は元々低いため、大ダメージを受けるディグダ。しかし、素早さならこちらが上だった。

だが、ロケット団員は回復の薬を使用する。

ロケット団員「残念だったな！次で決めてやるぜ！」

トレーナー達は先ほどと同じ作戦を繰り出す。

結果：ディグダが勝った。

ディグダ「勝ったぜえええ！」

作者「とりあえず、交替だ。」

ディグダ「まだ行けるううう！」

ロケット団員「ちっ！使えない！」

作者「……何故、萌えもんを道具扱いするんだ？」

ロケット団員「何故？くくく！こいつ等は“道具”なんだよ！だってそうだろ？道具じゃないならこいつ等は人間の言う事を聞かないはずさ！聞くのは道具という認識があるからだろおお！」

作者「……どうやら、てめえはボコしないと気がすまない。」

ロケット団員「出来るもんならやってみなあ！行け！ズバット！」

ズバット「……あ……。」

作者「ロトム、頼んだ！」

ロトム「どうやら、屑のようだね。…………潰してあげるよ。」

作者「ロトム！電気ショック！」

ロトム「さあ！痺れる！」

ロトムの電気ショックはズバットには効果抜群の様だ。

ロケット団員「驚かせ！道具！」

ズバット「…………。」

ズバットの驚かすがロトムに直撃。

効果は抜群だ。

作者「大丈夫か？」

ロトム「これくらい何とも無いよ。次で決めよう、主人！」

作者「ああ！ロトム！電気ショック」

ロトム「終わりだ！」

結果：ロトムの勝利！

ロケット団員との勝負に勝った！

ロケット団員「馬鹿な…………！俺より強いだと…………！」

作者「さて…………、覚悟は出来てるんだろうな？」

ロケット団員「ひいひい！ま、待て！それだけの腕があればロケット団でも幹部になれる！今からでも遅くない！入らないか！な？」

作者「…………お前等。」

仲間全員『何？』

作者「ボコレ。」

仲間全員『応！』

[illegible]

この後、ジュンサーさんに通報して、ロケット団員は逮捕された。ロケット団員の手持ちの萌えもんは薬を使われて操られていた。治療すれば治るらしいので、問題ないらしい。

作者「その後は良いトレーナーが見つかりしだいかな……。」

「キルト……嫌な出来事でしたね。」

作者「……言っておくぞ。」

「キルト？」

作者「確かに、俺は俺の願望の為に前等を戦わせてるが、道具として見てはいない！」

キルト「マスター……」。

作者「……それだけだ。明日こそマサキの家に行くぞ！」

仲間達
『
おおー
♪
』

こうして、深まった“絆”であった。

現るは、ロケット団。(後書き)

実は、ロケット団様萌えもんだったらオリジナルバトル書こうと思っただんですが、普通だったなので今回はこれで。

次にロケット団と戦う時はそういう風な展開にします。

時々自分が嫌になる時があるが、本編に関係は無い。関係あるのは伏線くらいか

帰ってきましたよ。

途中で食べたかき氷に当たり、腹下しました（泣）

今回は伏線の回のはず。

尚、ジム戦は今のレベルでいきますが、マサキの家行く途中で戦ったトレーナー戦でかなり瀕死者だったので心配である。

余談だが、コータスが相手の萌えもんで出てきたんだが滅茶苦茶気になった事がある。

灰色の傘（パラソル？）持ってた。

服装もなんか違ってた。（肩まで露出してた。）

知ってる人いますか？（鬼畜なんだが、バージョンが解らない）

時々自分が嫌になる時があるが、本編に関係は無い。関係あるのは伏線くらいか

事後報告

向かう途中の草むらでケーシーを捕獲した。

気になった事があった。

カップルうぜえ。

（25番道路ハナダの岬・マサキ宅前）

作者「……………」

仲間全員「……………」

作者「ジム戦終わったらか、ジム戦で敗北したら……………特訓な？」

仲間全員「おおおおおお！！！！！！！！！！」

現在、マサキの家までやってきた訳だが、途中が酷すぎた。

トレーナー戦でことごとく瀕死者だったので、特訓を考えている。

……………また、バトルマシンの缶詰か。

作者「中に入るぞ。」

イーブイ「だ、大丈夫なの？チャイムも鳴らさなくて？」（臆病）

……………何故、イーブイが居るかというと。

ハナダの下草むらで出た。

捕獲。

以上。

作者「呼び鈴無いんだが？」

イーブイ「あ……………」

ロトム「大丈夫だよ。中には誰かいる気配するし。」

コラッタ「いざという時は齧るよ！」

作者「程ほどにな。」

オニスズメ「と、止めないんですか？」

作者「諦めた。」

こうして、家に入る作者達。

作者「お邪魔します。」

中には人は居ないが萌えもんのピッピが居た。

作者「あー、マサキさん居ます？」

ピッピ「何や？何か様か？」

作者「えと、マサキさんは？」

ピッピ「だから、ワイに何か様か？」

作者「……………え？」

ピッピ「こほんっ！こんにちわ！僕、萌えもん……………！……………ちゃうわい！」

突然ピッピらしき萌えもんがノリツツコミを始めた。

そして、自身に指差しこっ叫ぶ！

マサキ「ワイはマサキ！人読んで萌えもんマニアや！」

作者「嘘だ！」

マサキ「嘘ちゃうわい！何やその眼は？あんさん信用してへんな？」

作者「出来るか！」

マサキ「ホントやで！実験に失敗して萌えもんとくつついてもうたんや！」

作者「何の実験したらそうなる。」

マサキ「いや、転送装置の修理してる時、こんな考えてたんや。」

マサキ『貴女と合体したい！何て展開ないやるか……。』
ピッピ『こら！手を動かす！』

マサキ『良いやん別に。減るもんあらへんし。』

ピッピ『良くないわよ……。って！ちよつと！』

マサキ『どないした？って！うおう！？』

カシャン！

ブォーン！

チーン！

マサキ「てな感じで上手にできました」的にくつついてもうたんや。

「

作者「馬鹿だろ。」

マサキ「酷いな、事故やで？」

作者「つか、実験だったんじゃないのか？」

マサキ「勿論！あの子と合体できると言う実験を……。ハ！？」

作者「帰るぞ、皆！」

仲間全員『異議なし！』

マサキ「待ってえな！頼む！ワイはどうなってもええ！しかし、ピッピを戻したいんや！」

作者「……………」

マサキ「なっ！助けてくれへん？」

作者「……………解ったよ。」

マサキ「おおきに！それじゃあ、戻る手順を説明するで。ワイが転送マシンに入るさかい、その時パソコンに表示されている分離プログラムちゅーアイコンを押してくれ。頼むで！」

マサキは転送装置に入っていた。

作者「えーと、……………これか。」

ポチッとにやあゝ！

作者「……………」

その後、分離して元に戻ったマサキとピッピが出てきた。

マサキ「やあー！おおきにおおきに！ホンマ助かったわ！」

ピッピ「アンタが変な事考えているのがいけないんでしょ！」

マサキ「まあ、ええやん。終わりよければ全て良しと言うで。」

ピッピ「良くないわよ！」

マサキ「で…………、あんさんもワイの萌えもんコレクション見に来たとちゃうんか？」

しばらく放置だったがやっと本題に入れた。

作者「まあ、一応はな。」

マサキ「なんや曖昧やなー、おもしろない。」

作者「悪かったな。」

マサキ「ああそや！」

作者「？」

マサキ「お礼！つちゅーのもなんやけど…………、これやるわ！」

作者は船のチケットを貰った。

ピッピ「あー！？それアタシと行こうとしてたチケット！」

マサキ「安心しい、ちゃんと人数分あるわ。」

ピッピ「そう、それなら良いわ。」

作者「しかし、何処の船のチケットなんだ？」

マサキ「ああ、それは今クチバの港に来ているサント・アンヌ号ち

ゆーでかい船が着とるんや。世界各地の萌えもんトレーナーもぎょうさんくるらしいで。」

マサキは作者の耳元でピッピに聞こえない様に本音を話す。

マサキ「チケツト貰うたのはええんやけど、パーティとか好きやないんや。」

作者（じゃあ、何で行くんだよ？）

マサキ（上目づかいでおねだりされたら勝てるか？）

作者（……………無理だな。）

男の悲しい性である。

少しだけ話をしていく事になった。

ピッピ「良い！男はね尻に敷いてこそ成長するのよ！」

サンド「そうなんですかー！」

ロトム「ふむ、確かにそんな傾向が無い訳では無いな。」

キルト「でも、マスターは成長してると思いますけど…………。」

ピッピ「甘いわよ！成長にさらに輪を掛けた成長の方がもっと効率が良いわ！」

コラッタ「齧るのは？」

ピッピ「それは止めておきなさい。」

イーブイ「勉強になります。（メモメモ）」

オニスズメ「何で、メモしてるの？」

……………作者の威厳がピンチである。

作者「勘弁してくれ。」

マサキ「まあまあ、あれも一種の愛情と思えばええやん。」

作者「はあ。」

マサキ「所で作者はん。」

作者「何だよ……………！」

マサキの眼がマジで真剣だった。

マサキ「あんさんを見込んで、渡したい物があるんや。」

作者「わ、渡したい物？」

マサキ「……着いてきてーな。」

こうして、色々なフラグが立った。

帰りの時間帯、マサキは「あんさんに渡したからあんさんの物や。けれど、間違わんという。」と言っていた。（こっそり）

作者は初めてのジム戦の不安と緊張、そしてマサキから貰った“装置”をどうしようか悩みながらセンターに帰った。

時々自分が嫌になる時があるが、本編に関係は無い。関係あるのは伏線くらいか

まあ、前に予告した通りの展開になりました。
さて、もう直ぐ夏休みに突入なんです。

宿題 & a m p ・学校見学があるから鬱だ……。

まあ、それで更新が遅れたりするので今のうち言っておきました。
官能系も書かないとな……。

ジム戦はどうか解らないがフルメンバーで挑もう！（前書き）

さて、今回は草と電気で攻め込みます。

レベル上げはこれで勝っても負けてもします。

その分、投稿が遅れますが。

ジム戦はどうなるか解らないがフルメンバーで挑もう！

くハナダ・ジム内く

今回はついにジム戦。

メンバーはナゾノクサ・キルト・マダツボミ・モココ・コラッタ・ロトムだ。

コラッタは紙装甲要員で入れている。

作者「しかし、何故“雨”が降ってるし。」

ロトム「多分、水に有利な様にしてるみたいだね。」

ナゾノクサ「無駄よ、そんな事しても私には勝てない。」

マダツボミ「私達、だろ？」

作者「まあ、油断しない様にな。」

ジム内トレーナー戦

1回戦：勝利！相手のサクラビスがエロく感じた。

2回戦：勝利！

作者「いよいよカスミ戦だ。皆気を抜くな！」

仲間全員『おゝ！』

奥の場所にカスミは居た。

カスミ「挑戦者ね？」

作者「ああ、マサラから来た作者だ。」

カスミ「……あのね君！萌えもん育てるにもポリシーがある人だけがプロになれるの！」

作者「……別にプロ目指してないが。」

カスミ「……貴方は萌えもん育てる時、何を考えている？」

作者「全員頑張っているなあとは。」

カスミ「……………私のポリシーはね…水タイプ萌えもんで攻めて攻めて……攻めまくる事よ！」

作者「そうかい、なら見せて貰おうか？水の脅威を！」

カスミ「今にその減らず口を叩けなくしてあげるわ！」

ジムリーダーのカスミが勝負を仕掛けてきた！

カスミ「行けえ！マイスタディ！」

ネオラント「悪いが……！押してまいる！」

作者「不味いな、強い！だが、こちらも負けられない！行け！マダツボミ！」

マダツボミ「悪いが倒させてもらっぜえ！」

カスミ「冷凍ビーム！」

ネオラント「ふん！」

マダツボミ「ぐああああ！？」

作者「な！？一撃だと！？！」

カスミ「さあ！どうする？降参？」

作者「ロトム！」

ロトム「コレは不味いね。やばい。」

作者「電気ショック！」

カスミ「デスサブマリン！」

～省略～

結果：敗北……。

カスミ「勝負有りね。」

作者「……………」

カスミ「さて、敗者は帰ってくれない？……底が見えるわよ。」

作者「……負け犬の遠吠えを言って良いか？」

カスミ「……………」どうぞ。」

作者「いつかりベンジに来る。首を洗って待ってる。」

カスミ「水で洗っておくわ。」

作者「今度はアンタの減らず口を叩き治す。」

カスミ「いつでもどうぞ。」

作者は瀕死の萌えもんを庇いながらセンターに走った。

〈萌えもんセンター・宿泊室〉

作者「……まあ、気にするなと良いが……、そうもいかないか。」

ロトム「当たり前だよ。」

マダツボミ「そうだな、キルトだけでしか倒してない。正直力不足だ。私達のな。」

ナゾノクサ「……………」

作者「どうした？さつきから黙っているが。」

部屋に入った時から口を閉ざすナゾノクサ。

ナゾノクサ「……私が油断してなければ……！」

作者「終わっちゃった後だ、今更言っても仕方無い。気にするな。」

ナゾノクサ「無理言わないでよ！どうやって気にしないって言うの！？」

作者「じゃあ、油断しなかったら勝てたのか？」

ナゾノクサ「それは……！」

作者「どの道、あいつが使ってた萌えもんは余り見ない萌えもんだ。多分こちらの奴じゃないか、最終進化だろ。」

ロトム「やっぱりね、どうりでおかしいと思ったよ。いくら強いとは言え電気を喰らっても半分も削れないから変だとは思ったけど。」

作者「どうやら、俺達は修行地獄行きだな。……悪いが今回は文句は言わせないぜ？」

モココ「言いませんよ。私達全員強くなりたいですから。」

作者「そうか。」

モココ「そうですよ、ご主人様！」

作者とモココ以外『ご主人様？』

作者「……いい加減に止めてくれ、その呼び方。」

モココ「駄目です」

キルト「……………！（ゴゴゴゴゴゴッ！）」

コラッタ「齧って良いよね？お兄さんの相棒齧って良いよね？（眼がやばい）」

作者「落ち着け、落ち着くんだ。」

こうして、敗北の夜だったが修行して見返そうと決意した夜であった。

この後、作者は眠るに眠れなかったとか。

ジム戦はどうなるか解らないがフルメンバーで挑もう！（後書き）

敗北しました。

あの萌えもん、ダイヤモンドかなんかが萌えもんになったのか？
知ってる方情報よろしく。

報告ですが、ここで臨時ニュースをお伝えします。今日未明、ハナダシティの煙

と、いう夢を見たんだ。

引つかかったな！

そんな貴方に？の称号を与えましょう！

報告ですが、ここで臨時ニュースをお伝えします。今日未明、ハナダシティの煙

く事後報告く

今回は主力とその他のレベル上げてたら進化したので、回想です。

く回想く

コラッタ「熱いよう……！」

ニドラン♂「まさか……！ここまでとは！」

ニドラン♀「水……！！水持って来い……！！」

ナゾノクサ「これくらい……！！冷凍ビームよりかわ……！」

マダツボミ「何か……変な感じが……！」

作者「見慣れた光景だ。」

モココ「ご主人様、現実逃避は如何なものかと。」

オオタチ「そうですよ、彼女達の晴れやかな進化を見届けるのが
くご主人様の勤めですよ。」

作者「……………2つ言っておく。1つ目は紳士も混じってる、2つ目
はお前が元凶か。」

オオタチ「何のく事ですか？」

作者「何で呼び方がご主人様なのさ。あと、どっから持ってきたそ
の服。」

モココ「私達の主〃ご主人様と言う方程式が成り立っております。」
オオタチ「服は近くの服屋で売ってました！」

作者「胃が痛い……。」

そんな会話が進化の最中であつた。

しばらくして。

作者「お疲れ。」

ラッタ「うゝ！何か落ち着かないよう！」

ニドリーノ「ふむ、強くはなったとは思いますがまだまだ火力不足ですかねえ。」

ニドリーナ「しかし、熱かったぜえー！」

クサイハナ「何か臭そうな名前なのに、甘い香りになってる……。どうということなの？」

作者「まあ、臭いよりはマシじゃないか？良い香りだし。」

クサイハナ「まあ、そうだけどって嗅がないでよ／＼／＼／」

ラッタ「所で、マダツボミは？」

ニドリーノ「今はウツドンですよ。はて、どうかしましたか？」

ウツドン「／＼／＼／／／／／」

作者「大丈夫か？ジョーイさん呼んでこようか？」

キルト「なら私が見てみましょうか？」

作者「どっから沸いた。」

キルト「ずっと、イマシタヨ？」

作者「片言になってる。」

キルト「？」

作者「んじゃあ、呼んでくる。」

作者がウツドンから離れようとした時。

がしっ！

作者「！？」

ウツドン「い、行かないで……。お兄ちゃん……。／＼／＼／」

.....えっ？

この時、全員が一斉に耳を疑った。

そして、時は動き出す。

ウツドン以外『ええ~~~~~~~~!?!?!?!?!?!?』

そうして、そこはカオスになった。

キルトが作者を弦でギリギリ締め上げたり。

ニドリーナは作者の腹を2度蹴りしたり。

クサイハナは作者に痺れ粉を噴射したり。

叫びを聞きつけたロトムは事情を聞き作者に泥掛けしたり。

ラッタは作者の相棒に怒りの前歯をやるうとしてる時、ニドリーノに邪魔されたり。

ウツドンは作者を助けようとしたり。

メイドと化した2人は微笑ましく見ていたり。

ジェラシー成分多いなあ。

数分後、ぼろぼろになった作者がウツドンに“詳しい事情”を聞いた。

.....別に後ろの夜叉が怖いからではない。

作者「.....何故、俺がお兄ちゃんなの？」

ウツドン「えと、進化する時に本能がお兄ちゃんと呼ぶってなったの。」

クサイハナ「でも、性格まで変わるのかしら？」

作者「変わった奴は居るな。以外にも。」

モココ「何か?（にっこり）」

作者「……何でもない。」

まあ、今回はこんな感じでお開きになる、はずだった。

ウツドン「あの！」

作者「なんだ？」

ウツドン「一緒に寝ても良い？」

その瞬間、夜叉が切れた。

夜叉達『殺す！』

作者「……………！（脱兎の如く）」

こうして、眠れない夜であった。

報告ですが、ここで臨時ニュースをお伝えします。今日未明、ハナダシティの煙

次はジム戦。

進化系とかスターミーの超念力とか何とかせねば。

リベンジなんだが、レベルもう少し上げるべきだったかなあ？（前書き）

現在の主力レベルは20ちょい。
勝てるかどうか怪しい。

まあ、救済措置とってるから問題ない。

リベンジなんだが、レベルもう少し上げるべきだったかなあ？

「ハナダ・ジム内」

作者「再びのジム戦だな。」

ロトム「今度は勝って帰ろう！」

キルト「そうですね！」

細かい事は抜きにして早速バトルに挑む。

カスミ「たった3週間でリベンジに来るなんて、私も甘く見られてるわね。」

作者「過程は関係ない、様は結果ができれば良い。」

カスミ「……少しは鍛えた様ね。」

作者「犠牲なんぞ出さずに勝とうとは思っているがな。」

カスミ「もう良いわ、後はバトルで“話ましよう”？」

ジムリーダーのカスミが勝負を仕掛けてきた！

カスミ「行きなさい！ネオラント！」

ネオラント「少しはやる様になったか？小童共！」

作者「行け！ロトム！」

ロトム「悪いけど、今回は勝つよ！」

カスミ「デスサブマリッ！」

作者「電撃波！」

2人の技が発動した。

結果：ロトム勝利！

ロトム「中々だったけど、届かないね。」

作者「よし！交替するぞ！」

カスミ「まだこれからよ、行け！トリトドン！」

トリトドン「祈りなさい……！神に！」

作者「生憎と無宗教なんでね。行け！キルト！」

キルト「行きます！」

作者「葉っぱカッター！」

キルト「せい！」

結果：キルト勝利！

カスミ「どうやら、本気で潰さないといけないわね。行け！スターミー！」

スターミー「ここまでです！」

作者「頼むぞ！行け！ラッタ！」

ラッタ「任せてよ！」

カスミ「雷！」

作者「必殺前歯！」

しばらくお待ちください。

結果：ラッタ敗北！

作者「くそ！瀕死者を出さない様にはしてたのに！」
カスミ「悪いけど、これもバトルなのよ。」

作者「行け！モココ！」
モココ「お任せを！」

カスミ「超念力！」
作者「電磁波！」

しばらく待て。

結果：敗北！

しばしお待ち。

総合結果：ギリギリ勝利！

カスミ「私の負け……か。しょうがない！私に勝った証拠にブルーバッジをあげる！」

作者「ありがとうございます！後1つ聞きたいんですが……。」

カスミ「何？」

作者「何で最後のエンペルトわ攻撃技出してこなかったんですか？」

カスミ「……………」

作者「……………」

この話は終了になった。

カスミ「あ、そうそう。秘伝マシン居合い切り出来るようになるからね。」

作者「解りました。」

こうして、リベンジを果たした作者達であった。

リベンジなんだが、レベルもう少し上げるべきだったかなあ？（後書き）

懺悔します。

実は何回かリセットして勝ちました。

すみませんでした。

謝らなければ意味がない！だってだって！ノリで進めてしまったんだよおおー

今回のサント・アンヌ号の回ではありません。

ノリで進めてしまいました（泣）

ただ、流石に書かない訳にはいかないので、殿堂入りした時のオリジナル設定で書きます。

現在の場所はニビです。

マチス？

放置プレイ中でした。

謝らなければ意味がない！だってだって！ノリで進めてしまったんだよおおー

くニビシテイ・萌えもんセンターく

作者「しかし、あつという間に到着したな。」

キルト「そうですね。でも、なんで船の記憶が曖昧なんでしょう？」

ニヤース「大人の事情にや。」

スリープ「絶対に違うと思う。」

作者「まあ、過ぎた事は置いてくとして今回の相手は岩タイプだ。」

クサイハナ「私の独壇場ね。」

ウツドン「よおおし！お兄ちゃんに撫で撫でして貰うぞおお！」

キルト「…………。（ピキピキ！）」

作者（目茶目茶怒ってらっしやるー！？）

ロトム「しかし、本当に岩タイプだけかな？」

作者「確かに、ハナダでも水と地面を持った萌えもんも居た位だからな。最初は負ける覚悟で挑もう。」

ニドリーノ「敗北を知ってこそ成長する、という事ですかな？」

作者「そうした経験は突破口を開く鍵にもなるからな。」

こうして、ジムに挑む事にした。

くニビシテイ・ジム内く

作者「しかし、何で砂嵐？」

現在、砂嵐が発生中。

キルト「岩と地面の萌えもんが有利ですね。」

作者「まあ良いか、進もう。」

作者はジムリーダーの所に行こうとした時、トレーナーに呼び止められた。

トレーナー「待ちなー！子供が何の様な！タケシさんに挑戦なんて1万光年早いんだよ！」

作者「子供はお前だろ？俺は20だ。」

.....。

作者以外『ええ~~~~~~~~!!!!!!?????』

作者は小柄な為、子供に間違われる。
高校生くらいの身長なんだが。

バトルは省略

結果：次回に続く。

謝らなければ意味がない！だってだって！ノリで進めてしまったんだよおおおー

レベル差がありました……。

次回に持ち越しです。

途中報告ですがなにか？（前書き）

2回リセットしました。

だって、ユレイドル硬いんだもん。
嫌な音聞かせないと倒せなかった。

途中報告ですがなにか？

トレーナー「しまった！1万光年は時間じゃない！……距離だ！」
作者「今更だな。」

結果：勝利！しかし、硬すぎる。

結局、今回はジムリーダー戦は止めてレベル上げに専念した。

毎回おなじみの進化です。

今回は回想ではありません。

……つか、回想とか意味が無い様な気がした。

くニビシティ・萌えもんセンター旅館並みの広さの部屋く

様は旅館丸ごと分の部屋数。
畳でふすまが4方向にある。
解らないと思うが、“戦争”が出来ます。

作者「しかし、何でこんなに広い？」

ラッタ「もう気にしない事にしたんだね……。」
作者「……何の事だ？」

現在、目の前には進化しようとしてるオニスズメ・ホーホー・ポッポ・チコリータがいました。
何でチコリータが居るかだって？
トキワの森にいた。
グレイシアとかも居たよ？

チコリータ「熱い熱い熱いいいい！」（せっかち）

ホーホー「ちょ……と……！見ない……でえ……／／／」

オニスズメ「はうううう……／／／」

ポツポ「もう！服脱ぐ！」

作者「しかし、何でこんなにあれなんだろうなー？」（すかさず後ろを振り向く）

ラッタ「さあ？」

しばらくして進化が終わった。

ベイリーフ「はあー！熱かったあー！」

ヨルノズク「うう……！もうお嫁に行けない……！」

オニドリル「だ、大丈夫だよきつと……！作者さんが貰ってくれるよー！」

ピジョン「そうだよ！据え膳食わねば男の恥！って言っし！」

諺があっているのか？

作者「まあ全員お疲れだな。とりあえず水持ってきたから飲みな。」
4人「はい。」

そして、時刻は8時を回った。

作者「第2回、枕投げ親交深め大戦〜！」

全員「実も蓋も無い！」

作者「やらないの？」

全員「やります！」

～作者率いるメンバー～

ヨルノズク率いるメンバー

作者「何でこっち数が少ない？」

ロトム「まあ途中からだけど古参扱いかな？」（陽気）

モッコ「同じくです。」
（頑張り屋）

ニヤース「うにやにや! ? この枕丈夫だにや!」(うっかり)

「イシツブテ、間違つて投げられない様にしようつと。」（能天気）

「さて、ここは大人の色気を魅せてあげましょうか。」

オニドリル「お、大人の魅力……／＼（どきどき）」（臆病）

157

……。」「（穏やか）

イトマル「にんにん！今回こそは役にたつてみせるでござる！」（やんちゃ）

ラッタ「必殺前歯が輝く時！私はお兄さんの相棒を齧る！」（のんき）

ラッタ以外『齧るな。』

ヨルノズク「さあ！今回は勝ちに行くわよ！」（陽気）

ニドリーノ「自分の力と！」（穏やか）

パラス「私の知恵をあわせていけば勝てます！勝てるったら勝てます！」（意地っ張り）

テッカニン「そんなむきになるな、底が知れるぞ？」（意地っ張り）

レディバ「向こうは姉さんが居るのか……。仕方無いか。」（腕白）

イーブイ「き、気を引き締めないと！」（臆病）

サンド「リラックスリラックスですよ。」（おっとり）

スピアー「司令と戦うのは気が引けるが……。仮にも軍人だ！手加減はしませんぞ！」（やんちゃ）

スリープ「軍人じゃないでしょ？まあ良いけど。」（気まぐれ）

ディグダ「さああああ！シヨウタイムだああああ！！！！！！！」
！」（せっかち）

ズバット「えと、とりあえず偵察で頑張ります。」（頑張り屋）

アーボ「ふむ、今回は変に気疲れしなくてすむ。ならば……。」「（生意気）

カメール「今回はマスターの耳元で＜放送禁止用語＞を言っちゃおう。」（頑張り屋）

ピジョン「その発言は止めなよ／＼／＼／＼」（テレヤ）

パウワウ「ねー？それどんな意味なの？」（穏やか）

ヤドン「聞かない方が良いと思う。あと卑猥表現は止めるべき。」

（控えめ）

クサイハナ「動じないのが凄いわね……。」「（生意気）

ウツドン（えへへ〜！隙を見てお兄ちゃんを攫っちゃおう）（やんちゃ）

ベイリーフ（何かろくでもない事考えてるわね……。マスターをとりあえず護るべきかしら？）（せっかち）

こうして、それぞれの思惑渦巻く枕投げ（と書いて戦争）が今始まるうとしていた。

作者の運命は如何に！？

途中報告ですがなにか？（後書き）

次回に続く。

早く進めて進化& a m p ;捕獲したいです。

明日は宿題に手を付けたいので、投稿しないかもしれません。

悲しみがそして始まる時、1万年と2千年前から貴方と枕投げと言つ戦争がした
今回はギャグの回。
実質、技が飛び交う戦場である。

悲しみがそして始まる時、1万年と2千年前から貴方と枕投げと言う戦争がした
ゝ戦場と化した宿泊施設ゝ

現在、キルトとニヤースが交戦していた。

キルト「眠り粉！」

蕾から睡眠作用を引き起こす粉が入った種を飛ばす。
しかし、相手は避けた。

ピジョン「甘い！風起こし！」

風が粉を吹き飛ばす。
しかし、吹き飛んだ粉が他に被害を与えた。

ケーシイ・イーブイ・ズバット『ZZZZZZZZ……』

ピジョン「しまっ……！」

キルト「余所見は禁物ですよ！」

体当たりをかますキルト。
吹き飛ばされるピジョン。
しかし、何とか立ち上がる。

ピジョン「まだよ。まだ戦えるわ！」

キルト「個人的にはマスターを護りたいんですが……、仕方ありません。ニヤース！」

ニヤース「にゃ！？何にゃ？」

現在、軽やかにイーブイとパウワウの体当たりを避けているニヤース。

イーブイ「くっ！」

パウワウ「もう！当たってよ！」

ニヤース「いやゝにやこった！」

そんな感じで攻防が続いていた。

キルト「マスターの所に行つて！ここは私が食い止める！」

ニヤース「解つたにやゝ！」

ニヤースはその場を離脱した。

ピジョン「待て！」

イーブイ「待つて……！」

パウワウ「待つてよお！」

しかし、キルトが立ちはだかる。

……葉っぱカッターを構えて。

キルト「せいっ！」

ヒュン！ヒュン！ヒュン！

それぞれに攻撃が当たる。

3人『きゃあああ！？』

パウワウとイーブイは気絶はしなかったが動けなくなった。
ピジョンは効果がいまひとつなので耐えた。

ピジョン「ふふふ……！」

キルト「何がおかしいんですか？」

ピジョン「まだ気づかないの？」

言われてキルトは気づいた。

キルト（これは陽動！不味い！マスターが……！）

ピジョン「逃がさないわよ！ズバット！カメール！ヤドン！」

ズバット「きゅ、吸血！」

ズバットが吸血を仕掛け。

カメール「噛み付くよ！」

カメールが噛み付こうとし。

ヤドン「ふぁゝあ。」

動けなくなった所をヤドンのあくびが直撃した。

キルト「く………！？」

あくびを喰らったキルトは襲い来る眠気に抵抗していた。

ピジョン「悪いけど、一番厄介な貴女を潰させてもらっわ。」
ズバット「う、上手いききましたね！」

カメール「マスター！待っててね！今この言葉を届けるよ！」
ヤドン（一番に仕留めた方がいいかな？）

しかし、彼女達には誤算があつた、それは。

キルト「えい！」

背中から種が発射。

そして、あのトラップが発動した。

イトマル「とう！」

びいんっ！とまた“糸”が発動した。

……相手側に。

相手全員『きゃああああ！?!?!?!?』

こうして、今回も山もオチもない決着がついた。

因みに、殴り合い等で交戦していた面子も巻き込まれたが、肉弾戦を好む者しか被害受けて無いので問題は無かった。

悲しみがそして始まる時、1万年と2千年前から貴方と枕投げと言つ戦争がした
次回のジム戦は省略します。
と言つかさせてください。

いい加減、学習装置が欲しいので。

事後報告と捕捉設定という俺設定。 (前書き)

タケシ？

ギリギリでしたが勝ちましたよ？

え？

省略しました。

タケシ「なぜだあああ！（泣）」

ぶっちゃけ印象が薄い。

タケシ「……うう。」

まあでも強かったよ。

もし、また戦う時きたら書くから。

タケシ「許す！」

計画通り！

作者「劇的に変わったなお前等。」

ダグトリオは熱血と冷静を手に入れた。

メガニウムは巨乳になり帽子を手に入れた。帽子の形は八雲 紫の帽子に似ている。

サンドパンはくが無くなっていた。です言葉になった。

作者「……まあ、色々な意味で被ってたからなあ。」

こうして、今回の進化は終わった。

余談だが、捕獲した萌えもんを記載しておく。

9番道路でヒメグマ・ゴマゾウ・グライガーを草むらで捕獲し、クヌギダマ・ヒマナツツを“頭突き”を持った萌えもんで木を揺らしてから捕まえた。

……エンカウント確立は低いが。

俺設定について。

この世界には“技”があるのは知っているだろう。

戦闘用と日常用だ。

戦闘用は書かなくても問題無いだろう。

日常用は“居合い切り”とか“怪力”とかが代表的だが、実は忘れた技も使えるのである。

勿論、ダメージなどは無いので人体に影響も無い。

ただ、間接的には技の威力と効果は発動する。

例え

木に蔓の鞭をする、蔓で木を引っかく、振り回す、ダメージあり。

解りづらいと思うが、様はそういう事だ。

また、火の粉などの攻撃はダメージは無いが火傷等の状態異常を引き起こすので気をつける事。

あくまでも日常用なので戦闘では使えないと言う事である。

ただ、どこぞの馬鹿共は日常用を“痛みのある日常用”にしようと思論んでいるらしい。

噂では、萌えものの力を人間が使用できる様にするという実験も行われているとか噂がある。

どの道、いつか巡り合うだろう。

——そう、直ぐにでも——

報告終了。

事後報告と捕捉設定という俺設定。
(後書き)

伏線は仕掛けた、後は機が熟すまで。

報告の忘れ物、というか忘れてた事。(前書き)

宿題終わらせないとなあ。

報告の忘れ物、というか忘れてた事。

ではどーぞ。

キルト「はあ……！はあ……！」

作者「大丈夫か？」

キルト「何とか……。」

しばらくして、キルトはフシギバナになった。

作者「お疲れ、茶でもいる？」

キルト「……………」

作者「……………どうし……！？」

ガシッ！

キルトがいきなり抱きついてきた。

作者「キ、キルト！？」

キルト「すうー！はあー！……………マスターのにおい……………」

作者「いや、落ち着け。」

キルト「……………あ！す、すみません／＼／＼」

作者「どうした？（どきどき）」

キルト「い、いえ！失礼します。」

キルトは出て行った。

作者「あー、何かしたかな？」

ある意味で期待していなかった訳では無いが、ここまで真っ直ぐに行動を表してくれると逆に恥ずかしい作者であった。

↓次の報告↓

ケーシィ「……………熱い……………！」

ニドリーノ「まだレベル20だと言っのに……………」

ニドリーナ「同じくだってのー！」

作者「…………ケーシィよ。いくら熱いからって人のバックを漁りあまつさえ月の石を投げるか？しかも2つ。」

ケーシィ「……………だけど……………私は……………謝らない……………」

作者「謝れよ。」

しばらく。

ユンゲラー「さて、わしは謝らんぞ。」

ニドキング「悪い事したら謝罪は常識でしょう？（ピキキッ！）」

ニドクイーン「そうよね、謝らないとね！（ゴゴゴゴッ！）」

結局、作者が仲介して謝罪させたりしたので事なき事を得た。

しかし、月の石2つ無くなったのは痛かった……………。

そして、“闇”は動き出す……………。

報告の忘れ物、というか忘れてた事。(後書き)

次回、オツキミ山の攻防。

再びのロケット団！オツキミ山の攻防！（前書き）

今回はロケット団の萌えもんが登場。

見た目は悪い顔っぽい。

敵専用なのか“悪の波動”を使用してくる。

そして、今回はオリジナルバトルの伏線を張る予定。

再びのロケット団！オツキミ山の攻防！

「オツキミ山」

作者「しかし、フラッシュが無いと1歩も見えないとは……。」

ニヤース「私の小判のおかげにや！」

ユンゲラー「確かにの、こう暗くては転びそうじゃ。」

ロトム「僕も覚えられるけど、忘れられない程強烈だからね。」

サンドパン「迷ってもいざという時は穴を掘って脱出するから問題ないです。」

ピジョン「天井にぶつからないと良いけど……。」

キルト「まあ、ともかく進んでみよう？」

しばらくトレーナー戦をやってる時、相手のトレーナーから気になる事を聞いた。

ミニスカート「ロケット団みたいなのがこの山に居たわ！何か変な事企んで無いと良いけど……。」

作者「ロケット団か……。」

ユンゲラー「確か橋で戦ってた雑魚じゃな？」

作者「見てたのか？」

ユンゲラー「うむ、気に入らん気配じゃったからの。」

ロトム「あいつ等の萌えもんは薬で操られてたからね、胸糞悪い。」

ピジョン「見つけたら叩き潰すわよ！」

作者「そうだな。」

「青年移動中」

作者「梯子を降りてっと！」

「???」「誰だ!」

作者「!?!」

ロケット団員「ガキか……、こんな所で何してやがる?」

作者「ロケット団……。」

ロケット団員「知ってる様だな。なら冥途の土産に教えてやろう。萌えもんマフィアロケット団は恐ろしく、そして強い……!」

作者「そうかよ、なら叩き潰すまでだ!」

「ロケット団員が襲ってきた!」

ロケット団員「行け!」

ダークサンドパン「ひやははははは!殺す!殺すぜえ!」

作者「なっ!?!」

サンドパン「私と同じサンドパン!?!」

ダークサンドパン「さあ!掛かって来いよおお!悲鳴を聞かせろおお!」

作者「……1つ聞く。」

ダークサンドパン「ああ?」

作者「君は君の意思でいるのか?」

ダークサンドパン「当たり前だああ!こいつ等に出会えた事で俺は

“変わった”んだよおお!」

作者「所持者が腐れば萌えもんも腐るか……。どの道、倒さないと
な。」

ダークサンドパン「やってみろおお!」

作者「行け!キルト!」

キルト「悪いけど倒します！」

〈省略〉

結果：キルト勝利！

ダークサンドパン「ちいいい！」

ロケット団員「戻れ！次だ！」

ダークゴルバット「吸わせろおお！！！！血おおお！！！！」

作者「行け！ロトム！」

ロトム「主人の血はやれないよ！」

〈省略〉

結果：ロトム勝利！

ダークゴルバット「血いい……！」

ロケット団員「馬鹿な！？ここまでとは！くそ、最後だ！」

ダークラッタ「使えん奴等だ！」

作者「行け！サンドパン！」

サンドパン「今回は怒り心頭です！」

〈省略〉

結果：サンドパン勝利！

ロケット団員「ちっ！しくじったか！」

ダークラッタ「己ええええ！」

作者「さて、どうする？」

ロケット団員「くくく……！」

作者「……何がおかしい？」

ロケット団員「馬鹿め！貴様はたったいまこの瞬間からロケット団に狙われる存在になった！仲間が黙ってはいないだろうよ！あばよ！」

ダークサンドパン「おらよ！」

ロケット団員はダークサンドパンを使い穴を掘って逃げた。

作者「逃がしたか。」

キルト「どうするの？マスター？」

作者「とりあえず進んでみよう。他にも居るかもしれない。」

しかし、まだこの先には恐ろしい敵がいる事を、作者達はまだ知らなかった。

——深淵より召喚されたと言える存在が——

再びのロケット団！ オツキミ山の攻防！（後書き）

今回はジムリーダー級の敵が現れるはず。
そこまでは省略します。

龍の能力を得る事とは“試練”なり。（前書き）

今回は進化の回ですが、シリアスな回でもある。

龍の能力を得る事とは“試練”なり。

1度萌えもんセンターに戻った作者達。

それからしばらく修行したのであったが、その日はいつもと違った。そう、決して忘れない出来事が起きた。

進化とは、萌えもんの能力が飛躍的に上がる成長であり、己の努力を实らせた結果でもある。

しかし、特定の萌えもん達にとって進化とは“試練”である。己が己でいられるかどうかの。

（ニビシティ・宿泊室）

カメール「熱い……、けど今回は進化のシーンがあるから……耐えられる！」

作者「このチョコチップうまい。」

カメール「放置プレイですね、解ります。」

作者「まあ、もう耐性ついたし。」

しばらくして、カメールはカメックスに進化した。

カメックス「よっと。」

ガシュン！

シュコン！

腋の下から大砲の様な物を出し入れしていた。

作者「おゝ！凄いな！」

カメックス「えへゝ！ボクに掛ければこれくらい訳無いよ！」

作者「ここから砲弾でも出るのか？」

カメックス「……水鉄砲くらいかなあ。」

作者「そうか、いつか出せだろ。」

カメックス「そうだね。そうそうマスター。」

作者「何だ？」

カメックス「抱き枕にしても良い？というかするね。」

作者「待てやこら、強制かよ。」

カメックス「抱きしめながら耳元で＜放送禁止用語＞を囁きまくるから。一晩中。」

作者「拷問だ！」

そんなやり取りの中、ゴマゾウが慌てて走って来た。

ゴマゾウ「大変！コイキングが大変！」（陽気）

作者「どう大変なんだ？」

ゴマゾウ「いきなり倒れた。寒いって言ってた。」

作者「今行く！」

（青年爆走中）

作者「コイキング！」

キルト「マスター！大変です！」

作者「事情は聞いた！どうなってるんだ！」

ニドリーノ「見た感じでは進化の兆候なのですが……。」

作者「進化って……、いつもは熱いって言ってるだろ。」

ロトム「あれは努力した結果が力に変わる事で起きる現象なんだ。」

作者「じゃあコイキングは何の努力もしていないから進化しようとしてるのか？」

パラス「それは違います。」

パラスが重そうな分厚い辞書を持って入ってくる。

作者「違うつて？」

パラス「これは“進化の試練”です。」

作者「進化の試練？」

パラス「特定の萌えもんが進化する際に起きる現象なんです。コイキングは進化するとギャラドスになります。」

ロトム「ギャラドスつて、あの凶悪萌えもんの!？」

作者「凶悪は無いだろ、いくら何でも。」

ニドリーノ「彼女の知識は間違つてませんよ。」

作者「どういうことだ？」

ニドリーノ「元来、コイキングという萌えもんは弱いイメージが強く、相手にもされません。だからなんでしょうか、彼女達は周りを憎みます。」

作者「……何だと？」

ニドリーノ「相手にされない悔しさと、自分には無い力を他者が持っている事を無意識に嫉む傾向があるのです。そうして進化した彼女達は世を憎み暴れる萌えもんになってしまうのです。」

作者「そんな……！こいつもそうなるつてのかよ！」

ロトム「落ち着け主人、話は最後まで聞くんだ。」

作者「……続けてくれ。」

ニドリーノ「さて、先ほどもパラスが言った通り特定の萌えもんは進化の試練にぶつかります。進化の試練とは、強大な力を得る時に訪れる試練です。その試練に打ち勝てば正気を保ち、その力を制御できます。」

作者「勝てなかった場合は？」

ニドリーノ「……………狂います。」

作者「な…………！」

パラス「それほどまでに大きいという事なんです。負けた萌えもんは狂気に飲まれ暴れ、最後は周りを巻き込みんで死にます。」

作者「……………俺達はただ見てるしかないのか？」

ロトム「僕達にできる事は信じる事だけだよ。」

沈黙が部屋に流れる。

作者はコイキングのおでこを触る。

—— 氷よりも冷たかった ——

作者はその瞬間、指示を出す。

作者「キルト。」

キルト「は、はい。」

作者「体温が温かい萌えもんをボックスから呼んで来て。ロトムは毛布を、ニドリーノは湯たんぽをジョーイさんから貰って来て。パラスは俺と一緒にコイキングの体を擦って。」

4人「え？」

作者「頼む。信じる事しか出来ないのは解ってる、だが何もせずにいるのは嫌だ。」

作者は頼んだ。

トレーナーとは萌えもんの主である。

普通のトレーナーは“命令”として言うだろう。

しかし、作者は“頼んだ”のだ。

だからこそ、4人はその頼みを叶えたいと思った。

4人『解った!』

——そして、舞台は精神世界に移る——

龍の能力を得る事とは“試練”なり。（後書き）

次回、精神の試練と問い。

さて、？脳はどう判断するのか。

最強の証とは、独りでは無い事である。（前書き）

それが、最強だと思う。

まあ、個人的な意見だが。

最強の証とは、独りでは無い事である。

（精神世界）

この世界は暗い・寒い。
そこに少女は居た。

——ただ独りで、寒そうに——

コイキング「寒い寒い寒い！！！」

ぶるぶる震えるコイキング。
ただ独りで震えている。

コイキング「あーもう！寒いわよ！と言うか他に居ないの！」

「???」「居るよ？」

コイキング「え？」

「???」「こんにちわ。」

そこには、“もう1人のコイキング”が居た。

コイキング「あんた誰よ？」

コイキング「私は貴女よ？」

コイキング「どういう事よ？」

コイキング「そうねえ。簡単に言うと、貴女の力かな？」

コイキング「んーと、つまり最強のあたいの力？」

コイキング「最強、ね。まあ、間違つて無いかな。」

くすくすとコイキング？は笑いながら言う。

コイキング「とりあえず、あんたが私なのは解ったわ。ここから出たいんだけど。」

コイキング「無理よ。」

コイキング「え？」

コイキング「ここは心の中。貴女が求め無い限りは出れない。」

コイキング「求める？」

コイキング「私よ。正確には“最強の力”を。」

コイキング「最強の力？」

コイキング「そう、欲しいでしょう？だって貴女は弱いんだもの。」

コイキング「よ、弱くなんか無いわよ！」

コイキング「そうかしら？でも、貴女は思ってたはずよ？自分は弱いって。」

コイキング「そ、それは……。」

コイキング「でも、私を望めば力が手に入る。どう？欲しいでしょう？」

コイキング「力……、でも……。」

コイキングの眼が薄黒くなる。

コイキング「さあ、一緒に狂イマシヨウ？」

コイキング「一緒に……。」

その時、声が聞こえた。

作者「もっと毛布運んで！オオタチとモココはもう少しくっついて！」

キルト』とりあえず、交替交替で実行して!』

——唯一、自分という存在を見てくれた人の声が聞こえる——

その時、コイキングの眼に光が戻った!

コイキング「悪いけど、そんな力いない。」

コイキング? 「ナゼ?」

コイキング「あたいの力を必要としてくれる馬鹿がいるのよ! そいつはあたいがいないと何も出来ないのよ! だから、あたいは戻るの! 作者の所へ!」

その眼は決意に満ちていた。

しかし、コイキング? は酷く歪んだ顔を見せた。

コイキング? 「そんな事が許されるところでも思ってるの?」

コイキング「!?」

コイキング? 「私と一緒に……、オチロオオオオ!」

く闇が襲い掛かってきた! く

闇「サア! クラウガイイ! アクノハドウ!」

ゴオオオオオオオ! ! !

黒い輪がコイキングに殺到する。

コイキング「うわ! ?」

闇「ノマレロ! キョウキニ!」

この世界は寒く暗い世界だ。
さらに悪の波動は黒いので視覚に捕らえづらい。

コイキング「あーもう！しつこいわよ！あたいは作者の所に帰るのよ！」

その瞬間、コイキングの体が光る。

闇「！？」

そして、声がこの世界に響いた。

『汝、独りでは無い事、証明せり。』

声は聞こえなくなり、光が収まった時、そこに居たのはコイキングでは無かった。

ギャラドス「……………」

闇「バカナ……………！コノシレンヲゴウカクシタダト！？」

ギャラドス「言ったはずだ……………、あたいは最強だと！」

——破壊光線——

そして、世界は輝いた。

（現実）

コイキングが光だしたので、全員手で眩しさを耐える。

光が収まった時、ギャラドスが居た。

作者「……大丈夫か？」

ギャラドス「……ああ、あたいは最強だから問題無いわよ。」

作者「相変わらず？だな。」

ギャラドス「？って言うな。」

キルト「お帰りなさい。」

作者「お帰り。」

ギャラドス「ただいま！」

その他の萌えもんにも礼を言ったりしたりと、ある意味で1番長い日ではあった。

——独りでは輝かない、仲間がいる事で輝くのだ——

最強の証とは、独りでは無い事である。（後書き）

別にコイキングだけがこういうシリアス回では無い。

特定なので、また他でもシリアスで書くかもしれない。

深淵より召喚された存在、そして悲劇（前書き）

今回でオツキミ山の大体が終了します。
夏休みの宿題をはやらねば……（泣）

深淵より召喚された存在、そして悲劇

「オツキミ山・採掘場出口」

作者「……何で、だろうな……。」
キルト「解らない、ですよ。」

現在、出口目指してロケット団員と戦ってきた作者達だが、ロケット団員の萌えもん達が狂っている事に戦慄していた。
だからこんな疑問も出てくる。

——何故彼女達は平然とくだらない事に加担し、楽しんでいるのだろうか——

最早ロケット団員が持ち主だからと言う理由では納得できなくなっていた。

何かおかしい。

そう、何処か引っかかるのだ。

そして、作者は気がついた。

作者「なあ、あいつ等って最終進化とかしてたよな？」

ロトム「してたけど……、それが？」

作者「この前、コイキングが進化する時がニドリーノ言ってたろ？」

『負けた萌えもんは狂気に飲まれ暴れます。』って。」

ロトム「いや、ありえないね。」

作者「あれだろ？特定の萌えもんしか起きない現象だからだろう？」

ロトム「そういう事。」

作者「……もし、ロケット団が進化の試練を引き起こす薬なんか

を製造していたら？」

ロトム「……まさか！」

作者「多分、この推測は合ってる。そして、どうやらロケット団は心底腐っちまったみたいだな。」

そんな、会話をしながら出口に向かう作者。
しかし、出口にもロケット団員は居た。

???「ん？なんだ君は？俺達の邪魔をする気か？」

作者「出来れば壊滅したいがな。」

???「それは困るな。ここで戦闘不能にしてやろう。」

作者「!？」

「ロケット団員の???が襲い掛かってきた」

???「始末しろゴースト。」

ダークゴースト「ケケケ！黄泉の国へご招待だぁ！」

作者「行ってくれサンドパン！」

サンドパン「押し潰しますです！」

???「催眠術！」

作者「シザークロス！」

攻撃力はサンドパンの方が高いのであと一歩で倒せた。
しかし、???は回復の薬を使用する。

ダークゴースト「ふい〜！」

???「まだまだ、これからだ。」

作者は先程と同じ攻撃を頼んだ。

〈省略〉

結果：サンドパン勝利！

???「少しはやる様だな……。」

作者「悪いが、お前等に負ける訳にはいかないのさ。」

???「ふふふ！ふははははははは！」

作者「……何がおかしい？」

???「何でもないさ、ただ知らないのも無理は無いがついな。」

作者「知らないだと？」

???「おしゃべりはここまでだ……、行け！」

ダークベトベトン「全てを……毒に……それが……娯楽……。」

作者「まだいけるか？」

サンドパン「問題無いです！」

???「影分身！」

作者「穴を掘る！」

サンドパンの穴を掘るが本体に当たり、そのまま倒した。

ダークベトベトン「己……！」

???「ふむ、少し見くびっていた。それは謝罪しよう。しかし、ここまでだ。」

作者「言い訳は見苦しいぞ。」

???「ならば……その眼に焼き付けるがいい！行け！」

ダークピジョン「我は不敗の使途なり。甘くみるな！」

作者「交替だな。ロトム！」

ロトム「さあ！沈んでもらうよ！」

作者「電撃波！」

????「翼で撃つ！」

2人の技が互いに当たる。

ダークピジョン「ぬううう！」

ロトム「……解らないね、何故君たちはロケット団に従う？」

ダークピジョン「くくく……。いずれ時が来れば解るだろう。」

ロトム「……………」

ダークピジョン「今は楽しもう！この戦いを！」

（省略）

結果：ロトムの勝利！

????「ほう！これは興味深い連中だ。まさか実験中とは言え倒すとはな。」

作者「実験、だと？」

????「大した事ではないさ。しかし、名前は名乗っておこう。私の名前はエビソバだ」

作者「どうやら、そこに居る団員より上みたいだな。」

エビソバ「くくく……。また機会があれば会おう。……生きていたらな。」

その瞬間、光が爆ぜた。

作者「く!?!」

そして収まった時にはエビソバは居なかった。

作者「生きていたら?」

その時、叫び声が聞こえた。

トレーナー「ひいひい!?!」

作者「!?!」

階段の方から聞こえてくる。

作者は直ぐに駆け上がる。

作者「どうし……!?!」

トレーナー「に、逃げろおお!?!」

トレーナーは直ぐに逃げた。

目の前には、萌えもと呼べない“異形の存在”が居た。

——まさしくそれは、合成萌えもとと言えよう——

深淵より召喚された存在、そして悲劇（後書き）

今回はオリジナルバトルです。

合成に使われた萌えもんはプテラ・オムスター・カブトプスです。

遭遇率低いらしいですが、ここが生息地になります。

昔日の残照ゝ忘れられた島より抜粋（前書き）

今回は自身が書くことを躊躇う表現が多々あります。
故に、覚悟を決めて読む事が好ましいかと。

——では、血みどろの話を始めましょう—— by エビソバ

作者より

昔日の残照／忘れられた島より抜粋

くオツキミ山・採掘場& a m p・出口付近く

そこに居たのは萌えもんであつて萌えもんにあらず。

そう、異形と化した存在が居た。

プテラの様な翼・カブトプスの様な鎌・オムスターの様な殻・そして死人の仮面の顔。

そう、それは化け物と呼ぶに相応しい存在だった。

作者「何だ……こいつは……！」

キルト「禍々しい気配がする……。」

ユンゲラー「………！これは………！馬鹿な………！そんな事をする愚か者が居るとは………！！！」

作者「………何だ？どうした！」

ユンゲラーは震えながらも“忌々しい事実”を放った。

ユンゲラー「こやつ………！いやこやつ等は萌えもんが合体しておる！」

作者「合体って、マサキの装置じゃあるいし！」

ユンゲラー「あの仮面みたいな物がそれを起こす装置なのじゃ！それでこの洞窟に住んでいた萌えもんを吸収してのじゃ！」

作者「………吸収された奴はどうなる？」

ユンゲラー「最悪、死じゃ。」

作者「あの装置を壊せば戻るか？」

ユンゲラー「恐らくの。」

作者「……全員、戦闘準備！」

一斉に手持ちの萌えもんが外に出る。

キルト「悪いけど、加減は出来ないよ！」

ユンゲラー「さて、本気でいくかの！」

ペルシアン「失敗しないにや！」

サンドパン「ここが踏ん張り所です！」

ピジョン「絶対に戻してみせる！」

ロトム「まったく、何故か嫌な感じがするから、とつとと終わらせてもらっよ！」

作者「全員、全力でいってくれ！」

仲間全員『応！』

合成装置『ハカイハカイハカイ！』

装置は翼で撃つを放つ。

放たれた風が全てを切り裂きながら作者達を襲う！

作者「全員避ける！」

その言葉通り、全員避ける！

作者「キルトは花びらの舞！ユンゲラーはサイケ光線！ペルシアンは猫に小判！サンドパンは連続切り！ピジョンは電光石火！ロトムは泥掛け！」

キルト「喰らいなさい！」

花びらが舞い散り、キルトはそれを纏いながら突撃する。

合成装置『ガッ！？損傷率100%！』

装置はよろける！

ユンゲラー「喰らえい！」

輪上の念力が装置に追い討ちを掛ける！

合成装置『グガッ！？損傷率20%！』

ペルシアン「それ！持ってけ泥棒にや！」

跳躍したペルシアンの爪と爪の間には小判が握られていた。それを勢い良く投げる！

合成装置『グガガッ！損傷率30%！』

サンドパン「せい！せい！せい！」

連続切りは繰り返す事で威力が上がる！

合成装置『ガッ！損傷率60%！ザンメツモード！アクノハドウ！』

合成装置は悪の波動を出鱈目に打ち出す！

しかし、ピジョンは電光石火を駆使し突撃した！

ピジョン「当たらない！それ！」

合成装置『ガガガッ！損傷率80%！』

ロトム「さあ！泥よ！」

砂鉄を使い泥を掛ける！

合成装置『ガーーー！損傷率90%！タイヒモード！』

何故こんなにダメージがあるかというと、地面技が効果抜群だからである。

作者「逃がすか！」

作者は足元にあつた“石”を投げた！

作者「あれ？」

石は石でもイシツブテだった！

イシツブテ「zzzzzz……。」

寝てたので微動だにしなかったので間違えたのだ。

それが合成装置にぶつかった！

合成装置『損傷率100%！ソウチタイハ！』

シューーン！

パツ！

合成装置から光が放たれた。

その光が収まった時、吸収されていた萌えもんが開放されていた。

作者「脈は？」

ロトム「……大丈夫、息はしてる。元々野生の萌えもんだからね。丈夫だったみたいだ。」

作者「そうか……。」

イシツブテ「痛〜！何なのよ！」

作者「あゝ。悪かった。てつきり石かと……。」

イシツブテ「まったく、寝なおすわ！」

イシツブテは去っていった。

作者達はその後、ジュンサーさん呼び、事の経緯を話した。

とりあえず、ロケット団には厳重注意をしておくと言っていた。

作者「こんな事を起こして厳重注意か……。」

キルト「そうですね……。」

ロトム「仕方無いみたいだね。居場所も解らないらしいし、この地方の経済の大半を握ってる組織らしいよ。スポンサーが庇ってるみたいだしね。」

作者「悔しいけど、絶対に倒すぞ！」

仲間全員「おー！」

この後、イワヤマトンネルを抜け、シオンタウンまで行った作者達はまた悲しい出来事に出くわす事になる。

昔日の残照ゝ忘れられた島より抜粋（後書き）

次回は悲しい事件と姓名判断氏の回。

悲しみの町と悲痛の問い（前書き）

今回は悲しい回。

でも、物語の裏を知る機会の伏線でもある。

悲しみの町と悲痛の問い

くシオンタウンく

イワヤマトンネルを疲労困憊になりながらも抜けた作者達。
その町で1ヶ月前起きた“悲劇”について知ることになる。

作者「ふう、やっと着いたな。」

キルト「そうですね。」

ペルシアン「そうだにや〜！」

作者「今更だが、お前何時進化した？」

ペルシアン「にや！？知らにやいんですにや！？」

キルト「あの時、マスターはオツキミ山から萌えセンターに戻った
時自転車の漕ぎ過ぎで足が腫れたから……。」

作者「そのまま、治療室に泊まったんだよ……。」

ペルシアン「……にや〜、それなら仕方ないにや。私の素晴らし

い進化を見せられにやかったのは残念にやけど……。」

キルト「熱い熱いと言いながらも、丸まってただけじゃない。」

ペルシアン「それは言わないお約束にや。」

作者「やれやれ、萌えセンターに行くぞ。」

作者達は萌えセンターに行こうとした時、青年が呼び止めた。

青年「あ、君たちは旅人かな？」

作者「そうだけど？」

青年「そっか、色んな所に行ってるのかい？」

作者「まあな。」

青年「……君はまともなようだね。」

作者「……どういう意味だ？」

青年「嫌ね、この町である事件が起きたのさ。」

作者「事件？」

青年「悲劇とも言えるかな？1ヶ月前、ガラガラの“死体”が発見されたのさ。」

作者「……！？」

青年「噂では、ロケット団に殺されたらしいんだ。そして、この“塔”にそのガラガラの霊が出るらしい……。」

作者「この塔は？」

青年「死んだ萌えもんの魂を慰める為に作られた塔なんだけど、最近はその霊と共にゴーストタイプの萌えもんも出てくる様になった。」

作者「そうなのか……。」

青年「この事件が知りたいなら、姓名判断氏の隣の家を訪ねると良い。その霊の子供が保護されてるはずだから。」

作者「ああ、解った。」

青年は去っていった。

キルト「マスター……。」

作者「……行こう。」

キルト「……はい。」

（シオンタウン・萌えセンター）

作者は萌えもん達を休ませてる間に、センター内の人に事件の話を聞いた。

少年「カラカラの種族の被ってる骨あるだろ？あれが高く売れるんだって。」

お爺さん「その所為で多くのカラカラが乱獲されたり殺されたりし

たんじゃ。ロケット団の連中……、お金儲けの為ならどんな非道な事も平気でやるんじゃないよ。警察は証拠が無い限り動かんと言ってるがの！」

女性「カラカラのお母さんが子供を連れて逃げるのを見たわ。その時は何から逃げてるのか解らなかつたけど、ロケット団が追いかけて来たの、銃を持ってね……。その後銃声が聞こえて急いで駆けつけたらロケット団はお母さんの骨を奪って帰って行って……。それで……。！ごめんなさい、これ以上は……。！」

作者は1人考えていた。

何故ロケット団はそこまで墜ちたのか？

元々は善行団だったはずだ、何故ここまで非道な組織になってしまったのだろうか？

ピジョット「どうしたの？作者。」

作者「ちよつとな……。って、何時の間に進化した。」

ピジョット「回復終わった後に進化して。」

作者「そうか。」

ピジョット「で、何考えてたの？」

作者「ロケット団についてな。確かに語るに墜ちたとは思うが何処か引つかかるんだ。」

ピジョット「何処が？」

作者「解らない。でも、何か見落としてる様な気がする。そう、大事な“何か”が……。」

ここで、彼がトキワに居たときの話をしよう。

彼は萌えセンターに居たとき、ジムリーダー特集を呼んでいたのだ。

その時、大地を操るジムリーダーが居る事も知って居るのだ。

その特集は何年か前の物だがこう書かれていた。

『私の相棒は妻が残したこのガラガラだ。』

そう書かれていた。

しかし、その記事の内容を思い出すのは先の事であった。

作者「とりあえず、殺された母親の娘に会いに行こうかと思う。」

ピジョット「ふーん。でも、大丈夫かな？その子。」

作者「錯乱状態になっていない事を祈ろう。」

〈シオンタウン・民家〉

作者「ごめんください！」

少女「……どなたですか？」

〈青年説明中〉

少女「そうですか……。解りました。」

作者「話が聞けたらで良いので。」

少女「興味本位では無いみたいなので通しますが、余り触れないで上げて。」

作者「解りました。」

作者「お邪魔します。」

カラカラ「……だれ？」

作者「旅人の作者と言います。」

カラカラ「貴方も話を聞きにきたの？」

作者「嫌なら聞かないさ。」

カラカラ「良いわ、聞かせてあげる。あの時の事を。」

カラカラ「あの日、私とお母さんは木の実を取りに行ったの。そ

ここにロケット団が現れて、母さんを殺して骨を奪っていったの……。

作者「君は無事だったのか？」

カラカラ「お母さんの技“見切り”を私に発動してくれてたから……。」

作者「……そうか。すまなかったな。」

カラカラ「気にしないで、ロケット団は許せないし憎んでるけど私1人じゃ勝てないのは解ってる。だからせめてこの真実を伝えて生きていこうと思うの。」

作者「そうか……。」

不意に、カラカラが作者の眼を見つめる。

作者「どうした？」

カラカラ「何で、お母さんは殺されなきゃならなかったの？」

作者「それは……。」

カラカラ「ねえ、何で？何でなの？何で……！何でなの！？」

カラカラは抑えていた感情を爆発させる勢いで骨棍棒を振り上げる！

ガッ！

ピジョットがそれを受け止める。

ピジョット「落ち着いて……。。」

——フェザーダンス——

カラカラの力が抜ける。

カラカラ「……ご……めんな……さい……！」
ピジョット「気にしないで、誰だってそうなっちゃうから。むしろ
今まで耐えてた事は凄いのと思うよ？」

その後、泣きやんだカラカラは疲れたのか眠り、作者達はその場を
後にした。

作者「ありがとう。助かった。」

ピジョット「気にしない気にしない！まあでも、少しは注意するベ
きね。」

作者「ああ、そうだな。でも、あの時言われた言葉に迷っちゃった
んだ。」

ピジョット「迷った？」

作者「俺は何て言えば良いのだろうか？つてな。」

ピジョット「……誰にも解らないよその答えわ……。」

今日の出来事はある意味で考えさせる出来事になってしまった1日
であった。

くおまけく

少女「貴方、幽霊居ると思う？」

作者「さあ？居るなら居るで居ないなら居ないんじゃないか？」

少女「あはは！そうよね！」

少女「貴方の右肩に白い手が置かれてるなんて……あたしの見聞
違いよね……。」

作者「るゑ？」

少女「……見間違ひよね？」

作者「……………」。(青ざめる)「
少女「……………」。(青ざめる)「

無かった事にした。

悲しみの町と悲痛の問い（後書き）

さて、次回は姓名判断氏に名前を変えてもらうの回。

その場で名前付けるとバグが起きるのでやっとなえらる。

尚、今回は今まで捕まえた萌えもんの名前を変えます。

まだ出てきてない萌えもんは性格を書いて出します。

そして、物語は若干の核心に迫る。

姓名判断氏の家で名前を変える事と10年前の悲劇（前書き）

名前変えたらちゃんとした外伝で書きます。

……めんどくさいし。

さて、今回で一時的にシオンは終わりです。

姓名判断氏の家で名前を変える事と10年前の悲劇

「シオンタウン・萌えセンター」

作者「ふう、しかし空気が重いなこの町は。」

キルト「そうですね……。」

オオタチ「それなら、姓名判断氏の家に行きませんか？」

作者「姓名判断氏？」

ロトム「確か……、萌えもんの名前を変えてもらえたり、良い名前のアドバイスくれたりする仕事だね？」

作者「なるほど、様は呼びやすい名前に変えてもらう所か。」

オオタチ「ありたいてに言えばそういう事です。」

ロトム「良い機会じゃないか主人。今までは種族名で呼ばれてたけど、そろそろ名前が欲しいと思ってた所だし。」

作者「今までは諸事情により変えられなかったからなあ。」

キルト「これからは帰られますね。」

作者「……ネーミングセンス無いんだが……。」

ロトム「主人……、もし、変な名前にしたら……（笑顔）」

オオタチ「……そうですね（笑顔）」

2人の笑顔が怖い。

作者「……頑張らせていただきます。」

「姓名判断氏の家」

作者「こんにちわー。」

判断氏「おや、いらっしやい。」

中に居たのは20代の男性だった。

作者「あの、貴方は？」

判断氏「私は判断氏の新人かな。」

作者「新人？」

判断氏「叔父さんが違う地方に行ってしまったからね。自己紹介が遅れたね。」

名山「名山と言います。以後お見知りおきを。」

作者「作者です。」

名山「さて、ここに来たという事は萌えもんの名前を変えに来たのかい？」

作者「そうです。」

名山「なら、ちゃんとアドバイスしないとね。判断氏は名前が変じやないかどうか、その名前を意味を汲み取らないといけないからね。」

作者「汲み取る？」

名山「……もし、トレーナーが何らかの事件・事故・病気などで死んでしまった時、此処で名前を付けて貰った萌えもんに伝えるんだ。その死んでしまったトレーナーがどんな思いで名前を付けたのか・変えたのかをね。」

作者「……そうか。」

名山「君の萌えもんが聞きに来ない事を祈らせてもらうよ。」

作者「ありがとよ。」

名山「さて、湿っぱい話は此処までだ。さあ、名前を変えよう。」

（名前変更中）

名山「まあ、こんな所だね。しかし、良い名前じゃないか。」

作者「若干不満顔されましたけど……。」

名山「……しかし、こうしてみると叔父さんに聞いた話を思い出さね。」

作者「話？」

名山「……そうだね、今の事件と同じ様な話さ。」

作者「……話してくれないか？」

名山「そうだね、話そうか。」

——あれは10年前の話だ。

まだロケット団が善行団体だった頃、この家に名前を付けてもらいたいと言う1人のトレーナーと萌えもんがやってきたらしいんだ。萌えもんの腕の中には赤ちゃんが居たんだって。萌えもんの赤ちゃんさ。

どうやら、ごく稀に生まれた半人半萌えだったんだ——

作者「ちよつと待て、それって奇跡的な確立じゃ無いのか？」

名山「そうだよ、でも世間はその存在を恐怖した。」

作者「……異常だからか？」

名山「そうだよ。そうやって生まれた萌えもんや人間は“異質”な能力を得てしまうからね。」

作者「異質な能力？」

名山「人間はその生んでくれた親と同じタイプの技を使える。様は萌えもんの技を使えるのさ。対する萌えもんの場合は、生き物が持っている欲が倍になってしまうのさ。人間の欲は三大欲求といって食欲・睡眠欲・性欲がある。萌えもんに加算されるのはそれさ。」

名山「性欲は不味いと思うけど……。」

作者「……………」

名山「さて、話を続けよう。」

——叔父さんはその2人の赤ちゃんに名前を付けるアドバイスを

してあげたのさ。

そして、それから1ヶ月後に“悲劇”は起きてしまった。

そのトレーナーの萌えもんが殺されたのさ。

その萌えもんは赤ちゃんを護る様に倒れてたのさ。

そのトレーナーは泣き叫んだらしく、この町まで聞こえてきたらしいよ――

作者「……まさか。」

名山「そう、そのまさか。そのトレーナーが当時の善行団体のリーダーで、トレーナーの萌えもんはガラガラだったんだ。」

作者「……犯人は見つかったのか？」

名山は静かに首を振る。

作者「だから、今はロケット団と言う組織を作ったのか……。」

名山「犯人も解らずうやむやにしまった警察や、こんな悲劇を起こした犯人、そして力の無さを悔いる己、全てに絶望したんだろ
うね……。」

作者「なんで、そんな事が……！」

名山「解らないよ。当時はガラガラの骨が高級とは知らなかったはずだ、けれど犯人は“骨”を奪っていったのさ。しかし、皮肉だね、自分が傷ついた事件を自分の手で起こすなんて……。僕には理解出来ない。」

作者「…………。」

名山「どうしたんだい？」

作者「いや、なんでもない。とりあえずありがとな。」

名山「またの起こしを。」

作者は考えていた。

作者（確かに、今回の悲劇は10年前と同じだ。けれど、本当にそんな事をするだろうか？ロケット団は“この地方の経済の大半を握ってる”んだらう？今更資金が必要になる程とは思えない……。何か、水面下で動いてる様な気がする。）

こうして、10年前の悲劇を知った作者。
今回の事件に矛盾も感じてもある。

舞台はタمامシティに移る。

——そして、彼等は出会ったらう。“異端の存在”に——

姓名判断氏の家で名前を変える事と10年前の悲劇（後書き）

設定細かい様な……。

一応、10年前の犯人は設定してあります。

ただ、矛盾が生じる場合がありますので、そこらへんはスルーで。

色違いだから？そんな事は関係無いだろ。（前書き）

色違い萌えもん発見です。

そして、見つけた場所は恐ろしいトレーナーが潜んでいた。

色々すっ飛ばした感が否めない。

少し進めてしまったし。

これ、プレイ日記みたいなんだけどなあ。

色違いだから？そんな事は関係無いだろ。

「タمامシティ・センター」

作者「しかし、でかい街だな。」

ムロン「それはそうだよ。この街は経済にも大きく影響してる街の1つだからね。」

作者「他は？」

ムロン「1つはヤマブキシティさ。シルフカンパニーって言う会社が経済力を占めてるけど。萌えものの回復アイテムとかはそこで製造・販売してるからね。もう1つはクチバだね。」

作者「あー、あのでかいビル。でも、まだ入れなかったぞ？」

ムロン「最近オープンしたらしいよ。近くのショップは閑古鳥が鳴いているみたいけど。」

作者「ふむ、こんど寄った時見てみるか。」

ムロン「個人的にはこの街のタمامシデパートを見てみたいけど。」

「

そんな会話に入ってきた萌えもんが居た。

ネルコ「それならカジノはどうかじゃ？」

作者「カジノなんてあるのか？」

ムロン「この街の資金源みたいな所さ。でも、景品交換所は変な噂が流れてるけどね……。」

作者「変な噂？」

ネルコ「一応、萌えもんも景品に出されてるらしいにや。」

作者「…………。」

ムロン「大丈夫だよ主人。ちゃんと警察の公認と本人の許可を取った上で景品になってるらしいから。」

作者「何の為にだ？」

ネルコ「にゃんか、自分達を本気で大事にしてくれるマスターを探
す為らしいにゃ。」

作者「何だかなあ。」

ムロン「気持ちは解らないでもないけど、本人が許可取ってるなら
大丈夫だよ。」

作者「話がそれたが、変な噂って？」

ムロン「今も言ったけど、ちゃんと許可を取った上で景品になつて
る萌えもんが居るけど此処最近、カジノに眠らされた萌えもんが運
ばれてるらしいんだ。」

作者「それは、犯罪だろう。」

ムロン「まあね。それで警察も動いてはいるらしいけど、全然見つ
からないんだって、運ばれた萌えもんも運んだ人物も。」

作者「……少し、この街について調べるか。」

ムロン「そうだけど、余り無理しないでね。」

作者「無理するのはお前等だろ。俺はただ後ろで指示を出してるだ
けじゃねーか。」

ネルコ「そんな事にゃい！」

作者「ネルコ？」

ネルコ「だってご主人、寝る前に『どうやったら無傷かつ迅速に勝
てるか！？』って本読んでるにゃ！」

作者「何故知ってる！？」

ネルコ「ご主人の寝顔を見に行こうとしたからにゃ！」

ムロン「後でネルコはお仕置きだね。しかし主人、そんな努力して
たのかい？」

作者「……寝る前に難しい本読めば寝やすいからだよ。」

ムロン「ふふっ。そういう事にしといてあげるよ。」

作者達は早速街を探索した。

「全員探索中」

ネルコが怪しげな建物を発見した。

この街のジムの横にある建物だ。

作者達は中に入ろうとした、その時！

除き爺「ぐへへ！良い尻じゃの〜！」

全員『……………』

数分後、そこには変態がぼろぼろになって倒れていた。

「タمامシテイ・空家」

作者「ダンボールが多いな……………」

キルト「…………マスター。」

作者「どうした？」

キルト「上から変な気配がします。実力のあるトレーナーが居るみたいですが、今はまだ行かないほうが良いかと思います。」

作者「……………解った。気にはなるがもう少し成長してからこよう。」

「探索中」

途中、開かないドアや、こじ開けて入った部屋のパソコンを調べるとゴーストが襲い掛かってきたりした。

作者「どうやら製造装置みたいだな。」

シヨナ「ゴーストだからなのか、増える事は可能みたいね。」

ムロン「それが証拠に、大掛かりな装置があるのを見ると此処は何かの実験場みたいだね。」

作者「しかし、最近是谁かが入った後は無いな。既に放棄したのか？」

シヨナ「でも、変な気配を感じる。」

作者「何処か解るのか？」

シヨナ「とさかが反応するのよ。」

作者「んじゃ、行ってみるか。」

向かう時、同じ部屋があつて迷つたりした。

シヨナ「ここよ、この上に居る。」

作者「しかし、疲れた……。」

チルド「疲れたわ……。もう！何であんなに同じ部屋があるのよ！」
作者「来た道と間違えたかもしれないがな。」

そんな会話をしながら上がる作者達。

そして、その部屋には“銀色の萌えもん”が居た。

???「……誰？」

作者「……君は？」

ムロン「ピカチュウじゃないか！しかも色違い！」

ピカチュウ「そうよ、私は色違い。選ばれた萌えもん……。他より優秀な萌えもんよ。」

作者「選ばれた？」

ピカチュウ「だってそうでしょう？周りは自分が弱いから強い奴を恐れて追い出す。それが心理。」

ムロン「……な！？」

作者「……。」

ピカチュウ「貴方達も私の力に恐怖し、とつと逃げ帰る事ね。」

作者「……何で君は、拒む？」

ピカチュウ「……何が言いたいのか？」

作者は腑に落ちない点があった。

——もし、彼女があのかぶりからして選ばれたと言い張るなら、何故階段を上がって来た時攻撃してこなかった？

選ばれた存在と豪語したなら、弱い奴との会話はおるか、見たくも無いと思うのが普通だ。

しかし、彼女は作者達を視界に捕らえ会話までし、あまつさえ帰る様に仕向けている。

導き出される答えは——

作者「君は“傷つける”事を恐れている。だから帰る様に脅してるんだろ？」

ピカチュウ「……違う！そんな事無い！私は選ばれた存在！伝説よりも崇高な存在なの！」

作者「なら、俺を攻撃してみろ。」

その場に居た全員が凍りついた。

キルト「な……！何言ってるんですかマスター！？」

ムロン「そудだよ！何考えてるんだ主人！？」

ピカチュウ「正気なの……！？」

作者は無言でピカチュウに近づく。

ピカチュウ「く、来るな！」

ピカチュウは電気ショックを放つ。

しかし、攻撃は外れた。

いや、外してるのだ。

萌えものの技は人を殺しかねない威力を持つ。
色違いなら尚の事だ。

それでも、作者は恐れずに近づいていく。

ピカチュウ「来るな来るな来るな！！！」

しかし、当たらない。

作者「君は誰かを傷つけるのを恐れている！だから、こんな空家に隠れて居たんだろ？」

ピカチュウ「黙れ黙れ黙れえええ！！！」

ピカチュウはもう何が何だか解らず、ただ恐怖していた。

———何でこいつは近づいてくるの？怖い怖い怖い！傷つくのも傷つけるのも怖い！だから、独りにならなきゃ！ならなきゃ！———

ピカチュウはそんな考えとは裏腹に無意識の内に技を発動していた。

気づいた時、発動していた。

ピカチュウ「！？しまっ……！！」

作者「！？」

ピカチュウの必殺技ボルテッカーが作者に向かう！

ピカチュウ「逃げてええええええええええ！！！！！！！！！！」

瞬間、光が弾けた。

ドカーン！

キルト「マスターああああ！？」

光が収まった時、作者は立っていた。
ピカチュウを抱きしめて。

ピカチュウ「何で……？何で貴方は……。」「
作者「……別に特に意味はねえよ。……ただ、俺は独りが嫌だ。そして、他の奴が独りで居るのも嫌なだけさ……。」「

そう言つて、作者は倒れた。

ムロン「主人！」「

ムロンが慌てて作者に駆け寄る。

キルト「ムロン！マスターは！？」

ムロン「息はしてるけど、センターに運んだ方が良いね。」「

そう言つて運ぼうとした時、ピカチュウが作者を背負った。

ムロン「何のつもりだい？」「

ピカチュウ「私の所為だから……。償いって訳じゃ無いけど。」「
キルト「なら、お願いします。」「

ムロン「……ふう、解つたよ。」「

ピカチュウ「ありがと。」「

キルト「正し！」「

ピカチュウ「？」「

キルト「貴女もマスターの旅について来てもらっわ。異論は認めない。」

ムロン「……何とも酷い論理だね。」

ピカチュウ「大変な人達に目を付けられたわね。」

そう言ってピカチュウは笑ってた。

その後、センターで3日は療養するはめになった作者であった。

色違いだから？そんな事は関係無いだろ。（後書き）

次回は恐怖の高レベルダンジョンの謎に迫る。

8 番道路の地下は強敵の住処。(前書き)

今回は迷宮の回。

実際は回復アイテムの消費オンパレードだった……。

まだ、良いことを手に入れられない状況。

8番道路の地下は強敵の住処。

～8番道路～

作者達はここのトレーナー達と戦ってる時、ある話を聞いた。

トレーナー「最近、あそこに小屋が出来たんだ。1度行ってみただけ、高レベルな萌えもんが襲ってきたんだ。すぐさま逃げたよ。あそこはやばい。」

そんな話を聞いたので挑む事に。

作者「とりあえず、そのトレーナーが出くわした萌えもんはダクトリオだったらしい。」

キルト「私の出番ですね。」

チルド「あたいの出番でもあるわよ!」

そういう訳で、この2人とその他で行く事になった。

～8番道路・地下～

全員『暗い!』

中はフラッシュが不要なくらい暗い。
ネルコが居たので明るくはなった。

作者「何があるんだここは?」
シヨナ「解らないけど、何かあるのは間違いないみたい。」
キルト「何か解った?」

シヨナ「強い気配の先に、小さな子供の気配がする。」
作者「こんな所に子供？」

キルト「まさか…、幽霊とか？」

シヨナ「近いわね。でも、行ってみないと解らないわ。」
作者「なら行ってみますか。」

階段を下りると、見慣れた景色があった。

壁と床が萌えセンターと同じなのだ。

違うのは、それが迷路の様に入り組んでいる事である。
そして、強者が集う住処という事。

作者「……全員、気を引き締めるぞ。」

仲間全員『はい！』

〈青年探索中〉

遭遇萌えもん：ダクトリオ・ライチュウ・フシギバナ

いずれも38〜50以上のレベルで出てきた。

作者「やばすぎるだろ……。」

仲間は疲労困憊だが、ついに目的の場所にたどり着く。

作者「扉が無いが暗くて見えないな……。」

シヨナ「でも、ここから気配がするわ。」

キルト「入ってみましょう。」

中に入ると、景色が変わった。

作者「!？」

入った瞬間、木の家の中にいた。
所処、穴が開いている。

そこに1人の少年が居た。

少年「やあ!こんな所まで良く来たね？」

作者「君は...？」

少年「僕はこの家に住んでる子供かな？」

作者「答えになってないぞ。」

少年「まあ、細かい事は気にしない!」

作者「細かくねえ。」

少年「唐突だけど鬼ごっこをしないかい?もし捕まえられたら良い
ことを教えてあげるよ。」

作者「良いこと?」

少年「どうする?やる?やらない?」

作者「んじゃあ、挑戦する。」

少年「それじゃあ始め!」

瞬間、景色は変わり部屋に移動していた。

作者「何だこれ?」

足元に紙が落ちていた。

作者「何々?」君がこの部屋に入る頃には、僕はもう次の部屋に居る。次の部屋に来る頃には、僕はさらに次の部屋に居る。だから君は僕を捕まえられない。つまり、逃げていく人に矢を放つてもその人が居た位置に矢が着く頃にはその人はもっと遠くに逃げています。だから、逃げている人に矢が当たる事は永遠に無い。これは僕から

のささやかなヒントだよ。じゃ！頑張つてね！』か……。」

チルド「どーすんのよ！永遠に此处から出れないの？」

ムロン「主人。」

作者「解つてる。」

キルト「何か解つたんですか？」

ネルコ「にゃ〜。私は解らないにゃ〜。」

シヨナ「……！もしかして！」

ディン「なるほどの〜、とんだ引つ掛けじゃな。」

作者はテーブルを調べた。

少年「あら！僕が此处に居るつて良く解つたね？」

作者「様はあれだろ？追いかけても追いかけても捕まらないのは、そいつが遠くに逃げているんじゃないや無く、直ぐ近くに居るのに気がつかないつて事だろ。」

少年「その通り！灯台下暗しとは言つたものだよ。」

作者「実践するのも珍しいがな。」

少年「あはは！それじゃあ約束通り良いことを教えてあげるね。君がもし、波乗り手に入れたら、クチバシティで波乗りをして“ある建物の裏から建物を調べてみると良いよ。きっと良いことがあるから。」

作者「ああ、波乗りを手に入れたら調べてみるよ。」

少年「久しぶりに楽しかったよ！ありがとう！また会おうね！」

その瞬間、少年は消えて部屋は元に戻った。

作者「……何とも不思議な少年だったな。」

とりあえず、階段を登ると入り口に続く道に出た。

そこからまた出口まで苦労したが、何だかすつきりした1日だった。

8 番道路の地下は強敵の住処。(後書き)

次回はジム戦の会話だけで、バトル省略。
何回も挑んだが、炎が居ないとキツイ。
でも、そんな奴居ない。

一息の休息をアナタに……。タマムシデパート広告（前書き）

まだジム戦では無いです。

省略したいが、少しはバトルシーンでも書くべきか……。

今回は進化や萌えもん達の個人行動する回です。

作者はカジノでスロットを回すはず。

……今更だが、持たせるアイテムが木の實しか無いのはどういふことなの……。

一息の休息をアナタに……。タمامシデパート広告

「タمامシ・萌えセンター」

作者「しかし、暇だな。」

デイン「良く……。！そんな事が……。！はあ！はあ！言えるのう！」
ヘルン「少しは……。！はあ！あたし達の心配もしなさいよ！」

進化の前の光景です。

艶かしいとです。

作者「一々心配してたら過保護になっちまうだろ。」

デイン「……。せめて、冷えたての水が入ったペットボトルは無いのかのう……。」

ヘルン「それは……。同意ね……。いくら……。熱いのに……。強いあたしでも……。辛いわ……。」

作者「ん。」

作者は2人のおでこに冷えたての水が入ったペットボトルをくつつけた。

2人『はふう~~~~~~~~！！！！！』

じゅっうううううう！！！！！

作者「……。一気に蒸発してるぞ。」

それほどの体温だったのだろうか？

ヘルン「あたしは……水に弱いから……急激に水を……暖めてるのよ……。」

作者「意味ねえ。」

進化した萌えもん達の1日であつた。

〳〵個別行動してる萌えもん達〳〵

ここは、デパート。

作者の萌えもん達が買い物に来ていた。

キルト「この野菜……、新鮮ね。」

くおん「ご主人様の〳〵体調管理には〳〵必要ね〳〵。それにしても、他の子達つたら。」

デン「まあまあ、たまにはハメを外したいんでしょう。私達も後で休憩しましょう?」

くおん「仕方無いですね〳〵。でも〳〵たまには良いですね〳〵。」

キルト「マスター、今頃何してるのかしらねえ。」

デン「……今頃、ですか。カジノで一山当てたりして。」

くおん「だったら良いですね〳〵。」

キルト「すつてなきや良いけど……。」

結果：当ててた。

〳〵洋服売り場〳〵

タルト「どうこれ?似合うでしょ?」

しきは「あら!良いわね!」

ニウ「何でハイレグなのよ……。」

タルト「これを着てマスターを悩殺するためさ！」

ニウ「果てしなく何も言えない……。」

しきは「なら私はこれを。」

タルト「紐水着！？……しきは、恐るべし！」

ニウ「もうちよつとまともな水着選びなさいよ！」

タルト「じゃあ、ニウは何選んだのさ？」

ニウ「え？」

しきは「そうですね、気になるわね。」

ニウ「べ、別に見せる程でもなわよ！」

2人『怪しい……。』

ニウ「う……。」

2人『見せろー！』

ニウ「きゃあああ！？」

白いビキニでした。

その後、こつてり絞られたニウであった。

……巨乳だしね。

〳〵街中・噴水広場〳〵

今ここで、世紀の決闘が行われようとしていた。

ジェネル「2人共、覚悟は良いな？」

ミヨン「いつでも。」

サザナ「早くしな。アタシは直ぐにでも倒したいんだ。」

犬猿の仲、とは言った物で現在ギャラリーが見守る中、決闘が行われようとしていた。

因みに、ネルコ・ムロン・ウェル・くいんは賭けの販売をしていた。

……止めるよ。

4人『無理。』

常識人どっか行った。

この後、勝って帰って来た作者に止められた。

今日はこんな感じで終わる。

一息の休息をアナタに……。タマムシデパート広告（後書き）

次回はジム戦を書こうかなあ。

マチスはまだクリアしてない。
倒せるんだがね。

男子禁制の花園を攻略せよ！（前書き）

ジム戦です。

今回は結果を書いていく事にします。

男子禁制の花園を攻略せよ！

「タマムシジム」

作者達はジムに挑みに来た。

作者「中は異常に花の香りがするな。」

キルト「ここは草タイプを主力にするみたいですね。」

シヨナ「男子禁制のジムって言われてるらしいわよ？」

作者「大丈夫か？俺？」

そんな作者達に近づく女性が居た。

女性「貴方達！何やってるの！此処は男性の立ち入りを禁止してるわ！即刻出て行きなさい！」

作者「ジムに挑みに来たんだが……。」

女性「問答無用！」

女性が勝負を仕掛けてきた！

結果：作者勝利！

女性「なっ……！」

作者「悪いけど、相手にもならないよ？」

女性「くっ！……良いわ、エリカさんと勝負する権限を上げる。さあ！行きなさい！」

作者「んじゃ、失礼して。」

作者は奥に来た。

1人の和服を着た女性が佇んでいた。

エリカ「あら、こんにちわ。」

作者「こんにちわ。」

エリカ「良いお天気ね。」

作者「屋内なんだが……。」

エリカ「……………」

作者「？あの？」

エリカ「……………すー……………すー……………あら？いけないいけない、寝てしまったわ……………」

作者「マイペースな人だな。」

エリカ「よく言われます。改めまして、ようこそ。私、タمامシジムのリーダー、エリカと申します。」

作者「マサラから来た作者です。」

エリカ「お花を生けるのが趣味で萌えもんは草タイプばかりなの。」

作者「良いんですか？そういう情報言つて？」

エリカ「良いんですよ、だって……………誰も勝てませんもの。」

エリカはクスクスと笑う。

作者「……………なら、1勝負してもらえませんかね？」

エリカ「……………あらやだ、試合の申し込みですの？そんな……………、私負けませんわよ？」

ジムリーダーのエリカかが勝負を仕掛けてきた！

1回戦：勝利！

2回戦：勝利！

3回戦：勝利！

4回戦：勝利！

5 回戦：勝利！

6 回戦：勝利！

エリカに勝利！

総合結果：シヨナ瀕死

エリカ「……………！参りましたわ。本当にお強い方……………、このレインボーバッジを差し上げなくてはなりませんね。」

作者「良い勝負でした。あそこで勝負を仕掛けなければ勝てませんでした。」

エリカ「貴方のギャラドスが毒を喰らい、そして私の萌えもんは花びらの舞いをしていた……………。まさに、一発勝負でしたわね。」

作者「後で褒めてやりますよ。」

エリカ「ふふ、それがよろしいかと。では、これを。」

作者「ありがとうございます。」

エリカ「また、いらしてください。今度はお客様として。」

作者「追い出されない様に紳士的な態度を身につけておきますよ。」

エリカ「楽しみにしておりますわ。」

こうして、ジム戦は終了した。

……………その後、良い雰囲気だったのが気に入らなかった様で、萌えもん達は拗ねていた。

男子禁制の花園を攻略せよ！（後書き）

次回、潜入作戦？です。

潜入！クチバジムを攻略しろ！（前書き）

前回の後書きでロケット団に挑むと思った方。

残念だったな！

レベル差があるから楽に勝てる。はず。
空飛びたいしなあ。

潜入！クチバジムを攻略しろ！

「クチバジム」

ここは、クチバジム。

作者達は挑む事にした。

作者「しかし、俺達はかなり強くなったと思うが……。」

ラタク「この展開……！久々に萌えるぜええええ！」

まろん「落ち着くです。波乗りとか使ってくるに違いありません。」

ムロン「僕には問題無いけどね。」

作者「さて、今回の要はお前達に掛かっているとさえ言えなくも無い。

だが、無理だと感じたら直ぐ引込む事、良いな？」

3人「はい！」

奥に進むと、軍人風の男が居た。

マチス「シー？ユーたち、チョウセンシヤダネ？」

作者「ああ、そうだが……。」

マチス「はーはーはー！そうか、挑戦者か！」

作者「日本語話せるのかよ！？」

マチス「いや、これは翻訳してるだけだ、実際は片言を喋ってるがめんどくさいらしい。」

作者「メタ自重！」

マチス「ユーの半端なパワーでは戦場では生き残れないと見た！」

作者「行かないよ、戦場とか。」

マチス「ミィは戦争でエレクトリック萌えもんを使って生き延びた！」

作者「戦友って訳か。」

マチス「皆ビリビリして動け無い！故に、死んでいった兵は多かつ

た。」

作者「……戦争だからな。」

マチス「だから……、ユーも同じ辿るが良い！」

「ジムリーダーのマチスが勝負を仕掛けてきた！」

1回戦：勝利！

2回戦：勝利！

3回戦：勝利！

4回戦：勝利！

5回戦：勝利！

6回戦：勝利！

総合結果：瀕死者無し！

マチス「オーノー！ユーの強さトゥルース！つまり本物ねー！」

作者「別に修行しただけだ。」

マチス「……そうか。では、これあげます！」

作者はバッジを手に入れ、ジムを後にした。

後に残ったのは、マチスのみ。

マチス「……あの男……、“ロケット団”の脅威になるな……。ア

ジトは見つからないと思うが、念のため報告しておくか。」

——黒い稲妻はここにあり——

おまけ

作者「これで、空を飛ぶが使えるな。」

シヨナ「さっそく使う?」

作者「できれば。」

シヨナ「じゃあ、乗って。」

作者「……何処にだ?」

シヨナ「背中。」

作者「……変な図が見える。」

シヨナ「掴まる方向で。」

作者「解った。」

作者は手を前に掛けた。

むによ!

シヨナ「ひゃあ//」

作者「す、すまん!」

シヨナ「もう! 気をつけてよ!」

作者「あ、ああ。」

その後、試行錯誤した結果空を飛べた。

……ただ、その後シヨナ以外の萌えもん達に説教喰らったのは言うまでも無い。

潜入！クチバジムを攻略しろ！（後書き）

次回は本当に潜入したいですが、レベル上げ等したいので遅れます。

あと、メールとか欲しいとです。

カジノにあるのはスロットとアジト（前書き）

今回はボスの居る階までの話です。

尚、大体はぶっ飛ばしたので、オリジナル展開で行きたいと思いません。

因みに、ダークⅡ悪いをアレンジして書いてます。

カジノにあるのはスロットとアジト

「ロケット団アジト」

作者達はカジノで怪しい行動をしていた男が居たので、近づいてみたがいきなりバトルを仕掛けられた。返り討ちにしたが。

男「くそ！ここがばれちゃった！」

男はポスターの裏に手を伸ばし、そのまま曲がり角に逃げた。作者達が追いかけると、壁しか無かった。

さっきの男がポスターの裏に仕掛けがあると見て調べると、スイッチがあった。

そして階段が出現し、下りて行った。

作者「……なんだここは？」

ムロン「どうやら、ここはロケット団の隠れ家みたいだね。」

作者「解るのか？」

ムロン「こんなRのインシヤル使うのはあいつくらいだよ。」

キルト「しかも、実験場みたいですね。薬品の匂いがあります。」

作者「なににせよ、叩くか。その前に、他も呼ぶか。」

ムロン「……主人って、結構規格外だね……。」

作者「悪いか？どの道警察は動かないんだ、俺達がやるしかないだろ。」

キルト「それで、どうするの？」

作者「まあ、とりあえず向かってくる敵は倒してリーダーを潰そう。」

2人『はい!』

そして、アジトでのオリジナルバトルが始まった。

ジル「ほらほら! 齧るよ!」

ホロン「まったく……、無茶苦茶ね。催眠術!」

くおん「ご主人様の〴〵為ですから。乱れ引つかき!」

ロケット団員「くそお!」

ダーク萌えもん「ひいい!」

ロケット団は、萌えもんだけでなくナイフなどを持ち出す者も居たが、返り討ちである。

……当たり前な話である。

〴〵地下2階〴〵

ロケット団員「撃てえ! 撃ちまくれえ!」

銃で撃ってくる者や、ダーク萌えもん達が応戦してくる。

ウエル「甘い!」

大きい巨体とは裏腹に軽い動きで敵をなぎ払う。

敵全員『ぐあああ!?!』

ウエル「まだまだですねえ。」

くいん「と言っても、ちゃんとレベル上げされてないから、人相手なんだよね……。」

ウエル「それは言わないお約束です。」

人にレベルがあるなら、最高で10レベルだろう。
武器の威力はともかく、身体能力はレベル1の萌えもんでも勝てる
のだ。

だからこそ人は普段から萌えもんを使い戦わせるのだ。

↓地下3階↓

ロケット団員「ぐは！」

チルド「で？リーダーの部屋に行くにはどう行くの？」

ロケット団員「誰が教えるか……！」

ムロン「仕方無い、ここを壊して崩そうか。」

ロケット団員「な！？」

チルド「あたいがやる？」

ロケット団員「ま、待て！教えるからそれだけは止める！」

ムロン「なら、教えてくれるよね？」

……どっちが悪人だ。

↓地下4階↓

ロケット団員は全滅している。

回る床を移動し、エレベータに来たが。

仲間全員「動かない……。』

↓地下4階・怪しい箱付近↓

ロケット団員「くそ！隠してた鍵が……！」

シヨナ「悪いけど、貰ってくね。」

ロケット団員「この泥棒！」

タルト「あんた等が言っな！水鉄砲！」

敵全員『ぎゃああああ！？』

まさに、戦争！

とりあえず、地下に行く鍵を見つけた作者達。

しかし、地下は“あいつ”が居るといふ事をまだ知らない。

カジノにあるのはスロットとアジト（後書き）

次回はバトルですが、終わらせてから書こうかと。
でも、やりながらでも良いかなとは考えている。

レベル上げしないとなあ。

入り口での死闘（前書き）

今回は上手く伝わるか解らないがバトル展開で行きます。

大丈夫なんだろうか？

メンバーはキルト・ラタク・チルド・シヨナ・ヘルン・しろねです。

入り口での死闘

「地下4階」

作者達は快進撃を繰り返し、エレベーターを作動して4階にやってきた。

作者「しかし、深いな。」

キルト「何かまだありそうですね。」

進んで行くと、ロケット団員が襲ってきた！

ロケット団員？「侵入者発見！」

作者「見つかったか。」

ロケット団バイトのカエデが勝負を仕掛けてきた！

BGMは伝説だと思う。

カエデ「ここから先へは行かせない！」

作者「なら、押し通るまでだ。」

カエデ「減らず口を……！行け！クサイハナ！」

クサイハナ「ここで終わりな！」

作者「そうはいくか！行ってくれ！ヘルン！」

ヘルン「しょうがないわね！直ぐに終わらせてあげる！」

互いの萌えもんは牽制をしあう。
先に動いたのは……ヘルンだ。

作者「ヘルン！オーバーヒート！」

ヘルンは力を為て一気に放出した。

ヘルン「はああああ！はあ！」

ゴーーーーー！

高熱の炎がクサイハナを焼き尽くす。

クサイハナ「ぎゃあああああ！？」

カエデ「な！？」

作者「俺達の勝ちだ。」

カエデ「クサイハナの花粉でくしゃみが……、ハックシュン！」

作者「危機感無いな。」

カエデ「バイトなのよ。」

作者「悪のバイトすんなよ。」

カエデ「自給良いのよ。あーもう！エリカに恨みを晴らすチャンスだったのに！」

作者「何故に？」

カエデ「花粉症だからよ！しかも、偶にデパートに来ると花粉がついてるから……！」

作者「まあ、此処よりも他のバイト探しな。」

作者は扉の方に進もうとした。

後ろからこんな会話が聞こえる。

カエデ「良い？クサイハナ、早くラフレシアに進化して今度こそエリカに恨みを……はつくしょん！」
クサイハナ「もう諦めようぜ。」

入り口には見張りが2人居た。

ロケット団員？「此处を通りたくば！」

ロケット団員？「私達を倒していく事ね！」

作者「仕方無い、ぶっ飛ばすか。」

くロケット団員のコサブロウが勝負を仕掛けてきた！く

コサブロウ「つてお前！オツキミ山で邪魔したガキじゃねーか！」

作者「初対面だ。それに俺は20だ。」

コサブロウ「何だと！まあ良い、ここで潰すぜ！行け！オコリザル！」

オコリザル「さあ！俺の怒りを味わえ！」

作者「続けて頼む！ヘルン！」

ヘルン「焼き猿にしてあげる！」

牽制し合う2人、動いたのは……ヘルンだ

作者「ヘルン！」

ヘルン「解ってる！」

先程と同じ動きで相手に近づくヘルン。

ヘルン「オーバーヒート！」

高熱の炎がオコリザルを焼き尽くす！

オコリザル「ぐああああ！？」

オコリザルは倒れた。

ヘルン「火加減はしといたわ、尤も良いにおいするけど。」

コサブロウ「くそー！前々からやろうとしていた事を！」

作者「やろうとするな。」

コサブロウ「次だ！行け！サウムラー！」

サウムラー「俺の蹴りを……味わえ！」

作者「交代だ！行ってくれ！シヨナ！」

シヨナ「任せなさい！」

牽制し合う2人。

動いたのは……シヨナだ。

作者「空を飛ぶ！」

コサブロウ「馬鹿め！ここは室内だ……」

ドガン！

天井を壊した！

コサブロウ「な！？」

作者「知らないのか？あいつはマッハ並の速度が出せるんだぞ？あ

んな天井なんて事はない。それより、お前の萌えもんを心配しな。」
コサブロウ「サウムラー！にg…！」

シヨナ「遅い！」

飛んでいたシヨナがマツハで天井を壊し、サウムラーに追突する！

サウムラー「か……は……。」「

どさりっ！とサウムラーは倒れた。

コサブロウ「く！このまま終わってたまるか！行け！パルシェン！」
パルシェン「ここからが本番だ。」

作者「行ってくれ！しろね！」
しろね「私に任せて！」

牽制し合う2人。

先に動くのは……しろね。

作者「ボルテッカー！」

しろねは身体に電気を纏い、眼にも止まらぬ速さで突撃する！
さながら、雷の様に。

パルシェン「ぐはああああ……！」

そして、音が後からやってきた。

ズガン……！！！！

コサブロウ「馬鹿な……！一回も攻撃を当てられないまま終わるだ
と……？」

作者「これが俺達の実力だ。尤も修行の成果とも言える。」

コサブロウ「……悔しいが、やられた！」

作者「まあ、ドンマイだな。」

コサブロウ「ロケット団の邪魔をしゃがって……！」

作者「……こちらにも、遊びでやってる訳じゃないからな。」

もう1人の見張りが口を開く。

ロケット団員？「どうやら、甘くないみたいね。」

作者「さて、この勢いに乗らせてもらうぜ？」

ロケット団員？「悪いけど、ここまでよ！」

「ロケット団員のヤマトが勝負を仕掛けてきた！」

ヤマト「ロケット団の悪事の素晴らしさを解らん子供め！」

作者「解りたくも無い。」

ヤマト「行け！ラッタ！」

ラッタ「お前丸齧り決定！」

作者「頼むぞ！ヘルン！」

ヘルン「ちよつとは休ませなさいよ！」

2人は牽制し合う。

動いたのは……ヘルンだ！

「省略」

焼け焦げたラッタが出来た。

ヘルン「上手に焼けたわ。」

ヤマト「くっ！次だ！行け！ドククラゲ！」

ドククラゲ「まったく、足止めも出来ませんの？」

作者「交代だ！しろね！」

しろね「さあ！行くよ！」

牽制し合う両者。

動くのは……しろね。

しろね「はあああ……ふ！」

〈省略〉

びりびりと放電しながら倒れたドククラゲが居た。

しろね「はあ……はあ……！」

作者「大丈夫か！」

しろね「へ、平気だよ。」

作者「ばかやろう！この技でダメージを喰らうなら先に言え！」

しろね「……ごめんなさい。」

作者「……後で説教だな！」

しろね「うっ……。」

ヤマト「余裕こいてるんじゃないわよ！行け！スリーパー！」

スリーパー「ここが終点だ！」

作者「交代に決まってるだろ！頼む！」

ヘルン「もう！後で何か奢りなさい！」

作者「パフエで！」

ヘルン「さあ、いくわよ！」

作者（安！）

牽制（略）

両者（略）

動いたのは…ヘルンだ！

作者「噛み付く！」

ヘルン「がぁぁぁあ！」

ヘルンのは相手の腹を噛む！

スリーパー「ぬう！」

ヤマト「ヨガのポーズ！」

スリーパーはポーズを取り、特防を上げる。

作者「オーバーヒート！」

ヘルンは噛み付きを解除した瞬間！

ヘルン「萌え散れ！」

……字が違うが灼熱の炎を繰り出した！

スリーパー「……………」

言葉すら焼く炎、最早形を保っているのが精一杯な状態になった。

ヤマト「あぎやぎや！」

作者「なんだその負けセリフ？」

ヤマト「くっ！ボス……！力及びませんでした。」

作者「まあ、もうちょっとだったな。」

一度回復しに戻る作者達。

そして、見張り2人の後に居たのは、奴だった。

——暗い暗い深淵の果て、彼の者“闇”なり——

入り口での死闘（後書き）

カエデはダーク系の萌えもんですが、バイトという事で普通の萌えもんです。

見張り2人もバイトでは無いですが普通です。

今回は戦闘を頑張った！

深淵の罪人より、死を込めて……。 (前書き)

今回はエピソードです。

オリジナルバトルはありませんが、シリアスで行こうかと。

メンバーはデン・ヘルン・チルド・シヨナ・ラタク・キルトの6名。

バトルシーンは上手く書けるか解りません。

深淵の罪人より、死を込めて……。

↓地下4階↓

見張り2人を撃破した作者達。

扉を抜けようとした時、呼び止められる。

エビソバ「よう、また会ったな。」

作者「お前は……エビソバ！」

エビソバ「くくつ。オツキミ山ぶりか。どうだった？あの“素晴らしい実験”は？」

作者「……最悪な実験の間違いだろ？今此処で引導を渡してやる。」

エビソバ「楽しみだ、と言いたいがそうもいかない。サカキ様に何か様か？兎にも角にもまず俺を倒す事だな。」

作者「言われずとも！」

↓ロケット団員のエビソバが勝負を仕掛けてきた↓

エビソバ「では、こて調べだ。行け！ゴースト！」

ダークゴースト「きひひ！あの時より強くなったぜえ！」

作者「行ってくれ！ヘルン！」

ヘルン「話には聞いてたけど……、とんでもないわね……。」

両者は動かない。

先に動いたのは……、ヘルンだ！

素早い動きで距離を詰めたが、軽く避けられる。

エビソバ「呪い！」

ダークゴースト「ぎひゃー！呪われなあ！」

ダークゴーストは自分の体に釘を打ち込む。

ヘルンは呪われた。

ヘルンの体に呪いが走る！

ヘルン「あああああ！」

作者「ヘルン！？」

ダークゴースト「さあ！逝っちまいなあ！」

〈ターン経過〉

両者動かず。

動いたのは……、ヘルンだ。

ヘルン「喰らえ！」

ヘルンのオーバーヒートがダークゴーストを焼き尽くす！

ダークゴースト「……！」

声すら焼く炎はダークゴースト焼き倒す！

エビソバ「仕方無いか、次だ、行け！ピジョン！」

ダークピジョン「さあて……、啄ばみ殺すかねえ。」

作者「交代だ！行ってくれ！デン！」

デン「畏まりました、ご主人様。」

〈ターン経過〉

両者動かず。

先に動いたのは……、ピジョンだ！

エビソバ「ドリルダイブ！」

ダークピジョン「死ねええ！」

空中を飛び神速の速さと超過移転の攻撃がデンを直撃した！

デン「か……！」

デンは倒れた。

作者「デン！」

デン「私は……大丈夫……です……。」

デンは気を失う。

エビソバ「さて、どんどん行かせてもらっ。」

作者「……チルド。」

チルドが出された。

チルド「ここで終わらせる！」

〈ターン経過〉

両者動かず。

動いたのは……、チルドだ！

ダークピジョン「ぐ……！」

攻撃の反動で動け無い。

チルドは大きく口を開き、ダークピジョンに接近する！

作者「チルド！氷の牙！」

チルド「がああああ！」

氷の牙で噛み付かれ、ダークピジョンは氷ついた！

エビソバ「く……！」

～ターン経過～

ダークピジョンの氷が解けた！

ダークピジョン「喰らえやあ！」

ダークピジョンの翼で撃つがチルドに直撃する。

しかし、チルドの氷の牙が当たり、倒れる。

作者「良くやった！」

エビソバ「……仕方無い、そろそろ夢を覚ましてやろう。行け！ベトベトン！」

ダークベトベトン「ここが墓場だ！」

作者「交代だ！ラタク！」

ラタク「情熱が迸る時……！オレは蘇る！」

＼ターン経過＼

両者動かず。

先に動いたのは……、ラタクだ！

作者「穴を掘る！」

ラタクは地中に潜り、そのまま相手の真下に穴を掘った！

ダークベトベトン「ば、馬鹿なあああ！？」

ラタク「オレに堀貫けぬ物は無い！貴様も掘ってやろう！」

ダークベトベトン「アーーーーー！」

ダークベトベトンは掘られた。

作者「……何やってるんだよ。」

ラタク「ふっ！」

作者「やりきったって顔するな。」

＼ロケット団員のエビソバに勝利した＼

エビソバ「やはり、強いな君は……。」

作者「俺が強いんじゃない、仲間が強いんだ。」

エビソバ「まあ良い、敗者は道を譲る。それが世の理だ。さあ通れ。」

私は去るがね。」

エビソバは前回同様に光を放ち逃げた。

作者「いつか倒す。」

センターに戻り、体勢を整える事にした。

——悲劇のに飲まれ、全てを憎みし者は何思っ？——

深淵の罪人より、死を込めて……。 (後書き)

次回はサカキ戦です。

ダーク系の毒タイプ萌えもんはエスパーが効かなくなっている。

全てを憎む者ゝ闇に墜ちた心（前書き）

メンバーは前回とほぼ同じ。

デンをムロンに変えたくらい。

全てを憎む者ゝ闇に墜ちた心

↓地下4階・サカキの部屋↓

作者達は部屋の奥のソファ―に座っている男を見つけた。

作者「あんたがサカキか？」

サカキ「ほほう？こんな所までよく来たな。その通り、俺がサカキだ。」

作者「さて、単刀直入に言わせてもらおう。あんたの目的は何だ？」

サカキ「俺の目的はただ1つ、世界中の萌えもんを悪巧みにつかい金を巻き上げ、社会に復讐する事だ！」

作者「……何故そんな事を？」

サカキ「……貴様に教える筋合いは無いな。」

作者「なら、お前の復讐を阻止させてもらおう。」

サカキ「私に歯向かうなら容赦はしない！」

↓ロケット団ボスのサカキが勝負を仕掛けて来た↓

サカキ「行け！イワーク！」

イワーク「御意……！」

作者「チルド！」

チルド「あたいに任せろ！」

両者動かず。

先に動いたのは……、チルドだ！

作者「ハイドロポンプ！」

チルドは大きく息を吸い、勢いよく発射した。

ゴーーーーー！

激流がイワークに直撃し壁に叩き付ける！

イワーク「が……！」

イワークは気絶した。

ターン経過

サカキ「……次だ、行け！サイドン！」
サイドン「終わらせてくれる！」

両者動かず。

先に動いたのは……、チルドだ！

チルド「はあああ！」

先程と同じ攻撃。

そして先程と同じ光景が現れる。

ターン経過

サカキ「……行け！ガルーラ！」
ガルーラ「ここで終わりよ！」

作者「交代だ！行け！ラタク！」
ラタク「掘進むぜええ！」

両者動かず。

先に動いたのは……、ラタクだ！

穴を掘ったが攻撃が余り効かず、アースクエイクでアウト。

└ターン経過┘

作者「不味いな…、行ってくれ！シヨナ！」

シヨナ「さあ、どう出ようかしら？」

両者動かず。

先に動いたのは……、ガルーラだ！

サカキ「噛み砕く！」

ガルーラが急接近し、シヨナを噛み砕く！

シヨナ「きゃああああ！」

しかし、空を飛んで反撃した。

効果は抜群だったが、回復の薬を使われる。

└ターン経過┘

両者動かず。

先に動いたのは……、ガルーラだ！

先程と同じ攻防が続き、勝ったのは……シヨナだ！

└ロケット団ボスのサカキに勝った┘

サカキ「ぐっ！馬鹿な！？」

作者「悪いが、あんたよりかは想いが強いんだよ。」

サカキ「……なるほど、君は大事に萌えもんを育てているな。」

作者「当たり前だ、こいつ等は俺の大事な仲間だ。家族だ。」

サカキ「……そんな子供に私の考えなど理解できないのだろう。」

その時、サカキの携帯が鳴る。

サカキ「私だ。………！何だと？」

作者「？」

サカキは携帯を切る。

サカキ「ここは1度身を引こう！君とはまた何処かで戦いたい物だ！」

サカキは非常用エレベータに乗り、逃げた。

作者「……結局、何も解らなかったな。」

キルト「マスター！何か落ちてますよ。」

作者「何だこりゃ？」

ムロン「これは……、シルフカンパニー製のスコープじゃないか！」

作者「スコープ？」

ムロン「人の目に見えない“もの”を見ることが出来る！をコンセプトに開発された物らしいよ。噂じゃやっとな開発できたらしいけど、ロケット団が盗んだみたいだね。」

作者「どうする？これ。」

ムロン「貰っておこう。何かに使うえるかもしれないし。」

こうして、アジトを後にした作者達。

そして、サカキの電話に掛かってきた内容とは？

次の目的地はシオンタワー、悲劇が起きた町の塔で眠る者とは？

全てを憎む者ゝ闇に墜ちた心（後書き）

やっと、終わった。

宿題1つ。

忘れ去られた彼、いや、忘れてないよ？本当だよ？（前書き）

努眼が久々の登場。

口調間違えない様にしないと…。

人気投票やろうかって、無理だな。

だって、本編に出てないやつ多いし。

忘れ去られた彼、いや、忘れてないよ？本当だよ？

く此処までのあらすじく

- ・ 作者、萌えもん世界に転移。
- ・ 数々の仲間を――ハーレム形成――集める。
- ・ ジムリーダーを撃破。
- ・ ロケット団を撲滅しながら旅をする。
- ・ タマムシからロケット団が居なくなる。

そして、舞台は数々の死んだ萌えもんを慰める霊安塔・萌えもんタワーに移る。

くシオンタウンく

作者「ふむ、萌えもんタワーか……。」

キルト「行くんですか？」

作者「まあ考えてはいるかな。それに……、フジ老人という人が帰って来てないらしい。」

キルト「フジ老人？」

作者「何でも、捨てられた萌えもんや子供を引き取り育てている孤児院を運営してる人らしいよ。」

キルト「良い人なんですね。」

作者「昔は名のある研究員だったらしいけど、何の研究をしてたか誰も知らないんだと。」

キルト「きつと立派な研究ですよ。」

作者「そうだな。さて、行こうか。」

キルト「はい！」

「萌えもんタワー」

作者達は萌えもんタワーに入った。
受付が騒がしい。

作者「何だ？」

男性「ゴースがいつぱい居て上に上がれないぞ！という事だ！」
受付「ただいま、対ゴーストタイプを治める祈祷師がお払いしてま
すので、落ち着いてください。」

作者「……祟りか？」

「萌えもんタワー・2階」

作者は見たことある人物に遭遇した。

作者「……あ。」

努眼「おや？」

久しぶりに努眼が現れた。

努眼「船をキングクリムゾンするとは思いませんでした。」

作者「すまん。」

メタな発言をスルーし、本題に入る。

努眼「こんな所へ何しに来たんですか？」

作者「人探し。」

努眼「そうですか、てっきり萌えもんがご臨終なされたかと思いま
した。」

作者「ぴんぴんして殺されそうです。」

手持ち全員に殴られた。

努眼「…………アホですか。まあ、良く見たら生きてますね。」
作者「だろ？」

その時、努眼の眼が怪しく光る。

努眼「せめて戦闘不能にしてあげましょう。」
作者「せめての意味が違うだろ。」

ライバルの努眼が勝負を仕掛けてきた

努眼「行きなさい！ヨルノズク！」
ヨルノズク「イエスマスター！」

作者「頼むぞ！チルド！」
チルド「最強光臨！」

そして、戦いの火蓋は切って落とされた。

作者「チルド！氷の牙！」

素早い動きで迫り氷付いた牙をヨルノズクの体に沈める！

ヨルノズク「ぐあああああ！」

ヨルノズクは倒れた。

努眼「交代です。行きなさい！ギャラドス！」
ギャラドス「最強は我だ！」

作者「交代だ！行け！デン！」

デン「今回こそ、ご主人様の役に立たねば……！」

そして、戦いは始まる。

努眼「アクアテール！」

激流がデンを吹き飛ばす！

デン「きゃあああ！」

作者「デン！」

デンは何とか着地。

デン「大丈夫です。」

作者「交代だ。」

デン「……ごめんなさい。」

作者「良いか？俺が修行を怠らせたのが原因だ。俺が悪い。」

デン「ですが。」

作者「良いんだよ、俺が悪いのが事実なんだ。だから、帰ったら我
俣聞いてやるからな？」

デン「……解りました、飛びっきりの我俣考えておきます。」

努眼「……もう良いですか？」

作者「すまん。」

努眼「……いえ。」

作者「頼むぞ！チルド！」

チルド「最強はあたいだ！」

両者は動かず様子を見る。

作者「チルド！龍の怒り！」

チルドの口から、龍の形をした炎が相手に襲い掛かる！

ギャラドス「ぬう！」

努眼「竜巻！」

チルドの周りに竜巻が発生する！

チルド「きゃあ！」

そして両者、はこのやり取りを繰り返して、最後に立っていたのは…
…チルドだった。

チルド「あたいたら、最強ね！」

努眼「まだです！タマタマ！」

タマタマ「マスター、卑猥発言は慎むべきかと…。」

努眼「……割りますよ？」

タマタマ「行きましょうか！」

作者「交代だ！シヨナ！」

シヨナ「何だか変な性格ね…、あれ。」

……動いた。

作者「デザートバーン！」
シヨナ「せい！」

羽がタマタマに纏わり付く。

タマタマ「状態異常は勘弁！」

それを難なく避ける。

追撃が走る。

作者「空を飛ぶ！」

シヨナは上空に飛び上がり、急降下！

タマタマ「ぐああああ！」

タマタマは倒れた。

努眼「……まだ、ですよ。行け！ユンゲラー！」
ユンゲラー「ほっほっほ！さあ、若い者には負けんよ。」

作者「ヘルン！」

ヘルン「年寄りには帰って寝てなさい！」

そして、直ぐに行動が指示された。

作者「噛み付く！」
ヘルン「があああ！」

急速接近し、噛み付く！

ユンゲラー「な、なんじゃ……と……。」

ユンゲラーは倒れた。

努眼「最後の大勝負です！行け！リザードン！」

現れたのは翼を持った炎龍。

リザードン「あはは、さあ一緒にいこうよ？」

作者「1人で逝け！交代だ！チルド！」

チルド「火遊びは厳禁よ！」

作者「ハイドロポンプ！」

しかし、軽く避けられる！

努眼「切り裂きなさい！」

リザードン「それえええ！」

鋭い爪がチルドを切り裂く！

チルド「うわ！」

掠りはしたがやはり威力は高い。

作者「氷の牙！」

相手は氷付く！

繰り返しが行われ、最後に立っていたのは……、チルドだった。

勝者、作者

努眼「……やりますね。」

作者「まあ、ギリだったが。」

努眼「ところで、進化始まってますよ？」

作者「え？」

デン「ひゃあああ！？」

光が始まって、治まる。

作者「大丈夫か？」

デン「はい、何とか。」

努眼「あ、そうそう。萌えもん図鑑はどうです？」

作者「ぼちぼちかな。」

努眼「駄洒落ですか？」

作者「え？」

努眼「……いえ、何でも。」

作者「お前は？」

努眼「僕はカラカラを捕まえましたね。ただ、何かに怯えてました
が。」

作者「何か？」

努眼「ええ。噂に聞く霊の仕業でしょうか？」

作者「さあ？」

努眼「まあ良いです。ではまた何処かで。」
作者「じゃあな。」

こうして、久方のライバル戦を制した作者達。
この塔には何が居るのだろうか？

くおまけく

センターの個室。

作者はデンに膝枕をしてもらった。

作者「耳掃除させてくれて、それだけで良かったのか？」

デン「はい。ご主人様の耳を掃除するのは余りできませんから。」

作者「んじゃ、頼む。」

デン「畏まりました。」

数分後。

作者「すう。すう。」

デン「寝てしまいましたか。」

優しい顔で作者を見るデン。

デン「何時までもお慕いします。作者様。」

彼女が名を呼ぶ時、それは親愛の意味であった。

忘れ去られた彼、いや、忘れてないよ？本当だよ？（後書き）

フラグ立てたかなあ。

次回は霊が出現する位置まで飛ばす予定。

尚、まだ名前をつけてない萌えもんが居ますので、こんな名前にして欲しい方メール等ください。

ゝ名前をつけてない萌えもんゝ

エアームド・ソルロック・マンキー・バリヤード・パッチール・ブル・ブビィ

あと、ガーディの名前は自分がつけますのでご了承ください。

亡霊達の悲しき賛美歌（前書き）

まだ、名前募集中。

あと、このバージョンは鬼畜3+らしいです。

プレイしてる方、情報提供求む。

前回の萌えもんの名前も募集中です。

亡霊達の悲しき賛美歌

く萌えもんタワー・6階く

此処まで来るのに色々戦ってきた。

作者「しかし、祈祷師が操られるとはな……。」

キルト「大丈夫ですか？」

作者「まあな。」

チルド「でも、ゴーストタイプって乗り移れるの？」

ムロン「少なくとも僕には出来ないよ。」

タルト「マスターに乗り移れたら……／＼／＼」

作者「……何で居る？」

2人「出番欲しいから。」

作者「他も出たがつてるだろ。」

2人「それはそれ、これはこれ。」

作者「……他にも来た奴出てきなさい。」

5人「はい。」

作者「ノリで言ったんだが……。」

来てたのは、ウェル・くいん・ミルラ・ミヨン・サザナであった。

作者「言い訳は？」

ウエル「お嫁さんが近くに居そうな気がしまして……。」
作者「居るかボケ。」

くいん「べ、別にアンタが心配だった訳じゃ無いからな！／＼／」
作者「ツンデレかよ。」

ミルラ「アナタを護りたくて……／＼／」
作者「何故顔を赤くする。」

ミヨン「作者様の警護に来ました。」

作者「……それだったら手持ちに連れて行ってる。」

サザナ「殺らないか？」

作者「帰れ。」

そして、7階に上がる階段を発見した。

作者「ここが最上階に上がる階段か……。」

階段を登ろうとした時。

キルト「マスター！」

作者「！？」

キルトが作者をおもいつき引つ張る。

そして、作者がいた所に切れ味の良い“何か”が通り過ぎ。

ピュパパパパ！

無数の刃が墓石を切り刻んだ！

作者「な！？」

サザナ「誰だ！出てきやがれ！」

ミヨン「この気配……、気力を感じない……！？」

そして、作者達の前に黒い煙が現れる。

作者「ゴース？」

ムロン「違う……、これは亡霊……？」

作者「どう違うんだ？」

ムロン「実態が無い……いや、実態が隠されてる。」

作者「……つまり、実態を表せる様にすれば……。」

ムロン「対処できるはずだよ。」

そんな会話を待つのなら我慢できない亡霊は、先程と同じ攻撃を繰り出す。

タルト「くっ！」

デン「きゃあ！」

このままではジリ貧だ。

作者「そうだ！」

作者はバックからシルフスコープを取り出し、亡霊を見た！

スコープ『分析率……30……60……99……100……完了！』

スコープから光が放たれる！

????『オオオオオ！』

作者「……まさかとは思ったが、やっぱりか。」

そこに居たのは、ガラガラだった。

——この世の物とは思えない程傷ついた身体をした——

ガラガラ『……タチサレ！……ココカラタチサレ！』

ゝ悪霊と化したガラガラが襲い掛かってきた！ゝ

作者「……。」

キルト「マスター……。」

ミルラ「……どうします？」

作者「……俺は善人じゃない。だが、このまま彷徨わせる程落ちぶれちゃいない。」

ムロン「なら、どうする？」

作者「このまま倒して眠らせる。それが俺達にしか出来ない手向け方だ！」

ヘルン「なら、盛大に火葬しないとね！」

作者「行け！チルド！」

チルド「あたいに任せなさい！」

ガラガラ『オオオオオオオ！』

両者、出方を見る。

作者「チルド！ハイドロポンプ！」

チルド「はぁ——————！！！」

激流がガラガラを押し流し壁に叩き付ける！

勝敗は決した、はずだった。

ガラガラ『オオオオオ！』

作者「……………何だと？」

チルド「……………何か護ってる。」

作者「え？」

チルドはミルラを呼び、ガラガラが護ってる“命”を見に行く。

ガラガラ『来るな！来るな！』

攻撃が2人に当たるが、それでも歩むのを止めない。

そして、2人は見つけた。

ミルラ「そんな……………！」

チルド「……………！作者！」

作者は走った。

そして、この惨状を見た。

作者「何て事を……………！」

——今にも死にそうなカラカラが居た——

作者は何も言わず凄い傷薬を出し、カラカラに処方する。

ガラガラ『お前達の所為だ……！』

作者「……………」

ガラガラ『お前達人間の所為で……！』

???『もう、止めなさい。』

声が聞こえた。

そこに居たのもまたガラガラだった。

何処か母性溢れる感じた。

母性感あるガラガラ『その人達が悪い訳ではありません。』

ガラガラ『だが……！』

母性感あるガラガラ『それに、いくら護る為とは言え誰かを傷つけるのは、貴女やこの子を傷つける事をした人達と同じです。』

ガラガラ『だが……！私は……娘を……！』

作者「娘さんは生きてるぞ。」

ガラガラ『……！？』

ガラガラは息を呑んだ。

作者「この町の人々が助けて保護してる。あんたが庇ってたから生きてるんだ。あんたは護ったんだよ、娘を。」

ガラガラ『あ……あ……！』

作者「会いに行つてやれ。あんたは母親だろ？」

ガラガラ『………！』

ガラガラは消えた。

母性感あるガラガラ『ありがとうございます、彼女を救ってくれて。』

『作者「何もしちゃいないさ。それより、あんたもしかして。」
母性感あるガラガラ『……ええ、その通りです。私はサカキの妻の
ガラガラです。』

作者とカラカラ意外『えー！！』

作者「……やっぱりか。」

母性感あるガラガラ『あの人を憎むのは解ります、けれど……。』

作者「今回の悲劇は関係無いんだろ？」

母性感あるガラガラ『……解つてたのですか？』

作者「まあな。それに矛盾が生じる。奥さんのあんたが死んだ原因
になつて悲劇をサカキ自身がやる分けないと思つたんだ。昔は善
良団体のリーダーだ、まともな心を持つてた人間が自分の心の傷を
決ると思えない。」

此処までは推測だったと作者は付け足す。

作者「まあサカキとあつた時、薬を服用しなかつた萌えもんが居な
かつたからまだ人として墜ちちゃいないと思つたから核心に変わつ
たがな。」

母性感あるガラガラ『ありがとう、あの人を信じてくれて。』

作者「完全では無いがな。それで、あんたを殺した人物は解るか？」

母性感あるガラガラ『……1人だけ、心辺りがあります。』

作者「誰だ？」

母性感あるガラガラ『もう、名前も忘れてしまいました。がまだ5歳
になつたばかりの子供でした。』

作者「子供？」

母性感あるガラガラ『ええ、その子供が黒い服を着た男達に命令を
下してました。』

作者「それ以外に何か思い当たるのは？」

母性感あるガラガラ『ありません。』

そこで、先程のガラガラが戻ってきた。

ガラガラ『ありがとう、娘に会わせてくれて。』

作者「礼は保護した人とあの2人に言え。」

ミルラ「私は同じ親として行動したただけですよ。」

チルド「子供居ないでしょ。」

ミルラ「これから作りますよ。」

作者「……で、あんた等どうするのさ？」

ガラガラ『娘を見守ろうかと思う。』

母性感あるガラガラ『私は……、あの人が間違いに気づいた時会いに行きます。』

作者「なら、早く気づかせるさ。」

母性感あるガラガラ『お願いします。あの人を助けてください。』

作者「任せな。」

ガラガラ『あのカラカは気づいたら此処でぼろぼろになっていた、この上に居るのだろう。』

作者「ついでにぶっ飛ばしておく。」

ガラガラ『頼むぞ。』

そして、2人は消えていった。

作者「さあ、この上の馬鹿共を蹴散らすぞ。」

仲間全員『応！』

——かつての栄光を捨てた人物は今、窮地に陥っている——

亡霊達の悲しき賛美歌（後書き）

まだシリアスが続く。

ギャグがほのぼの書きたいぜ！

名前は募集中です。

今回出てきたカラカラは仲間入りしますが、名前を変える時に出します。

今回はバトル省略です。

異論は認めません。

名前は募集中です。

「萌えもんタワー・7階」

ロケット団員？「いい加減、戻ってきてもらえませんか？博士？」

フジ老人「……いい加減に諦める事じゃ。わしはもう研究を捨てた。」

ロケット団員？「そうもいかないんですよ。貴方の研究は我々には必要です。」

フジ老人「断る！」

ロケット団員？「それならば……、無理やりにでも協力してもらいましょうか。」

フジ老人「何を……まさか！」

ロケット団員？「確か……、孤児院があつたはずですね。」

フジ老人「あの子達に手を出すな！」

ロケット団員？「なら、我々に協力してもらえますね？」

フジ老人「くっ！」

その時、階段から悲鳴が聞こえた。

敵「ぎゃあ！」

敵「あべし！」

ロケット団員？「どうした！」

敵「襲撃です！」

ロケット団員？「そんな者さつさと倒せ！」

敵「無理です！強すぎます！」

そして、報告していた敵も吹っ飛ばされる。

敵「ぐあー！」

ロケット団員？「何者だお前等！」

作者「通りすがりの馬鹿撲滅軍団だよ！」

ロケット団員？「な、我々に逆らうか！」

作者「知ったこっちゃねえ！花びらの舞い！」

キルト「せい！」

ロケット団員？「ぎゃああああ！？」

ロケット団員？は吹っ飛んで行つて、鳥タイプの背中に乗り、運ばれた。

作者「大丈夫ですか？」

フジ老人「ああ、ありがとう。助かったわい。死んだ萌えもんの魂を休めようと登ってきたんじやが、奴等が現れてのう。」

作者「あれは一体？」

フジ老人「……そうじやの、君なら話してもいいかのう。とりあえず孤児院に行こうかのう。」

こうして、萌えもんタワーを後にした作者達は、フジ老人の話を聞くため孤児院に向かった。

歴史は誰しもある——忌むべき記憶も——前編（後書き）

後編へ続く。

歴史は誰しもある——忌むべき記憶も——後編（前書き）

後編です。

あと、勢い余って進めてしまったが、次回にいたらダイジェストに書く事にします。

「フジ老人宅孤児院」

作者達はフジ老人の孤児院を訪れた。

中には子供や萌えもん達が仲良く遊んでいる。

フジ老人「何も無い所じゃがゆっくりしていつておくれ。」

作者「お構い無く。」

出されたお茶を飲んで和む。

そして、ゆっくり時間は過ぎると思ったが、フジ老人が話を始めた。

フジ老人「さて、何故ロケット団に囚われていたか話しておこう。」

作者「お願いします。」

フジ老人「わしが今回の事でロケット団に文句を言いに行ったんじや。萌えもんを殺すとな。」

作者「それであいつ等が怒って捕らえたんですね。」

フジ老人「最初はそうじゃった。じゃが、ある男が来てわしを萌えもんタワーに連れて行きそこに閉じ込めたんじや。あそこなら死んでも墓がいっぱいあるからのう。」

作者「その男とは？」

フジ老人「エビソバと呼ばれておったわ。」

作者「あいつですか……。」

フジ老人「……かつて、わしとはある研究をしていたのじゃよ。」

作者「何でも凄い研究だったとか聞いてますけど。」

フジ老人は酷く悲しい眼をした。

まるで、罪を犯した人の様に。

フジ老人「……今思えば、わしは愚かじゃった。あんな研究などしなければ悲劇など起きなかった。」

作者「……一体何の研究を？」

フジ老人「わしは萌えもんの細胞を研究していたのじゃ。」

作者「細胞？」

フジ老人「そう、細胞じゃ。そして、その細胞を使い“最強の萌えもん”を生み出そうとしていたのじゃ。」

作者「最強の萌えもん？」

フジ老人「その萌えもんを創り、軍事力のある国に提供するのが目的じゃった。当時のわしは研究さえ出来れば良かったからの、その後の事は関わらない事になっていたのじゃ。酷い話じゃろ？」

作者「それは……。」

フジ老人「良いんじゃないよ。それより此処からが本題じゃ。覚悟は良いかの？」

作者「はい。」

フジ老人は話を始めた。
悲劇を。

——当時研究していた場所は極秘に作られた場所じゃった。8番道路に小屋があるじゃろ？あそこの地下で研究が行われていたのじゃ。そして、あらゆる萌えもん、そして、捨てられた子供達を攫い実験に使っていたのじゃ。この孤児院も昔その実験の為に作られた副産物じゃ。今は普通の孤児院じゃがな。話が逸れたの。その頃、萌えもんを捕獲する部隊が伝説の萌えもんの毛を手に入れたとの報告が入ったのじゃ。わし等は歓喜したよ、伝説は中々見つからない存在じゃからな。そして、当時の開発責任者が自分の娘と攫ってきた子供と萌えもんを使い萌えもんを生み出すと言ったのじゃ。わし

は何も感じなかった。研究の成果が実ると喜んでおったよ。じゃが、結果は逆方向に進んだ。

細胞が暴走を始めたのじゃ。その時、子供達や萌えもんは水の入ったケースに入れていたのじゃ。

そして、死んだ。

わし等が殺した様なものじゃ。その瞬間、わしは眼が覚めた。何故こんな恐ろしい事をしてるのかと。

そして逃げたよ。逃げて逃げて、この町にたどり着いた。

わしは全てを警察に話そうとしたのじゃが、当時警察は別の事件を追っていたのじゃ。

善良団体の萌えもんを殺した人物をな。

わしはヤマブキの警察を目指す事にした。しかし、シオンの町は封鎖されてしまい出られなかった。

そして、悲劇は起きた。

大きな爆発音が響いたのじゃ。そう、あの時生み出そうとした萌えもんが暴れたのじゃ。

わしが逃げ出す前は殆ど身体が出来ていたからのう。遅かれ速かれ、そうなっていたと思ったわ。

生き残ったのは開発に関わったいた研究員数名のみじゃった。

子供達や萌えもんは全員死んでしまった。

わしは警察に全てを話し、牢に入れられ贖罪を全うする事にした。

しかしな、結局わしは罪滅ぼしをしておらん。死んでしまった命に対してどう罪滅ぼしをしろと言うのじゃ――

これがフジ老人の過去話。

作者「……………」

フジ老人「わしは、酷い存在じゃ。罪人と言っても差し支えない。」
作者「……………」けれど貴方は孤児院の子供達を育ててるじゃないか。」

フジ老人「所詮、偽善者の罪滅ぼしにしか過ぎんよ。」

作者「……俺達、8番道路の地下に行きました。」

フジ老人「……何かあったかの？」

作者「子供が居ました。」

フジ老人「……何？」

作者「その子供は鬼ごっこをしようと言い、遊びました。」

フジ老人は思いだした。

かつて攫ってきた子供達を見るために木材で出来た部屋を訪れた事を。

その時、1人の少年がこう言ったのだ。

少年「鬼ごっこしよー!」

フジ老人は泣いていた。

ただただ、泣いていた。

フジ老人「お……おお……おおお!」

作者「だ、大丈夫ですか!？」

フジ老人「だ、大丈夫……じゃよ。わしは大丈夫じゃ……!」

その涙は後悔の涙か、それとも狂っては居たが充実していた日々を思い出す涙だったかもしれない。

しばらくして、フジ老人の涙は収まった。

フジ老人「みつとも無いのう。」

作者「気にしないでください。」

フジ老人「君のおかげで、少しだけ懐かしい思い出を思い出したよ。少し待っておくれ。」

フジ老人は自室に向かった。
そして戻ってくる。

フジ老人「これをあげよう。」

作者「これは？」

フジ老人「萌えものの笛と呼ばれるものじゃ。当時の研究で使われていた物じゃ。眠っている萌えもんを起こす効果を持つ。持って行きなさい。」

作者「良いんですか？」

フジ老人「……当時、狂っていたとは言え幸せだった時の記憶を思い出させてくれた礼じゃよ。」

作者「……ありがとうございます。」

フジ老人「何、わしも大事な事を思い出したからお互い様じゃよ。そういえば、君の名を聞いて無かったの？」

作者「作者と言います。」

フジ老人「そうか、作者君か。君の旅に幸あらん事を。」

作者「ありがとうございます。」

しばらく、雑談した作者達はセンターに帰った。

フジ老人「わしは、どうやら決着をつけねばなんのかのう。その前に墓参りじゃな。」

後に、フジ老人とは意外な場所で出会うが、まだ作者達は知らない。

——歯車は1つ嵌った、まだ動く事は出来ないが——

俺設定的展開でした。

でも、辻褄は合ってるかもしれません。
次回はダイジェストに紹介します。

ダイジェストな紹介で行く！進めてしまった悲しみに花束を手向ける！（前書き

ダイジェストの話。

省略的、事後報告です。

！
」

作者は狙われた。

カビゴン「いただきまーす！（捕食の意味）」
仲間全員『させるかー！』

このあと、カビゴンは捕獲しました。
美味しくいただいてませんよ？

くサイクリングロードく

作者達は暴走族を蹴散らした。

暴走族リーダー「てめえ！」

作者「いや、屯してるのが悪いんだろ？」

暴走族リーダー「あんだと！」

作者「良い大人なんだから、みつともないよ。」

暴走族リーダー「うるせー！どうせ俺達は悪なんだよ！ロケット団
みたいな悪を目指してるんだよ！」

作者「……馬鹿だろ。」

暴走族リーダー「ああ！」

作者「あいつ等は、屑だよ。全員が全員じゃないと思うが、やっ
てる事は人がする事じゃない。」

暴走族リーダー「……………」

作者「目指すのは結構だ。止められないと思うし。ただ……、自分
の萌えもんを薬漬けにする気か？」

暴走族リーダー「な……………！」

作者「無知は罪だ。覚えておいた方が良い。」

こうして、作者達は去っていった。

暴走族リーダー「……………」

暴走族「どうしたんですか？兄貴？」

暴走族リーダー「…………野郎共を集める。ロケット団と戦った奴は直ぐ来るようにつてのも伝えとけ。」

暴走族「解りました！」

暴走族リーダー「無知は罪か…………俺達は悪ぶっちゃ居るが、身内を道具にする気はねえ。」

——— またも歯車は嵌る、されど未だに動かず時期を待つ ———

くセキチクシティく

作者達はセキチクに到着した。

作者「此処がセキチクか……………」

デン「ここはサファリゾーンと言う所がありますよ。」

作者「サファリゾーン？」

デン「何でも、此処で生息している萌えもん達は自分に相応しいトレーナーに出会う為に作られた施設なんです。様は萌えもんを合法的に捕まえる施設なんです。正し、手持ちの萌えもんは入れないのでトレーナーだけで行く事になります。」

作者「何でそんなに知ってる？」

デン「萌えもん達にはタイプ事にネットワークがあります。私はドラゴンネットワークで知りました。」

作者「便利だな。」

デン「尤も、悪用しないようにはなってますけど。」

こうして、作者達は此処でのジム戦とサファリゾーンを体験する事になった。

〈園長の家〉

サファリゾーンを作った園長が住んでいる家に向かった。
係員の人に名前を教えて貰った。

作者「ヤドンねえ。」

キルト「のんびりしてるかららしいですよ。」

ネルコ「でも、最近ふにやふにや言ってるって言ってたにや。」

デイン「ふむ、ボケたのかのう。」

作者「デインじゃ無いんだから。」

デイン「何か言ったかの？（良い笑顔）」

作者「何でもないです。」

そして、家に入るとふにやふにや言っている園長が居たのだ。

ヤドン園長「ふにやふにやふにや。」

作者「何て言ってるか解らん。」

ネルコ「私は解るにや！」

作者「通訳。」

ネルコ「にや！え」と『入れ歯をサファリゾーンで落としてしまったので、拾ってきて欲しい。』って言ってるにや。」

作者「解りました。探してみます。」

ヤドン園長「ふにやにや！」

ネルコ「『頼みました！』って言ってるにや。」

こうして、サファリゾーンで入れ歯を探す事になった作者達。
萌えもんも捕まえても良いが忘れないで欲しいとも言われた。

ダイジェストな紹介で行く！進めてしまった悲しみに花束を手向ける！（後書き

次回はサファリゾーンから帰って来た話になります。

色々キツイので。

試練——後天的な従者（前書き）

今回はデンが試練を受ける事になります。
龍が入りましたし。

あと、今回はサファリから帰って来た話になりますので、入れ歯返しに行く回でもある。

マサキの実家もある。

試練——後天的な従者

「セキチク・萌えセンター」

サファリゾーンから帰って来たら、デンが倒れていた。

作者「な、何があった!」

タルト「それが、くおんと料理作ってたら倒れて…!」

くおん「最近調子悪いから、安静にしてなさいって、言っただすけど……。」

チルド「もしかして……。」

作者「原因が解るのか?」

作者がチルドに尋ねた時、部屋に入ってきた人物が居た。

カイア「試練よ。」

作者「試練ってまさか…!」

カイア「そう、進化の試練。」

チルド「でも、あたいの時の様に進化する前じゃないよ?」

カイア「先天的と後天的に分かれてるのよ。私もあるとは思っけど、彼女は後天的だったみたいね。」

作者「どう違うんだ?」

カイア「先天的で試練が起る場合は“問いの試練”、後天的の場合は“闘の試練”になるわ。」

作者「闘の試練?」

カイア「戦って勝つのよ、自分の闇に。」

チルド「ちよつと待って!あたしも戦ったよ?」

カイア「貴女の種族は特殊なのよ。様は逆になるの。」

作者「なるほど。じゃあ今回もあの時の様に呼びかければ……。」

カイア「あれを見ても言える？」
作者「え？」

デンの身体が放電している。

カイア「近づけば痺れる羽目になる。まして数十億のボルトが流れてるかもしれない。」

作者「……………」

〈精神世界・心層最奥〉

暗く何も見えない世界。

デン「ここは……………」

「……………」「いらつしゃい。」

デン「……………」貴女は誰ですか？」

デン「私は貴女よ。」

デン「進化の試練ですか。話には聞いてましたが、私が受ける事になるとは思いませんでした。」

デン「そうね。まさか龍の血を引いてとは思わないでしょう。」

デン「ここから出るにはどうすれば？まだ、夕食の準備中なんです。ご主人様が帰ってくる前に終わらせたいんですが。」

デン「簡単よ。私を倒す事、それが此処から出る条件。」

デン？は笑った。

不気味な程に。

デン「……………」何がおかしいんです？」

デン「貴女の言うご主人様を食べられる日が来るとは思わなかつ

たから、つい。」

デン「食べる？」

デン？「別に物理的じゃないわ。」

デン「卑猥ですね、吐き気がします。」

デン？「何言ってるの？私は貴女、つまり“欲望”よ？」

デン「だからなんです？いくら私の欲望がそんな物だからといって、動じるとでも？」

デン？「あはははは！そうね！……でも、望まない訳ではないでしょう？」

デン「……………」

デン？「私に身を任せれば、大好きなご主人様と一緒に永遠の快樂に浸れるわよ？」

デンは迷った。

迷ってしまった。

確かに、そんな事を望まなかった訳では無い。

かといって本当にそんな事をしたら、自分が自分では無くなってしまふと感じている。

その時、声が聞こえた。

作者「くおん！よせ！俺が行く！」

くおん「ぐうう！あああ！！！」

バチバチ！

何かが感電してる音。

そして、それに混じった悲痛な声。

くおん「ぐううう！デン！聞こえてる！貴女は！私よりも強くなりました！ぐう！だから……負けないで！」

デンはハッとした。

——何を迷う必要があったのだろう。

自分は作者のメイドであり、従者であり、大切な人（作者）を護る為について来たのだろう——

デン「どうやら、大切な事を忘れてました。」

デン？「え？」

デン「私はデン！メイドであり、従者であり、そしてご主人様を世話する存在です！たとえそんな願望を抱いたとしても、ご主人様を縛る気は毛頭ありません！」

デン？「残念ね。貴女さえ飲み込めれば私が外に出れたのに……。」

デン「生憎と、待たせてる人が居ますのでお断りします。」

デンがそう言うと、デン？は姿を変えた。

闇「ナラ、キサマヲコロスマデ！」

闇は放電をした！

デン「甘い！」

軽く避ける。

闇「チョコマカト！」

デン「喰らいなさい！」

デン「ただいまです。」

作者「良く頑張ったな。」

デン「くおんのお陰です。」

くおん「そんな事は……。」「

作者「くおんはもう休みなさい。」

デン「ごめんなさい。」

くおん「気にしないの」。だから、明日からまた頑張ろう？」
デン「……はい！」

こうして、試練は終わった。

試練——後天的な従者（後書き）

とりあえず、名前はまだ募集中です。

あと、ドラゴンタイプ以外で進化の試練が必要なタイプはどれにしようか考え中。

コーヒープレイクも大事だと思う、真夜中だが。（前書き）

今回は休憩的な事である。

大体は遠く離れない様に遊んでいる。

コーヒープレイクも大事だと思う、真夜中だが。

くセキチクシティ

・暇だからカラオケに行ってる奴等。

タルト「あ〜ち〜ち〜！あ〜ち〜！萌えてるんだろうから！」

ニウ「何か、熱い歌ね……。」

はるせ「まあ、偶には良いんじゃないかと……。」

まわり「次ボク！」

タルト「キャラを被せるなあああ……！」

まわり「え〜〜〜！」

アスラ「うるさい。」

因みに、最高得点を叩き出したのは、はるせであった。

・ライバルな奴等。

砂浜で、数人の萌えもん達が居た。

ネルコ「第2回！どっちが強いんだああ！開幕にやああああ！」
しきは「司会は私、しきはと。」

ムロン「実況のムロンだよ。」

ジェネル「審判のジェネルだ。」

ネルコ「発案者のネルコにや！」

特設ステージからの実況。

しきは「いやゝ始まりましたねえゝ!」

ムロン「前は引き分けで終わったからね。前回に賭けられたお金はキャリーオーバーで持ち越しされてるし。かなりの額じゃなかったけ?」

しきは「万は超えてますねえ。」

ムロン「さて、今回はどうなるのかな?」

ジェネル「両者!悔いの無い戦いをして欲しい!」

今回、対戦するのは……。

ロールVSカガラ

しきは「何で争ってるんでしょうね?」

ムロン「詳しい人物に来てもらっているから説明。」

作者「……。 (汗)」

しきは「何があったんですかゝゝ? (笑顔)」

ムロン「それは聞きたいね。 (笑顔)」

作者「あー、何て言うか事故っていうか……。」

2人『説明。』

作者「……解りました。」

ゝ回想ゝ

作者「ふあゝ。良く寝……た……。」

カガラ「すう……すう……。」

作者「……。 (汗)」

ラブコメ的状况からして、この後の展開は簡単に予測できた。

こんこん！

作者「あ！ちよつとまつ……！」

がちやつ！

「ルール……ご飯だよ。」

固まるルール。

作者「いや待て、誤解だ。平屋だが誤解だ。」

ルール「……………」。
（黒い闘気が立ち込める）

カガラ「うん……、むにやむにや……えへへ／＼／」

ぷ
つ
ん
！

何か切れた音がした。

「ルール……!!!」

ずかずかとベットに来るロール。

そして、カガラを掴んで……投げた！

作者「おい
おい
おい
おい
おい
おい
！？」

ど
ん
!

しかし、カガラは石頭（というより、骨が丈夫）だった為軽傷ですむ。

カガラ「い、痛い……。」「

作者「大丈夫か？」「

カガラ「えと、何とか。」「

作者「ロール、今のわやり過ぎだぞ。謝りなさい。」「

ロール「……………天誅……………。」「

作者「謝れよ！？」

ロール「……………私の作者……………（ぼそり）」「

カガラ「な……………！わ、私です！」「

こうして、回想終了。

く現在く

ムロン「主人、朝からモテモテだねえ……………！（ピキピキ！）」「

作者「いや、そこ怒るとこ！？」

しきは「糸を吐いて、一生縛ろうかしら……………。」「

作者「物騒な事を口走るな！？」

んで、結局バトルが始まった。

カガラ「せい！やあ！とう！」「

カガラの骨棍棒が縦、横、斜めに振られる！

ロール「……………ふっ！」「

しかし、ロールの後ろ髪を覆っている防具が弾く！

カガラ「さ、作者さんは私を抱き枕にしてくれました！」

観客席がどよめく。

ロール「……どうせ、怖かったから……一緒に寝て欲しいって……言ったんでしょ……？」

しかし、ロールの怒りのボルテージが上がっていく！

作者「あいつ、怒りなんて覚えてたっけ？」

しかし、作者の疑問は熱狂にかき消される。

ジェネル「ふむ、どうやら次で決着をつける気だな。」

そして、2人が急接近し互いの技を繰り出す！

カガラ「骨棍棒！」

「ルール「乱れ突き……！」

そして、互いが連続攻撃をしていたその時。

タルト「ボクの方が波に乗れるんだあああああ！！！！」
はるせ「ひいひいひいひい！！！」

……波乗りをかまし、1位になったはるせを沈めようとしてるタルト達が乱入した。

勿論、海上は水浸し。

水タイプに弱い2人は気絶したのは言うまでも無い。

尚、こつてり絞られ甲羅干しの刑にされたタルトが泣いていたのは書くまでも無い。

コーヒープレイクも大事だと思う、真夜中だが。（後書き）

今回のオチは、波乗りオチです。

次回はジム戦書こうかと。

少年は拳を——深淵の王と異世界の青年（前書き）

——これは、深淵の王と異世界の青年による、壮大な戦いの序曲である——

どこぞ歌を変えてみた。

解る人は解る。

あと、反応すらないので名前募集締め切ります。

……… 実力行使するべきだったかなあ（ぼそり）

少年は拳を——深淵の王と異世界の青年

「セキチクシティ・海岸」

夜、砂浜に3人の人影があつた。

くおん「では——参ります。」

作者「頼む。」

2人は構えを取った。

組み手である。

前にも書いたと思うが、人にレベルがあるなら、最高で10レベルだろう。

武器の威力はともかく、身体能力はレベル1の萌えもんでも勝てるのだ。

だからこそ人は普段から萌えもんを使い戦わせるのだ。

例外を言えば、小さい頃から萌えもんと共に鍛えている人や、萌えもんに育てられた人、人と萌えもんの間から生まれた人ならレベル10には勝てる。

しかし、いきなり鍛えれば萌えもんに勝てるのかと言つたら答えは——否。

付け焼き刃にしかない。

それでも、作者が鍛える理由は萌えもんには勝てなくても、武器を持った敵には勝てるようにしたいと思つたからだ。

それで、体術に心得があるくおんとデンに頼んだのだ。

……他にも候補者は居たが、加減が失敗しそうな人物が多かった
のでこの2人に頼んだ。

しばらくして、息も切れ切れになった作者が居た。

くおん「大丈夫……ですか……？」

作者「大丈夫……だ……！」

デン「無理するからですよ。」

作者「でも……なあ……、もし……1人で……行動……した時……
敵と……戦わない……と……言えない……だろう……。」

くおん「1人になど……しませんよ。」

デン「そうですよ、私達が居ますよ。」

キルト「そうですよマスター。」

その時、不自然な人物が居た。

作者「何故居る？」

キルト「あとを付けました。」

作者「……何で解った？」

キルト「3日も不審な音がすれば解りますよ。」

結局、キルト以外にも来ていた。

その後、全員の修行が始まり朝帰りになるまで続いた。

〳別の話・園長の家〵

ヤドン園長「いや、入れ歯が帰ってきてホンマに助かったわ。」

しかし、あの青年達も結構やるようやな。」

ヤドン園長は金の入れ歯を輝かせながら機嫌が良い。
その時、チャイムがなった。

ヤドン園長「誰や？こんな時間に？」

ヤドン園長は扉を開けた。

ヤドン園長「あんたは……。」

そこに居たのはフジ老人だった。

フジ老人「久しぶりじゃのお。」

ヤドン園長「おお！久しぶりやないかい！上がってえな！」

2人は談話をした。

作者の話をしながらである。

ヤドン園長「あの青年も相当やるようやね。まさか、ロケット団相手に大立ち回りするとはなあ。」

フジ老人「そうじゃのお。まさに、嵐の様な活躍じゃったわ。」

ヤドン園長「……それで、そんな話に來たとちゃうやろ？」

フジ老人「……まあ。う。安心せい、あんな研究など捨てておる。」

ヤドン園長「1番最初に捨てたのはあんたやろ。で？結局何しに來たんや。」

フジ老人「何、あの時の“真相”を調べようかと思つての。」

ヤドン園長「なる程、あの時か……。しかし、何で今更？」

フジ老人「まだ、あの時の悲劇が続いてるとしたら？」

ヤドン園長「……なんやて？」

フジ老人「古い先短いわしは良い。じゃが若い者にまで危険な爆弾を処理させる気か？」

ヤドン園長「……とんだ貧乏くじやな。しかし、つけを払わなアカンなあ。ええで、協力したる。」

こうして、極秘裏と呼べるか解らないが水面下での作業は着々と進んだ。

——動かずの歯車は今だ回らず、されど胎動の時を待つ——

少年は拳を——深淵の王と異世界の青年（後書き）

フラグです。

次回はジム戦です。

……前回も書いたような……。

——忍びは暗躍する——影の如く——（前書き）

ジム戦です。

くセキチクジムく

作者達はジム戦に来ていた。

奥に忍びの姿をした人物が立っていた。

キョウ「……良く来たな。俺がジムリーダーのキョウだ。」

作者「マサラから来た作者です。」

キョウ「ふつ。小童如き戦いに挑みに来るか、だが油断はしない。」

作者「用心深いですね。」

キョウ「一瞬の油断が命取りだからな。……状態異常の餌食にしてやろう！」

くジムリーダーのキョウが勝負を仕掛けてきた！く

キョウ「行けい！ハブネーク！」

ハブネーク「切り伏せる……！」

作者「行ってくれ！ディン！」

ディン「さて、軽く揉んでやろうかのお。」

両者動かず。

作者「サイケ光線！」

ディン「喰らえい！」

ディンはスプーンを揃え、輪を描き発射する。

ハブネークは倒れた。

キヨウ「行け！クロバット！」

クロバット「ケケケ！さあ！地獄に送ろう！」

両者動かず。

～省略～

事情により割愛。

結果、敗北。

作者「……。」

キヨウ「……爪が甘いな。だが、まだ光るだろう。その時が来るまで待っておこう。」

作者「ありがとうございました……。」

結局、修行しなおす事にした。

——忍びは暗躍する——影の如く——（後書き）

修行し直します。

進化だよ！全員集合！……んな訳あるか！（前書き）

ジム戦で敗北した悔しさ＋深夜のテンションで狂ってこんなタイトル。

まあ、進化ですかねえ。

進化だよ！全員集合！……んな訳あるか！

くセキチク・萌えセンターく

レベル上げから帰ってきたら、進化が始まった。

アンユ「熱い熱い熱いいいいい！」

しので「熱いでござる！熱いでござる！熱いでござるうううううう
！」

アスラ「くっ！……！！水だ！水が必要だ！」

のこえ「もう……駄目……です……。」

はるせ「熱い……！」

作者「くおん、デン。冷たい水が入ったペットボトル持ってきて。
水技使える奴はかけてやれ。」

数分後、水をかけられたメンバーは落ちつきしばらく熱さに耐え、
進化した。

アンユ「強くなったのかなあ？」

しので「これなら、隠密が成功しやすいでござる……」

アスラ「ふん。強くなるなら気にはしない。」

のこえ「知識が豊富になりましたです！」

はるせ「……………」

はるせの様子がおかしい。

作者「大丈夫か？」
はるせ「……………」

また性格が変わったのかと思いきや、彼女の口からとんでもない発言が飛び出す。

はるせ「作者さぁん……………」

作者「な、何だ？」

聞いたことも無い甘ったるい口調、そして上下運動を繰り返す動機。

はるせ「血を吸わせてくれませんか？」

作者「……………え？」

気づいた時、はるせが作者を押し倒した！

作者「ちょ…！」

はるせ「いただきます♪」

仲間全員『させるか…！！！！！！！！！！』

結局、首筋からの吸血を“適量”に吸う事で妥協してもらった。
しかし、吸血の技を持っていた仲間が吸血しようと狙おうとして、襲おうとしたがキルトによって叩きのめされたのは書くまでも無い。

進化だよ！全員集合！……んな訳あるか！（後書き）

単発的才子です。

これしか思いつかなかった。

吸血の表現としては、舌で舐めてから牙を軽く刺し、吸血します。

……ただ、作者の血は美味しいと言う設定なので、干からび掛ける才子も考えている。

再戦を挑んだ所、忍びは手を抜いていた様です。（前書き）

まあ、デモンストレーションに挑んだら勝ったので投稿。

再戦を挑んだ所、忍びは手を抜いていた様です。

「セキチクジム」

作者達はキヨウに勝った。

キヨウ「どうやら、この短期間で成長した様だな。」

作者「まあ、何とか修行したんで。」

キヨウ「とりあえずバツジをくれてやるう。」

こうして、作者達はジムを後にした。

残ったのは“忍び”のみ。

キヨウ「さて、手を抜いたのは良いがこれで良かったのだろうか？」

キヨウの手持ちの萌えもん、メタドガスが応える。

メタドガス「上の命令って言うてはいたけどねえ。何かきな臭い様な気もしなくも無いし。」

キヨウ「何れにしろ、私の願望を叶える為には手段を選ぶ訳にはいかない。」

メタドガス「そうね、萌えもん協会が動きそうな物だけどねえ。」

キヨウ「なに、金を握らせれば黙る連中だ、放っておけ。……しかし、あの青年は危険かもしれん。」

メタドガス「……でも、一番危険そうなのは前に来た少年だと思うけど。」

キヨウ「……そうかもしれぬな。」

——影は動く、主と己の願望の為に、奪われた“光”を奪還す

る為に――

「セキチク・萌えセンター」

作者達は今後の方針を決めていた。

作者「タルトの波乗りが使える様にはなったが何処行くべきか……」。

「

タルト「ボクはマスターと合体したい……！」

ムロン「自重しようか。」

ふと、ラスラの様子がおかしい。

作者「どうした？」

ラスラ「いや……身体が熱い……！」

しばらくお待ちください。

進化を果たしたラスラは何処と無くお嬢様風な風貌になった。

作者「気分はどうだ？ 気持ち悪くないか？」

ラスラ「大丈夫です。」

手に持っている仮面を下げて、作者に笑みを見せる。
んで、恒例の爆弾投下。

ラスラ「お兄様。」

……………え？

この後、手持ちとボックス内から出ていた萌えもん達にボコボコにされたのは書くまでも無い。

方針は無人発電所に行く事になった。

再戦を挑んだ所、忍びは手を抜いていた様です。（後書き）

そして、作者達は出会う。
雷を司る“鳥”に。

無人発電所の伝説（前書き）

今回は微妙な展開になると思う。

無人発電所の伝説

「無人発電所」

作者達は無人発電所に来ていた。

作者「しかし、誰も居ないな。萌えもんが住みかにしてるからか？」
キルト「どの道動いてはいるみたいですね。」

ムロン「……………」

タルト「どうしたの？まさか……………！」

ムロン「いや、此処に来たことがあったかなと思ったんだ。で？まさかの続きは？」

タルト「マスターとく放送禁止>した時、<表現出来ないよ！>がまだ痛いとか!？」

その後、焼けた甲羅が出来たのは言うまでもない。

しばらく歩いていくと、何か変な気配を感じた。

作者「何だ？この気配？」

キルト「…………どうやら、大物が居るみたいですね……………」

シヨナ「この気配…………まさか……………!？」

作者「解るのか？」

シヨナ「鳥タイプのネットワークで聞いてはいたけど、まさかホントだったなんて。」

作者「何なんだ？一体何が居るんだ？」

その質問はムロンが答える。

ムロン「伝説の萌えもん、サンダーだね？」

作者「伝説の萌えもん？」

シヨナ「生まれながらにして強力な力を保持する存在だよ。鳥萌え達からは尊敬と畏怖の存在の1人。」

作者「……どうやら、相手は気づいてるみたいだな。」

その言葉の通り、羽の音が聞こえる。

そして、伝説が目の前に現れる。

サンダー「誰だ？お前等？」

作者「旅人さ。」

シヨナ「ちよっ！作者！流石にタメ口は……！」

サンダー「ほう？トレーナーか。差し詰め俺を捕獲しに来たと見える。」

作者「まあ、出来ればだな。嫌なら逃げる事を進めるぜ？」

サンダー「上等だ！出来るもんならやってみな！」

「しばらくお待ちください」

雷が響き、物は壊れ、天井は消え青空が見える。

作者「いい加減に……捕まれええ！」

作者はハイパーボールを投げつける！

そして――

次回に続く

無人発電所の伝説（後書き）

捕まらないんだよ…（泣）

とりあえず、上手に捕まえましたー！（前書き）

運だったけどな！（泣）

だって、ちょっと位しか削ってないし、完全に運だった。

今回は捕獲した後の話。

とりあえず、上手に捕まえましたー！

くちバシテイ・萌えセンターく

あの後、ラスト1つのハイパーボールが勝敗を決した。

眠り粉の応酬があつたがその度に目が覚め、PPを削られるハメになった。

しかし、起きて“羽休め”しようとした瞬間！

——相手の視界から消えた作者が隙を突いた！——

そして、捕獲し現在。

サンダー「……………！（ピキピキ！）」

ご立腹の様だ。

ご丁寧に青筋も浮かべている。

何故此处まで機嫌が悪いかというと、捕獲されたからが原因では無い。

捕獲されたとは言え、曲がりなりにも“伝説”に該当する萌えもんである。

そんな萌えもんをボックスから出し、あまつさえボールから出せば周りが騒がないはずも無く。

野次馬やテレビ取材、萌えもん大好きクラブ会長まで来てしまったのだ。

流石に作者も軽率だったと感じ、その場を脱出する。（サンダー連

れて)

今は萌えもん大好きクラブの裏を波乗りを使い隠れている。
……細かいツツコミは無しだ。

作者「あー、すまん。軽率だった。」

サンダー「何でこんな奴に捕まったんだ……。」

キルト「まあまあ、マスターも悪気があった訳じゃ無いんです。ただ、仲間との親睦を深めようと……。」

サンダー「ふん！そんな事を言っても無駄だ。」

サンダーは自覚している。

伝説は確かに珍しいかもしれないが、大きい力を持つ。

——こいつも、俺の力を恐れて捨てるか、その力を利用する気な
んだろ——

作者「しかし、変な事になっちまったな。」

ムロン「主人、次は気をつけてよ。」

作者「解ってるよ。」

チルド「しかし、懐かしいわね。」

サンダー「何が懐かしいんだ？」

作者「ここで、この2人に出会ったんだ。ムロンは捨てられたテレビの中に、チルドは釣りで釣った。」

ムロン「出会った頃から変わらないよね、主人は。」

チルド「そうね、作者はあたいがこんな姿になっても変わらずに接してくれてるわね。」

サンダーは気づいた。

チルドは凶暴萌えもんでは無かったか？

伝説よりかは劣るが、それでも大きい力を持つ種族だ。
だが、何故この男は恐れていないのだろうか？

その疑問は直ぐに解った。

作者「馬鹿かお前は。」

チルド「何でよ!？」

作者「外見が変わった位で態度変える奴は信頼されないっつの。」

チルド「……力も強くなり過ぎたと思うけど。」

作者「だからどうした? 大きい力を所持してようがしてまいが、関係無いだろ。それに、力があるから恐れ敬えと言いたいのか?」

チルド「そういう訳じゃないけど……。」

作者「……力って言うのはな強ければ良いって訳じゃ無い、その力をどう使うかが大切なんだ。例えば自分が良いことで力を使ったとしても、周りから見たらそれは恐ろしい力かも知れない。でもな、恐れられても誰かを救う為に力を使うなら、それは誇れる事だと思う。俺はそう思う。」

サンダーは思った。

——この男は馬鹿だ。でも、真っ直ぐな奴だ——

サンダーは不思議と落ち着いていた。

そして、本当の意味で“敗北”を感じた。

でも、悪い気分では無いと思った。

くおまけく

ついでなので、8番道路の地下に居た少年の言葉を思い出したので調べた。

作者「クチバシテイで波乗りをして“ある建物の裏から建物を調べてみると良いよ”か……。」

タルト「よーし! 全速全身でぶつかるよおお!」

タルト以外『止める』

んで、調べると。

——そこには金色のコイキングが居た——

作者「……………」

何とも言えない空気。

金色のコイキング「誰？貴方達？」

作者「旅人の作者って言う。」

金色のコイキング「……そっか、君が私の救世主……………」

作者「……………救世主って程のものでは無いが、悩み事を解決する手伝いなら手を貸すぜ？」

金色のコイキング「ううん、だって、あの子供を救ったじゃない。」

作者「結局あの子供は幽霊だったか？」

金色のコイキング「どちらかと言うと残留思念かな。」

作者「……研究施設の被害者か。そして、君も。」

金色のコイキング「噂じゃ、赤いギャラドスなんかも居るらしいよ？」

作者「そうか、すまん。」

金色のコイキング「何で謝るの？」

作者「身勝手な人間の所為だと思っとな。」

金色のコイキング「気にしなくて良いのに。」

作者「ケジメは付けたいのさ。」

金色のコイキング「なら、私を連れて行ってくれる？」

作者「お前が嫌でなければな。」

金色のコイキング「よろしく。作者！」

作者「よろしく！」

その後、チルドが先輩みたいな感じにはなっていた。

とりあえず、上手に捕まえましたー！（後書き）

まあ、99個買って、一回で捕まえたんですがね。

次回はまあ、名前を決められてない萌えもん達が枕投げを仕掛けてくと思う。

頼むから誰か名前の提供くれませんか？
そろそろ、ダブリそうなんで。

名前の無い者達の反乱（前書き）

今回は名前無し萌えものの反乱です。

名前の無い者達の反乱

「セキチク・萌えセンター」

作者は困惑していた。

最近仲間になったサンダーと金色のコイキングを除く、他の名前無し萌えもんが怒りを露にしているのが原因である。

作者「……………」

オオスバメ「私達の要求はただ1つ！名前が欲しい事です！」

コロトツク「そろそろ、出番が欲しいんですよ。」

トロピウス「賄賂ですか！？賄賂出せば良いんですか！？（必死）」

カクレオン「なんなら、何か調べようか？」

サイホーン「落ち着きたまえ、ここはじっくりと説得しよう。」

キリンリキ「べ、別にあたと一緒に居たい訳じゃないんだからね！／＼／」

カビゴン「それよりご飯頂戴！お腹減った！」

エアームド「今なら頑張るわよ？」

ソルロツク「何なら照らすよ？」

マンキー「意味あるのそれ？それより、おんぶしてよ。」

トサキント「完全に話がずれてるわね……………」

ブルー「とりあえず話し戻すわよ。出番が欲しい。名前が欲しい。

唯それだけよ。」

ブビィ「あの…………出来れば良いので……………」

ベロリンガ「甘いなあ、ここはもっと攻めるべきだよ。」

フローゼル「そうだね、ここは押すべきだね。」

ゴース「オイラなら色々役に立つよ！」

ヒトデマン「わ、私も！進化すれば……………！」

ハリーセン「わ、私は…………えと……………」

クラブ「落ち着いて、深呼吸して。」

コダック「そうそう、大丈夫だよ。」

バリヤード「でも、何かずれてる気が……。」

パッチール「あはは、怖いね。」

コンパン「笑いながら言つても……。」

ニヨロモ「……活躍……希望……。」

タツツ「ふん、何かどうなってるか解らないや。」

ウパー「まあ、あのトレーナーが理解できてるとは思わないけど。」

コイル「僕がいれば問題無いのに！」

ビーダル「眠いねえ。」

ライボルト「えへへ／＼作者と……／＼」

サメハダー「まあ、この変態思考は良いとして。」

メノクラゲ「私が居れば怖いもの無しですわ！」

以上、これが名前無しの面々。

今回は此処までだが、名前の募集はこれで最後にしたいと思う。

作者「いや、俺が考えれば良いんじゃない……。」

絶対被るんで却下。

名前の無い者達の反乱（後書き）

出来ればください。

メールを。

感想でも可。

結局、気が向いたら名前を付ける事にしよう。（前書き）

まあ、次回送りである。

レベル上げしたいと思ったときに変えると思う。

尚、現在はグレン島に到着しているが、双子島に居る事になる。

……… 鬼畜3rd + 持っていてグレン島到着してない人に注意。
研究所の中に居る研究員と、ジムの前に居る男には気をつける。
バトル挑んでくる。

レベル60ジャストで。

結局、気が向いたら名前を付ける事にしたと思う。

〈双子島〉

作者達は双子島に来ていた。

作者「ミルラお疲れ。」

ミルラ「ありがとうございます、アナタ。」

ムロン「……………何かむかつくけど、頑張ったのは確かだね。」

タルト「でも、何でこんな回りくどい仕掛けなんだろう?」

シヨナ「やっぱり、此処も噂通りね……………」

作者「まさか……………」

シヨナ「そうよ。伝説の鳥萌えもんが1人、フリーザーが住んでるの。」

キルト「となると、此処も捕獲しますか?」

作者「さてな、相手が逃げるなら別にいいがな。」

しばらくして、タルトの背に乗りフリーザーが居る島に到着した。

フリーザー、その美しさは見るもの魅了し凍てつかせる。

作者も最初は魅ぼれたが、キルトが引つ叩く。

作者は頭を抑えながら作者はフリーザーと対峙する。

作者「あんたがフリーザーか?」

フリーザー「……………そう……………」

沈黙。

しかし、どうしようも無い。

作者はどうしようか考えるが、よくよく考えてみると仲間の体力が限界だったのを思い出した。

作者「んじゃ、これで……。」

踵を返し出口へ向かう作者。
しかし。

フリーザー「……待って……。」

呼び止められる。

作者「……何だ？」

フリーザー「……捕まえないの……？」

作者「まあ、捕まえられれば捕まえたけれど、生憎と仲間の体力も限界だからな。まあ、捕まるのが嫌なら逃げても良いぞ。」

フリーザー「……………」

だからこそ、作者は気づかない。

フリーザーの冷たい瞳の奥に“熱”が籠っていた事を。

フリーザーは作者の目の前に回り込む。

作者「……何だ？俺は何もしちゃいないぞ？」

フリーザー「……貴方を……永久に……手元に……置く……。」
作者「……は？」

爆弾発言が投下される。

毎度の事だが。

しかし、仲間が黙ってなかった。

仲間全員『却下!』

フリーザー「なら……強制的に……。」

そしてこの後、死闘が繰り広げられた。
次回に続く。

結局、気が向いたら名前を付ける事にしたと思う。（後書き）

実際は捕まりにくいから手に負えない。

何かどつと疲れる。

「グレン島・萌えセンター」

結局、フリーザーを捕獲した。

まあ、正確には“捕獲された”と言える。
何故なら――

フリーザー「……………」。

作者「……………」。

絶賛抱きしめられている作者。

作者（…………寒い…………！）

体温もそうだが、もつと寒い。

萌えもん達『……………』

空気をもつと寒い。

しかし、そんな空気を打ち破る存在が現れる。

サンダー「よう、お前も捕まったか。」

同じ伝説の鳥萌えもん、サンダーさんだ。

フリーザー「……………」。

サンダー「いや、無視するなよ。それより、お前の体温の所為で作

者が凍え死ぬぞ?」

そう言われフリーザーは離れる。

作者(た、助かった……!)

しかし、ぶるぶると震える作者。

サンダー「ほれ、電気を抑えるからこつち来な。」

今度はサンダーが抱きつく。

思いのほか温かい。

そんな光景を見て、フリーザーが舌打ちする。

伝説の萌えもんは常にタイプ事の属性を放つ。

サンダーなら電気、フリーザーなら冷氣と言った具合に。

それでも伝説の萌えもんなら、増減はお手の物であり調節できる。

しかし、以前部屋の空気が絶対零度になる。

だが、サンダーは気にもせず。

サンダー「しかし作者よお、お前も凄い事してるなあ。」

作者「……何が?」

サンダー「あのフリーザーを虜にするなんてな!」

……部屋の温度が最早表現出来ない程冷える。

作者「そ、それは凄いのか?」

サンダー「まあな。むしろフリーザーに虜になる萌えもんが多いん

だな。」

作者「……俺は特に何もしてない筈なんだが……。」

その頃、話題のフリーザーはと言うと。

フリーザー「……………。（ポー）」

作者を熱い眼差しで見ていた。

何故彼女が此処まで作者の虜になってしまったかと言うと、作者の行動と言語に原因があった。

彼女は伝説の萌えもん。

だから、彼女の力求める輩が後を絶たなかった。

そんな日常に嫌気が差していた彼女の前に作者は現れた。

作者は彼女に見とれてわいたが、別に顔を赤くするとかは無く普通に接してきた。

ましてや、彼女の力が今すぐ欲しいとかでは無く、逃げても良いとか言ってきたのだ。

女としてのプライドと、見逃してくれると言う気遣いと優しさに引かれてしまったのである。

だからこそ、作者を手元に置きたくて戦いを挑んだのである。

結果として、彼女は捕まってしまったのだが。

だが、捕まえた後も作者は態度を変えなかったで、さらに彼女は虜になってしまったのは言うまでも無い。

こうして、作者は伝説に気に入られる素質を持っていたと思う。

因みに、萌えもん達に滅茶苦茶に抱きつかれたのは書くまでも無いし、書く気も無い。

何かどつと疲れる。(後書き)

……何故か接触した話を書いた後に伝説が捕まるんだが、偶然か？
サンダーの時もそうなんだが……。

かつての栄光は輝きを失った——（前書き）

今回はかゆつま日記風に書いていければ良いかと。

かつての栄光は輝きを失った――

「萌えもん研究所」

作者達は研究所に来ていた。

ここはまだフジ老人が研究者だった頃、創設したらしい。しかし、数年前に屋敷と一緒に手放したらしい。

当時の写真が飾ってあった。

『グレン・ラボラトリー 創設者 フジ博士』

作者は何とも言え無い表情になったが、次に行く事にした。

「萌えもん屋敷」

昔は研究者の別荘として使用されていたらしいが、今は萌えもん達の住処になっている。

作者「どうやら火山もあるから炎タイプが多いらしい。」

キルト「研究者も出入りしてるらしいですね。」

ムロン「まあ、昔の研究が知りたいからだろうけどね。」

しばらく進むと、日記があった。

作者は日記を読む。

『7月20日 新発見の萌えもん見つけた。 私はミュウと名づける。 フジ』

作者「……………」

さらに進む。

日記があつた。

『8月16日 こ……は……。』

ぼろぼろで読めない。

日記があつた。

『9月1日 ミュウ……強すぎる！ 誰か、彼女……止め……頼む！』

日記の隣には鍵があつた。

そして、萌えもん屋敷を出た。

かつての栄光は輝きを失った——（後書き）

諸事情により此処まで。

あの時の現実——研究所は朽ち果てる（前書き）

今回は2階に生息する“トレーナー”と戦う事になる。
ダブルバトルです。

あの時の現実——研究所は朽ち果てる

「タمامシテイ・空家」

前回探索した時、キルトが感じた気配の元に行く事にした。
そして、部屋に入る作者達。

中には男性が1人佇んでいた。

作者「あの、あなたは？」

「???」……………」

作者「あの？」

そして、男は笑い出す。

「???」クククツ！バトルの時間だ。」

作者「!?!」

「複製体のえびそばが勝負を挑んで来た!」

えびそば「ダブルバトルだ！行け！エンペルト！ベイリーフ！」

そして現れたのは、髭を生やし厳つい顔をした萌えもんと呼ぶには躊躇う程の萌えもんが出てきた。

作者「……………」

手持ち全員『…………』

えびそば「恐ろしくて声も出ないか。」

髭エンペルト「私の髭に恐怖するとは、いささか失礼ではないですか？」

作者「畳み掛けるぞ！キルトはあの髭に眠り粉！ディンはサイケ光線！」

しかし、えびそばが技を指示する。

えびそば「髭エンペルト！アクアジェット！」
髭エンペルト「任せました！」

水を足から勢い良く出し、水を叩き付ける！

ディン「くう！」

しかし、微力ダメージで済んだ。

ディン「お返しじゃ！」

ディンはピジョンにサイケ光線を放ち、キルトは髭エンペルトに眠り粉を振り掛ける。

ピジョン「うゝん……。」「
髭エンペルト「おの……。れ……。」「

そして、先程と同じ繰り返し。

ピジョンは倒れた。

えびそば「仕方無い。行け、ゾロアーク！」

そして、出てきたのは黒い狼を思わせる萌えもん。

ゾロアーク「どうやら、姉をやってくれたみたいだな。」

気迫と雰囲気があるで違う。

しかし、作者は怯まない。

作者「デインは気合玉！キルトは草結び！」

そして、先制する。

デイン「波あ！」

デインの気合玉が発射される！

しかし、攻撃は外れた。

ゾロアーク「甘いなあ！」

えびそば「アツシドレイン！」

ゾロアーク「喰らえやあ！」

天井から“雨”が降る。

その雨は有害物質で構成された雨だった。

デイン「ぬう！」

キルト「きゃ！」

しかし、キルトの草結びは髭エンペルトを直撃し、髭エンペルトは倒れた。

えびそば「そろそろ、切り札を出すか……。」

作者「何？」

えびそば「行け！ウィンディ！」

出てきたのは、前に見たウィンディでは無く、格闘家をイメージするウィンディだった。

ウィンディ「やれやれ、あたしが出る嵌めになるとは……。」

しかし、作者は怯まない。

作者「ディンはもう1度気合玉！キルトは眠り粉！」

そして、素早く行動に移る。

ディンの気合玉は今度は当たり、ゾロアークは倒れる。

キルトの眠り粉も当たり、眠るウィンディ。

えびそば「まさか此処までやるとはな。しかし、これで終わらせる！行け！128！」

出てきたのは、ハートを振りまく萌えもん？だった。

128「愛してるぜ！」

とりあえず、殺意が沸く作者達。

（省略）

その後、ウィンディにサイコキネシスを喰らわせて倒し、128も

倒した。

えびそば「中々やる様だな。」

作者「まあな、修行したからな。」

えびそば「まあ良い、これをやろう。」

作者はパインアメを貰った。

作者「でだ、あんたは誰だ？」

えびそば「えびそばと言う。」

作者「……何だと？」

えびそば「その様子だと、会ったみたいだね、“オリジナル”に。」

作者「どういう意味だ？」

えびそば「君はグレン島に行った事はあるかい？」

作者「まあな。萌えもん屋敷にも入った。」

えびそば「なら解るだろう。あの屋敷には最強の萌えもんを作る際に記録した日記があっただろう？」

作者「……！まさか！」

えびそば「そう、その実験の試料を元に作られた存在が僕さ。」

作者「まさか此処は……！」

えびそば「複製体実験施設だった所さ。僕以外にも連れてこられた人も居たけど、結局死んじゃったのさ。運良く逃げさせた僕はゾロアークに出会い、今に至ると言う訳さ。」

作者「……辛くは無かったか？」

えびそば「……さあね。でも、僕は幸せだよ。あも実験の副産物で生まれたとしても、僕は今幸せだ。」

作者「そうか。」

えびそば「また来てね、いつでも勝負するよ。」
作者「こっちのセリフだ。」

こうして、空家を後にした作者達であつた。

――歯車が回るかもしれない。その時は近いから――

あの時の現実——研究所は朽ち果てる（後書き）

お守り小判つけて勝つと、25600円位貰える。
次回はバトルより、クイズ優先。

クイズは灼熱の香り——な訳ねえだろ。(前書き)

バトル無視していきます。

クイズは灼熱の香り——な訳ねえだろ。

「グレンジム」

作者達はジム戦に挑みに来た。

入り口の話だと、クイズが繰り出されるらしい。

作者「仕方無い、とつとと解くか。」

クイズ装置「萌えもんクイズ！」

第1問：萌えもんのキャタピーが進化するとトランセルになる？

作者「なるだろ。」

クイズ装置「当たりです！」

次に進む。

第2問：萌えもん委員会・リーグ認定のバッジは全部で9種類？

ムロン「8種類だよ。」

クイズ装置「当たりです！」

次。

第3問：ニヨロモは3回進化する萌えもんである？

チルド「2回じゃなかったっけ？ニヨロトノっての居たし。」

クイズ装置『当たり前です!』

次。

第4問：電気タイプの技を繰り出した時、地面タイプの萌えもんには効く？

シヨナ「いや、効かないでしょ。鳥タイプなら効いたけど。」

クイズ装置『当たり前です!』

ここで、少し休憩。

作者はトレーナーからある話を聞いた。

理解系「リーダーのカツラは、山で遭難した事があったんだが火の鳥萌えもんに救われたらしいよ。」

作者「何で助かったんだ？」

理解系「暗い山道を照らしたからさ。まあ、偶然だったらしいけど。」

作者「ふーん。」

再開する。

第5問：同じレベルの同じ萌えもんでも捕まえる度に強さは違う？

作者「これ、どうなんだ？」

ウエル「難しいですねえ。」

ディン「カンで行くかの。いいえ。」

クイズは灼熱の香り——な訳ねえだろ。(後書き)

尚、最後の答えは破壊光線だと思う。

灼熱の栄光と落日、失った誇り（前書き）

シリアス展開になる予定。

灼熱の栄光と落日、失った誇り

「グレンジム」

作者達はリーダーの部屋に到着した。

作者「あんたがリーダーか？」

カツラ「ああ、ジムリーダーのカツラと言う。」

作者「マサラから来た作者だ。」

カツラ「挑戦かね？」

作者「ああ。」

カツラ「わしは燃える男と呼ばれた事もある。だが、唯の老いぼれだ。それでも戦うかね？」

作者「……あんたが何を失ったのかは解らない。だが、あんた“漢”か？」

カツラ「何？」

作者「あんたが卑屈になるのは勝手だ、だがなこのジムで修行してる奴、あんたに挑みに来る奴に対して失礼だろ。あんたは唯の老いぼれと言うけど、あんたの弟子と言う奴等が居るんだよ。それすら否定する気か？」

少し間が開く。

カツラ「どうやら、忘れていた様だ。失礼した。ならばもう言葉は要らない。さあ！共に舞おうではないか！」

「ジムリーダーのカツラが勝負を挑んできた！」

カツラ「行け！ウインディ！」

ウィンディ「承知！」

作者「デイン！」

デイン「ふむ、あの時の犬と同じかのう。」

デインが先制する。

作者「サイコネシス！」

デイン「仕舞いじゃ！」

ウィンディは倒れる。

カツラ「ブースター！」

ブースター「行くぜ！」

作者「行け！タルト！」

タルト「任せて！」

先手はブースター。

カツラ「フレアドライブ！」

タルトは倒れた。

作者「もう一回頼むぞ！」

デイン「ふむ、少し不味いかの。」

先手はデイン。

繰り返し。

結果はディンが勝利。

一進一退の戦いの果てに、勝ったのは。
作者だった。

カツラ「良い——勝負だった！」

こうして、バッジを貰う作者。
そして、カツラがとある話を始めた。

——歯車の胎動であった——

灼熱の栄光と落日、失った誇り（後書き）

終了です。

真面目にロードして繰り返す事が痛い……（泣）

少し、昔の話をしようか——そして、今。（前書き）

シリ阿斯展開は続く。

懐き進化の基準は220で大体が進化するらしい。

少し、昔の話をしようか——そして、今。

「グレンジム」

作者達はカツラからとある話を聞く事になった。

ムロン「その前に……回復して……欲しいね……。」

チルド「うう……。」

タルト「き……気持ち良い……（ビクン！ビクン！）」

作者（ついにドMになりやがった……！）

カツラ「すまないね、つい年甲斐も無く熱くなつて。」

作者「いえ、気にしなくて良いですよ。」

カツラ「しかし、君達はフジの知り合いとは思わなかったよ。」

作者「連絡をとって無いですか？」

カツラ「……話はフジから聞いてると思うが、私も研究員だったんだよ。もつとも、下っ端だがね。」

カツラは壁にか飾ってある写真を見た。

——カツラとフジ老人が肩を組んで楽しそうに笑っている——

作者「……………」

カツラ「……少し、話をしようか。あの日、“何が”あったのかを。」

——萌えもん屋敷は行つたね？

あの屋敷には研究員の日記が置かれているのさ。
もし、何かあっても資料として使われる様に。

フジの日記もあつただろう。

あいつが発見した萌えもん“ミュウ”はとても珍しい萌えもんだつた。

何故なら、力は兎も角、その“細胞”が特殊だったからだ。
あえて言うなら“ミュウ細胞”と言つべきかな？

その細胞はあらゆる事が可能になる“起爆剤”だった。

……だからフジは逃げたんだ。

その細胞を恐ろしい研究に使う組織から。

だが、私はそうでは無かった。

研究の為に、私欲の為にその“実験”を続けたのさ。

そして、あの“悲劇”が起きた。

ミュウの細胞から生まれた存在“ミュウツー”が暴走したのだ。

いや、怒り狂つたと言えよう。

当たり前だろうな、人間が好き勝手やったのだ。

怒り狂わない訳が無い。

そして、地下研究所は燃えた。

捕らえられてた、萌えもんと人間の子供もな……。

私は、命かながら逃げたよ。

そして、がむしゃらに逃げて、逃げて、逃げて、気づけば山に居た。

方角も解らない、食料も無い、萌えもんも居なかった。

もう駄目だと思つたよ。

でもな、空が急に明るくなつたんだ。

そこには“伝説の萌えもん”が通つていたんだ。

その後を目印にして、気がつけば山を下りていた。

その後、罪を償う為に牢に入り、償いを終え、出て来たのさ。

そして、今に至るのさ――

カツラ「まったく持って、皮肉な物だろ？何で私が生きているのか不思議な位だよ。……本当は私が死ねば良いと思つていたのさ。しかし、君達が現れた。忘れかけていた“情熱”を思い出したよ。だ

から、死ぬ事を止めた。それが、私の所為で死んでいった者達への弔いだ。」

作者「そっか。」

カツラ「そろそろ、長話も終わらせよう。彼女達も参ってるだろうし。」

作者「あはは……。」

こうして、作者達がジムから出て行く。

くグレンジム・出入り口く

作者達が外に出ると。

マサキ「あれ！？作者やないか！」

作者「あ、マサキさん。」

マサキ「久しぶりやな！」

作者「何やってるんですか？」

マサキ「それは……。せや、此処で会ったのも何かのご縁や！ちょっと一緒に行かへん？」

作者「行くって何処にですか？」

マサキ「この地方から少し遠い南に“1の島”という小さな島があるってな、友達に呼ばれて行くところやけど……。どや、行くか？」

作者「行きたいですけど、仲間の回復がしたいんですが……。」

マサキ「大丈夫やって、待ち合わせ場所は萌えセンターやから、そこで回復してもええやん。」

作者「いや……。でも……。」

マサキが切れた。

マサキ「ええから！行くで！」
作者「ちょ！？」

〈移動中〉 ほな行くで〜♪ （助けてえーりん！めーりん！）

その後、ジムに1人の老人が訪れる事により、歯車は確実に動こうとしていた。

〈1の島〉

マサキ「ここが1の島や！この辺には幾つか島があるんやけど、まあその中の一つや。」
作者「そうなんですか。」

マサキ「せや。今日船をよこしたのは、島のパソコン通信を1人で管理しとるニシキっちゅう奴や！」
作者「ニシキさんって言うんですか。」

マサキ「……ここで名前言っても意味あらへんから会いにいこか！」

〈移動中〉

〈1の島・萌えセンター〉

マサキ「よっ！ニシキ！」

ニシキ「マサキさん！来てくれたんですね！」

マサキ「当然や！どや？研究の方は？……っと、その前に。」

ニシキ「？」

マサキ「作者！こいつがニシキ！期待の新人でパソコンマニアや！んで、ニシキ！こいつが作者！萌えもんチャンピオン候補や！」
作者「ちょっ！マサキさん！別に俺は……。」

ニシキ「凄いですね！俺、勝負はさっぱり勝てないから……、よろしく願います！」

作者「いや、よろしくって……。」

マサキ「で、どないなん？マシンの方は？」

ニシキ「やはり遠すぎます。」

作者（スルーかよ……。）

専門知識の話になる、パソコンマニア共。

マサキ「作者！ちょっと待っていてくれる？」

作者「別に良いですよ。」

マサキ「……せや！一つ頼まれてくれ！」

作者「何ですか？」

～説明中～

2の島に行き、隕石を渡して欲しいらしい。

そんなこんなで、島を回る事になった、作者達であった。

少し、昔の話をしようか——そして、今。（後書き）

次回は色々省略かダイジェストになるかもしれない。

ダイジェストな展開で行きます。何故なら、ノリで進めたんで。（前書き）

間違いを指摘され直し。

また間違いを指摘され直し……。

おかしいなあ……疲れて無い筈なんだが……。

タスケテ！ボーダー商事！

ダイジェストな展開で行きます。何故なら、ノリで進めたんで

（１の島・萌えもんセンター）

作者達は違う島に行く前に、この島の北にある場所に行つて来た。

熱りの道を通り、灯火山に登ったのだ。

途中、洞窟温泉に寄った時、ニビシティのジムリーダー、タケシさんが居た。

バトルして勝ったら、いきなり光が起こり、消えた。

……実は書いて無かったが、最初の頃、手持ちがキルトのみの時、マサラから出たらとあるトレーナーとバトルした。

サトシと名乗る少年はピカチュウを繰り出してきた。

勝つと、タケシと同じように光って消えた。

後日、タケシさんに聞くと。

タケシ『確かに温泉には行っただけど、君達に負けてから行っただよ？』

との事。

……残留思念でもあったのだろうか？

灯火山の頂上に辿りつくと、伝説の萌えもんファイヤーが居た。

ファイヤー「何者です？」

作者「俺は作者、旅人さ。」

ファイヤー「……此処へ何しに？」

作者「ん？頂上に何かあるのかなと見に來ただけさ。」

ファイヤー「……………」

作者「まあ、特に何かあった訳でもないみたいだし、下山するよ。」

ファイヤー「貴方は私を知らないのですか？」

作者「知ってるよ。」

ファイヤー「ならば何故？何故捕まえようとしないのでですか？」

作者「捕まりたいのかあんたは？」

ファイヤー「……そういう訳ではありません。」

作者「なら良いじゃねーか。無理意地で捕まえても全然うれしくも無い。」

シヨナ「その割には、他の萌えもん捕まえてるよね？」

作者「俺は“逃げたきや逃げろ”と言ったよな？」

キルト「そうですね。」

そこで気づいた。

何故か周りの気温が上昇してる事に。

作者「何だ？噴火か？」

しかし、答えは後ろから返ってくる。

ファイヤー「いえ、私の仕業です。」

作者「……何故に？」

ファイヤー「そうですね……“血”でも飲ませようかと。」

シヨナ「えー！？」

作者「いや、どういう意味だ。」

ムロン「ファイヤーは文献に載ってた“不死鳥”と同じなんだよ！その血を飲めば不老不死になるんだ！」

作者「……何で伝説はこうも我俣なんだ……。」

ファイヤー「さあ、永久に燃えましょう？」

妖艶な顔をするファイヤーとの“死闘”が始まった。

そして現在。

萌えセンターでは。

ファイヤー「~~~~~」

作者「……またこのパターンか……」

絶賛抱きつかれ中な作者。

周りの気温は時が止まっております

フリーザー「……………ギリギリギリ」

サンダー「……………バチバチバチ」

とりあえず、3の島に行く事にした。

ダイジェストな展開で行きます。何故なら、ノリで進めたんで（後書き）

次回は暴走族を締め上げる回。

うゝゝゝ ボーダー商事！

カントー暴走族撲滅戦争！何が大事か考える！（前書き）

今回は暴走族を撲滅した後、木の実の森の救出作戦を展開で終了予定。

カントー暴走族撲滅戦争！何が大事か考える！

＼3の島＼

ブオン！ブオン！

けたたましいバイク音が鳴り響く。

作者「何だ？」

視線の先には、この島の住民と暴走族が言い争いをしている。

住民「この島から出て行きなさい！」

暴走族「ああ〜ん？何言ってるんだテメー！」

作者はどうしようかと見ていた時、相手の暴走族が見つかる。

暴走族「何だオメーは、さっきからジロジロ見やがって……、やんのかコラあ！」

作者「まあ、あんた等が通行止めしてるからな、とっとと通りたい。」

暴走族「良い度胸じゃねーか！負けたら有り金全部寄越せ！」

＼無双中＼

暴走族「ちきしょう……、ナメんなよ！」

作者「舐めねーよ。」

暴走族「お前カントーの奴だろ？こっちの味方だろ？」

作者「違うわボケ。」

く無双中く

暴走族「マジになってダセーんだよ！」

作者「お前等してる事がダサイわ。」

暴走族「せっかくボスを招待したいのにお前の所為で台無しだぜ！」

作者「責任転嫁してんじゃねーよ。」

く無双中く

暴走族「……………」

残りの子分が慌て始める。

暴走族「ボス！この男を何とかしてください！」

ゴウゾウ「さつきから黙って見てりや………… お前は何なんだよ？」

作者「唯の通りすがりの旅人だ。」

ゴウゾウ「ならじゃますんじゃねーよ！」

作者「うるせーんだよ！いい加減に何が大事か考えろ！」

ゴウゾウ「意味解んねーんだよ！」

く無双中く

ゴウゾウ「くそっ！何で勝てない！」

作者「………… お前は大切な事を忘れてやがる。」

ゴウゾウ「何？」

作者「お前が威張れるのは萌えもんが強かったからだろ？」

ゴウゾウ「……………」

作者「今は腐ってるかもしれないが、ここまで育てた思いも忘れたのか？」

ゴウゾウ「……野郎共、帰るぞ。こんな所、何時までも居たく無い。

」
暴走族全員「解りました！」

ゴウゾウ「……あばよ。」

暴走族はカントーに帰って行った。

作者達は気を取り直して、迷子の探索に向かう。

絆橋を通り、木の実の森に向かう作者達。

カントー暴走族撲滅戦争！何が大事か考える！（後書き）

そして、木の実の森に到着できず（泣）

木の實の森救出大作戦！変態は沈んでろ。（前書き）

マヨちゃんの救出劇です。

しかし、直ぐに終わる回です。

そろそろ伝説とか、今までの萌えもん達の名前付けなきやなあ。

木の実の森救出大作戦！変態は沈んでろ。

く木の実の森く

作者達は森に来ているであろうマヨちゃんを探しに来ていた。

作者「しかし、広いな。」

キルト「トキワの森の様に1本道だったら良かったんですけど……。」
シヨナ「うーん、この様子じゃ無理だね。迷子になっちゃうよ。」

仕方無いので、とっとと探す事に。

しばらくして、泣き声が聞こえる。

作者「何だ？」

タルト「誰か泣いてる？」

進むと、そこには少女が居た。

マヨ「ヒック！ヒック！」

作者「大丈夫か？」

マヨ「……あ、助けて！さ、さっき其処に怖い萌えもんが！」

ガサガサッ！

草むらから萌えもんが出てくる。

スリーパー「譲ちゃん、酷いんじゃないの？」

マヨ「ひいー！」

作者が前に出る。

作者「さて、いい加減にしてもらおうか？」

スリーパー「邪魔するな！」

〈省略〉

スリーパーは倒れた。

作者「大丈夫か？」

マヨ「……（ハッ！）あ、ありがとう……／＼／＼／＼」

作者「どういたしまして。さあ、帰ろう？」

マヨ「うん！」

〈1の島〉

マヨを救出し、目的の物を渡した作者はマサキの所に戻った。
しかし、進化する萌えもんが出た。

はるせ「ふう……！」

作者「大丈夫か？」

デイン「ふむ、これはわしと同じ進化じゃな。」

作者「どんな進化なんだ？」

デイン「それは秘密じゃ。」

作者「まあ良いが。」

しばらくして、はるせはクロバットに進化した。

作者「お疲れ。」

クロバット「……（じー）」

作者は逃げ出した！

しかし、周りこまれてしまった。

はるせ「血―を―寄―越―せ―！」

作者「だが断る！」

こうして、色々あったナナシマの出来事。
カントーに帰る作者達であった。

尚、クチバの港から何時でもこれるらしい。

木の實の森救出大作戦ゝ変態は沈んでろ。(後書き)

当面はほのぼの回で行かせてください。

名前も考えないとなあ。

夜の闇に紛れ、僕ら低空で飛び続け、月は何も知らず、低くエンジンが響いて

今回は枕投げと言う戦争です。

他に無いのかと言うならネタくださいよ。

by 作者

夜の闇に紛れ、僕ら低空で飛び続けた。月は何も知らず、低くエンジンが響いて

「タمامシ・萌えセンター（旅館バージョン）」

作者「えー、第3回枕投げ大会を開始したいと思います。」

手持ち& amp; ボックス勢「うおおおおおおお！！！！！」

のっけから枕投げ大会です。

今回は3チームに分かれます。

今回の勝敗条件は、真ん中に居る作者に触れれば勝ち。

勝ったチームは作者と添い寝の権利がもらえる。

……爆ぜろ。

キルトのチーム・しろねのチーム・チョウのチームに分かれています。

まあ、大体は名前の名簿の欄がメンバーである訳だが。

因みに、唯一の♂のウエルは特設実況場所から審判を勤める。

ジョーイさんとラッキーも解説です。

ジョーイ「どうなるんでしょうか？」

ウエル「彼はモテますからねえ。皆目見当もつきません。」

ラッキー「ふっ！この勝負は賭けが出来ます。お近くに居て興味が
ある方は是非起こしてください！」

カジノもあるタمامシならではのあった。

「キルトのチーム」

キルト「絶対に勝つ！」

ムロン「ふむ、どうやって敵を出し抜くかね？」

しので「拙者の系で！」

アスラ「3度も引つかかる馬鹿は居ないだろ。」

やんややんや

くしろねのチームく

しろね「ボルテッカーで強行突破は？」

ソルト「いや、流石に危険だと思うけど……。ここは漁夫の利で行かない？」

ミヨン「しかし、相手が速ければそれは愚策にしか……。」

メンテ「ボクが相手のリーダーに変身して攪乱してくるよ！イかせてくるよ！」

ワイワイガヤガヤ

くチヨウのチームく

チヨウ「此処は空中から攫いおうかと思うのですが……。」

サン「でもよー、妨害にあつたら終わりだぜ？」

レイズ「……全て……凍らせる……。」

ポロル「炎どうするの？」

ざわ……ざわ……ざわ……

こうして、様々な作戦を考える萌えもん達。

その頃作者は。

く作者の居る場所く

作者は何重に詰まれた布団に囲まれていた。

作者「あー、早く出たいな。このまま放置とか言うオチは嫌だ。」

流石にそんなオチは用意してない。

そして、戦いのファンファーレが鳴り響いた！

パンツ！

その瞬間、そこは“戦場”と化した！

夜の闇に紛れ、僕ら低空で飛び続けた。月は何も知らず、低くエンジンが響いて

次回に続く！

其処にゝどんな人がゝ暮らし笑いあつて居るのでしょゝ其処でゝどんな夢がゝ

枕投げ開始です。

レイニが進化しましたが、今回はシーン無しです。

レイニ「酷くない？」

知らん。

其処に〜どんな人が〜暮らし笑いあつて居るのでしょ〜其処で〜どんな夢が〜

〜枕投げ戦場〜

襖が全開に開いている。

何重にも積まれた布団がバリケード的な物になっていた。

キルトのチームがしろねのチームと戦闘を開始した。

ミルラ「ピヨピヨパンチ！」

混乱付加の拳がレルツを襲う。

しかし、レルツは電光石火で避ける。

レルツ「お返した！雷パンチ！」

雷の如く突き出すパンチ。

ミルラは避けるが追撃の枕が投げられた！

しかし、ランナが尻尾で落とす。

ランナ「まったく、雑な攻撃ですね。」

ゴゲン「悪かったな！」

ゴゲンがガス状の腕で投げた枕は“呪い”が発動されていた。

……当たれば発動してた。

攻防は続いた。

キルトのチームがチヨウのチームと戦闘を開始した。

イルク「あああああ！」

怒りを発動しながら枕を乱れ撃ちする。

ジエネル「甘い！」

乱れ突きで全て撃墜する。

そして、戦いは益々ヒートアップした。

其処にゝどんな人がゝ暮らし笑いあつて居るのでしょゝ其処でゝどんな夢がゝ

ピュノも進化しましたが、進化無しです。

ピュノ「えゝゝゝゝゝゝ！？」

地図に示さゝれた 名も読めない町 今夜も正義を御旗に (前書き)

因みにタイトルは歌詞と言つても良い。
もっとも、全部書く気は無いが。

この枕投げはイベントは、PCゲームのイベントシーンを見たとき
面白そうだなと感じたから使用してゐる。

地図に示された 名も読めない町 今夜も正義を御旗に♪

「戦場・中間地点」

しろねのチームがチョウのチームと交戦している。

たしみ「手助け！」

ひきよ「手助け！」

ピュノ「10万ボルト投げ！」

手助けの補助が付いた10万ボルト入り枕がゼルマ達に向かっていく！

ゼルマ「散開しろ！」

その言葉を指示したゼルマは電光石火で難なく避ける。
そして反撃も指示する。

ゼルマ「ブラストはスモッグを発動してくれ！」

ブラスト「わ、解りました！」

勢い良く毒の煙が放たれる！

たしみ「わっ！？」

ひきよ「きゃっ！？」

ピュノ「くっ！ピリスさん！どうしますか！」

ピリス「任せなさい！翼で撃つ！」

ビュウウウウ！

突風が巻き起こる！

しかし、効果がいまひとつのジバルが磁力で枕を複数投げる！

ジバル「ソニックブーム！」

投げた枕の間からの攻撃！

ピリス「ふっ！」

難なく避ける。

しかし、追撃は止まらない。

バグマ「フレアドライブ！」

炎を纏った枕を投げるバグマ。

しかし、反撃するピリス達。

何時しか、そこら辺に死んではいないが倒れてる者達が出てきた。

戦いが始まって1時間。

未だに決着がつかない3チーム。
しかし、まだ戦いはつづく。

＼戦場・目的地周辺＼

部屋の真ん中には積まれた布団。
中には作者。

周りには3チームの大將が居た。

キルト「どうやら此処で決着の様ですね……。」

ムロン「しかし、どうにも不味いね。こっちは人数が居ても実力差がある。」

デン「やるしかありませんね。」

チルド「いざとなったらあたいが押し切るわ!」

しろね「出来れば突破したいけど……、難しいなあ。」

ミヨン「仕方ありません。ここは、私が切り込みます。」

サザナ「へっ!アタシも暴れてきてやらあ!」

はくらん「私は側近を切る……。」

チヨウ「此処が最後の舞台ですね。」

サン「何にせよ、あいつ等ぶっ飛ばさないとなあ!」

レイズ「凍てつかせる……。」

りんり「まったく、あいつがしつかりしないから……。」

そして、3チームは同時に動いた。

それぞれのチームのメンバーは枕投げで攻防を繰り広げる中、隊長クラスは技の攻防に突撃していた。

キルト「眠り粉!草結び!」

しろね「光速移動!ボルテッカー!」

チヨウ「日本晴れ！火炎放射！」

しかし、彼女達は致命的なミスを犯した。
此処は密室に近い状況。

そんな場所で充満した粉に火をつけるとどうなるか？

答え：粉塵爆発

——ドガン——

この日、タムシ・萌えセンター（旅館バージョン）で大規模な爆発があつた。

幸い死者は出なかったが、負傷した人が1名出た。

作者であつた。

軽傷だったが3日は安静にする事で完治するらしい。

何故、彼が怪我をしたのか？

丁度、作者が居た位置の上空で技と技が激突したのが原因らしい。

萌えもん達も反省はしてるので、余り怒らない作者だった。

怒れなかったのが本音ではあつたが。

余談だが、この時賭けられていた金はキャリアオーバーされた。

地図に示さゝれた 名も読めない町 今夜も正義を御旗に (後書き)

爆発オチで落ち着かせてみた。

まあ、大怪我だと話進めないし。

そうだ、嫁探しに行こう。……作者のじゃ無いよ？（前書き）

ニコ動でぼっけぼけの人の動画見てないなあ……。
この小説読んでくれないかなあ……。

今回は進化シーンオワタしたら嫁探しに行きます。

そうだ、嫁探しに行こう。……作者のじゃ無いよ？

「セキチク・萌えセンター」

進化シーンが始まっていた。

ジュン「熱い……熱いよ……お兄……。」

作者「耐えろ……耐えるんじゃ……全ては製作者の罠……。」
えびそば（いや違うから。）
メタんな。

「数分後」

ジュンはジュゴンに進化した。

作者「大丈夫か？」

ジュン「うん、大丈夫だけど……。」

作者「だけど？」

ジュン「なんか……スースーする。」

作者「風邪か？」

ジュン「解んない。」

作者「？」

……あえて何も語るまい。

因みに、図鑑変更パッチ付けたかったが付けられなかった。
メス化パッチも。

ひと段落した頃、作者はウエルを呼んだ。
ウエル「何か様ですか？」
作者「ああ、嫁探し行くぞ。」

——その瞬間、手持ち& a m p ;ボックス内の萌えもん——ウエルを除く——達が作者に飛び掛かった——

作者は慌てて説明した。

作者「俺じゃねえよ！ウエルのだよ！」

ウエル「自分ですか？」

作者「約束したろ？忘れたのか？」

ウエルを捕まえた時、作者は約束していた。

〈回想〉

作者『責任重大だな、これは。』

ウエル『お嫁さん探しもですよ？』

作者『解ってるって。』

〈終了〉

ウエルにとって唯の口約束にしか過ぎなかった。

しかし、作者は覚えていてくれた。

ウエル（自分もまだまだですね。）

作者「おゝい、行くぞお。」

ウエル「解りました。しかし、何処で探すのですか？」

作者「サファリゾーン。」

ウエル「また斬新な所で探しますね。」

作者「シンプルの間違いだろ？」

ウエル「そうですね。」

因みに、デンが言っていた情報は少し古かったらしく、手持ちから出さなければ持込可能らしい。
波乗りも使用できるが。

「サファリゾーン」

作者「さて、どこら辺探すかな？」

ウエル「と言われましても、自分はボール内で見てるしかありません。」

しばらく探す事に。

作者「出ねえ……。」

ウエル「……仕方ないですよ。此処はかなりの確立ですから。」

作者「だけどさあ……。」

ウエル「なら作者君、君に頼みがある。」

珍しく名前で呼ばれた作者。

作者「何だ？」

ウエル「自分を最初に捕まえた場所に連れて行ってくれないか？」

作者「別に良いが……。何かあるのか？」

ウエル「……何、勝手に別れた男の微かな願いさ。」

作者「……そうか。」

とりあえず、サファリゾーンから出る作者達。
そして、作者と出会った草むらに向かう。

そうだ、嫁探しに行こう。……作者のじゃ無いよ？（後書き）

次回は出会った草むら。
あの時、ウエルは……。

別れと絶望は時を越えて、やがて希望と再開に変わる。（前書き）

もしBGMがあるなら、マナケミアの章の冒頭BGMでも流してください。
切ねえ……。

出だし回想で始まり。

別れと絶望は時を越えて、やがて希望と再開に変わる。

〈回想・トキワの森・出入り口・トキワ方面〉

2人の萌えもんが森から出てくる。

まだ作者と出会う前のウエルとくいんだった。

くいん「……悪かったな。アタシの所為で……。」

ウエル「気にしないでください。……仕方なかった事です。」

くいん「でもよ……、“あれ”さえなければあんたまで追放される事は無かった……！」

ウエル「……自分^{ひと}はあの女さえ護れたからそれで良いです。」

くいん「でも……！」

ウエル「良いんです。……これで良かったんです。」

そして、3日後に作者達に捕獲された。

〈終了〉

作者は22番道路に向かう途中、ウエルが出会う前の話をしていた。
作者「……何があったんだ？」

ウエル「些細な事です。」

くいん「嘘を付くな嘘を。」

作者「で、何があったんだ？余り込み入った話とかは聞かない様にはするが、今の話を聞いたらそうもいかないぞ。」

解りましたよ、とウエルが話を続けた。

く回想・ニドラン達の群れく

まだ進化もしてない頃、ウエルとくいんとニドラン♂・ニドラン♀で遊んで居た。

その日は森にトレーナーが入ってきていたらしく、見に行く事になった。

でも、そこに居たのはトレーナーでは無かった。

——漆黒を纏った男——

その男はウエル達を見つけたが、無視して行こうとした。

だが、くいんがその態度が気に入らなかつたらしく勝負を挑んだ。

……結果は勝てる訳も無く、瀕死になった。

普通なら此処で終了だった。

だがあるう事が男は萌えもんに技を命じた。

男「噛み砕く。」

アーボック？「があああああ！！！」

その時、ウエルとニドラン♂が直ぐにくいんを救出しに走る。

しかし、ニドラン♂が技に当たり危険な状態に陥った。

その後、何とか逃げた4人。

ニドラン♂も持ち直した。

だが、ニドラン♂はその群れの息子だった。

激怒したのはその父親。

処分は群れからの追放だった。

だがウエルだけは彼女を庇った。

その結果、ウエルも追放となった。

追放される事になったウエル。

その日、ニドラン♀がウエルに会いに来ていた。

ウエル「君か……。」

ニドラン♀「行っちゃうの？」

ウエル「それが処分だからね。」

ニドラン♀「なら私m「駄目だ。」……え？」

ウエル「君はもう少し大きくなったら群れから出られるだろ？」

ニドラン♀「でも！」

ウエル「幸せに。」

この2人は婚約者だった。

と言っても、ままごとであつたが。

それでも、2人は互いの事を好いていた。

そして、ウエルとくいんは群れを出た。

〈回想終了〉

作者は黙って話を聞いていた。

ウエル「あれからかなり時間は経ちました。もう自分の事など忘れて
いるでしょう。」

作者「……………」

作者は何と言えば良いか解らなかった。

気の利いた言葉を言った所で気休めにしかない。

それでも、彼言葉を紡いだ。

作者「そんな事は無いよ。」

ウエル「……何故、そんな事を言い切れますか？」

作者「気休めにしかならない言葉なのは解ってる。でもさ、誰かが思ってくれているなら忘れないさ。」

ウエル「自分が忘れていなければ覚えてくれていると？」

作者「ああ。」

ウエル「……そういう事にしときましようか。」

そして、22番道路にたどり着く。

作者「此処に居るのか？」

ウエル「解りません。ただ……そんな予感がしたんです。」

作者「そっか。」

すると、草むらからニドラン♀が出てきた。

ニドラン♀「あ……。」

ウエル「……久しぶり、かな？」

ニドラン♀「もしかして、ニドラン君!？」

作者「お前の名前か？」

ウエル「群れ内での愛称ですよ。……久しぶりだね、ランニ。」

ニドラン♀「……何だか、大きくなったねえ。」

ウエル「成長期だったからね。」

作者「くいん『嘘付け。』」

ニドラン♀「ええ!? ラニーちゃんなの!？」

くいん「おお! 久しぶり!」

しばらく、同郷達で話をしていた。

話によると、あの後しばらくしてから群れから出たらしく入れ違いだったらしい。

この後、ニドラン♀も旅に付いて来る事になった。

ただ、ウエルとの体格差もあるので早く進化して同じ視線を見たいらしい。

……ウエルは何故か不安を感じたのは余談である。

別れと絶望は時を越えて、やがて希望と再開に変わる。
(後書き)

一応、ニドラン[♀]の名前募集しようかな。
こんな名前が良いと思う人メールください。

水面下での密談——決意と覚悟（前書き）

そろそろ進めたいので、下準備をさせてもらいます。

水面下での密談——決意と覚悟

「シオンタウン」

部屋には4人の人影があつた。

名山「さて皆様に集まってもらいました。……正直私は叔父さんから話を聞いただけですがこの話に参加させていただきます。」

姓名判断氏——名山

フジ老人「うむ、今は1人でも強力者は欲しい。よろしく頼みますぞ。」

孤児院・院長——フジ老人

ヤドン園長「んで、あの時の“悲劇”は何か解つたんか？」

サファリゾーン・園長——ヤドン

カツラ「……かなりの事が解つた。そして、“あの萌えもん”の居場所もな。」

グレンジム・ジムリーダー——カツラ

……かつて、とある研究をしていた者とその親戚が一同に会した。

名山「それで、何処に？」

カツラ「ハナダの洞窟だ。」

フジ老人「あそこか、皮肉じゃのう。」

ヤドン園長「せやな、あそこはかつての実験場やったからな。強い奴等がぎょーさんおるわ。」

名山「とりあえず、ハナダの洞窟は殿堂入りした者でないと入れませんから今は置いておきます。」

フジ老人「さよう。今回の話し合いは“ヤマブキ突入作戦”についてじゃ。」

ヤドン園長「……しかし、ほんまに居るんか？“あの男”は？」

フジ老人「彼等は“あの男”と出会っておる。となればロケット団の第2の拠点は……。」

カツラ「シルフカンパニーだ。……しかし、萌えもん協会も墜ちたものだ。いや、ジムリーダーの中にも墜ちた者達が居るか。」

名山「クチバのマチス、セキチクのキョウ、そして、ヤマブキのナツメ。それらを束ねるサカキ。」

ヤドン園長「わいの町にもロケット団と繋がったもんがおるのは恥ずかしいわ。」

フジ老人「気にせんで良いわい。3ヶ月前の“殺人事件”もまだ解決されて無いんじゃない？」

ヤドン園長「まあな。しかし、あの殺され方はロケット団でも萌えもんの中でも無いんや。」

カツラ「やはり、細胞の研究を続けていたか……！」

名山「落ち着いてください。今、怒りを露にしても意味がありません。」

ヤドン園長「せやかて、どないするんや？敵さんはぎょーさんおるで？」

名山「だからこそ、協力者を呼びかけました。そして来てもらっています。」

カツラ「誰なんだ？」

名山「ご紹介します。——入ってきてください！」

ガチャ！

入ってきた人物に驚く一同。

フジ老人「これはまた、何とも頼もしい援軍じゃのお。」

入ってきたのは、ニビのジムリーダー、タケシ・ハナダのジムリーダー、カスミ・タマムシのジムリーダー、エリカ・ハナダの岬在住、マサキ・サイクリングロード屯してる暴走族リーダー、テル&m p・ゴウゾウ

これにより、ヤマブキ突入作戦が開始される。

合言葉は“全てを奪還する！”

——歯車は動き出した、後は主役を待つのみ——

水面下での密談——決意と覚悟（後書き）

今回はヤマブキ突入作戦が開始されますが、特定の萌えもん達を進化させてから開始します。

ボクと契約して双子のガーディを捕まえてよ！（前書き）

タイトルに 意味 は 無 い 。

このタイトル見たことがあったただだし。

一応今回はデイモの双子の捕獲です。

尚、今回のガーディは炎の石で通常のウインディ。

太陽の石で別グラのウインディに進化する。

その際、タイプは変わる模様。

ボクと契約して双子のガーディを捕まえてよ！

「タマムシ・萌えセンター」

ある日の事だった。

デイモ「ご主人様ー」

作者「どうした……で、ま、ま」

ドーン！

……見事な突進だった。

作者「痛え……」

デイモ「あ……、ご、ごめんなさい……」

作者「とりあえず、次は気をつける事。」

デイモ「はい……」

作者「んで、どうかしたのか？」

デイモ「あ、そうだった。ご主人様！」

ズイツ！と顔を近づけるデイモ。

……周りの視線——主に作者の萌えもん達——が痛い。

作者「な、何だ？」

デイモ「ボクの双子を捕まえてください！」

作者「……双子？」

掻い摘んで説明すると、デイモの双子は既に草むらで生活していたらしい。

デイモは群れから出て直ぐに作者と出会ったので、会ってはいない。
んで、今日は懐かしい草むらを遠くから見ていると、双子が居た。

作者「それで捕まえて欲しいか……。」

デイモ「駄目、ですか？」

上目遣い＋涙目。

作者は1000億のダメージを受けた。

おお！作者よ！萌え死ぬとは情け無い！

作者（だが……悔いは……無い！）

デイモ「ご主人様ー！？」

（治療中）

仕切りなおし。

作者「それで捕まえて欲しいか……。」

デイモ「駄目、ですか？」

作者「俺は構わないが、デイモは良いのか？」

デイモ「はい！……それに、あいつも1人ぼっちは嫌だと思っし。」

どうやらデイモは姉妹には少し碎ける様だ。

作者「俺も碎けて話されたいんだが……。」

デイモ「却下です」

作者「……そうですか。」

因みに周りが齒軋りしていたが、スルーした。

ボクと契約して双子のガーディを捕まえてよ！（後書き）

次回に続く。

レベル上げて、進化シーン書いて、次に進むぜ！

んで結局、捕獲した訳だが……。　（前書き）

何で♀出てこないんだああああ！！！！！！　（血涙）

……ラプラスは出ないし、リーファイやグレイシアの♀も出ないし、
ヒトカゲの♀も出ないし、鬱だ……。

んで結局、捕獲した訳だが……。

「タマムシ・萌えセンター」

その後、デイモの双子の妹を捕獲したが……。

ガーディ「まったく、何でいきなり捕まえられたと思ったら……、姉さんの仕業だったんだね？」

デイモ「まあまあ、良いじゃない。」

ガーディ「……せめて一言欲しかったなあ、僕としてわ。」

作者「……………」

ガーディ「眼、反らさないでくれないかなあ、ご・主・人・様・？
(ゴゴゴゴッ！)」

何とも言え無い雰囲気。

とりあえずは、まだレベル上げの段階なので、気を引き締める様に努力するよう、萌えもん達に頼んだ。

しかしと作者は思う。

作者(あのニュースはマジか？)

一昨日のニュースでヤマブキシティのシルフカンパニー社長がロケット団を“正式な組織”として認めると言う発言だった。

しかし、社長の後ろに居たのは……。

——エビソバだった——

作者は今更ながら、あいつの素性が気になった。

——よくよく考えてみれば、ウェル達が出会った人物も怪しい。
となると、その頃からあの男はロケット団に居たのか？でも、辻褄
が合わない——

思考の海に浸りながら、1日は過ぎて行つた。

んで結局、捕獲した訳だが……。 (後書き)

レベル上げて何とか話に間に合わせねば…！

総進化発動しました！（前書き）

1 回目です。

総進化。

総進化発動しました！

「タمامシ・萌えセンター」

此処で萌えもん達が進化を耐えていた。

レルツ「……熱い……！」

ブラスト「幾らなんでも此れは……！」

チュノ「溶けちゃうよお……！」

ゴゲン「アニキい……！水くれえ……！」

シリス「水が……枯れた……。」

カイア「まだ……試練じゃ無いわね……。」

イルク「熱い熱い熱い！いいいいいい！！！！！」

バグマ「……（ピクピクッ！）」

作者「白目剥いてる！？誰か水ー！！！！！」

その後、タルトに頼んで日常用の波乗りをしてもらい全員進化した。

レルツ「おっしゃー！強くなったぜえ！」

ブラスト「何だか力が沸いてくる……！」

チュノ「まったく、疲れちゃったわ。」

ゴゲン「オイラの身体、何で足が無いんだ？」

シリス「何か……変な力が……。」

カイア「次が試練かしらね……。」

イルク「よっし！アタシに倒せない奴は稲荷！」

バグマ「うう……、白目剥いていたなんて……。」

作者は思う。

何故こんなにも性格が変わるのだろうか？

実際は変わってないが、雰囲気と言う奴なのだろうか？
とりあえず、作者はとある数名を呼んだ。

そして、告げた。

作者「進化の石があるが、使うか？」

そして、連続の進化が始まる……！

総進化発動しました！（後書き）

次回に続く。

進化そして問いの試練、どうなったんだろう？（前書き）

んで、今回は今までの奴等のカットしてしまいます。

進化組み『えー！！！！？？？』

諦めろ、深夜で書くには限界だ。

進化そして問いの試練」どうなったんだろう？

「タマムシ・萌えセンター」

作者は今の状況を把握出来なかった。

作者「何だよこれ……。」

目の前には水の球体が浮いていた。

カイア「試練よ。」

作者「……誰が？」

カイア「シリスよ。」

作者「……大丈夫か？」

カイア「安心なさい、今回は“問い”の試練。いつもの試練よりかは狂う確立は少ない。」

作者「けれど油断も出来ないんだろう？」

カイア「まあね。」

「心理階層」

シリス「あれ？此処何処？」

世界は水色に描かれていた。

その色が次第にシリスの姿を描く。

シリス？「こんにちわ。」

シリス「こんにちわ！」

シリス？「元気ね。」

シリス「でも、作者が子供扱いするんだよね。」

シリス？「そう……。ねえ、今から問いかけをしない？」

シリス「んゝ、良いよ！」

そして、シリス？は問い出す。

シリス？「貴女は今、危険な状態になっている作者が居ます。それと同時に、貴女もまた危険な状態です。さて、質問です。貴女はどうしますか？」

この問いに意味があるのかと言えば、意味は無い。
では、何の意味があるだろう？
そして、シリスは応える。

シリス「作者を背負って、萌えセンターに行く！」

シリス？「でも、貴女も危ないのよ？死んでしまうかもしれない。」

シリス「大丈夫！皆が気づいてくれる。そして作者も自分は平気なふりして私を背負うと思うよ。」

シリス？「……それが、貴女の答えですか？」

シリス「うん！」

シリスは笑顔を見せて頷く。

そして、世界は光に満ちた。

シリスは眼を光から庇いながら、シリス？の声を聞いた。

—— 忘れないください。貴女は1人では無い事を ——

そして、シリスの目の前には作者とカイアの顔があった。

作者「大丈夫か？」

シリス「おはよ〜。」

カイア「もう夜ですよ。」

シリス「そなの？」

作者「残念ながらな。」

こうして、試練は終了し、1日は過ぎた。

進化そして問いの試練、どうなったんだろう？（後書き）

とりあえず、そろそろ進めても良いとは思っけど、進化させてからにします。

次回は新章に入りますが、進化シーンは無いですが進化させます。

ヤマブキ突入作戦開始！地下通路からの進入。（前書き）

今回から突入作戦が始まります。

ヤマブキ突入作戦開始！地下通路からの進入。

（タムムシ・萌えセンター）

作者はボックスの整理をしていた。
すると、後ろから声をかけられた。

マサキ「よっ！作者！」

作者「マサキさんじゃないですか？お久しぶりです。」

マサキ「まあな。それよりも少しええか？」

作者「はあ。」

（説明中）

作者「……………つまり、ヤマブキを占拠してるロケット団を一掃する
手伝いをして欲しいと？」

マサキ「せや。……………頼まれてくれへんか？」

作者「……………正直、仲間を危険な目には合わせたくはありません。
でも、ある人との“約束”があるのでやらせてもらいます。」

マサキ「……………ホンマおおきに。」

それから、地下通路の隠し部屋からヤマブキの萌えセンターに入
ると聞き向かって欲しいとの事。

マサキさん達は陽動・突入を含めてロケット団と戦闘するらしい。

作者は心配したが、マサキさん曰く『ジムリーダーも参加してくれ
てるから、大丈夫や！』との事。

こうして、作者達は地下通路を通りヤマブキの萌えセンターに入
った。

そして中は一般人とジョーイさんが居た。

作者「とりあえず、サカキ達はシルフ本社に居るみたいだな。」
キルト「でも、場所が解りませんよ?」

その時、ボックス勢の2人が挙手した。

カクさん「私が行く!」

作者「お腹の模様はどうするんだ?」

メンテ「それはボクに任せてよ!変色する前に隠しちゃうから!」

ムロン「ここは任せてみようよ、主人。」

作者「んじゃ、頼む。危なくなったら逃げろよ。」

2人『はい!』

くヤマブキ・街中く

変色して辺りを探索している。

カクさん(でも、結構見張りがうるついてるね……。)

メンテ(欲求不満なのかな?)

カクさん(……絶対に違う……。)

しばらくして、大きなビルを発見した。

カクさん(多分此処だね……。)

メンテ(見張りも寝てるね、どうする?)

カクさん（見た物も変身できる？）

メンテ（一応出来るよ。）

カクさん（ロケット団の服装に変身すれば入れると思うけど……。 ）

メンテ（お兄さんと始めての合体……。 ）

カクさん（……ごめん作者、止められない。）

く ヤマブキ・萌えセンターく

あの後、メンテがロケット団に服に変身して作者が着る。

ボックス勢は突入してきたマサキさん達と合流次第、本社に突入するらしい。

作者の本社突入メンバーはキルト・ディン・シヨナ・タルト・ラタク・カイアとなった。

そして、作者達は突入した。

ヤマブキ突入作戦開始！地下通路からの進入。（後書き）

次回は大体すっ飛ばして書いていきます。

出来れば書きたいですが、色々めんどくさい事が起きそうなので勘弁してください。

シルフ本社の攻防くそして、ライバルの登場。(前書き)

本社は11階までありますが、ワープパネル使わないと社長室に行けない。

シルフ本社の攻防くそして、ライバルの登場。

くシルフカンパニー・9階く

作者は服に変身したメンテを着て本社に入り、休憩室まで侵入した。休憩室にパソコンがあったので、此処から襲撃をかけられる。しかし、どうやら“保険”が居た様で…。

ラムダ「オレ様はシルフ社員のフリをして侵入者を排除してたんだ……。」

そんな訳で、進入がばれた。

しかし、其処は予想済みだったので直ぐにボックス勢を出した。

ミヨン「今は突入してきた人達が街中で戦闘をしていました。」

作者「そうか、突破できたのか。」

ミヨン「……どうやら、ジムリーダーの1部が封鎖していたみたいです。」

作者「ジムリーダーが？」

ミヨン「ロケット団の幹部らしいです。クチバのマチスさん、セキチクのキヨウさん、ヤマブキのナツメさんの3人です。」

作者「……何でだろうな？」

ミヨン「主に仕えてるからだと思います。従者は主を護る為ならこの身を犠牲にしても護りますから。」

作者「俺はそんな事を望まないぞ。」

ミヨン「出来るだけ、そうならない様にします。」

この後、暴れ始めたボックス勢。

作者達は社長室に向かう為パネルに乗る。

「シルフカンパニー・7階」

作者達は驚いた。

何故なら。

作者「……何で居る？」

努眼「あ……、作者さんじゃないですか。」

ライバルの努眼が居たからだ。

努眼「待ってたんですよ。」

作者「待ってた？」

努眼「ええ。最近骨のあるトレーナーが居ないんでどうしようかと思っただんですが、貴方がこのビルに入っていたので……。」

作者「んで、先に社長室の道を見つけて待ってたのかよ。」

努眼「はい。」

作者「……どうやら、1戦交えないといけないか？」

努眼「お願いします。」

「ライバルの努眼が勝負を仕掛けてきた！」

努眼「行きなさい！ヨルノズク！」

ヨルノズク「さあ此処で散りなさい！」

作者「頼むぞ！ディン！」

ディン「とっとと終わらせるかのう。」

先に先手を打ったのはディン。

作者「超念力！」

ディンがスプーンを前に出し、念じる。

ターン経過。

結果：ディン

努眼が萌えもんを交代する。

努眼「相変わらず、容赦ないですね…。」

作者「お前にだけは言われたく無い。」

努眼「そうですね。行け！ギャラドス！」

（省略）

努眼「一撃ですか……。」

作者「ドンマイだな。」

この後、タマタマを繰り出してきたがサイコキネシスでアウト。

リザードンも出して来たが結果は同じ。

ディンと同じフリーディンも出たが、シャドーボールで終了になった。

…… 此処だけの話、超念力の特殊効果とレベルが勝因である。

ディンのレベルはこの時点で93である。

努眼「此処まで何も出来ないうちに倒されると、何も言え無いんで

すが……。」

作者「修行しろよ。」

努眼「そうですね、それが終わり次第萌えもんリーグに挑みますでは。」

作者「じゃあな。」

努眼は去って行った。

作者「……………」

キルト「どうしたんですか？」

作者「……いや、なんでもない。それより急ぐか。」
キルト「はい！」

くシルフカンパニー・11階く

作者達は社長室まで来ていた。

途中、ロケット団のコジロウ・ムサシが邪魔したが撃破した。
コジロウ・ムサシ『やなかんじー！』

んで、変な女が勝負を仕掛けてくる。

アテナ「此処までよ、ボウヤ……………」

しかし、撃破。

アテナ「なんて事なのっ……！」

作者「いや、弱いから。」

アテナ「くっ！でも私が負けても代わりはいるわ。」

不気味な発言をスルーし次に移動。

下っ端を倒し、社長室の前に来た。
しかし、“あの男”が居た。

エビソバ「随分と暴れてくれたようだな……。」
作者「……エビソバ！」

作者は睨む。

しかし、エビソバ何処吹く風だ。

エビソバ「悪いが今回は用事があるのでね。其処の君頼むよ。」

アポロ「貴様に命令される筋合いは無い……！」

エビソバ「頼んだよ、元“右腕”。」

アポロ「……（ギロリッ！）」

エビソバ「怖い怖い……。」

エビソバは去って行った。

（省略）

アポロ「ぐっ……！」

作者「悪いが、俺達の勝ちだ。」

アポロ「サカキ様、阻止出来ませんでした……。」

こうして、社長室に入る事が出来るようになった作者達。
サカキの心は救われるのか？
次回に続く。

シルフ本社の攻防くそして、ライバルの登場。(後書き)

尚、エビソバ戦は本当はありますが、物語上の都合によりあえて省略させていただきます。

悲しみと怒りと嘆きゝそして、光は刺す。(前書き)

早く進めたいが為に今回のバトルシーンは省略しかねない。

悲しみと怒りと嘆き、そして、光は刺す。

（社長室）

作者は社長室に入る。

そして、声を掛けられた。

サカキ「またあつたな、作者。」

作者「そうだな、タムシ以来か。」

サカキ「悪いが今、社長と話をしているんだ。」

作者「だから？」

サカキ「これ以上、俺の邪魔をするな。」

作者「断る。」

サカキ「……最早これ以上の会話は無用だ、此处で散れ！」

そして戦いは始まった。

サカキ「俺は頑張った。人々の為に！萌えものの為に！」

ニドキングを出すサカキ。

作者「そうかい！まともだったみたいだな！」

作者はデインを出す。

サカキ「しかし、俺の妻は死んだ！何故だ！？警察も動かず、真実は闇の中だ！」

ニドキングが倒されたので、ガルーラに交代する。

作者「あんた自身は調べなかったのかよ！」

交代にシヨナを出す作者。

サカキ「調べたさ！調べたとも！だが、強力してくれる者も居なかった……！」

ガルーラも倒されニドクインを出すサカキ。

作者「それであんたは諦めたのかよ！？」

デインを出しながら叫ぶ。

サカキ「黙れ！！！！俺とて諦めたわけでは無い！そいつを見つけ地獄をみせてやる為にロケット団を創った！」

ニドクインまで倒され後が無いサカキは最後の1匹、サイドンを繰り出す。

作者「だからって萌えもん達を薬漬けにしてまで復讐したいって言うのかよ！」

作者はキルトで勝負を決める。

サカキ「……何だと？」

サイドンを倒された事より、作者の言葉に反応したサカキ。

作者「……知らなかったのか？」

サカキ「言っておく、いくら俺とて萌えもんに悪事をさせても薬漬けにする気は無い。」

作者「だが、現に薬漬けにされた萌えもん達を見てきた。」

サカキ「……シルフは諦める。さらばだ！」

作者「待て！」

サカキは閃光玉を投げつけ、その場から逃走した。

作者「……やっぱりか。」

作者の推測は当たっていた。
嫌な方に。

この後、社長を助けてマサキさん達と合流した。

マチス・キヨウのジムリーダーも捕まった。

しかし、ナツメが捕まっていない。

ジムに立てこもっているらしい。

こうして、まだ終わらない今日であった。

悲しみと怒りと嘆きゝそして、光は刺す。（後書き）

諸事情により中途半端に投稿してしまった事をお詫びします。

黄昏の宿命、念力の少女は何思っ？（前書き）

ジム戦です。

尚、バトルシーンは余り期待しないでください。

黄昏の宿命／念力の少女は何思っ？

「ヤマブキジム」

真ん中の部屋に2人の影があつた。

1人はサカキ、もう1人はナツメであつた。

ナツメ「それでは、転送します。」

サカキ「すまん、俺は調べる事が出来た。」

ナツメ「^{しんがり}殿はお任せを。」

サカキ「頼んだぞ。」

ナツメ「はっ。」

サカキはナツメの萌えもののテレポートでトキワのジムに転送された。

残つたのは、少女のみ。

ナツメ「……来た、みたいね……。」

来訪者は作者達。

次々とジム内のトレーナーが倒される。

そして、この部屋にやってきた。

作者「あんたがナツメか？」

ナツメ「ええ。」

作者「マサラから来た作者だ。」

ナツメ「知ってるわ、そして貴方がロケット団も潰そうとしてるのも。」

作者「んじゃ、話が早い。」

ナツメ「そうね。始めましょう、戦いを！」

「ジムリーダーのナツメが勝負を仕掛けてきた！」

ナツメ「ドータクン！」

ドータクン「くすくす…！」

作者「どうやら、余裕みたいだな。」

ムロン「潰してあげるよ。」

先手を取るムロン。

作者「シグナルビーム！」

ムロンの両手から赤と緑の光線が放たれるが…。

ドータクン「くすくす…。」

微ダメージしか無い。

作者「交代だな。」

ムロン「悔しいけどね。」

作者はキルトを出す。

先手を取ったキルト。

そのまま、攻防が続く。

結果：勝利！

その後、ナツメはサーナイト・フリーディン・メタグロスが倒された。

ナツメ「ルージュラ！」

ルージュラを出すも。

作者「ハードプラント！」

キルトのハードプラントで沈む。

ナツメ「ヤドキング！」

ムロンの放電が効果抜群になり、倒れる。

……相打ちだったが。

そして、勝利した。

ナツメ「強いわね……。」

作者「……サカキは何処に居る？」

ナツメ「伝言を預かってるわ。『トキワで待つ。』そうよ。」

作者「そうかい。」

ナツメ「……捕まえないの？」

作者「どうやら少しだけ酌量の余地があったのさ。でも、悪事は見
過ごせないがな。」

ナツメ「そう……。」

作者「後は知り合いが何とかするさ。じゃな。」

作者が去り、ナツメは思う。

——もし彼が、あの時居ればこんな事にはならなかったかもしれ

ないわね――

こうして、ヤマブキ突入作戦は幕を下ろした。

黄昏の宿命、念力の少女は何思っ？（後書き）

次回は少し修行してから挑みます。

進化の試練／空を制する覇者（前書き）

今回は進化シーンです。

尚、1度サカキに挑みましたが、ぼろ負けでした。

進化の試練　空を制する覇者。

くクチバ・萌えセンターく

作者は将棋をムロンとしていた。

作者「むむむ……。」

ムロン「主人、詰んだよ?」

作者「……参りました。」

ムロン「ありがとうございました。」

こんな和やかな空気に突然の来訪者が現れた。

バンツ!とドアが開く。

おどか「たたた!大変です!」

作者「どうした?」

おどか「カイアちゃんが……!」

カイアは倒れていた。

——身体はかなり冷えていて、風を巻き起して——

作者「龍の試練か!?」

シリス「違う……、進化の試練だよこれ!」

作者「今までと何が違うんだ?」

ムロン「龍の場合はかなり危険な試練だけれど、進化の試練もそれ

と同じ位危険な試練なんだよ。」

作者「何にせよ、毛布とか持ってきてくれ！」

シリス「あの暴風域に行く気ですか！？吹っ飛びますよ！？」

作者「あいつ1人でいさせる程墜ちたくねえよ。」

〈心想階層〉

青い世界、吹き荒れる風、そんな場所にカイアは居た。

カイア「……どうやら、試練みたいね。」

その通りと言わんばかりに、風が吹きすさぶ。

そして、目の前に風が形取った萌えもんが現れる。

キレイハナ・クサイハナ・ドダイトス・ジュカイン・フシギバナ・
ビジョット・ギャラドス等の萌えもん達。

それが一斉に襲い掛かる！

カイア「はぁ！」

龍の怒りで的確に1人ずつ狙い打つ！

ドガン！バコン！ズドン！

3人減り、残った萌えもん達が止まる。

すると再び風になり、集合する。

そして、萌えもんの形をした風が現れた。

……だが、その萌えもんは。

カイア「カイリュウ、ですか……。参ったわね。」
風「グオオオオオオ！！！！！！」

空気が震え、風が勢いを増す。

カイア「くううううっ！」

吹き飛ばされそうになりながらもその場に留まる。
しかし、風は冷たくカイアの体温を奪ってゆく。
その時、身体が温かくなった。

作者『ぐおお！負けるんじゃないぞ！』

作者の呼びかけ。

デイモ『もっふもふだよー！暖かいよおー！』
ピリス『何の商売してるの！』

その他『わーわー、やんややんや！』

作者『手伝え！』

作者と萌えもん達の体温がカイアを暖める！

カイア「まったく……。作者達は今……。」

嬉し涙が頬を伝う。

その時、カイアの身体が光に包まれる！

光が収まった時、其処に居たのは進化したカイアだった！

カイア「悪いけど、とつとに戻らせてもらっわ！」

カイアは空を舞い、勢い良く風に突撃する！

その速度は神速を超えた！

そして、激突した！

風「ガアアアアアアアツツ！?!?!?!?!?!」
カイア「偽者は風に帰りなさい。」

そして世界は光に包まれた。

〈現実〉

カイアの身体から発せられた風が止み、光に包まれた。
光が収まった時、進化したカイアが居た。

作者「どうやら試練に合格したみたいだな…。」

シリス「いい加減離れたらどうですか？（ジト）」
作者「おっと、そうだな」

ガシッ！

カイアの両腕が作者の腰を掴み引っ張る。

作者「ぬおっ!？」

カイアは寝ぼけているのか放そうとしない。

その後、萌えもん達総出で引き剥がそうと頑張った。

カイアは既に起きていたが甘えていただけだった。

進化の試練、空を制する覇者。（後書き）

当面はレベル上げですね。
砂起こしキツイ。

とりあえず、進化報告。（前書き）

あと報告として、ディンのレベルが100になった。

修行装置『バトルシュミレーター』で修行しています。

相手のレベルは75で手持ちはドダイトス・バシャーモ・エンペルト・チャーレム・カイロス・マグカルゴです。

とりあえず、進化報告。

（修行装置のある家）

こなち「熱いよお……。」

ラスラ「熱いです……。」

作者「今日も修行だなー。」

ヘルン「そうね。」

しので「今日は拙者が主様の修行するでござる!」

……… 確実に無視をする作者達。

こなち「酷いよお…… お兄ちゃん……。」

ラスラ「そうですよ…… 労ってくれても良いじゃありませんか……
お兄様……。」

作者はバックから冷えぴたを取り出し、貼った。

2人『はううううう……。』

作者「これで良し。」

しので「誑し込むのが上手くなりましたでござる。」

ヘルン「変態。」

作者「他にどうしろと?」

しばらくして、進化は終わった。

こなち・ラスラは作者に抱きつく。

こなち「えへへ〜」
ラスラ「うふふ」
ヘルン「…………ギロツ」
しので「ジトー……。」

居心地が悪すぎる状況。
そんな午後。

しかし、サカキにはどうやって対抗するべきか考えないといけない作者であつた。

とりあえず、進化報告（後書き）

また次回。

とりあえず、これからの事と報告。（前書き）

1回、デモンストレーションでサカキに勝ったんですが、如何せん被害が酷かった。

実質、2人で勝った様な物だった。

とりあえず、これからの事と報告。

トキワ・萌えセンター

ラッキーA「頑張つて!」

ラッキーB「あと少しよ!」

ピネラ「ひっひっふー!ひっひっふー!」

……。

作者「……何で萌えセンターのラッキー達が応援してるんだ?」

くおん「同族のよしみですよ。」

作者「……何でラマーズ方なんだ?」

デン「ロマンと言っていました。」

作者「……………」

あえて何も語るまい。

数分後

ピネラ「私に任せればどんな怪我也治します!」

ラッキーA「キヤー!」

ラッキーB「ステキー!」

作者「カリスマが出てるのか?」

くおん「さあ?」

んで、ピネラがこっちに来る。

ピネラ「先生！」

作者「何？あと先生じゃないから。」

ピネラ「そんなことより、私を進化させてくださいますとありがとうございます！」

作者「気にするな。学習装置使わないと色々と問題が発生するだけだから。」

レベル100のディンで無いと倒せない萌えもんがいるので。

ディン「ぶえつくしよん！！！！」

くおん「そういえば……。」

くおんが清らしい程の笑みを浮かべる。

作者「な、何だ？」

くおん「懐き進化でしたっけ？良いですね、私達も欲しいですね！ご主人様の愛情……。」

作者「いやいや、色々やばいから、その発言。」

デン「私も欲しいですね。」

作者「ちよっ！」

この後、まあ何だ想像に任せる。

ただ言える事は、いつかのキルトの時と同じように太陽が黄色かったという事しか言えない。

とりあえず、これからの事と報告。（後書き）

まあ、最後にアー！なネタになった。

次回にバトル戦書きたいが、如何せんレベルが低い。

全力と意地と信念と絶望の終わり（前書き）

トキワジム戦です。

金稼ぎ居なくなっただ…（泣）
番外編でも作ろうかなあ。

今回からバトルシーンを変更してみます。

全力と意地と信念と絶望の終わり

「トキワジム」

あの突入作戦から3日後、作者達はトキワジムに挑みに来た。

……あの後はささやかな祝勝会が開かれたので少しは気が楽になったが。

作者「さて、行くか。」

キルト「地面タイプを使ってきましたね。」

タルト「流し素麺にしてあげよつと」

ジム内のトレーナーを撃破し、奥にサカキは居た。

サカキ「ようこそ、隠れ家へ。」

作者「なるほど、ジムリーダーなら疑われないって事か。」

サカキ「まあな。」

作者「……どうした？」

サカキ「いや、作者。」

作者「何だよ？」

サカキ「本気で来い……！」

サカキは全てを賭けて勝負を挑む気だった。

だからこそ作者はこう応える。

作者「ああ！行くぞサカキ！」

「ジムリーダーのサカキが勝負を仕掛けてきた！」

サカキはカバルドンを、作者はキルトを出した。

カバルドン「波あつ！」

カバルドンの特性で砂嵐が吹き荒れる。

しかし、キルトは怯まずにカバルドンを見据える。

カバルドン「来ないならこっちから行くぞ！」

カバルドンはストーンエッジを発動する。

地面から尖った岩がキルトを襲う。

しかし、キルトは余裕の笑みを浮かべる。

キルト「……行け！」

その言葉に呼応するかの様に地面から複数の蔓が地面から出てきて、岩の刃を粉々に粉碎していく！

カバルドン「何！？」

驚愕の表情を浮かべるカバルドンを蔓が巻きつき、そのまま締め上げた！

カバルドン「ぐああああああつ！？！？！？！」

カバルドンが苦痛の叫びを上げ、そして瀕死した。

キルト「私の勝ちです。」

サカキ「やるようだな…。」

作者「……まだ油断は出来ないみたいだな。」

サカキ「ふっ。」

サカキはグライオン、作者はディンを繰り出す。

カバルドンの砂嵐がディンに微ダメージを与える。

ディン「迷惑な砂じゃのお。」

ぼやくディン。

グライオン「ならさっさと楽になりな！」

そして向かってくるグライオン。

ディン「やれやれ……じゃな！」

ディンが腕を前に突き出し、超念力を発動する！

グライオン「ぐうっ！舐めるな！」

グライオンも反撃に辻切りを発動する！

ディン「ぬうっ！……！」

ディンは倒されそうになったが、思いのほか超念力が急所を突いたらしくグライオンも意気絶え絶えである。

サカキ「これを使え。」

回復の薬がグライオンに使用される。

作者「これで！」

凄い傷薬をディンに使う。

勝負は振り出しに戻った。

グライオン「次で決めてやる……！」

急所に当てられたのが余程気に障ったらしく、怒りに燃え疾走するグライオン。

ディンはそんな暴走蠍を見据え、また腕を前に突き出し、叫ぶ。

ディン「舐めるな小娘！」

その叫びと同時にサイコネシスを発動する！

グライオン「ぐああああっ……！」

しかし、又しても辻切りで反撃する。

そんな攻防に決着がつく時、既に10分経過していた。

グライオン「はあ……はあ……！」

ディン「いい加減に沈むが良い！」

ディンのサイコネシスが発動され、グライオンは悲鳴も上げられず瀕死した。

サカキ「まだ終わらないか。」

作者「あんた、本気か？」

サカキ「残念ながら……本気だ！」

サカキはニドキングを出してきた。

作者はディンのまま続行。

砂嵐がディンにダメージを与える。

しかし、相性はディンにとって有利だった。

ディン「波あああ……！」

ニドキングとこの後出てきたニドクインは一瞬で沈んだ。

サカキ「これ程とは思わなかったな。」

作者「俺達の“絆”を舐めるな。」

サカキ「なら、私の萌えもんも舐めないで貰おうか！」

サカキはカブリアスを出してくる。

デインは又しても（略）

デイン「いい加減にして欲しいのお。」

カブリアス「ごちゃごちゃ言ってんじゃねえ！」

カブリアスは疾走する。

デインは腕を前に突き出し、サイコキネシスを発動する。

結果、カブリアスは失速し倒れて終了となった。

サカキ「……………これが最後だ。」

作者「……………」

サカキはドサイドンを、作者はキルトを繰り出す。

砂嵐がキルトを襲う。

キルトは意識を集中させ、そして発動する。

キルト「奥義！」

その瞬間、数えられない程の蔓がドサイドンの足元から出てきてドサイドンに巻きつく！

ドサイドン「な、何だと!？」

そして、ギリギリと締め上げられたドサイドンを見据え、キルトは右手の平を開いた状態から握り拳にした。

その動作がされた瞬間!

ベキッ!

ドサイドンは力無く瀕死した。

蔓に絡まれたまま浮いている状態で。

この瞬間、勝者が決まった。

サカキ「やはり、勝てなかったか……。」

作者「おい、まさか……。」

サカキ「全力だったさ。そして、勝てなかった……。ただ、それだけだ。」

作者「……………」

——そして、真実が訪れる——

全力と意地と信念と絶望の終わり（後書き）

一応、技の指示を出してますよ。

ただ、それを省いた事でより解りやすく、尚且つ熱い展開になっただけです。

次回は真相です。

真相と真実と希望（前書き）

ちよつと展開を早める。

色々あるんだよ…。

真相と真実と希望

トキワジム

作者はサカキにある事を伝え様としたがその前に確認しておきたかった。

作者「復讐はまだやる気か？」

サカキ「……どうやら、私は道化に過ぎなかったみたいだな。」

作者「……解ったのか。」

サカキ「ああ。まさか、“エビソバ”の仕業とはな……。」

あの悲劇はエビソバの仕業だと思った。

サカキの時も同じだった。

ただ、どうにも引かかる事があるがサカキに伝える事から伝えようと思う。

作者「サカキ。」

サカキ「何だ？」

作者「あんたに伝える事がある。」

作者はシオントワーで出会ったガラガラ——サカキの奥さん——に聞いた話と約束を話した。

サカキ「そう……か……。」

サカキは泣いた。

どういふ感情だったか解らないが。

作者「しかし、5歳位の子供がエビソバなら辻褄が合わないんだが……。」

サカキ「……今にして思えば、あの男は異常だった。」

作者「どういう意味だ？」

サカキ「外見が変わって無いんだ。」

作者「……何でそんな奴をロケット団、いや善良団体に入れた？」

サカキ「……それが、解らないんだ。」

作者「……催眠術か？」

サカキ「だが、奴の萌えもんになんな技を使える奴が居るとは限らない、それに萌えもんを出して無かったぞ。」

作者「ハーフか？」

サカキ「何だと？」

作者「萌えもんの技を使える人間なら可能だろ。」

サカキ「……しかし、それなら気づけたはずなんだ。」

作者「何でだ？」

サカキ「そういう存在は萌えもん協会に登録しなければならない。」

作者「となると一体……。」

サカキ「私はロケット団を解散する。そしてもう少し調べてみよう。」

「

作者「大丈夫か？」

サカキ「……全て片付いたら罪を償う。」

作者「……。」

サカキ「そんな顔をするな。全ては操られていたとは言え自分がした事だ。ケジメは付けなければならない。」

作者「そうか。」

サカキ「……また、会おう。」

作者「ああ！」

サカキは去り際に気になる事を呟いていた。

サカキ「あの子供が……、だが、何故？」

作者は”あの子供”について聞いたかったが聞けずじまいであった。

くおまけく

サカキは元アジトに来ていた。

必要な資料を持ち、此処を後にする。

不意に後ろから声を掛けられる。

ラカ「お父さん。」

サカキ「ああ、行こう。」

その後、出口でラカの母親——幽霊だったが——が待っていて、
涙ながらな展開になった。

真相と真実と希望（後書き）

次回はチャンピオンロードに行きます。

出来ればレベルが100が5、6人居れば良いと思う。

はてさて、これからどうするか？（前書き）

チャンピオンロードに行く前に努眼と対戦しましたが、その話はスルーします。

何故かチャンピオンロード入り口にマサキっぽい人物が居たのでレベル上げようかと修行装置使おうと思ったら、装置のレベルが90に上がってたので倒しづらい。

予想だが、マサキの手持ちはイーブイ、そして、その進化系がグレイシア・リーフィアかと予測。

……誰か手ごろにレベル上げの場所知らない（泣）

はてさて、これからどうするか？

「マサラタウン・蘭木さんの家」

作者達は久しぶりに蘭木さんの家に居た。

作者「しかし、すいません。泊めさせてもらって。」

蘭木「気にしなくて良いのよ。息子も旅に出てから帰って来ないし。」

作者「……心配、ですか？」

蘭木「……あの子はひよっこり帰ってくるから心配要らないわ。」

作者「いや、ひよっこりって……。」

蘭木「ふふっ。」

他愛も無い会話。

その後、これからどうするか考えていた時、ふと思った事があった。

作者（そういえば、あのヤマブキ突入作戦で敵側にマチスさん、キョウさんが居たんだよな？マサキさんは突入に参加してたらしいけど、強かったのかな？）

イメージ的には大らかな関西弁の気の良い青年の印象を受ける。

名山もまた紳士的な雰囲気を漂わせている感じでもあった。

フジ老人やヤドン園長も参加してたと聞いた時は驚いた。

作者（でも、ささやかな祝勝会にも来なかったしなあ。）

そんな疑問も解決する訳では無いが、気になった作者であった。

くおまけく

突然だがこの家のベットは1つしかない。

したがって、手持ちの萌えもん達はボールで寝て過ごすはずなのだが。

ジル「ふっ！久しぶりの登場だよ！」

作者「メタ発言すんな。」

偶には登場させると脅さ「齧るよ？」もとい、必死のお願いで根負けして出した。

作者「まあ、良いが…、何で抱きつく？しかも俺が下で。」

ジル「私が下になったら潰れちゃうよ。」

作者「正論だがな……、押し付けるな。」

ジル「ん？何を？」

作者「…お休み。」

ジル「にゅふふっ」

翌日、萌えもん達が作者をぼろぼろにしたのは言うまでも無い。

はてさて、これからどうするか？（後書き）

まあ、進まない・上がらない・ネタが微妙の三拍子でお送りしました。

次回はマサキ戦にしようかな…。

萌えもんマニアの激励（前書き）

今回はマサキ戦です。

萌えもんマニアの激励

「チャンピオンロード・出入り口」

作者達は萌えもんリーグに行く為、チャンピオンロードに向かって
いた。

だが、出入り口に意外な人物が居た。

作者「何やってるんですか？マサキさん？」

マサキ「おう作者！ヤマブキ作戦以来やな！」

ハナダの萌えもんマニア……マサキだった。

マサキ「いやな、リーグに行くって聞いたもんやから、激励しに来
たでえ〜！」

作者「はあ。」

マサキ「そろそろ、作者が来る頃やろおもて、腕試しの相手にでも
なるおもつてな。」

作者「……それは、随分な激励ですね。」

マサキ「何、萌えもんトレーナーの先輩としての餞別みたいなもん
や。さあ作者！バトルや！」

「萌えもんコレクターのマサキが勝負を仕掛けて来た！」
間違いではありません。
注

マサキはイーブイ、作者はディンを繰り出した。

イーブイ「行くよー！」

その言葉の通り、突撃してくる。

ディン「やれやれじゃな。」

呆れながらも腕を交差させ、そして思いっきり交差した腕から気合玉を発射。

イーブイ「うわああああ!?!」

一撃で沈むイーブイ。

マサキ「……容赦ないなあ。」

作者「悪いですね。」

マサキはブースター、作者はタルトを出した。

ブースター「はあああああ!?!?!?!」

いきなり身体から炎を纏う。

タルト「火遊びは夜にやってくれない?」

大砲の砲身を構え狙い打つ。

タルト「ハイドロカノン!」

そして、一撃で沈む。

マサキ「ホンマ容赦無いなあ！」

作者「それがバトルでしょう！」

マサキ「ええーい！解つとるわ！」

マサキはシャワーズを、作者はカイアを出した。

シャワーズ「……水よ……。」

水が浮き始め、そのままカイアに攻撃する。

しかし、カイアのプラズマクロードで切り落とす。

カイア「無駄よ。貴女じゃ私に勝てない。」

シュバツ！

電気の爪がシャワーズを引っかき、痺れて倒れる。

マサキはサンダースを、作者はキルトを出す。

サンダース「痺れな！」

雷を落とすサンダース。

しかし、キルトは予想もしない方法を繰り出す。

蔓を地面から上空に向けて伸ばす。

避雷針もどきを作ったのだ！

サンダース「な、何だと！？」

キルト「すいませんが、これでお終いです。」

キルトは暴れた。

逆鱗を発動したのだ。

逆鱗で龍の怒りが複数サンダースに当たる。

サンダース「ぐあああ！？」

サンダースは倒れた。

マサキ「……鬼か。」

作者「先言っておきますけど、あんな作戦思いつかないですよ。」

マサキはフリーディンを、作者はディンを出した。

フリーディン「先輩のお膳立てでもしてくれないかね？」

紳士的に聞いてくるフリーディンは超念力の構えを取る。

しかし、フリーディンの影からシャドーボールが出てきて急所に当た

り終了した。

ディン「油断大敵じゃよ。」

マサキ「……あのアホ、後でしばいたる。」

作者「まあまあ。」

その後、最後の手持ちもイーブイだったので、一発で終了した。

マサキ「さすがやな！ワイのお節介やったかな……。」

作者「いえ、良い経験になりました。ありがとうございました！」

マサキ「ええって、ワイがやりたかっただけやから。ほなワイは帰るで！またな！」

マサキは去って行った。

作者達は今度訪れた時に何か持っていかうと考えた。

そして、ついにチャンピオンロードに足を踏み入れた。

萌えもんマニアの激励（後書き）

イーブイに進化の石を使えばブラッキー・エーフィーが手に入るんだが、如何せん出現率が低い……（泣、主に♀出ない）

リーフィアはトキワの森・グレイシアは双子島で捕まえるしか無い。（今の所）

今回はチャンピオンロードをキングクリムゾンして一気に出口に行きたい。

予想外の事が無い事を祈る。

紅い憎しみの炎——救いを求める者の悲しみを払え。（前書き）

作者「さて、何故2ヶ月も更新してなかったかと言うと……、新作ゲームやってた」

何処からか刀や鎌を研ぐ音や、糸をピイイイン……！と引つ張った音がしてくる……！

作者「……えー、では書かなかったと言うと、レベル上げがめんどくさい」

何処から（略）

作者「まあ、今週末のあれが終わればまた書き始めると思う。」

紅い憎しみの炎——救いを求める者の悲しみを払え。

くセキエイ高原・萌えもんリーグく

作者達はチャンピオンロードの猛者達を撃破してリーグにたどり着いた。

とりあえずはレベル上げをして四天王戦を攻略しようと修行したのだったが……。

くリーグ宿泊施設く

作者は四天王の事について調べていた。

作者「水氷使いのカンナ・格闘使いのシバ・亡霊使いのキクコ・龍使いのワタル・そして最近チャンピオンになった誰かか……。」

作者は思った。

——最後の1人についての情報が無い——

作者「秘密主義なんだろうか？」

そんな思考に耽っていると、足音が聞こえてきた。

シリス「作者！大変だよ！」

作者「どうした？」

シリス「チルナが……紅く光ってるんだ！」

作者「……どういう事だ？」

シリス「良いから来て！」

作者「解った！」

（別室）

部屋は紅い光に包まれていた。

作者「一体どうなっているんだ！？」

そう叫ぶ程部屋は紅い。

中に居たのは倒れているチルナ、心配しているチルド、深刻な顔を
したカイアの3名。

作者「どうしたんだ！？」

チルド「作者！大変なんだ！」

カイア「此れは……不味いわよ……！」

作者「どういう事なんだ！？」

カイアの顔は焦りの顔だった。

作者はこの顔を見た事があった。

チルドが龍の試練を受けた時、ムロンが浮かべた表情にそっくりだ
った。

作者「龍の試練か！？」

カイア「……違う。」

作者「……え？」

カイア「此れは……“歪みの試練”よ……！」

作者「……なん……だよそれ……？」

ムロン「僕が説明するよ。」

部屋にムロンが入ってきた。

作者「解るのか？」

ムロン「此処最近ボックス内で暇だったからね。調べられる事は調べたのさ。」

そして、ムロンから説明があつた。

解りやすく説明すると、色違いは元々特異な存在であつた。

突然変異で生まれた者も入れば、意図的に創られた場合もある。生まれた時から色違いだった場合は特に問題は無い。

しかし、意図的に生まれた色違いは別だ。

それは生き物の“進化”を侮辱した行為に等しい。

よつて、進化の試練は歪み、歪になる。

これを“歪みの試練”となる。

この時、試練に耐えられず進化した者は狂う所の話じゃ無い。

最早全てを滅ぼさなければ止まらない存在になる。

止めようにも色違いは元々特異な体質、能力が元々高かったのにそれを10倍に引き上げた力を発揮する。

命を賭けてまで止める以外に術は無い。

ムロン「……これが、歪みの試練。そして、人の愚かさに生まれた結果だよ。」

作者「……………」

ムロン「……どうする？今ならチルナの“命”を奪う事で止められるよ？」

ドンッ！

作者の拳が壁に穴を開けた。

作者「その案は無い。」

ムロン「じゃあどうするのさ？」

作者「……これは歪んだ試練なんだろう？」

ムロン「……主人。」

作者「お前は俺に危険な事をしてほしくなかったから、あの案を出したんだろう？」

ムロン「……敵わないなあ。」

作者「安心しろ、戻ってくる。」

ムロン「ああ、行って来たまえ。」

因みに、ムロンがヒロインでは無いけれど何となくこうなった事に
対しキルトが滅茶苦茶妬んでた。

そして、作者はチルナの頭に触った。

——世界が反転する——

〈歪な心理階層〉

作者は辺りを見回す。

——紅い——

さながら血の色だ。

作者「やれやれ、とつとあいつを見つけますか。」

浮遊感があるが歩けるみたいなのでしばらく歩いた。

少し立つと研究所みたいな建物が“半壊”した状態であった。

作者「……まったく、馬鹿な事をした奴等が居たもんだな……！」

怒りを露にする。

しかしそんなことよりも身体は動いていた。
声はチルナを呼んでいた。

作者「チルナー！何処だー！」

そう叫んだ時、チルナの“慌てる声”が聞こえた。

チルナ「作者避けて！」

その瞬間、が2階から壁を飲み込みながら“紅い破壊光線”が襲ってくる！

作者「——こなくそお！」

力の振動を脱し横に避ける作者。

作者の居た場所は光線が大地を抉り、マグマを生み出した。

作者「……出鱈目だな。」

そんな言葉しか出ない。

その時、反対側にチルナを見つけた。

チルナ「作者ー！大丈夫！」

作者「大丈夫だ！問題ない！」

とりあえずお互いの安否を確認した。

作者「しかし、此れは……。」

チルナ「……赤いギャラドスだよ。」

作者「……そうか。」

沈黙が流れる。

しかし、そんな沈黙は怒号によって碎かれた。

ガアアアアッ！！！！！！！！

最早言葉をするのも不快と言わんばかりに、上空から赤いギャラドスが舞い降りた。

着地点にはマグマがあつたが、“竜巻”を起こし四散させ消した。

作者「何て野郎だ。」

しかし、この試練をどうにかしないといけない状況ではあつた。
なので、チルナに聞く。

作者「この試練はどうすれば達成なんだ？」

チルナ「……解らない。」

どうやらチルナ自身も解ってない。

作者（今までは戦いか問いのみ、となると此れは——）

そんな思考を消さんと言わんばかりに赤いギャラドスが作者を睨みつける。

作者「——！？」

チルナ「作者！？」

蛇に睨まれた蛙——この場合は龍に睨まれた愚者とでも言つべき

か。

兎も角、現状は最悪と言える。

赤いギャラドスが口に“光球”を溜める。

作者（——不味い！）

しかし、それは阻止された。

チルナ「ええーい！」

ドンッ！

赤いギャラドス「！？」

チルナの体当たりが当たりバランスを崩した赤いギャラドス。

その隙に作者の元に行くチルナ。

チルナ「大丈夫！？」

作者「あ、ああ何とか。」

しかし、赤いギャラドスが再び光球を為発射する準備をした。

チルナ「させないよ！」

作者の前に出て手を広げ庇う姿勢を取るチルナ。
そして、紅い破壊光線が発射されるその瞬間！

——作者がチルナを庇った——

「????」

暗い空間。

其処にチルナが居た。

チルナ（あ……れ……？僕……どうし……！？）

——作者がチルナを庇った——

その記憶を思い出す。

チルナ（まさか——！）

「……」「安心しろ。」

声が暗闇から聞こえてきた。

チルナ（誰？）

「……」「あの男は私の攻撃で外に出た。」

チルナ（まさか……赤いギャラドス！？）

先程攻撃をしてきた赤いギャラドスが話しかけてきている。
しかし、会話が出来たら何故攻撃をしてきたのか？

赤いギャラドス「簡単な話じゃ。我等は人間を好かん。」

チルナ（でも、出会った時も喋らなかったよね？）

赤いギャラドス「人間なんぞに力を貸す子孫も好かん。」

チルナ（なるほど。）

子孫——やはりこの赤いギャラドスはかつて暴れていたギャラドスなのだろう。

赤いギャラドス「しかし——自分の身しか考えん人間がこの世界に来て、あまつさえ身を挺してお主を護るとはな。」

チルナ（作者はそんな人間なんだよ。）

赤いギャラドス「ただ単に馬鹿なだけじゃろ。」

チルナ（否定出来ない…。）

赤いギャラドス「まあ良いわい。ほれ。」

赤いギャラドスが暗闇から手を伸ばす。

チルナ（え？）

赤いギャラドス「良いから握れ。」

そう言われ、握りかえすチルナ。

その瞬間、チルナの金色の身体が“赤いギャラドス”になった。

チルナ「え？え？」

赤いギャラドス「力をくれてやったのじゃ。狂わない力をのう。」

チルナ「良いの？」

赤いギャラドス「お主とあの馬鹿なら問題ないじゃろ。ではな。」

そういつて、暗闇だった世界が光輝く世界になった。

そして、チルナの意識が再び沈んだ。

く別室く

作者は眼を覚ましていた。

作者「大丈夫なんだろうか？」

ムロン「光が収まったから何とも言え無いね…。」

カイア「大丈夫よきつと。」

シリス「どうして解るのさ？」

チルド「あたいの弟子だから！」

チルド以外『はあ…。』

チルド「何でため息！？」

そんなやり取りをした直後。

チルナ「うゝん…。」

進化したチルナが眼を覚ました。

作者「チルナ！」

チルド「大丈夫か？」

チルナ「あ…、皆…。」

とりあえず、意識ははっきりしてるみたいなので安堵の息を吐いたメンバー。

作者「何はともあれ、お帰り。」

チルナ「ただいま！」

こうして、今日が終わっていく。

くおまけ

とりあえず、ごたごたが終わった作者は温泉施設の風呂に浸かって
いた。

露天風呂だ。

このリーグは色々と施設がある為、旅館宿は勿論ホテルなどの宿泊
施設などもある。

デパート程では無いが、色々と売られている。

カジノでは無いがゲームセンターもある。

まあそんな事ははどうでも良い。

大事なものは、この後起こる“サプライズ”なのだから♪

作者「ん？何で寒気がするんだ」

ガラッ！

中風呂のドアが開いた。

作者「誰——！？」

チルナ「……………」

其処に居たのは、タオルを巻いた（巨乳）のチルナが居た。

作者は慌てて振り返る。

作者「ちょっ！？どうした！？」

チルナ「……………」

しかし、チルナからの返事は無い。
そのまま作者が入っている湯に浸かった。

沈黙が流れる。

不意にチルナが“年寄り口調”で話しかけてきた。

チルナ？「やれやれ、こやつの主は度胸が無いのう。」

作者「……………彘？」

チルナ？「どうかしたかえ？主殿？」

作者「…………誰だあんた。」

チルナ？「やれやれ、あんなに我の熱い思いをぶつけたと言つのに……」

よよよと、嘔泣きをする“赤いギャラドス”。

作者「何ともまあ、あれか。あの時の。」

赤いギャラドス「左様。」

作者「あいつはどうした？」

赤いギャラドス「安心せい、ちゃんと存在しておる。」

作者「そうか、そいつは良k」

赤いギャラドス「この格好でお主の前に来ている所見て赤面して気絶しておるわ。」

作者「全然良くねえええええ！？」

赤いギャラドス「うるさいのお。」

作者「いや、人格が変わっても意識あるの！？」

赤いギャラドス「我位になれば造作も無いわい。」

まあ、そんな感じのやり取り。
不意に作者が尋ねる。

作者「あんたに名前は無いのか？」

赤いギャラドス「……名など、等の昔に捨てたわ。」

作者「……そうか。」

とりあえず、作者は風呂から上がり中風呂に向かおうとした時、振り返らず赤いギャラドスにこう言った。

作者「くれない紅」

赤いギャラドス「……何じゃと？」

作者「あんたの名前だ。嫌だと言ってもそう呼ばせてもらっ。」

そういつて中風呂に入っていった。

残された紅は、何処か懐かしい顔をしていた。

紅「まったく、見た目も性格も違うと言うのに。」

紅の名前は昔捨てた名前だった。

でも何処か懐かしい顔で、何処か嬉しそうな顔だった。

—— 汝、悲しみを乗り越えた ——

紅い憎しみの炎——救いを求める者の悲しみを払え。（後書き）

因みに、鬼畜3rd+を持つてる友人に四天王をクリアーされまして…（泣）

俺の努力って一体……。

四天王と氷水の足（前書き）

今回は挑みますが、負けてしまった場合はレベル上げます。

ただ、レベル上げて挑んだ場合はこの話では敗北していない状態で挑むことになりますので、矛盾は覚悟しておいてください。

四天王「氷水の足」

「萌えもんリーグ・四天王の部屋前」

作者「さて、挑むか…。」

キルト「緊張しますね…。」

作者「今更怖気付いたか？」

キルト「まさか。」

作者「んじゃまあ、行きますか！」

仲間全員「応！」

「四天王・氷の部屋」

作者「寒いな。」

部屋は氷で覆われている。

フィールドも所処凍っている。

そんな場所に悠然と佇む女性が居た。

カンナ「ようこそ、挑戦者君」

作者「マサラから来ました、作者です。」

カンナ「そう、貴方が…。」

作者「俺の事を知ってるんですか？」

カンナ「ええ、少しね。」

何故か自分の事を知ってるカンナ。

しかし、そんな世間話をしに来た訳ではない。

作者「四天王に挑ませてもらいます。」

カンナ「ええ、そうね。貴方はその為に来たんですものね。でもね……。」

そして、カンナの雰囲気が変わる。

カンナ「氷萌えもんを使わせたら右に出る者は居ない！何故なら、相手を凍らせてしまうから……。」

そして、呟く。

——魂までね——

一気に下がる気温。

そして、熱気を纏う戦闘意欲。

戦いは開始された！

「四天王のカンナが勝負を挑んで仕掛けて来た！」

カンナ「まずは小手調べ……、行きなさい。」

ジュゴン「さあ、凍りなさい。」

作者「行け！キルト！」

キルト「はい！」

キルトは接近して行く。

ジュゴン「自殺希望者かしら？」

口元に青色の球体を生み出す。

しかし、キルトは頭の花から眠り粉を噴出する。
ジユゴン「しま……た……」
倒れるジユゴン。

キルトは頭の花から種を発射。
キルト「行け！」

種爆弾はジユゴンに命中する。

ドガンッ！

ジユゴンはそのまま瀕死した。

次に繰り出されたのは、パルシエンだった。
パルシエン「やれやれ、めんどくさい。」

そう言いながらもジユゴンと同じ攻撃準備を始める。
キルトも先程と同じ戦法をとった。

そして、パルシエンも倒れた。

カンナ「やるわね。」
作者「どうも。」

次に繰り出されたのは、ラプラス。
ラプラス「あまり調子に乗らないでください。」
キルト「貴女は乗せるでしょう。」

ラプラス「戯言を！」

冷凍ビームを発射するラプラス。
しかし、キルトはギリギリ避けて眠り粉を噴射。
そして種爆弾で仕留める。

キルト「あ、危なかった……」
それでも生きた心地はしなかったらしい。

繰り出されるのは、グレイシア。
グレイシア「もうそんな攻撃は効かないわよ？」

作者「交代だ。」

カンナ「賢明な判断かしらね？」

作者「相性が悪い中で戦ってくれたんだ、少しは休ませるさ。」

キルトの交代で出たのは、デイン。

デイン「一発勝負かのう。」

そう、デインの気合玉が当たれば勝ち、外れれば終わり。

まさに一発勝負。

そして、両者は攻撃準備を始める。

仕掛けたのはデイン。

デイン「行けえ！」

ギウウンンン！

速いスピードでグレイシアに向かう気合玉。

結果は……、外れた。

グレイシア「ふふふっ！」

グレイシア「くすくす……！」

デイン「……影分身。」

ギリッ！と齒軋りをするデイン。

回避率が上がる事により、気合玉が当たる確立はほぼ零に近い。
しかし、デインは諦めずに気合玉を放つ。

デイン「余り舐めるでないわ！」

再び気合玉がグレイシアに向かう。

影分身をした中で、本体を当てるのは至難の業。

結果……、またしても外れる。

グレイシア『あははは』』

デイン「くっ！」

影分身は増えていく。

しかし、ここで作者が叫ぶ。

作者「落ち着け！」

デイン「……！？」

作者「当たらないなら当てる技で当てるんだ！無理に一撃で仕留めなくて良い！」

デイン「……少し、焦ってたかの？」

作者「当たり前だ馬鹿。」

デイン「仕方無いのう。汚名返上せねばな。」

そして、手を交差させて“技”を放つ。

デイン「波あ！」

グレイシア『な……！？あがががつ！？』

影分身を含むグレイシア達が苦しみ出した。

デイン「やれやれ、脆いのう。」

再び交差、発動！

デイン「ふんっ！」

グレイシア「があああつ！？」

どさり！つとグレイシアが倒れる。

カンナ「……まさか、此処までやるとはね。」

作者「何、色々と乗り越えて来たんですよ俺達は。」

繰り出されるのは、ルージユラ。

ルージユラ「まったく、弱い子達ね。後でオシオキね。」

デイン「趣味が悪いのう。」

ルージユラ「あら、あの子達の喘ぎ声は最高なのよ？」

デイン「なら、とつとと終わらせるかのう。」

瞬間、ルージュラの影から“シャドーボール”が放たれた。

ドガッ！

ルージュラ「が……！？」

デイン「仲間が頑張ったのに仕置きとは何事かのう？」

その言葉を最後まで聞く前に、ルージュラは倒れた。

作者「ふう。」

カンナ「余裕ね。」

作者「そんな訳無いですよ。」

繰り出されるのは、オニゴーリ。

オニゴーリ「此处で…終わり。」

ゴゲンに交代。

ゴゲン「オイラに任せて！」

ゴゲンは“影”に隠れる。

オニゴーリ「出てこないと……攻撃は出来ない…。」

ゴゲン「解ってるよ！」

オニゴーリの影からゴゲンが出てくる！

オニゴーリ「……そこ！」

ゴゲン「てえい！」

ガンッ！

両者にダメージ。

その後、ゴゲンが倒されたが“呪い”を発動し体力を弱らせてキルトで倒した。

カンナ「……なんて……事なの……！」

作者「俺達の勝ちです。」

カンナ「少しは出来るみたいね……。解った……！次の部屋に行きなさい。」

そして、カンナはまた呟く。

——四天王の恐ろしさはまだ始まったばかりよ……——

そして、カンナの部屋を後にした作者達。

残ったカンナは、憑き物が落ちた様に晴れ晴れとしていた。

カンナ「やっと“氷の足”が止まった……！」

その言葉の真意は解らない。

ただ言える事は、彼女の足は進めない状況だった。

それを作者達が進める様にした。

ただそれだけ。

——次に立ち上がるのは、“闘の身体”——

そして、真実は何処にある？

四天王と氷水の足（後書き）

次回はシバ戦。

尚、速めに沈む場合は省略される。
どっちも。

四天王の闘の身体（前書き）

連載です。

とりあえず、瀕死者は元気の欠片で回復させました。

四天王、闘の身体

「四天王・稽古部屋」

今度の部屋は稽古部屋と呼べる場所だった。
その先に1人の“漢”が立っていた。

シバ「良く来た！挑戦者よ！」

作者「どうも、マサラから来た作者です。」

シバ「カンナを倒した様だが、俺を倒せると思っな！」

そして、直ぐにバトルに入ろうとするシバ。

作者「ちよっ！」

シバ「悪いが！今の俺は戦いを楽しみたいんだ！細かい話はもう入らないだろう？」

作者「くっ！この戦闘狂！」

シバ「褒め言葉だな！さあ、俺達の格闘パワーを受けてみるがいい！」

そして叫ぶ。

——ウー！ハー！——

「四天王のシバが勝負を仕掛けて来た！」

シバ「行けい！」

ハガネール「はあ！」

作者「行け！」

ゴゲン「再びの出番だ！」

ゴゲンは影からシャドーボールを放つ。
それがヒットした。

ゴゲン「どうだ！」

しかし、悠然と佇むハガネール。

ハガネール「こんなものか？」

そして、自らの岩の一部を投げつける！

ハガネール「ふん！」

——ストーンエッジ——

ゴゲン「わあああつ！？」

ダメージがでかい。

しかし、耐える。

ゴゲン「まだまだあ！」

ゴゲンは手を触手に変え、ハガネールに触れる。

ギューウウン！

ハガネールの体力が奪われる！

ハガネール「小賢しい！」

ハガネールは牙で噛み付く。

ゴゲンは避けた、しかし。

ピキピキピキッ！

ゴゲン「な……！？」

ハガネールは“氷の牙”で噛み付いたのだ。
徐々に凍りつくゴゲン。

先程の攻撃で体力を消耗したハガネール。

作者「受け取れ！」

シバ「使え！」

ゴゲンは何でも直しを使い、ハガネールは回復の薬を使った。
現状ではハガネールが有利だ。

しかし、ゴゲンはペタドレインを再び使う。

ゴゲン「てい！」

先程と同じく体力を吸収する。

そして、ハガネールは倒れた。

作者「危なかった…。」

シバ「やるな！次だ！」

繰り出されるのは、エビワラー。

エビワラー「さあ！殴り飛ばす！」

ゴゲンのシャドーボールで終了。

そして交代。

ディン「やれやれじゃな。」

繰り出されるのは、ガルーラ。

サイコキネシスで終了。

作者「うわ…。」

シバ「何と言う作業ゲー…。」

繰り出されるのは、サウムラー、カポエラー、カイリキーも一掃した。

勝利した。

作者「やばかった…。」

シバ「俺が……負けるとはな…。」

作者「ギリギリなんだが…。」

シバ「俺の出番は終わりだ…、先に進むと良い…。」
だがな、とシバは言う。

——亡霊達の餌食にならない様にな——

作者は亡霊に気になったが、先に進んだ。

残ったシバは何処かすつきりした様な、そんな表情をしていた。

シバ「これで、闘の身体も終わりか……。長かったな。」

何故そんな言葉を放ったのかは解らない。

ただ、何かを焦っていた様だった。

でも、そんな焦りは些細な事に過ぎないと思い知らされた。
ただ、それだけ。

シバ「次は負けないぞ！作者よ！」

闘士を燃やし、再戦を決めたシバだった。

——次に立ち上がるは、亡霊の主——

次回に続く。

四天王の闘の身体（後書き）

次回はキクコ戦。

尚、四天王達の過去話はまた今度。

四天王亡霊の主・亡霊の腕（前書き）

連戦連戦また連戦。

尚、実際はデインとゴゲンが沈んでいる。

被害はまだ少ない方だが、場合により甚大になる。

四天王と亡霊の主・亡霊の腕

「四天王・慰霊の部屋」

カンナの部屋程では無いが、此処も空気が寒い。
若干霧も出ている。

そんな霧の中から声が聞こえてきた。

キクコ「ヒーヒツヒツ！」

作者「……何だ？」

キクコ「やれやれ、シバもカンナもこんな若造にやられるとはね…。」

「

作者「悪いけど、これでも20代なんだよ。」

キクコ「そいつは驚いた！背が小さいから18に見えるよ。」

作者「……………」。(ゴオオオツ！)」

キクコ「おお！怖い怖い！」

でもね、と散々人を馬鹿にした様な口調を一変させる。

「——本当に怖いのは、どちらだろうね？——」

その言葉が放たれた時、部屋の温度が“消えた”

そう、表現出来ない温度。

熱いのか寒いのか、空気がある様で無い様な状態。

そう、例えるなら……。

——亡霊の腕の中に居るような——

作者「はっ！」

作者は正気に戻った。

キクコ「おや？戻っちまったかい。」

作者「何を……した……！」

キクコ「何もして無いよ。あたしの“気迫”に飲まれちゃったただけさ。」

作者「化け物かよ……。」

キクコ「ヒッヒッヒッ！化け物じゃあ無いけどね、“亡霊の主”ではあるさね。」

そして、戦いが始まるうとしていた。

キクコ「オーキドの爺と知り合いみたいだね？」

作者「そうだけど？」

キクコ「あいつは強い男だった。今じゃ見る影も無いがね。萌えもんの研究だけに没頭してる様じゃ駄目だ、萌えもんは戦わせる者さね。」

作者「そうは思わないがな。」

キクコ「……いつか、解る時が来るさね。嫌って程にね。さあ！あなたにも見せてあげるよ！本当の戦いをね！」

「四天王のキクコが勝負を仕掛けて来た！」

キクコ「行きな！」

ゲンガー「キシッ！」

作者「同じ萌えもんか……。」

ゴゲン「オイラの方が上だよ！」

互いに影の中に隠れる。

そして、影から同時に出てきて、技を出し合う。

ゴゲン「はあ！」

ゲンガー「せい！」

ガンッ！ドンッ！

両者はダメージを受けながら影に隠れる。

ゲンガーは隠れる際、影分身をして影を増やす。

ゴゲン「そんな小細工！」

シャドーボールをありったけに影に投げ入れる。

ドンッ！ドンッ！ドンッ！

影から闇が噴出する。

結果……、影から眼を回しながら浮いて来たゲンガーが出てくる。

作者「ふう。」

キクコ「やるねえ！しかし、こいつはどうする？」

繰り出したのは、ヤミラミ。

ゴゲンは再びシャドーボールを投げつける。

ヤミラミは倒れる。

ゴゲン「へへん！」

ゴゲンの顔にピントレンズが見えてくる。

装備品は使用する時実体化される。

発動しない時は見えない様になっているのだ。

兎も角、相手の急所を狙えたので勝ったのだ。

繰り出されたのは、又してもゲンガーだった。

先程と同じ攻撃を繰り出すゴゲン。

しかし、どちらも同じ攻撃だった。

そして、ゴゲンは急所に当たり倒れる。

作者「デイン！」

デインが出され、シャドーボールを投げつけた。
沈むゲンガー。

繰り出されるのは、フワライド。
デインは先程と同じ攻撃を仕掛ける。
沈むフワライド。

繰り出されるのは、ジュペッタ。
デインは先程と同じ攻撃をした。
ジュペッタは倒れる。

キクコ「まさか此処までとはね…。」
作者「不味いんですけどね…。」

繰り出されたのは、ヨノワール。
ヨノワール「死をあげる…。」

デイン「いらんわ！」

シャドーボールを乱射。

急所に当たった。

ヨノワール「きゆうっ…。」

眼を回して倒れる。

勝利！

キクコ「はん！大したもんだよ！」
作者「た、助かった…。」

キクコ「あんたの勝ちだ！爺が眼をつけただけの事はあるみたいだね！」

作者「そりゃどーも。」

キクコ「さあ！敗者の負け惜しみを言わせて貰おうかね！」

―― 龍の顔は恐ろしいよ？何せ牙が鋭いからね！ヒーヒッヒッ！

作者はその忠告を聞き、気を引き締めて進んだ。

残ったキクコは何か納得した様な顔つきだった。

キクコ「はんっ…、まったくあの爺の言うとおりだったかねえ…。」
作者達の戦い方は、何処か信頼している戦い方だった。

キクコ「…ふん、認めてやろうじゃないか。」

何を認めるのかは解らない。

しかし、何かを認めたくなかった“少女”の心は救われたのかもしれない。

キクコ「あーあー、亡霊の主も墜ちたもんだねえ。腕も崩れちまつた。」

その言葉とは裏腹に、何処か清んでいるキクコだった。

―― 龍の顔は恐ろしく、牙は研がれた。あるのは唯、弱肉強食のみ――

次回に続く。

四天王亡霊の主・亡霊の腕（後書き）

色々と死に掛けた。

しかし、少女の表現は無かったか。

まあ、何となく伏線を張ってみた。

無駄にだが。

四天王ノ龍の顔・研がれた牙（前書き）

いよいよ難関の場所。

逆鱗でいけるなら行きたい。

そして、此処を突破すれば真実は明らかになると、思う。

四天王・龍の顔・研がれた牙

「四天王・牙の部屋」

所処に龍の牙が地面から飛び出している。
その先に、四天王のワタルが居た。

ワタル「ようこそ、挑戦者よ。」

作者「マサラからきて」

ワタル「言わなくても良い。作者だろ？」

作者「……何で知ってるんだ？」

ワタル「何、このチャンピオンが教えてくれたのさ。信頼などと言言葉を信じる、下らないトレーナだね。」

作者「……何だと？」

作者は怒りを露にする。

しかし、そんな事などお構い無しに話続けるワタル。

ワタル「まあ、僕にとってそんな事はどうでも良いのさ。僕は龍の力を世に知らしめたいんだ。その為の礎になってもらう。」

作者「自己中心的だな……！」

ワタル「何とでも言うがいいさ！僕の信念を誰にも妨げる事は出来ない！」

だから、とワタルは言う。

——此処が君達の旅の終わりだ！——

最早言葉すら要らないと言わんばかりに、戦いの準備をするワタル。
ワタル「さあ！尻尾を巻いて帰りたくなっただかい？もつとも、逃が

す気は無いけどね！」

「四天王のワタルが勝負を仕掛けて来た！」

ワタル「行け！」

ギャラドス「ガアアアアッ！」

作者「行つてくれ！」

キルト「はい！」

威嚇で攻撃力を下げられたが、キルトは応戦する。

キルト「えい！」

眠り粉を発射する。

しかし、避けられる。

ギャラドス「はあ！」

龍の波動がキルトを襲う。

キルト「くっ！」

しかし、少しでもダメージを受け流し眠り粉を噴射。

ギャラドス「ぬ……う……！」

眠るギャラドス。

キルト「ガアアアッ！」

キルトは龍の力を込めた“逆鱗”を発動した。

ドゴンッ！

一撃で沈んだ。

繰り出されたのは、プテラ。

交代し、ゴゲンを出す。

ゴゲンは十万ボルトを発動！

沈むプテラ。

繰り出されるのは、カイリユー。
しかし、撃墜される。

その後に出てくるカイリユーも撃墜。

ワタル「なん……だと……！？」

作者「これが、俺達の手だ！」

繰り出されるのは、カイリユー。
それも撃破。

最後はボーマンダだった。

ボーマンダ「これが、最後だ！」

ボーマンダは自らの龍のオーラを最大限に高め、放つ。

ボーマンダ「喰らえ！」

ギユウウン……！バーン！

流星群がゴゲンにヒット。

ゴゲンは何とか耐えたが、最早一撃で終わってしまう体力だった。
しかし、呪いを発動しゴゲンは倒れる。

キルトが交代で出て、眠り粉を放つ。

ボーマンダ「ガア……！」

キルトは疾走し、逆鱗を放った！

キルト「ガアアアアッ！」

命中した龍の怒り。

そして、倒れるボーマンダ。

この勝負、作者達の勝利だった。

ワタル「馬鹿な……！馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿な馬鹿なああああああ！？」

作者「悪いけど、現実を認めるべきだぞ。」

ワタル「認めない！僕の……僕の龍軍団が負けるなんて認めるものか！」

作者「……ざけんなよ？お前は龍の力を知らしめるなんて言ってたが、実際は自分の強さを知らしめただけじゃねーか。」

ワタル「ち……ちg「違わない。」……。」

作者「……なあ、お前が駆け出しの頃を思い出せ。そうすりゃ、解るだろ。お前の中の大事な事がよ。」

そう言つて、作者は進んで行つた。

作者は考えていた。

キルト「どうしたんですか？」

作者「いや、ワタルが言っていた言葉が気になってな。」

キルト「酷いですね！私達の事を下らないトレーナーって教えるなんて！」

作者「……。」

キルト「どうしました？」

作者「いや、なんでもない。」

作者は一つの確信を得ていた。

そして、全ての辻褄も合うという事も。

真実の扉は直ぐ其処だった。

敗北したワタルは思い出していた。
自分の駆け出しだった頃を。

あの頃、トレーナーとして新米で未熟だった自分。

トレーナーに負けて馬鹿にされた時もあった。

良い勝負だったと、気の良い奴とも出会った。

何時の頃からだっただろう？

自分が負けたくないと思い始めたのは？

必ず勝てる保障がある訳では無いのに、勝つと信じ込んでいた。

そうすれば、周りは敬うと思い始めた。

何時からだろう？自分がこんなにも腐ってしまったのは？

ワタル「は……はは……！まさに道化とは言ったものだな……。」

けれど、ワタルは大切な事を思い出した。

—— 仲間を信じる事が、トレーナーとして唯一出来る事じゃないか——

ワタル「龍の顔もこれまでか……、牙は抜かれゆく物だったな。」

涙混じりに呟く。

彼の心の中の“欲”は涙で流れていった。

—— 真実を知り、真実を隠していた者。全てを絶望した心は何を思う？——

次回に続く。

四天王と龍の顔・研がれた牙（後書き）

予約投稿しようとしたが、失敗した。

あと、もう解ってると思うが真実はあいつが知っている。
俺設定だな。

頂点へ絶望した心 前編（前書き）

さて、何故こんな連続投稿してるかと言つと、明後日に試験です。
現実逃避です。

明日は地獄の面接練習です。

さあ、合格してやるぜ！

……怖いけどな。

頂点へ絶望した心 前編

「殿堂入り部屋前」

作者達は階段を登って行くと、“努眼”が居た。

キルト「……………え？」

キルトと仲間達が信じられないといった顔をする。

努眼「お久しぶりですね、作者さん。」

作者「そうだな、リーグ突入前振りだな。」

和やかに話す2人。

けれど、友好的では無い。

作者「なあ、お前に聞きたい事があるんだけど。」

努眼「何ですか？」

そして、真実が暴かれる。

作者「お前だろ？全ての黒幕は。」

その言葉は、其処に居た者達にとっては信じられない言葉。

努眼「……………何の話ですか？」

作者「おかしいんだよ。お前がヤマブキに居た事や、タワーに居た

事が。」

努眼「別におかしく無いじゃないですか？貴方と腕試しがしたいから貴方を追いかけてシルフに入っただんですよ？タワーだって墓参り位しますよ。」

作者「違うな。」

努眼「何が違うんですか？」

作者「俺はビルを開放した時、監視カメラを見せてもらったんだ。其処にエビソバと会話しているお前が映っていたんだよ。タワーにも建設当時のカメラがあつて、調べてもらったらそれにも映って痛たんだよ、お前が自分の萌えもんを使つてガラガラの亡霊に“催眠術”を掛けている映像がな。」

しかし、努眼は知らないと言わんばかりな反応をする。

努眼「仮にその話が本当だとして、何で僕がそんな事をしなくちゃならないんですか？何の特にもならないのに？」

作者「簡単な話だ。お前、萌えもんを憎んでいるだろ？」

その言葉を聞いた時、努眼の表情が歪んだ。

努眼「何故、知っている？」

作者「ここに来る前、マサラでオーキド博士にあつたんだ。そして、お前の両親の知り合いが来たんだ。それで、お前が萌えもんを憎んでるって解ったんだ。当時5歳の頃、お前は萌えもんによつて両親を殺されたらしいな？これは推測だが、傷ついたお前に何者かが言葉巧みにお前を復讐鬼に仕立て上げたんだろ。少なくとも、その知り合いが怪しい男とお前が会話をしているのを見たからそう推測しただけだが、あながち間違つては無いだろう。兎も角、お前が黒幕と確信したのはサカキから届いた手紙からだっただ。」

そして、1枚の手紙を取り出す。

作者「リーグに来て、修行をしていた時手紙が降ってきたから何か
と思ったが、お前がロケット団を指示していた事が解つたんだ。正
確にはロケット団員じゃなかったらしいがな。大方、お前を誘い込
んだ人物だろう。どうする？まだ言い逃れする気か？」

笑い出した

その笑い声は狂気に満ちていた。

努眼「そう！そうですよ！全部！全部僕の仕業です！だってそうでしょう？萌えもんが両親の命を奪ったのだから！それを憎んじやいけないとでも？」

作者は思ったのはそれだけだった。
だがしかし、呆然としている気は無い。

努眼「いいえ！間違ってるんですよ！萌えもんさえ居なければ両親は死ななかつた！居なければ人は死ななかつた！萌えもんは恐ろしい生き物なんですよ！排除しなければならいんですよ！」

作者は最早言葉では伝えられないのか？と思った。

そんな想いとは裏腹に、努眼は萌えもんバトルを準備した。

努眼「ここで貴方達を殺せば、僕の邪魔者は居なくなる！行け！道具達よ！精々相手を殺して役に立つんだな！」

作者「努眼……、俺達は終わらない！お前の下らない絶望を壊してやるよ！」

——死闘が始まった——

頂点へ絶望した心 前編（後書き）

努眼のキャラが崩壊したと思う。

矛盾は無いと思うけど、念の為報告を。

受験怖い……（ガタガタ！）

頂点へ絶望した心 後編（前書き）

さあ、この話もいよいよ大詰めかもしれない。
まあ、第1部的な感じでもある。
とりあえず、バトルです。

頂点へ絶望した心 後編

く殿堂入り部屋前く

くチャンピオンの努眼が勝負を仕掛けて来た！く

努眼「道具よ！行きなさい！」

虚ろなムクホーク「ハイ、ワカリマシタ。」

作者「何だよあれは……。」

キルト「薬の匂いがします……。」

努眼「クツクツク！道具共に力を与えてやったんだ！感謝して欲しい位だね！」

作者「ざけんな！」

ゴゲンを出して、戦闘開始。

ゴゲンは疾走し跳ぶ。

ゴゲン「喰らえ！」

十万ボルトがムクホークに直撃する。

ムクホーク「ガアアア！？」

ドサッ！

ムクホークは倒れた。

繰り出されるは、リザードンだった。

やばい表情のリザードン「あは……あはは……♪クスリ……♪」

最早何も考えられない状態なのだろう。

廃人まであと1歩という所か。

キルト「リザードン……。」

同じ所で生まれた彼女にとって、それはショック以外の何者でも無いのだろう。

そんな彼女を眠らせる為に、逆鱗を放つ。

そして、彼女は落ちた。

キルト「ゆっくり眠って。」

死んではいないだろう。

そして次に出てきたドサイドンは交代したゴゲンのシャドーボールで沈んだ。

繰り出されるのは、ナツシー。

ゴゲンのシャドーボールで沈んだ。

努眼「使えん屑共め！」

作者「いい加減にしやがれ！」

繰り出されるのはフリーディンだった。

ゴゲンの（略）

最後の1匹はギャラドスだった。

力に飲まれたギャラドス「ハカイハカイハカイ！」
ゴゲン「いい加減にしやがれえ！」

十万ボルトが当たる。

しかし、ギャラドスには微ダメージしか無い。
ギャラドス「ガアアアア！」

吹っ飛ばされるゴゲン。

作者はカリアを出す。

カリア「まったく、龍の恥ね！」

そして疾走し、龍の波動を繰り出す。
当たった。

そして、倒れるギャラドス。

この瞬間、勝敗は決した。

作者達の勝利だ。

努眼「……何倒れてるんだよ？早く立てよ？あいつ等を殺せよお！？」

作者「お前の負けだ。」

努眼「負け？僕が？君たちに？負けた？冗談も休み休み言え！？」

努眼は必死の形相で怒鳴る。

しかし、努眼の手持ちは全員瀕死状態。

動ける訳も無い。

とうとう努眼は最悪の手段に出た。

努眼「お前等が殺さないなら……！」

ポケットからナイフを取り出し、作者達目掛けて振り回しながら近づく。

努眼「僕が殺してやるよおおおおお！……！」

作者は動じず、避けて腹部を蹴る。

メキィッ！

アバラが折れる音がした。

努眼「ぐあああああ！？」

作者「なあ、努眼よう。お前はなんでトレーナーになったんだ？」

行き成りの質問に努眼は戸惑う。

作者はそんな努眼を無視して話し続ける。

作者「俺はな、誰かを信じるといいう事が出来なかったんだ。」

作者の言葉は以外なものだった。

——人を上辺しか見ていなくて、信じるなんて事は出来なかった。怖かったからな。

騙されるのが嫌で、独りになろうとした。

でもな、独りは寂しいんだ。

でも、信じるのは苦手なんだ。

そんな俺は萌えもん達に出会ったんだ。

あいつ等は人を信じている。

だから聞いたんだ。

何でお前達萌えもんは人を簡単に信じるんだ？ってな。

そしたら、こう言われたんだ。

確かに騙される子もいます。しかし、そのトレーナーが間違った道を進まないと信じて、また間違ってしまったても全うな道に戻ると信じているから、私達萌えもんは信じるんです。って言われたんだ。

俺はそんなじゃ生きていけないと思うぞって、言った。

でも、例え死ぬような事になっても自分のトレーナーは最高のトレーナーだって誇れるんだと。

だから、恨み言は言うかもしれないけど、恨まずにそのトレーナーが幸せである事を願うんだと。

俺は、そんな馬鹿正直なこいつ等に出会って、自分の考えがちっぽ

けと思っ
たんだ。

だから、俺はこいつ等を信じる。

そう決めたんだ

長い作者の話。

何処か伝わり辛い所もあるが、これが彼の本音であり“本心”であった。

努眼はあの日、まだヒトカゲだった頃のリザードンを思い出した。

あの日はドーピングで勝って、それでもっと投与しようと思って薬を渡したら。

笑顔でありがとうと言われた事があった。

あの時の笑顔は努眼にとって人生で一番幸せに感じた時だった。

そんな事を思い出した努眼は、泣いた。

努眼「あ……あ……ああああ……！ああ……！」

涙を流し、リザードンの元に行く。

そして、泣きながら謝った。

努眼「ごめんよう……！ごめんよう……！う……う……う……う……う……う……」

それは、彼の心が元に戻った瞬間だった。

ここで終われば、大団円だったかもしれない。
しかし、闇は近くに居た。

エビソバ「やれやれ、元に戻ってしまっただか。」

そんな声が聞こえてきた。

作者は後ろの出入り口を睨む。

作者「エビソバ！」

エビソバ「久しぶりと言っておこう。」

作者「なるほど、お前が本当の黒幕か。」

エビソバ「ああそうさ、俺の仕業だ。全てな。」

作者「……その全ては努眼の両親を殺した事もか？」

作者はずっと考えていた。

いくら萌えもんが強力な力を持っているとはいえ、無闇に命を奪うだろうか？と。

そして、誰かに命令されていたのなら説明が付く。

エビソバ「其処まで解ったか。流石にロケット団を倒し、チャンピオンを倒しただけの事はある。」

作者「ふざけるな！貴様の所為でどれだけの人や萌えもんが不幸になったと思ってるんだ！」

エビソバ「ふざけてなどいないよ。全部筋書き通りさ。俺が世界の王になる為のな。」

作者「どういう……！？」

エビソバの腕が“伸びた”

ズンッ！

作者はギリギリかわした！

作者「くっ！」

手持ちの萌えもん達も驚いてはいたが、直ぐに応戦した。

キルト「せい！」

デイン「喰らえ！」

ゴゲン「てやつ！」

種爆弾・サイコネシス・十万ボルトを喰らわせる。
しかし、エビソバは人間離れした身体能力で避けた。

その時、後ろの扉から誰かが上がって来る。

エビソバ「ふむ、ここらで引き上げるとしよう。目的のものは手に
入った事だし。」

作者「何だと？」

エビソバ「さらば。」

エビソバは閃光を放ち、逃げた。

作者「くそ！一体どうなってるんだ！？」

そして、上がって来た人物がこの惨状を見た。

オーキド博士「これは…一体！？」

作者「博士！」

オーキド博士「作者君！何があつたんじゃ！？」

事の顛末と今までの事を話した。

オーキド博士「そんな事があつたとは…。しかし、今はそんな事を言ってる場合じゃない！」

作者「何かあつたんですか？」

オーキド博士「君の手持ちに伝説の萌えもんが居たな？」

作者「あいつ等に何かあつたんですか！？」

オーキド博士「突然ボックス内に攻撃技が発動されたようなのじゃ。その際、攻撃を掠って血を流したらしいのじゃ。多分そのエビソバが言つてた目的の物とは…。」

作者「伝説の血…！」

オーキド博士「恐らくのう。とりあえず君は殿堂入りの部屋に行つて殿堂入りを登録してきなさい。努眼はわしが見ておく。」

作者「今は殿堂入りをしてる暇は…。」

オーキド博士「良いか作者君。殿堂入りを果たした者は色々な場所に行ける権利書を貰えるのじゃ。もしそのエビソバが殿堂入りをしないと入れない場所に潜伏していたらどうする？」

作者「……解りました。」

オーキド博士「うむ。こんな時にこんな事を言われても嬉しくないと思うが、殿堂入りおめでとう！」

作者「今度はこんな事態が起こつてない時に言われてみますよ。」

作者は殿堂入りの部屋に行つた。

〈殿堂入りの部屋・内部〉

作者が歩いていくと、大きな装置があつた。手元の説明を見て、殿堂入りの記録をした。

キルト・デイン・シヨナ・カイア・ゴゲン・ラスラ

殿堂入りおめでとう！

そんな言葉が流れたあと、カードが出てくる。

こうして、殿堂入りを果たしリーグを制覇した作者達。
しかし、まだ敵は残っている。

そいつ等を倒し、一夫多妻を達成する為に作者達は旅を続ける。

第1部 完

頂点へ絶望した心 後編（後書き）

一部はオリジナルです。

第1部は完了しました。

2部はナナシマの途中から、もしくはハナダの洞窟でミューツ―戦手前から開始する予定。

皆さん、俺の合格を祈ってね！

新天地と財宝集め（前書き）

まあ、面接は手応えありました。

面接官の人が良い人だったので、緊張が解れた。

まだ、受験前の人・落ちてしまった人。

無責任だとは思いますが、諦めずに頑張ってください！

俺も多くの人（友人・先生方）に助けてもらいました。

だから、1人では出来ない事でも誰かに手伝ってもらう事は恥じる事じゃないです。

あの面接練習の日々は辛かったですけど、今は友人達に頼んで良かったと思っているんですから。

新天地と財宝集め

く灯火山・出入り口付近く

ドガッ！バキッ！

萌えもんバトルで技がヒットする音が聞こえた。

ドラピオン「きゅうく。」

忠実なロケット団員「くそ！何て奴だ！」

ロケット団員「ロケット団に喧嘩を売るとどうなるか解らないのか！？」

そんな事を言われても特に気にはしない。
何故なら――

作者「ロケット団は解散してるけど？」

ロケット団を壊滅した張本人なのだから。

忠実なロケット団員「ふ、ふざけるな！」

作者「ふざけて無いけど？」

ロケット団員「とりあえず、撤退だ！良いか！この洞窟に入るなよ！絶対入るなよ！」

そう言つて、逃げていくロケット団員達。

作者「入れて意味なのか？」

ムロン「さあ？お約束なんだと思うよ？」

キルト「入っちゃいましょう。」

さて、作者達は現在1の島に來ている。
あの出來事があつてから色々あつた。

まずは、努眼の事だ。

唆されていたが、自分の意思でもあつたため警察に行くかと思つた。
しかし、オーキド博士の口添えと世間一般からの同情、政治家達からの謝罪もあつた為、重々酌量の余地があつたので刑罰になつた。
それでも、罪状はあつた。

〔罪状〕

被告人 ツトメ オーキドは巨悪の犯罪者 エビソバ を捕まえる
まで旅をする事を禁ずる。
正し、エビソバを捕獲するならばあらゆる所の探索を許可する。

とまあ、こんな感じの罪状だつた。
要訳するに、「エビソバを捕まえるなら旅を続けても良い、捕まえた後は無罪放免だ。」と言う温情だつた。

ともあれ、努眼は現在ナナシマを回っている。
作者は1度、1の島に行った際努眼と会つた。
努眼曰く「4の島にロケット団が向かつたらしいですよ。カンナさんからそういう情報が入りましたし。エビソバの手下か確認したいですが、別の島でも変な連中が居ると言う情報があつたので調べてきます。」との事。

尚、情報はチャンピオン専用シーバーで連絡が可能。

作者は殿堂入りしたがチャンピオンになる気はさらさら無いので辞退した。

努眼も辞退しようとしたが、次の挑戦者が来るまでやって欲しいと頼まれたので頂点に居る。

……密かに、再び作者達が挑み倒されたら譲ろうと企んでいるのは余談。

話を戻すとして、作者達はマサキの友人のニシキに頼まれ“ルビー”の探索に灯火山まで来ていた。

其処でロケット団員達が居たのでしばらく様子を見ていた。洞窟らしき所を見張る様に立っていた。

あと、1人が合言葉を忘れていたらしくもう1人が教え様としていた。

『タマタマ またまた』

1つ目のパスワードがこの言葉らしい。

2つ目を聞く前に見つかったので戦闘し、勝利した。

そして現在、洞窟の最深部まで来ていた。

作者「お、あれは……。」

台座の上に赤い宝石がある。

“ルビー”を手に入れた！ ドオオオオ！

作者「……今、効果音変じゃなかったか？」

チルド「気のせいじゃ無い？」

作者「そうかなあ？」

ネタであつた。

その後、ニシキにルビーを渡した。

ニシキに対となる宝石も捜してきて欲しいと頼まれ、レインボーパスを渡された。

ニシキ「これがあれば、ナナシマ全部に行けますよ！だからお願いします！」

作者「解った。」

こんなやり取りがあつた。

そして、次に向かう作者達だつた。

くおまけく

ヤマブキにファンクラブと言う集会所があるらしく、作者のファン

も居ると言う。(マサキ談)

とりあえず、見に行つてみた。

作者「こんにちは。」

「!?!」

3人の男女が驚いて作者を見る。

少女「も、もしかして……?」

少年「作者さん……?」

作者「あ、ああ。そうだけど?」

紳士「おお!貴方が!」

ワイワイ!ガヤガヤ!

その後、サインして欲しいやら萌えもんを見せて欲しいやらで大騒ぎだつた。

因みに、作者が活躍すればするほどファンが増えるらしい。

とりあえず、アイドルの気持ち少し解つた様な気がした作者だつた。

く余談く

ファン名簿

ミカン 少女

ハマダ 少年
クリスト 紳士

新天地と財宝集め（後書き）

第2部の開始です。

あと、FF零を買ってきました。

更新の大幅低下注意。

まあ、萌えもん様のPSPはバッテリーが無いから家でしか出来ないから、学校でやると思う。

事件は会議室で起きてるんじゃない、現場で起きてるんだ！と言っが、予想外な

まあ、今回は帰らずの穴で事件は起きています。

そして、作者の本当の出身地と身体の変化に気づく回。

事件は会議室で起きてるんじゃない、現場で起きてるんだ！と言うが、予想外な

「今回のあらすじ」

レインボーパスで5の島に来た作者達。

萌えもんセンターにジュンサーさんが居た。

困り顔だったので作者が事情を聞いた。

ゴージャスリゾートに住むアキホと言うお嬢様が行方不明になったらしい。

んで、ゴージャスリゾートまで行き情報を集めて帰らずの穴へ。

帰らずの穴を探索し、不審者と間違われてバトルして勝利。

事情を説明し、脱出して任務完了。

アキホ「もう此処までで結構ですわよ。ではごきげんよう。」

礼の一つも無しであった。

時間は再び現在の帰らずの穴へ。

此処まで説明なのは、そのイベントを完了してしまったのが原因です。

ごめんなさい。

「帰らずの穴・救出地点の部屋」

作者達は帰らずの穴に来ていた。

キルト「酷い方でしたね！お礼の言葉1つ無いなんて！」

くおん「そうですよ！ご主人様が来なかったらどうするつもりだったのかしら！」

ムロン「あれは人としてどうかと思うね。」

作者「だからって、此処にあのお嬢様が何か落としてないか確認しに来る事は無いだろ……。」

様はお嬢様の私物か何かを売ろうと此処に来ただけであった。

……此処だけの話、ゴージャスリゾートに居るアキホ以外のお嬢様方から金を巻き上げれば良い話である。

お守り小判を着ければ約40000は手に入るし。

そんな余談は置いて、チルドが何か見つけた。

チルド「ねー？ スカーフを見つけたよ？」

シルク生地のスカーフだった。

ムロン「あのお嬢様の落し物かな？」

キルト「ノーマル系の萌えもん使ってたから恐らくは。」

くおん「後はどの位の値で売るかですね。」

作者は思う、恐ろしいと。

ふと、チルドがスカーフを発見した場所に洞窟があった。

作者「なあ、あの洞窟に行ってみないか？」

キルト「そうですね！ まだ何か落ちてるかも知れませんし。」

奥に進むと、何かの気配がした。

しかも、この気配は……。

作者「…………マジか。」

——伝説と出会った時の気配——

つまり、この奥には伝説系統の萌えもんが居ると推測できた。

作者「…………。」

キルト「ど、どうしますか？」

作者「虎穴にいらずんば虎児を得ずって奴だ。行こう。」

進む。

そして、威圧感の存在は佇んでいた。

???「……………」

作者「あんたは一体何者だ？」

そう聞いたところ、そいつはこう答えた。

ギラティナ「私はギラティナ。そう呼ばれている。」

伝説の萌えもん——ギラティナはそう答えた。

作者「ギラティナ？」

ムロン「なるほど、あの伝説のか。」

作者「どんな伝説だ？」

ムロン「伝説には時や時空、空間や世界を超える力を持つ者も居るらしいんだ。ギラティナの場合は時空と空間を渡る力を持つてる話だよ。その下位の伝説の萌えもんを諫める役割を持つんだ。」

作者「なるほど。」

時空と空間の覇者（もしくは女王）と言う事だろう。

しかし、ギラティナは作者を訝しげに見る。

ギラティナ「貴様は一体何なのだ？」

作者「え？」

ギラティナの言葉に作者の萌えもん達が疑問符を浮かべる。

そして、萌えもん達にとっては衝撃の事実が判明する。

キラティナ「貴様は“この世界”の人間では無いだろう?」

萌えもん達『……………え?』

作者「……………」

空気が凍った。

——薄々気づかれるとは思ったが、まさかこの時に解るとはな

エビソバを追いかけてるこの時期、今中間達の信頼関係を崩すと言う事は、エビソバの追跡は元よりトレーナーとして旅を続けられなくなるということだ。

ワザと隠していた訳では無いが、此処まで先伸ばして黙ってる事は隠していたと言う事になる。

即ち、萌えもん達を信用していないと言う事になる。

しかし、作者の不安は杞憂に終わった。

ギョッ!

キルトが作者を抱きしめる。

作者「え?」

キルト「大丈夫、作者がどんな所で生まれたとしても私はそばに居るから。」

他の萌えもん達もそうだった。今まで築いてきた信頼関係と“絆”はそんな事では無くならないという事が再確認できた。

その光景を見ていたギラティナは何処か不機嫌そうな顔をしていた。

ギラティナ「……………まあ良い、貴様等は人の寢所に入って来たんだ。蹴散らしてくれる！」

頭の王冠を被り直し、威嚇する。

伝説の戦いが始まった。

[illegible]

キルト「もしかして、羨ましいんですか？」

その一言がギリティナの暴走に拍車をかけた。

[illegible]

その瞬間、ギラティナの眼前に“眠り粉”が現れた。

「ギラティナ……しまっ！」

大きく息をしていた為、吸い込んでしまう。

そして、眠るギラティナ。

作者がハイパーボールを投げつける。

結果は次回に持ち越しです。

事件は会議室で起きてるんじゃない、現場で起きてるんだ！と言っが、予想外な
♂の萌えもんとメタモンを使って卵を産ませ、♀に孵化させようか
と考えている。

……下種^{げす}な発想だよなあ。

新事実と決意と伏線張り（前書き）

今回は作者の新事実？の発表です。

零は味方が死にまくる。

召喚するだけでも死ぬって……、燃費が悪いよなあ。
MPが0、体力1なら解るけど。

新事実と決意と伏線張り

「4の島・萌えもんセンター」

作者達は何故か気まづかった。

空気が重い。

理由は簡単だ。

ギラティナが怒ってるんだぜ

ギラティナ「……………（ギロツ！）」

ひっ！？

……文章すらツツコムとは……恐るべし。

因みに此処は個室です。

クチバの時よりかは人は居ないが念の為である。

さて、そろそろギラティナが怒ってる理由について話そう。

あの帰らずの穴でギラティナをゲットした後、努眼の情報を元に4の島に来ていた。

んで、センターに入ったら仁王立ちしているギラティナが居た。

部屋に連れて行かれて、今現在。

作者「なあ、何で怒ってるんだ？」

ギラティナ「……………」

だんまりを決め込むギラティナ。

しかし、何時までもそうしている気は無い。

作者「あんたはキルトが言った事を気にしているのか？」

ギラティナ「……そうではない。」

作者「じゃあ何故？」

ギラティナはふうつとため息を付き、作者を見据える。

ギラティナ「貴様、人間では無くなってるぞ。」

作者「——え？」

一瞬、何を言ってるのか解らなかった。

ギラティナ「……知らなかったのか？」

作者「……………あ、ああ。」

ギラティナ「自分からなつた訳では無いのか…。」

作者「どういう事なんだ？」

ギラティナ「その前に、貴様はどうやってこの世界に来た？」

作者は来た時を話した。

ギラティナ「ふむ。その光が原因だろう。」

作者「今更だが、あの光ってなんなんだ？」

ギラティナ「恐らく“気まぐれなる光”だろう。」

作者「気まぐれなる光？」

ギラティナ「名前の通り、気まぐれに現れて、気まぐれに人を移動

させ、気まぐれに人を人ならざる存在にする。別名は転機の生贄。」

作者「行き成り物騒な名前になったな。」

ギラティナ「人の人生を終わらせると言う意味だ。」

作者「なるほど。それで、俺はどうなってるんだ？見た感じ外見は何とも無いが。」

「グラティナ、まずは寿命が人では無い。簡単に言えば、寿命で死なないと言う事だ。」

作者「寿命が無くなった？不老不死って奴なのか？」

「ギラティナ、いや、不死では無いな。どんな病気も掛からないみたいだ……ん？」

ギラティナが何かを見つけた様な声を出す。

作者「どうした？」

「……風邪は引くみたいなんだ。」

作者「……あれか？看病フラグ？」

「ギラティナ、さて他には……、どうやらお前に捕まった萌えもんもお前と同じになるみたいだな。………？」

作者「……………は？」

問

[illegible]

「ジョーイ、うるさいですよ！」

2人 すいません。

落ち着いて状況整理。

「ギラティナ、まさか此処まで規格外な気まぐれを起こされるとはな……。」

作者「マジか……。どうすれば？」

「ギラティナ、今更言つてもどうにもなるまい。まああれだ。」

作者「？」

ギラティナ「よろしく頼むぞ、作者よ。」

作者「……こちらこそ。」

〈余談〉

ギラティナはドアの前に立った。

ドアを開くと、作者の手持ち&ボックス勢の萌えもんが居た。その後、一斉に飛びかかってきたが軽く回避して脱出した。

新事実と決意と伏線張り（後書き）

何とか主人公設定に繋がられた。

ギラティナの名前付けないとなあ。
あと、Wiiのピクミン2買った。

く生まれ故郷を護りたい！く元氷水のカンナ（前書き）

四天王止めてませんけど。

里帰りをしようとしていた時にそんな話を聞いたから帰省してるだけ。

「生まれ故郷を護りたい！」元氷水のカンナ

「凍て滝の洞窟」

作者達はこの洞窟にカンナが入って行ったという情報を聞き、洞窟内に居る。

作者「しかし、氷水の使い手だけに寒い所で育ったんだな。」

チルド「あたいは全然寒くないわ！」

タルト「マスターがボクの背中に乗ってる……！そしてこの後、寒くなつて震えているボクに＜表現出来ません＞に違いない！」

……… 1名の妄想の熱が暖を取っているとは思ひもなかった。

（作者談）

そんなこんなで、大きな水が流れ落ちる滝の前に来た。

作者「滝が……、どうやって登るか？」

チルド「作者、あたいの肩に掴まって。」

作者「こうか？」

チルド「しっかり掴まってよ！」

ビュンツ！

一気に滝の水面を滑る様子上っていく！

バシヤツ！

着水時、チルドは作者をお姫様抱っこしていた。

作者「な、何でお姫様抱っこなんだよ!？」

チルド「今がブームなんだって。」

作者「誰が言った!？」

タルト「（ギリギリギリッ!）」

ハンカチを噛み締めるタルト。

作者「お前が犯人か!」

とまあ、こんな調子で奥を目指していた。

〈凍て滝の洞窟・奥地〉

誰かが言い争っている声が聞こえてくる。

カンナ「ここの洞窟の萌えもんに出したらただじゃ置かないわよ!」

ロケット団員「うるさい女だ。片付けるぞ。」

カンナがロケット団員達とバトルをする所だった。

作者「カンナさん!」

カンナ「作者……!何故ここに?……話は後よ、私と一緒にこいつ等を倒すわよ!島の萌えもんを売りさばいている下種共よ!」

そっちを頼む、と言われて片方のロケット団員とバトルする。

ロケット団員「邪魔をするな!」

ロケット団員はフジギバナを出す。

目付きの悪いフジギバナ「ヒヤハー！消毒消毒♪」

作者「行ってくれ！」

カイア「キルトとは似ても無いわね。」

ドリルダイブで仕留める。

ロケット団員はリザードンを繰り出すが、キルトの眠り粉と逆鱗を喰らい撃沈。

ロケット団員「く、くそ！」

最後の1匹のクロバットもカイアで沈んだ。

ロケット団員「こんな筈では……。」

作者「年貢の納め時だな。」

こちらが終わった時、カンナも勝利していた。

カンナ「あんた達、捕まえた萌えもんは何処に居るの！？ぶっ潰してやるわ！」

ロケット団員「そ、そんな事言うわけ無いだろ！」

カンナ「……言わないなら、氷付けになるわよ……？」

酷く低い声でそう言う。

カンナ「仲間を虐められて私のラプラスも怒ってるわ。」

ラプラス「仲間は何処！」

カンナ「行きなさい！」

ラプラス「コオオオオツ！」

ラプラスが水色の球体を溜める。

ロケット団員「わっわーっ！解った！捕まえた萌えもんは5の島の倉庫だ！も、もう教えてやったから俺等は帰るぜ！」

蜘蛛の子散らす様に逃げるロケット団員。

捨て台詞にこんな意味深を残す。

ロケット団員「倉庫に入れるか解りませんけどね……。」「

一先ず落ち着いた。

カンナ「作者ありがとう。それにしても……あのサカキの手下もどんな教えをしてきたのかしら？」

作者「エビソバの手下かもしれないですね。」「

カンナ「生まれ故郷にあんな奴等が来るなんて信じられないわね……。」「

とりあえず、作者達は外に出た。

く4の島・カンナの家く

その後、お礼と言う事でカンナの家に来ていた。

カンナ「はいどうぞ。」「

作者「あどうも。」「

お茶をだされ、啜る。

キルト「ぬいぐるみがいっぱいですね〜！」

部屋は萌えもののぬいぐるみだらけだ。

カンナ「ふふつ。帰ってくる時いつも買って帰るのよ。」

他愛も無い話。

しかし、カンナの顔は少し暗い。

作者「どうしました？」

カンナ「ええ、ちょっとね……。」「

そして、深呼吸をした後話し出した。

カンナ「今悩んでいるの。」「

作者「悩みですか？」

カンナ「ええ、自分が育った島に何かあっても萌えもんリーグに居ては気づくことは出来ない。それは無責任な事かなって…。」

作者「……俺にはカンナさんが何で四天王をやっているか知りませんが、少なくとも無責任では無いと思いますよ。無責任って言うのは、知ってるのに誰かに任せて自分は知らない振りをする事です。カンナさんはロケット団がこの島に居るって聞いたから帰省したんでしょう？島の人や萌えもんを護ろうとしたカンナさんを無責任と呼ぶ人は居ないと思いますよ？」

長々と話した。

カンナ「……そうね、護ろうとする事は無責任では無いわね。」

作者「そうですよ。」

カンナ「ありがとう、少し元気出たわ。」「

その後、次の島に行く為にカンナの家を後にした作者達であった。

く生まれ故郷を護りたい！く元氷水のカンナ（後書き）

伏線なのかな？

クリスマス来る前にデリバートゲットしたい。

祝！100話突破！

何だがこれと言って特に何か企画してる訳では無い。

まあ、外伝的な物で何とかしとこう。

1話の前に書くか。

祝！100話突破！ 何だがこれと言って特に何か企画してる訳では無い。

（6の島・萌えセンター）

あの4の島の戦いの後、6の島に向かった。
萌えセンターに入ると努眼が居た。

作者「お、努眼。」

努眼「作者さんですか。」

作者「何か解ったか？」

努眼「残念ながら。ただ、ロケット団の残党……と言うより、解散を知らされてないメンバーが暴れてる様ですね。」

作者「それは知ってる。さっきぶっ飛ばしてきたから。」

努眼「そうですか。……エビソバはカントーに潜伏しているかも知れないですよ？」

意味深な言葉を発する努眼。

作者「どういう事だ？」

努眼「エビソバは伝説の萌えものの血を使って世界征服を目論んでいるんですよ？」

作者「あの口ぶりからしてはそんな感じだったな。」

努眼「なら、まだ何処かに見つけていない隠れ家があると思うんです。研究資料を持ち運びするのに、船を使うと言うのはどうも腑に落ちませんし。」

作者「空を飛んだら見つかるしな。」

努眼「とりあえずカントーに戻って情報を集めてみます。」

作者「あ、戻る前に聞きたい事が。」

努眼「何ですか？」

作者は宝石について聞いた。

努眼「……ふむ。そういえば、現地の人の話によると此処から南の遺跡——点の穴に宝石が眠っているらしいですよ？」

作者「そうか、行ってみるよ。」

努眼「お気をつけて。僕も萌えもん達のリハビリをしながら探します。」

作者「……後悔してるか？」

努眼「ええ。ですけど、その分の責任は取ります。それが償いですから。」

作者「頑張れよ。」

……余談だが、努眼のボール内が激しく揺れていたのは気のせいだろう。

……ハートが出ていたのも気のせいだろう。

く点の穴く

作者「穴か……。点字を読む限り進む道順は上・左・右・下か……。」

キルト「回りくどいですね。」

チルド「入り口を開ける時も、居合い切りを使わないといけないもんね。」

作者「それだけ用心してるって事だろう。」

最下層まで来た作者達。

台座の上に青い宝石が置かれていた。

作者「これが宝か。」

手を伸ばした瞬間！

ボワッ！ボワッ！ボワッ！

突如として洞窟内に煙が吹き出る！

作者「罨か！？」

ムロン「違う！煙玉だ！」

そして、黒い影が台座の上にあった宝石を奪っていく。

???「貰ってくぜ！売れるぜ！」

そして、影は去っていった……。

煙が晴れた時にはもう、宝石は無かった。

作者「やられたな……。」

そんな諦めに近い言葉を放つ。

しかし、ディンが何かを見つける。

ディン「何じゃこれ？」

作者「何が？」

ディン「『カブトは 飛ぶか』じゃと。」

作者「そういや、灯火山の前に居たロケット団はパスワードがどうか……。」

ムロン「『タマタマ またまた』って言ってたね。」

キルト「5の島に変な倉庫が出来たって、現地の人が言っていましたね。」

作者「おいおい、何てご都合主義なんだ？」

ムロン「この際だから、利用しよう。」

作者「いつかの突入作戦の時みたく行くか？」

チルド「武装してる人なら勝てるよ！」

こうして、突入作戦が開始される。

祝！100話突破！

何だがこれと言って特に何か企画してる訳では無い。

次回は突入です。

突入作戦 前編〈花粉症少女の憂鬱（前書き）

今回はカエデの章。

一応、ロケット団専用の萌えもんを使ってくるが、この話では普通の萌えもんとなっている。

尚、同じバージョンを持っている友人は、ロケット団専用の萌えもんを捕獲している。

秘伝マシンが全部覚えられるらしい。

突入作戦 前編 花粉症少女の憂鬱

「5の島・倉庫前」

ロケット団員の見張りが居る。

ロケット団員「……………」

銃を持ち、警戒をしている。

その時。

ガサッ！

！

チャキッ！

銃を近くの草むらに向ける。

しかし、引き金を引くことは無かった。

何故なら、眠ってしまったからだ。

どさりと倒れるロケット団員。

片方の草むらからキルトが出てくる。

キルト「……………大丈夫です。」

その言葉を合図にして、作者+ボックス勢が草むらから出てくる。

作者「見張りが1人しか居ないか、無用心だな。」

ムロン「実力のある萌えもんが居るからか、それともこの島の倉庫に入れないと高を括っているのか。」

しので「何れにしろ、チャンスでござるな。」

シヨナ「油断は禁物よ。大量に敵がいるかもしれないわ。」

そんなこんなで、作者はパスワードを入れる。

作者「タマタマ またまた カブトは 飛ぶか」

ピー！

扉のロックが外れた。

作者「全員に作戦を伝える。トレーナーは俺達に任せろ。捕まってる萌えもん達の救出を最優先だ！」

仲間達『了解！』

そして突入作戦は開始された。

くロケット団倉庫く

ドカツ！バキッ！グシャッ！

仲間達が武装集団を蹴散らしていく。

ロケット団員・武装兵「くそ！トレーナー兵出せ！」

ロケット団員・トレーナー兵「任せろ！レベル100の萌えもん達で、悪タイプ化の薬を使用した奴等を使用する！」

作者「そうは問屋が下ろさない！」

ゴゲン「行けー！」

シャドーボールが萌えもんボールに当たり、地面に落ちる。

そのまま撃退する。

作者「こいつ等もエビソバの手下か！？」

ミヨン「それにしても隙がありましたけど……。」

ムロン「大方、エビソバが薬の実験が何かに使ってる場所なんだろうね……。」

作者「とりあえず、此处を潰すぞ！」

く青年勢快進撃中く

「???「待ちなさい!」

作者「誰だ!？」

カエデ「久しぶりね。タマムシ以来かしら。」

作者「カエデだっけ?アルバイトの。」

カエデ「今はバイトじゃ無いわよ。正社員よ!」

作者「だから悪の仕事止めろって。」

カエデ「問答無用!ロケット団の邪魔をするのは許さないわ!」

作者「ロケット団は解散したっての。」

カエデ「嘘をつくな!此処にやってきた幹部がまだ活動してるって言ったのよ!」

作者「幹部?」

カエデ「エビソバって男よ。ある薬をクサイハナに投与したから見みると良いつて言つてそのまま何処か行つたわ。」

作者「今すぐその投与された萌えもんを治療しろ。」

カエデ「意味が解らないわ?まあ良い、バトル!」

作者「ちっ!」

「正社員のカエデが勝負を仕掛けて来た!」

カエデ「行け!ラフレシア!」

ボワンッ!

ボールから出てきたのは、顔が暗く見得るラフレシアだった。

ラフレシア?「……………ウウ……………」

カエデ「ラフレシア?」

そして、ラフレシアは暴れ出した!

ラフレシア：闇「ガアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアア！！！！！！！！！！」

花びらがあらゆる所を壊し始める！

カエデ「どうしたの！？何で暴れ始めるのよ！」

作者「薬の副作用だ！」

カエデ「ええ！？」

作者「この薬は力と引き換えに、理性を壊すんだ！」

カエデ「そ、そんな……！」

作者はカイアを繰り出す。

カイク「止めるわ！」

そして天井を突き破り、上空からラフレシアに狙いを定める。
急降下！

グ
オ
ン
ツ
！

ラフレシアは迫ってくるカイアに花びらを放った。

カイア「ふっ！」

カイアの両手がビリビリと電気が流れ、花びらを切り落とす。

カイア「せいっ！」

そのまま突撃！

ラフレシア「ガアッ!？」

効果は抜群で、ラフレシアは倒れる。

作者の勝利だった。

作者「もう解ったか？あの薬は恐ろしいんだ。」

カエデ「……………」

作者「進むべき道を誤るなよ。今度こそな。」

そう言って、作者は奥に進んだ。

この後、カエデは人知れず消えた。

また何処かで会うかもしれない。

突入作戦 前編 花粉症少女の憂鬱（後書き）

まだ続く。

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻1（前書き）

ムサシ・コジロウなどのロケット団員が連戦でバトルを仕掛けてくる。

まさに一瞬たりとも油断できないと思う。

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻1

くロケット団倉庫く

あの後、仲間達が捕まってる萌えもん達を救出したらしく、現在外に逃がしたそうだ。

作者「気を引き締めていくぞ！」

仲間達『おおー！ー！』

そして、移動するパネルを使って進むと4人のロケット団員が待ち構えていた。

???『我等！エビソバ四天王！』

作者「……………は？」

意味が解らなかった。

???「久しぶりね、小僧。」

作者「……………誰だ？」

ムサシ「シルフで戦ったムサシよ！」

作者「ああ、何か負け際に何か言ってた奴か。」

ムサシ「……………あの時は手を抜いていたとしたら？」

作者「……………なるほど、伊達に四天王と名乗っちゃ居ないか。」

ムサシ「全てはエビソバ様の為。」

作者「解せないな。何でエビソバの味方に付く？」

ムサシ「……………語る言の葉は無い。」

作者「そうかい。」

くエビソバ四天王が1人、ムサシが勝負を仕掛けて来た！く

ムサシ「行きなさい！ソーナンス！」
ソーナンス「そーなんす！行くっす！」

作者「何か間抜けな感じが……。」
カイア「油断は出来ないわよ……。かなり強い。」

カイアは様子見で空中に上がる。
ソーナンスは微動だにしない。

攻撃を食らわした時、カウンターが飛んできた！

カイア「きゃっ！？」

作者「カイア！？」

ソーナンス「すっすっす！」

ムサシ「どーよ！」

作者はキルトに変えた。

キルトは疾走し、近づく。

ソーナンス「また返してやるっす！」

しかし、返せなかった。

何故なら、眠ったからだ。

ムサシ「しまっ！？」

作者「行け！」

キルト「はあ！」

種爆弾が炸裂する！

ソーナンスは倒れた。

次に繰り出されるは、メガヤンマだった。

メガヤンマ「あはははははははははは」

作者「行けるか？」

カイア「大丈夫。」

カイアは先程と同じく空中からの攻撃を仕掛けた。

ドゴオッ！

メガヤンマ「あは……は……ぐふっ！」

メガヤンマは倒れた。

ムサシ「くう！舐めるな！」

繰り出されるはアーボック。

こちらはディンを出した。

相性は最悪だったが、何故かディンが出たがったから出した。

ディン「そんな状態で大丈夫かの？」

行き成りそんな事を言い出すディンに対し、アーボックは。

アーボック「大丈夫シャー、問題ないシャー。」

と返した。

デイン「こんな出会いでは無かったらもう。」

悲しく呟いた。

アーボック「ガアアアアッ！」

狂った蛇が襲い掛かる！

デインが球体を作り、放った。

アーボック「シャアアアア！？」

倒れるアーボック。

作者の勝利。

ムサシ「嫌な感じー！」

作者「終了つと！」

ムサシ「くっ、よくよく思い出してみたら、あんたとは地下のアジトでも戦ってるわね…。」

作者「そうだっけ？」

ムサシ「2度ならず3度も負けるとはね…。」

1人目終了。

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻1（後書き）

B U M P O F C H C K E N 最高だ！

ゼロが流れてる時に書いていた。

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻2（前書き）

かなりキツイ状態。

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻2

連戦が続く。

???「おつと、待った！」

作者「今度はお前か。」

コジロウ「おうよ！エビソバ四天王が1人！コジロウ様だぜ！」

作者「はあ。」

コジロウ「手前の快進撃は此処までだぜジャリンコ！此処が終点だ！」

作者「ねえよ。」

「エビソバ四天王が1人、コジロウが勝負を仕掛けて来た！」

コジロウ「行け！ウツボット！」

ウツボット「コジロー！」

コジロウ「のわ！？行き成り抱きつくな！」

ウツボット「にゅふふ」

作者「……惚気は余所でやってくれないか？」

コジロウ「違えよ！」

作者は考える。

何故こんなにも個性溢れる奴等がエビソバに従っているのか。

作者「何であんた等はエビソバに従う？」

コジロウ「………恩人、だからな。」

作者「………とても人を助ける様には見えないんだが……。」
コジロウ「へっ！他人には解らないぜ！」

作者もカイアを出す。

カイアは空中を飛んだ。

ウツボットは直ぐに避ける体制を取ろうとしたが、それが間違いだった。

カイア「喰らえ！」

飛び上がったかと思うと、突如身体を回転し急下降！

ドガアッ！

メキッ！

骨の折れる音が響いた。

コジロウ「ウツボット！？」

作者「カイア！何も其処までしなくても！」

カイア「安心なさい、今は私の骨が折れた音よ。」

作者「安心できるか！？」

カイア「反動が大きいから、少し動け無いわね……。」

作者「待て！今満タンの薬を！」

カイア「落ち着きなさい！これは技の反動で起きるの！少し待てば回復するわ。」

しかし、ウツボットは戦闘不能なのでこの際交代になる。

コジロウ「よくもやりやがったな！」

激昂したコジロウが繰り出すのは、マタドガスを繰り出す。

マタドガス「また怒ガス！」

このバトルは省略する。

豆知識なら披露するが。

基本は防御力が高く、性能も良い。

レベル100で300近くになる。

メタドガスは400近くになると言われているが、素早さが遅い。

そんな話をしていると、マタドガスが倒れていた。

コジロウ「い、一体何が……！？」

作者「お、俺もさっぱりなんだが……？」

デイン「これがキンググクリムゾンじゃ！」

2人「意味が解らねえよ！？」

コジロウはニヤースを繰り出すが、気合玉を喰らい終了となった。

作者の勝利。

コジロウ「嫌な感じー！」

作者「アホだ……。」

コジロウ「…………。」

落ち込むコジロウだった。

2人目撃破。

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻2（後書き）

まだまだ続く。

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻3（前書き）

しかし、プレイしながら書くの本当にキツイ……。
進めたいのに、話書かないと進めないジレンマ……。

そろそろ佳境かな。

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻3

2人撃破し、エビソバ四天王もいよいよ半分になる。

作者「くそ、まだ終わらないのかよ……。」

???「残念ながら、此処からが勝負所です。」

作者「……めんどくさいぜ。」

???「まあ、我々の邪魔をするなら容赦しませんがね。」

作者は感じた。

作者（不味いな……、さっきの奴等とは核が違う……!）

ランス「ふふっ！私はランス。エビソバ四天王が1人です。」

作者「あんたは何故エビソバに？」

ランス「いえ、別にエビソバに忠誠を誓ってませんよ。」

作者「………そういうことかい。」

ランス「お察しが良いですね。考えの通り、私は強者と戦いたい、それだけです。」

作者「めんどうだああああああ!」

こういう手合いが一番厄介でもある。

ランス「この組織に入って正解でしたね。」

作者「厄日!」

くエビソバ四天王が1人、ランスが勝負を仕掛けて来た!く

ランス「行きなさい!」

ミカルゲ「ZZZZZZ……。」

作者「ちくしょー（泣）」

ゴゲン「オ、オイラが何とかするから（汗）」

ゴゲンのシャドーボールで仕留める。

次に繰り出されるはブラッキー。

ブラッキー「ふん…。」

作者はキルトを出す。

キルト「行きます！」

疾走し眠り粉を浴びせる。

ブラッキー「くっ！」

避けられず、眠るブラッキー。

種爆弾で終了。

繰り出されるはマニユーラ。

マニユーラ「アハハハハハハハハハッ！」

狂気じみているので、キルトは眠り粉を浴びせる。

マニユーラ「ZZZZZ…。」

作者「油断するな、何かやばい感じがする。」
キルト「解りました！」

袖から種爆弾を取り出し、投げつける。
しかし、眼が覚めた。

マニョーラ「アハッ」

ズバッ！

冷凍パンチを“冷凍クロウ”に変えて攻撃した。

キルト「…え！？」

ズササッ！

後ろまで飛ばされながらも着地。
しかし、大ダメージだった。

作者「大丈夫か！？」

キルト「な、何とか…。」

この状況は不味いと感じる。
しかし、キルトの眼は勝利を確信していた。

キルト「頭上注意」

マニョーラ「え？」

ドカーンッ！ドカーンッ！ドガガガガン！

先程投げつけた種爆弾の残りを上空に向けて投げていたのだ。
落下の衝撃が威力を増幅させていた。
それにより、マニョーラは倒れた。

ランス「……驚きましたよ。」
作者「こっちな。」

繰り出されるはクロバット。

クロバット「血いいい！」

作者はカイヤを出す。

カイヤ「喰らえ！」

電圧が迸った爪がクロバットにヒット！

クロバット「ぎゃあああああ！？」

クロバットは沈んだ。

繰り出されるはマタドガス。

マタドガス「また（略）」

気合玉（略）

繰り出されるはカメックス。

カメックス「＜書けるかぼけ！＞」

キルト「うわ〜。」

種爆弾を投げつけて終了。

作者の勝利。

ランス「何と言う事ですか……！」

作者「危なかった……！」

ランス「私でさえ歯が立たないとは……。まさか此処までの強者と出会えるとは予想外です。」

作者「いや、マニユーラのあれはかなりやばかったんだが……。」

ランス「謙遜しなくて良いですよ。あの技を喰らいながらも、立っていた萌えもんは居ませんでした。また次で戦いましょう。」

作者「勘弁してくれ……。」

残り1名。

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻3（後書き）

続きます。

しかし、6匹で来るとは。
マニョーラも居るとはな……。

最後のカメックスは素早さがキルトより速かったのが驚いた。
210は超えてるのに……。

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻4（前書き）

これが最後の相手だ！

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻 4

作者達は一度、萌えセンターに戻り回復して再びやってきた。捕まっていた萌えもん達は、ジュンサーさん達によって保護されていた。

時期にこの倉庫も警察が来るだろう。

作者「でもまあ、まだ四天王が居るんだよなあ。」
「???」そういう事よ。」

その女はヤマブキで見かけた。

作者「あんたは…、アテナだっけ？」

アテナ「私達のしている事なんてどうでも良い…、私はサカキ様を信じて付いて来たのよ！」

作者「サカキはロケット団を解散したんだぞ？」

アテナ「ふん！そんな嘘に騙されないわ！」

作者「じゃあ何でエビソバ四天王なんぞに居る？」

アテナ「サカキ様直筆の手紙が届いたのよ。そしたら“エビソバの指揮下に入れ”って書いてあったの。」

作者は気づいた。

——恐らく、メタモンの細胞が何かを利用して本物と同じ様に書いたな——

どの道バトルは避けられない。

これがエビソバ四天王最後の1人、アテナとの戦いだった。

「エビソバ四天王が1人、アテナが勝負を仕掛けて来た！」

アテナ「行け！」

ベトベトン「あゝあゝ！」

作者「ゾンビっぽいな…。」

ディン「まあ良いわい。」

手を交差させ、気合玉が飛んで行く。

ベトベトンは倒れた。

繰り出されるはドンカラス。

作者はゴゲンに交代。

ゴゲン「えーい！」

電気の塊がドンカラスに当たる。

ドンカラス「ぬう！？」

倒れるドンカラス。

繰り出されるはアーボック。

ディンとあのネタをやったので省略。

ゲンガー繰り出してきたが省略。

次に繰り出すはシザリガー。

シザリガー「ロブスターにしてやんよ！」

キルト「共食いですよ？」

疾走し種爆弾を喰らわせて、終了。

最後はラフレシアだった。

しかし、空中撃で終了。

作者は勝利した。

アテナ「ま、負けたわ……。」

作者「ふう。」

アテナ「貴方も貴方を信じる様に動いているって訳ね……。解ったわ。」

そう言つて、アテナは何かの装置を押した。

アテナ「其処のパネルを入れる様にしたわ、1度頭を冷やしてくれば？……この先の幹部は私より強いわよ、心して立ち向かう事ね！」

作者「アテナ、あんた……。」

アテナ「勘違いしない事ね。私はまだサカキ様を信じてるの。でも、今回の指揮下の件が何か引つかかるのよ。だから、サカキ様を探して話を聞くわ。じゃあね。」

アテナは去って行った。

突入作戦 中編 準幹部勢の猛攻4（後書き）

次回は幹部と対決。

エピソードか？

突入作戦 後編 5の島の幹部（前書き）

幹部は誰だ？

突入作戦 後編 5の島の幹部

5の島・ロケット団倉庫

エビソバ四天王を倒し、ついに幹部の部屋にたどり着いた作者達。

作者「お前は……、アポロ。」

アポロ「……やはり貴様か、小僧。」

作者「20代だボケ。」

アポロ「それは失敬。」

言い知れぬ雰囲気。

アポロ「さて、萌えもん達を救出した正義の味方ごっこは楽しんだか？」

作者「生憎、そんな年でも無いね。」

アポロ「まあ良い、ロケット団が解散したなどと言っているみたいだが……、貴様の言う事に騙される程我々は愚かでは無い！我等ロケット団の恐ろしさを思い知るが良い！」

ロケット団幹部のアポロが勝負を仕掛けて来た！

アポロ「行け！」

クロバット「キシヤアアア！血いいいいい！」

作者「カイア！」

カイア「行くわよ！」

電撃を纏った爪がクロバットにヒット！

クロバット「ぎゃあああ！？」

クロバットは倒れた。

繰り出されるのはヘルガーだった。

ヘルガー「燃え尽きろ！」

作者はゴゲンに交代。

ゴゲン「えいつ！」

シャドーボールがヘルガーの影から出てきて、急所に当たりヘルガーは倒れた。

繰り出されるはマタドガス。

省略。

繰り出されるはグラエナ。

作者は交代でキルトを出す。

キルトは種爆弾に眠り粉を振りかけて、投げた。

グラエナは睡眠＋爆弾の餌食となり、倒れた。

繰り出されるはサメハダー。

キルトの種爆弾で終了。

アポロ「くそ！くそ！こんな奴に負けるのか！」

繰り出すはダーテング。

作者は交代でカイアを出す。

カイアは身体をドリルの如く回転させて、空中撃を放った。

ダーテングは倒れた。

作者の勝利。

アポロ「く……、強いと思ったらサカキ様のバツジ……！ロケット団が解散したのは本当なのか？」

作者「まあ、紆余曲折の末に出来た組織だからな。」

アポロはしばらく思考に陥っていた。

そして、言葉を放つ。

アポロ「この倉庫は手放す。……だが、私は諦めない！サカキ様を探し、再びロケット団を復活させる！」

作者「あんたは、まともに戻れた人間をまた外れ街道に引きずり込むのか？」

アポロ「黙れ！……たとえサカキ様に拒まれたとしても私は必ず……！」

アポロはさらばっと言って、去って行った。

作者は虚しさを感じた。

しかし、人の道はそれぞれだ。

誰にも止められないのかもしれない。

作者「無駄か……。」

キルト「そんな事はないですよ。絶対に。」

作者「……ふっ。ありがとう。」

ふと、ムロンがアポロのPCを弄っていた。

作者「何かあったのか？」

ムロン「うゝん、グラフやレポートが映ってるんだけど……。」

作者「だけど？」

ムロン「調べていたのは、萌えもんを進化させる電波の研究について、って書かれているんだ。」

作者「きな臭いな。」

ムロン「どの道、意味が解らないから奥に行こう。」

奥には研究員らしき男が居た。

研究員「くそ！もう少して売れる所だったのに！」

作者「その声は……。」

カイア「点の穴で宝石を奪った奴の声！」

研究員「ふん！お前等のせいで売れなくなったんだ！絶対に許さん！」

作者「こっちの台詞だ！」

〈省略〉

研究員「ちくしょう！ちくしょう！ちくしょう！」

作者「往生際が悪いぞ。」

研究員「ふん！金にもならないし、持ってけよこんなもん！」

作者はサファイアを手に入れた。

作者「じゃあな。」

研究員「ふん！」

こうして、作者はサファイアを手に入れた。

エビソバ四天王とカエデは姿が無かった。

他の団員もだ。

兎も角、1の島のニシキにサファイアを渡しに行った。

「1の島」

ニシキ「作者さんありがとうございます！」

作者「いや、気にしないでください。」

ニシキは装置を取り付けた。

しばらくして、この地方では無い方の預かりボックスと通信が完了した。

ニシキ「マユミさんと繋がった…！」

作者「マユミ？」

ニシキ「ハウエン地方と言う所で、萌えもんの預かりをしているんです。」

作者「マサキさんと同じか。」

ニシキ「これでネットワークマシンは完成です…！全て作者さんのお陰です！」

作者「俺はただ、男のロマンに誘われたただだよ。」

こうして、ナナシマの出来事は終わった。

そして、ステージは更なる高みに移動する事となる。

突入作戦 後編 5の島の幹部（後書き）

と言う訳で、2章の前半は終了です。

今回は対エビソバ勢に備え、ドガースをメタドガスに進化させます。

防御力が軽く300以上超えるので、頑張ります。

グレン島の修業場ゝそんな手持ちで大丈夫か？大丈夫だ、問題ない。（前書き）

恐らく此処はロケット団の修業場だと思う。

水溜りにRのインシヤルがあつたし。

此処には修業装置があるが、装置の手持ちは128と言つ萌えもん？を6匹出す。

しかもレベル100なんだが……。

跳ねるしか使つてこない。

……だからレベル100が大量に出来たのか…。

グレン島の修業場ゝそんな手持ちで大丈夫か？大丈夫だ、問題ない。

ゝグレン島・萌えもん屋敷奥ゝ

作者はカツラに連れられて、穴の前に来ていた。

カツラ「この穴の奥には岩があったのだが、最近になって崩れたのだ。」

作者「何かあるんですか？」

カツラ「さあな、ただロケット団らしき人物が大勢入っていくのを見たと言っ証言があったのだ。」

作者「何時の話だ？」

カツラ「解散前だったな…、何かおかしいと思い後を付けようと思っただが、岩があつて通れなかったのだ。」

作者「……修業場があるのかもな。」

カツラ「何故そう思う？」

作者「レベル100の萌えもんをロケット団員が使ってきたんだ。」

カツラ「……もしその話が正しいなら、此処はとんでもない場所だな。」

ゝ努力の穴ゝ

橋が架かった場所に出た。

下は溶岩が流れていた。

カツラ「ふむ、かなり熱い温度の筈なのにこの場所は平温だな。」

作者「装置か何かあるんですかね？」

カツラ「さあな、だが少し調べてみるか。」

奥に扉があつたので、入ってみる。

部屋の中はダンボールが数個あり、水溜り程の水にはRのイニシャルが描かれていた。

カツラ「あながち間違っでは居ないみたいだな。」

作者「此処が修業場所か……。でも、それらしい装置は何処に？」

カツラ「目の前のあれだろう。左は回復装置、右はPCか……。」

作者達は少しこの部屋を調べていた。

しかし、特に収穫があつた訳ではなかった。

カツラ「ふむ、特にこれと言つた物は無かつたか……。」

作者「そうですね。」

カツラ「だが、修業装置が使えるみたいだから修業したければしていきなさい。……君が追っているエピソードを倒すために力は付けておきなさい。」

作者「解りました。」

その後、20番水道にある怪しい階段の奥の岩が崩れたと聞いたので後で行ってみる事にした。

グレン島の修業場ゝそんな手持ちで大丈夫か？大丈夫だ、問題ない。（後書き）

ルギアフラグ。

その次ホウオウ。

最後はハナダの洞窟です。

ハナダの洞窟には偽者とエビソバが居るらしい。

ミュウツーも居る。

竹馬の友々今更なフラグ回収と謝罪会見（前書き）

前はルギアとか捕まえに行こうと思いましたが、フラグ回収に急遽変更。

その後、謝罪会見予定。

竹馬の友々今更なフラゲ回収と謝罪会見

（1番道路）

作者が何故こんな所に居ると言っと。

作者「ここに辺に居るのか？」

タルト「うん、絶対に居る！」

タルトが小さい頃の友人と会いたいと頼んできたからだ。

作者「しかし、お前は進化してるからその友人が解るか解らないぞ？」

タルト「大丈夫！ボクしか知らない秘密があるから」

作者（鬼か……。）

しばらくして。

ガサガサッ！

タルト「其処だああああ！」

何故か波乗りを放つ。

「???」「きゃあああああ!？」

作者「何してんのおおおお!？」

タルト「ノリだよ」

作者「ウザッ！」

そんなこんなで、気絶している萌えもんを介抱する。

「???」「うーん……、あれ？」

作者「目が覚めたか。」

「???」「うえ／＼／え?え?」

作者「まあ、落ち着け。」

タルト「相変わらずヒトカゲは抜けてるなあ」。

ヒトカゲ「その減らず口を叩くのはまさか……！ゼニガメ！」

タルト「今はタルトって名前だよ。」

ヒトカゲ「あんたがいつの間にか居なくなっと思ったたら、このトレーナーに捕まったからか。」

作者「逃げたいなら逃げて良いと言ったんだが。」

ヒトカゲ「変わってるわね。」

作者「同意は欲しいからね。」

ヒトカゲ「で、何しに来たのよ？」

タルト「近くに來たから顔見に来た！」

ヒトカゲ「あんた変わったわね……。昔は頑張って努力してた癖に。」

タルト「マスターのお陰だね。」

作者「何もしていないぞ？」

タルト「またまた。」

ヒトカゲ「本当に変わったわね……。」

それからしばらく雑談をして、そろそろ行こうかと準備し始めた時。

ヒトカゲ「ねえ。」

作者「ん？何だ？」

ヒトカゲ「私も連れて行ってくれない？」

作者「別に良いが、俺の目的を知った上でか？」

ヒトカゲ「ハーレムを創るって事でしょ？あの子から聞いたわ。」

作者「まあ、そんな願望を持っている人間なんだが……。」

ヒトカゲ「あんたが最低なトレーナーならこんな頼みしないわよ。」

作者「買いかぶり過ぎだ。」

ヒトカゲ「生憎と人を見る目はあるのよ。」

作者「そうかい。まっ、お前が良いならよろしく頼むよ。」

ヒトカゲ「任せなさい！」

こうして、フラグ回収は完了した。

* 此処から先は本編とは無関係です。

作者「……………」

キルト「……………何でそんな顔してるんですか？」

ムロン「……………1番道路にヒトカゲの♀は出なかったんだって…。」

キルト「……………まさか！」

作者「……………タマゴだよ。」

ヒトカゲ「嘘……………！」

作者「出なかったんだよ！俺としても粘ったんだよ！でも出なかったんだよ！」

キルト「で、でも！タマゴを使うなって縛りでも無いですし。」

作者「下種い方法を使っただよ！罪悪感が半端ないよ！」

ムロン「主人は感情移入が激しいからな、空想と解っても怒りなどを感じるタイプだから。」

ヒトカゲ「いや、気にしてないわよ！」

作者「チクショウ！」

しばらく傷心気味。

竹馬の友々今更なフラゲ回収と謝罪会見（後書き）

とまあ、謝罪です。

……鬱だ……。

同時試練／極炎龍の試練・狹霧の試練 前編（前書き）

まあ、前回の反省から少し経ってるから軽いと思われると思いますが、書きます。

同時試練　極炎龍の試練・狭霧の試練　前編

「努力の穴」

サリヤとメタランがリザードとマタドガスに進化し終えた日があった。

その時に変な違和感があったらしい。

サリヤ「うゝん……。」

メタラン「???」

作者「どうした？」

サリヤ「うゝん、何でもない。」

メタラン「同じく。」

作者「そうか？」

2人「うん。」

この時は深く考えてはいなかった。

でも、その認識が甘かったと思い知らされたのはそれから1週間後だった……。

その日も装置を使ってレベルを上げていた時、突然サリヤとメタランが倒れた。

サリヤは水溜りの上に、メタランは換気口の上に。

そして“異変”が起きた。

ポー！

モクモクモク…。

サリヤの身体が炎に包まれ、メタランの身体はガスに包まれた。

作者「な!？」

カイア「龍の試練と進化の試練!？」

ムロン「2つ同時に起きるなんて……!」

作者「くそ!炎とガスの勢いが強すぎる。」

言葉通り、極炎と狭霧と化している。

ただ救いなのは、極炎は水のお陰で勢いは少し抑えられている。
狭霧は換気口から吸い込まれているので充滿する事は無い。

作者「でもこのままじゃ不味い!」

作者が近づこうとする時、デインが止める。

デイン「アホう!丸焼きか器官が止まるわ!」

作者「じゃあどうすれば良いんだよ!？」

その時、デインの後ろからエスパー勢が現れた。

おどか「わ、私達が手伝います!」

りんり「ふん!別にあんたの為じゃ無いわよ!」

メアナ「私達に掛ければ問題ないですよ。」

デイン「そういう事じゃ。」

作者「………具体的にどうするんだ?」

デイン「エスパーには生まれながらにして特殊な能力があるのじゃ。」

「

作者「特殊な能力?」

メアナ「テレパシーです。」

作者「なるほど。」

りんり「でも、言葉しか届けられないわよ。」

作者「十分だ。早速始めよう!」

おどか「は、はい!」

4人は四方向に別れ、テレパシーの準備をする。
作者は特訓装置の前で待機。

デイン「行くぞ！最初はサリヤからじゃ！」
そして、作者の意識はサリヤの精神世界に向かった。

「精神世界」

全てが赤く、炎が所処で噴出している。
マグマも流れていた。
作者「ここにサリヤが居るのか…。」

ドガンッ！

近くで爆発音が聞こえた。
作者「あっちか!？」
直ぐに向かう。

しばらく進むと、リザードンの姿をした“黒い炎”がサリヤを見下ろしていた。

作者「サリヤ!」

サリヤ「作者!？」

作者「大丈夫か!」

サリヤ「あゝもう！何で来たのよ!」

作者「心配だからに決まってるだろ!」

サリヤ「安心しなさい!こんな炎、私が直ぐに消してあげるわ!」

サリヤは大きく息を吸い、放射した炎を吐き出す。

ポオオオオオッ！

しかし、黒い炎は翼で吹き飛ばしそのまま押し返した。

サリヤ「きゃあああ!？」

作者「サリヤ!」

押し返された炎を喰らうサリヤ。

しかし、その眼に諦めは無い。

サリヤ「あの馬鹿があそこまで進化したんだ!あの馬鹿をちゃんと育てた奴が居たんだ!私は!同じ場所に行きたい!」

焦り、だつたのだろう。

置いていかれてしまった、そう思っていたのだろう。
だからこそ、彼女は“極炎の炎”に包まれた!

ゴオオオオオッ!

そして、炎が収まった時サリヤはリザードンに進化していた。

サリヤ「喰らいなさい!」

勢いよく空中を飛び旋回、そして眼にも止まらぬ速さで黒い炎に突撃した!

黒い炎「ガアアッ!？」

サリヤ「止めよ!」

至近距離から“龍の波動”を放つ。

黒い炎「ギャアアアアアアッ!!!」

黒い炎は掻き消えた。

サリヤは炎が噴出していない場所に着陸する。

サリヤ「つ、疲れた……。」

作者「サリヤ！ やったじゃねえか！」

サリヤ「ふう、まったくあんたも物好きね。」

作者「生憎と天邪鬼なんだね。」

サリヤ「まったく……。」

——ありがとう——

作者「何か言ったか？」

サリヤ「な、何でも無いわよ！／＼／／／」

作者「そうか？」

こんなやりとりを交わし、1度精神世界を脱する作者だった。

同時試練、極炎龍の試練・狭霧の試練 前編（後書き）

この正確……、霊夢に似ている様な……。

同時試練〜極炎龍の試練・狭霧の試練 後編（前書き）

後編です。

しかし、努力の穴の修業装置はマジで凄い。
レベル100が生産できる。

同時試練／極炎龍の試練・狭霧の試練 後編

／努力の穴／

作者は目覚める。

デイン「戻ったか！」

作者「ああ、何とかな。」

メアナ「サリヤを包んでいた炎が消えましたよ。」

作者「そうか、じゃあ次はメタランの精神世界に……。」「
其処まで言っと、作者はよろめいた。

ガシッ！

りんりが掴む。

りんり「少し休みなさい。」

作者「でも……。」

りんり「安心なさい。あの子は多分大丈夫よ。」

おどか「そうですね。ボックス内でも皆と模擬練習やってましたけど、根性がありました。」

作者「……少し、焦ってたな。」

デイン「そうじゃな。」

作者「お前が言うなよ……。」

デイン「何の事か？」

作者はメタランを信じた。

作者（頑張れよ……！）

／精神世界／

霧で視界は見えず、毒ガスが吹き出ている。
酸性雨の雨も降っている。

そんな世界で、爆発が起きた。

ドカーンッ！

メタラン「うわわっ！？」

何とか避ける。

メタランの目の前に“黒い霧”がメタドガスの姿をしていた。

メタラン「まいったなあ……。」

ドガス・マタドガスなどの姿をした霧が黒い霧の周りに浮いている。

そして、自爆や大爆発を発動しながら近づいて来る為、何とか避けていた。

メタラン「このままじゃ…！」

その時、作者の声が頭に響いた。

——頑張れよ……！——

メタラン「……………まったく、作者に心配されるなんてね。」

出会ったのは萌えもん屋敷だった。

当時は毒ガスで毒状態にしようと思ったら、こう言われた。

——俺の仲間になってくれるかい？いやなら逃げて良いよ。——

その時、ムキになって勝負挑んで捕まって……。でも、作者の所は居心地が良くて。

——帰りたい！いや、帰るんだ！作者達の所へ！——

そう思った瞬間、メタランの身体は紫色の霧に包まれる！

その霧が晴れた時、メタランはメタドガスに進化した。

メタラン「行ける……！これなら！」

メタランは黒い霧に突撃した！

ドカーンッ！ドカーンッ！

霧が自爆・大爆発をメタランの至近距離で発動する。

しかし、メタドガスに進化したメタランには効いていない。

鋼タイプが追加されている為、効果はいまひとつなのだから。

メタラン「喰らえっ！」

メタランは突撃して、また突撃した！

黒い霧「ギユウアアアッ！？」

ダブルアタックを喰らいよろける黒い霧。

メタラン「終わりっ！」

何処からともなくヘドロが集まり、拳の形をする。

それが黒い霧を直撃した！

黒い霧「ガアアアアアア！？」

黒い霧は消滅した。

メタラン「さてと、帰ろうっと」

「努力の穴」

サリヤとメタランが目覚めます。

デイン「おお！成功したか！」

おどか「お、お帰りなさい！」

りんり「まったく、心配したわよ。」

メアナ「お帰りなさい。」

サリヤ「あ、ただいま！」

メタラン「あれ？作者は？」

デインが指差した方向に作者は居た。
倒れて。

2人「!?!」

デイン「安心せい。少し疲れただけじゃろ。」

サリヤ「で、でも!」

メアナ「大丈夫ですよ。だから、目が覚めた時は笑顔で迎えてあげなさい。」

メタラン「でも、何で疲れたの?」

りんり「人間が萌えもんの精神世界に入るって事は、体力を消費するのよ。」

おどか「で、でも!2人を心配していたんですよ。」

デイン「ま、何はともあれ目が覚めた時は飯でも食べに連れて行って貰おうかのう。」

サリヤ「……そうね、心配させたんだからその位は良いわよね?」

メタラン「そうだね」

こうして、1日は過ぎていった。

同時試練〜極炎龍の試練・狹霧の試練 後編（後書き）

次回は伝説捕獲に行きたい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8056u/>

創作者の冒険～萌えもんで欲望を～

2011年11月21日06時48分発行